

2018（平成 30）年度 人間発達環境学研究科・発達科学部
年 次 報 告 書

神戸大学大学院人間発達環境学研究科・発達科学部

はじめに

本年次報告書は、人間発達環境学研究科・発達科学部における平成30年度の教育・研究・社会貢献等の活動の記録や取り組み内容が記載されたものであり、研究科の強み・特色を示した価値ある集積となっている。

平成30年度の研究科の取り組みでは、前年度の平成29年度に受けた外部評価において指摘された、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題、すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要性、多くの環境系教員が参画できるための枠組みづくりの必要性、ならびに多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金獲得の必要性、及び優秀な留学生の積極的獲得の必要性などの観点から検討を進めた。

また、今年度は外部評価で指摘された課題の解決を目指すとともに、研究科を取り巻く学内外の様々な状況の変化を踏まえながら、研究科の将来について意見を出し合う場を持たせたことは、意義深い年度であったといえる。

第3期中期目標・中期計画期間の前半にあたる平成28年度～平成30年度は、教員組織と教育研究組織の分離及び教員人事のポイント制の実施、若手教員比率の数値目標の設定、教員活動評価の再検討が行われるなど、これらの対応に苦慮した3年間であった。

第3期中期目標・中期計画年度の後半にあたる平成31年度～令和3年度では、令和2年度に法人評価、翌年度の令和3年度に認証評価を受けることになっている。

併せて、第4期中期目標・中期計画期間に向けて神戸大学全体としての機能強化が進んでいくなかで、研究科は改革という大きな渦のなかに巻き込まれることが予想される。そのような状況のなかでも、本研究科がこれまで標榜してきた「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉える」という教育研究のアイデンティティは守っていくべきと考える。そのためには、着実に教育・研究・社会貢献に係る実績を重ね、学内外での研究科のプレゼンスをいっそう高めることが肝要である。

最後に、この報告書をお借りして御礼を申し上げたいことがあります。

平成28年度から平成30年度までの3年間にわたる研究科長の職にあつて、心から有難いと思ったことは、教員、事務職員の皆様方のご協力とご支援です。

教職員の方々からの温かい声かけや気遣いは、私の活力の源となりました。ここに深く感謝申し上げます。

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2018(平成 30)年度
人間発達環境学研究所・発達科学部 年次報告書 目次

はじめに

目次

1. 平成 30 年度の取り組みの概要	1
1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み	1
1.1.1. 神戸大学機能強化改革	1
1.2. 部局としての取り組み	1
1.2.1. 戦略「社会課題を解決する分離融合研究の推進」	1
1.2.2. 将来構想に係る懇親会について	2
2. 学部・大学院運営	3
2.1. 学部・大学院運営組織	3
2.2. 管理運営	4
2.2.1. 学域人事委員会	4
2.2.2. 研究科運営委員会	6
2.2.3. 教員活動評価委員会	8
2.2.4. 中期計画推進委員会	8
2.2.5. 自己評価委員会	9
2.2.6. 安全衛生委員会	10
2.3. 予算	11
2.3.1. 予算に関する特記事項	11
2.3.2. 予算関係の審議等の状況	12
2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)	12
2.4. 広報及び情報公開	13
2.4.1. パンフレット, ウェブサイト等	13
2.4.2. 人間発達環境学研究所 オープン・らぼ	14
2.4.3. ホームカミングデイ	14
2.5. 環境設備	17
2.5.1. 教育・学習環境の整備	17
2.5.2. 交流ルーム・アゴラ	18
2.6. 教員研修	19
2.6.1. FD	19
2.6.2. 初任者研修	19
3. 入試	19
3.1. 一般選抜入試	19
3.1.1. 入学試験委員会	19
3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題	20

4. 国際交流活動	21
4.1. 学術交流協定	21
4.2. 留学生	22
4.3. ダブルディグリー	24
4.4. Innovative Asia	24
4.5. 学生・教員・職員の海外派遣	24
4.6. 海外研究者等の招聘・訪問	26
4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」	28
4.8. 海外協力大学とのグローバル・ワークショップ	28
4.9. スタディツアー	28
5. 教育	31
5.1. 教育課程	31
5.1.1. 今年度の特徴	31
5.1.2. 研究科, 専攻共通科目	32
5.1.3. 教職教育	34
5.1.4. 博物館学芸員資格	34
5.1.5. ESD サブコース	36
5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント	36
5.1.7. 神戸グローバルチャレンジプログラム	37
5.2. 各学科等の教育	38
5.2.1. 人間形成学科	38
5.2.2. 人間行動学科	39
5.2.3. 人間表現学科	40
5.2.4. 人間環境学科	42
5.2.5. 発達支援論コース	43
5.3. 各専攻講座の教育	44
5.3.1. 人間発達専攻	44
5.3.2. 人間環境学専攻	47
6. 進路	49
6.1. キャリア形成支援	49
6.1.1. キャリアサポートセンター	54
6.1.2. 学振特別研究員申請支援	54
6.2. 卒業・修了後の進路	55
7. 研究	55
7.1. 今年度の特長	55
7.1.1. 研究動向	55
7.1.2. 学生の受賞	57
7.2. 学術 WEEKS	58

7.2.1 学術WEEKSの各事業・セミナー	59
7.3. 研究科支援プロジェクト研究	68
7.4. 高度教員養成プログラム	73
7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続共同研究	77
7.6. 研究推進	77
7.6.1. 研究推進委員会	77
7.6.2. 研究倫理審査委員会	78
7.6.3. 紀要編集委員会	78
7.7. 各専攻の研究	78
7.7.1. 人間発達専攻	79
7.7.2. 人間環境学専攻	110
8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動	126
8.1. 産官学共同プロジェクト	126
8.2. 地域連携プロジェクト	127
9. 社会的活動・震災復興支援	129
9.1. メンタルケア関係	129
9.2. 災害地への支援活動	130
10. 附属施設	131
10.1. 発達支援インスティテュート	132
10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会	132
10.1.2. 心理教育相談室	133
10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	135
10.1.4. のびやかスペースあーち	144
10.1.5. サイエンスショップ	154
10.1.6. 教育連携推進室	159
10.1.7. アクティブエイジング研究センター	164
10.2. 実習観察園の運営利用状況	170

1. 平成 30 年度の取り組みの概要

1.1. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.1.1. 神戸大学機能強化改革

(1) 神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略

平成 28 年度から第 3 期中期目標・中期計画期間が始まった。神戸大学は、第 3 期中期目標・中期計画期間（平成 28 年度～平成 33 年度）における神戸大学の機能強化改革として、平成 27 年 4 月に神戸大学ビジョンとして、先端研究・文理融合研究で輝く卓越研究大学をかかげ、平成 27 年 6 月に文部科学省「国立大学経営力戦略」の 3 つの重点支援の枠組みの重点支援 ③「海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究，社会実装を推進する取組を中核とする国立大学」を選択した。

第 3 期中期目標・中期計画期間におけるビジョンの実現に向けて、以下の 5 つの戦略が実施されている。

- ・戦略 1：先端研究の推進
- ・戦略 2：社会課題を解決する文理融合研究の推進
- ・戦略 3：先導的研究成果の社会実装への取組み
- ・戦略 4：世界で活躍できる人材の育成
- ・戦略 5：大学運営基盤の改革

なお、国際人間科学部の設置は戦略 4「世界で活躍できる人材の育成」に位置づくものである。

(2) 神戸大学ビジョンを支える新たな教員組織・人事システム

平成 28 年 5 月 19 日開催の教育研究評議会において「神戸大学ビジョンを支える新たな教育組織・人事システム（案）」が承認された。この教員組織・人事システムは、教員の流動性の向上，組織間の教員配置の最適化，柔軟な改組の実現，教員数及び若手ポストの増加をねらいとし，教員の教育研究組織からの分離，ポイント制の導入及び学長裁量戦略枠の設定などを柱としたものである。

平成 28 年 10 月から教員組織と教育研究組織の分離が実施され，当研究科教員の全員が人間発達環境学域の所属となった。また，同時に教員人事委員会が設置され，教授人事の審査，及び採用・昇任人事に伴うポイントの管理が行われることになった。そして，平成 29 年 4 月にポイント制が正式導入され，現在に至っている。

1.2. 部局としての取り組み

1.2.1. 戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」

神戸大学ビジョンの実現に向けた戦略「社会課題を解決する文理融合研究の推進」の取り

組みの一つに、「文理医融合の先端研究による未来世紀都市学の構築」があげられる。

平成30年度から、この取り組みを拡充するために、『well-being研究拠点』が新たに設置された。この拠点は、未来世紀都市を支える多様な人々のwell-being（人々の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活）を実現するために、多様化するアジア諸国の保健衛生課題の解決を目指す「アジア健康科学研究ユニット」、及び都市における人々の社会的連携や協調を実現させるプログラムの構築を目指す「社会関係資本研究ユニット」から構成される。

本研究科は「社会関係資本研究ユニット」として役割を果たすことになった。このユニットは、都市における人々の社会的連携（結束力、絆）やネットワーク等の社会関係資本を重視した持続可能なコミュニティ形成及び環境形成プログラムを考究し、社会実装を目指すものである。

今年度の「社会関係資本研究ユニット」の活動実績としては、WoS論文が3編、競争的資金獲得が2件、また国際セミナー1件、シンポジウム1件及び講習会等の開催が7件あった。

1.2.2. 将来構想に係る懇談会について

平成19年4月に人間発達環境学研究科は、心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻、及び人間環境学専攻の5専攻から成る研究科として設置された。その後、平成25年4月には、人間発達に関わる社会的諸課題の解決に向けて「人間それ自身の発達」に係る教育・研究のあり方をさらに高度化・総合化させることを目指し、専攻の改組を行った。すなわち、人間それ自体の発達を対象に教育研究を担ってきた心身発達専攻、教育・学習専攻、人間行動専攻、人間表現専攻の4専攻をまとめ人間発達専攻とした。現在、人間発達環境学研究科は、人間発達専攻と人間環境学専攻の2専攻体制で教育・研究を行っている。

平成26年4月に文部科学省が公表した本研究科のミッションの再定義には、「今後、人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、異なる専門分野間の連携等に取り組むについて重点的に取り組むなど、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国の社会課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」と記されている。

これまで、本研究科はこのミッションの実現に向け、人間の発達及びそれを支える環境に関わる新たな研究課題の設定、ならびに分野横断型研究の支援等の取り組みを行っている。

平成29年には、平成25年の専攻の改組後の本研究科における教育・研究等に対する外部評価を受けた。その結果、学際系の研究科として、教育・研究・社会的活動の成果を着実に蓄積していること、またそれらの活動は5年間で大きく発展・深化したこと、地域の課題に対して、その住民と連携する形で、研究と教育と社会活動を一体のものとして展開していること、及び高齢化、貧困、環境、共生社会などといったグローバルな課題に関する国際共同研究の推進やそれらの研究に学生を参画させる多様な取り組みが実施されていることなどが高く評価された。その一方で、本研究科が取り組んでいる多様な活動を将来にわたって継続・発展させていくために解決しなければならない組織、研究、教育等に関する課題も指摘された。すなわち、研究科の規模に応じた学際研究・文理融合研究のアウトプットの必要

性、より多くの教員が参画できるための枠組みづくりの必要性、多種多様な社会的活動を展開・維持していくために不可欠な大型の外部資金の獲得の必要性などである。

近年の科学技術（特に情報通信技術）の発展やグローバル化の進展は、経済・社会のルールを急速に変化させ、人々のライフスタイル、社会と人間の関係の在り方、国家間の関係などに影響をもたらし、地球規模の様々な課題を顕在化させている。国内を見れば、少子高齢化が加速し、地域経済社会は疲弊しつつある。このような状況では、人間の発達が阻害される可能性、すなわち一人ひとりの人間が潜在的にもつ多様な能力の発現が妨げられることが危惧される。

本研究科の「人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉えるため、総合的な研究を組織的に推進するとともに、我が国社会の課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。」というミッションのさらなる実現に向けて、またグローバルな課題対応型の文理融合研究の推進や俯瞰的視野をもった協働型グローバル人材の育成など、神戸大学ビジョンの実現に貢献するため、研究科運営委員会のメンバーによる研究科将来構想に係る懇談会を8回にわたって開催した。さらに、10月19日には教員懇談会「研究科将来構想について」を開催し、懇談会でまとめた内容について報告したのち、意見交換を行った。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び発達科学部は、以下の組織により運営されている。

<教授会等>

人間発達環境学域会議、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会、神戸大学発達科学部教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際、大学院に関係する組織については、その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し、学部に関係する組織については、「発達科学部」とした。

<管理運営>

学域人事委員会、教員活動評価委員会、研究科運営委員会、予算委員会、学舎検討委員会、中期計画推進委員会、自己評価委員会、交流ルーム運営委員会、安全衛生委員会、ハラスメント防止委員会、専攻運営会議

<研究>

研究推進委員会、研究紀要編集委員会、研究倫理審査委員会

<教務・学生>

教務委員会, 学生委員会, 博物館学芸員資格専門委員会

<入試>

入学試験委員会, 発達科学部編入学試験専門委員会, 学生委員会 (編入学入学者の募集及び選考に関わる事務)

<国際交流>

国際交流委員会, 学術 WEEKS ワーキンググループ

<広報>

情報メディア委員会, 研究科案内作成ワーキンググループ

<附属施設等>

図書委員会, 実習観察園運営委員会, キャリアサポートセンター運営委員会, 発達支援インスティテュート運営委員会, 心理教育相談室運営委員会, ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会, のびやかスペースあーち運営委員会, サイエンスショップ運営委員会, 教育連携推進室, アクティブエイジング研究センター運営委員会

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2.2. 管理運営

2.2.1. 学域人事委員会

学域人事委員会は、教員の採用及び昇任等、ポイントの管理・運用及び教育研究組織への配置に関して、学域会議に発議する原案を審議する委員会である。学域人事委員会の構成は、学域長、副学域長、人間発達環境学研究科専攻長、国際人間科学部学科長 (グローバル文化学科長を除く)、及び発達科学部学科長であり、今年度の委員は岡田修一学域長 (委員長)、平山洋介副学域長、近藤徳彦副学域長、稲垣成哲人間発達専攻長・発達科学部人間形成学科長、近江戸伸子人間環境学専攻・発達科学部人間環境学科長・国際人間科学部環境共生学科長、河辺章子発達科学部人間行動学科長、梅宮弘光発達科学部表現学科長、並びに吉田圭吾国際人間科学部発達コミュニティ学科長、木下孝司国際人間科学部子ども教育学科長の9名である。また、中野下勉事務課長及び西田望智子総務係長も出席した。

学域人事委員会の開催日及び検討事項については、以下に記す。

	検討事項
第1回 (4月6日)	1. 平成34年4月1日までの人間発達環境学域のポイントの推移 (見込み) について

	<ul style="list-style-type: none"> 2. 平成 30 年度人事方針について 3. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 4. GSP 担当教員の退職及び採用について 5. 教授昇任人事の検討について
第 2 回（4 月 27 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事の公募について 2. 教授昇任人事に関する人事選考委員会設置の申請について 3. 教授昇任人事の検討について
第 3 回（6 月 1 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 教授昇任人事について（人事選考委員会報告） 2. 助教採用人事の公募に係る問題について 3. 人間発達環境学域のポイントの推移（見込み）表の一部訂正について 4. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 5. 採用助教の任期について 6. 教授昇任人事の検討について
第 4 回（7 月 6 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 助教の採用人事に係る進捗状況について （大雨により帰宅困難になる恐れが出たため、その他の議題は7月18日の臨時開催の委員会にて審議する。）
臨時：7 月 18 日	<ul style="list-style-type: none"> 1. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 2. 教授昇任人事の検討について 3. 助教の採用人事について
第 5 回（9 月 7 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 教授昇任人事について（人事選考委員会報告） 2. GSP 担当教員の採用について 3. 先端融合研究環からの教員の配置依頼について 4. 人間発達環境学域人事選考委員会規則の一部改正について 5. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 6. 教授昇任人事の検討について
第 6 回（10 月 5 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 専攻における採用人事（若手教員）に係る専門分野について 2. 助教選考に係る確認事項について 3. 教授昇任人事の検討について
第 7 回（11 月 2 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事の公募について 2. 大学院後期課程担当について 3. 教授昇任人事の検討について 4. 教授昇任候補者を選考する際の観点について
第 8 回（12 月 7 日）	<ul style="list-style-type: none"> 1. 平成 34 年 4 月 1 日までの人間発達環境学域のポイントの推移（見込み）について 2. 教授昇任人事の検討について

	<ul style="list-style-type: none"> 3. 教授昇任候補者を選考する際の観点について 4. 助教人事の進め方について
第9回 (1月11日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 教員の退職について 2. 教授昇任候補者について 3. 助教採用人事について
第10回 (2月1日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 助教採用人事に係る人事選考委員会の設置について 2. 教授昇任候補者について 3. 今後の人事選考委員会委員の選出に係る課題について
第11回 (3月8日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 人間発達環境学域のポイントに関する試算について 2. 助教採用人事の進捗状況について 3. 教授昇任候補者について 4. 先端融合研究環からの教員の配置依頼及び平成31年4月1日人間発達環境学域人事配置案について

(人事委員会委員長 岡田修一)

2.2.2. 研究科運営委員会

研究科運営委員会は、研究科長，副研究科長，専攻長（2名，ただし2名は学科長を兼ねる），発達科学部学科長（4名）の7名体制で運営した。本委員会は、研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱ってきた。なお，11月の運営委員会から平成31年3月末まで，研究科運営委員会規則 第2条（5）その他委員会が必要と認められた者として，国際人間科学部における発達コミュニティ学科長の吉田圭吾先生及び子ども教育学科長の木下孝司先生に委員に加わっていただいた。検討事項は，以下のとおりである。

	検討事項
第1回 (4月6日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 予備審査委員会委員候補者について 2. イノベーティブ・アジアについて 3. 奨学金について
第2回 (4月27日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 奨学寄附金について
第3回 (6月1日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 神戸大学若手教員長期海外派遣制度 H31年度派遣教員の募集に係る「原則45歳以下」について 2. 奨学寄附金について
第4回 (7月6日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 平成30年9月修了予定者に係る博士學位論文審査委員候補者(案)について 2. 平成31年度教員サバティカル制度適用教員について 3. 「研究室等の使用願」について 4. 奨学寄附金について
第5回 (9月7日)	<ul style="list-style-type: none"> 1. 平成30年度優秀若手研究者賞の受賞について

	<ol style="list-style-type: none"> 2. 持続可能な開発目標（SDGs）に対する神戸大学の取組のHPへの掲載について 3. 平成31年度概算要求のなかの「国立大学改革の推進」について 4. 10月27日（土）第13回神戸大学ホームカミングデイについて 5. 奨学寄附金について
第6回（10月5日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予備審査委員会委員候補者一覧表（案）依頼フォーム改正について 2. 博士論文予備審査委員会候補者（案）について 3. 10月27日（土）第13回神戸大学ホームカミングデイについて 4. 奨学寄附金について
第7回（11月2日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究科運営委員会の組織について 2. 研究科専攻の講座・コースの再編について 3. 10月27日（土）発達科学部ホームカミングデイについて 4. 奨学寄附金について
第8回（12月7日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究科専攻の講座・コースの再編に係る進捗状況について 2. 11月12日（月）部局年次計画ヒアリングについて 3. 研究科における外国人研究員の選考及び雇用手続き等について 4. 予備審査論文・博士論文の審査等について 5. 第3期法人評価及び3巡目の認証評価に向けた外部評価受審について 6. 先端融合研究環「開拓プロジェクト」提案について 7. SDGsに対する神戸大学の取組HPへの掲載依頼について 8. 奨学寄附金について
第9回（1月11日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 博士学位論文審査委員候補者案について 2. 12月19日（水）研究科専攻の講座・コースの再編に係る水谷理事との面談について 3. 中期計画の指標ごとの目標値について 4. 神戸大学機能強化構想資料（研究科の専門教育に係るポンチ絵）更新について 5. 奨学寄附金について
第10回（2月1日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 1月18日（金）本部・人間発達環境学・国際文化学・国際協力研究科・国際人間科学部）の打合せメモについて 2. 博士後期課程に係る出願件数について 3. 定年後の継続雇用者に係る特例措置の要望書について 4. 助教の大学院担当に係る教務委員会原案について

	5. 1月31日(木)卓越大学院プログラム打合せについて 6. 奨学寄附金について
第11回(3月8日)	1. 人間発達環境学研究科・発達科学部の教員配置について 2. 外国人研究員の選考について 3. 助教の大学院担当に係る教務委員会原案について 4. 非常勤講師の教育活動評価について 5. 教員の社外取締役の委嘱承認について 6. 本部と3研究科との意見交換会で出された課題に対する検討WG報告について 7. 次年度の検討課題について 8. 奨学寄附金について

(研究科運営委員会委員長 岡田修一)

2.2.3. 教員活動評価委員会

神戸大学教員活動評価が実施されて5年目となる。昨年度と同様、教員活動評価委員会内規第3条に基づき、研究科長、副研究科長、専攻長に、その他研究科長が必要と認めた者として発達科学部学科長及び国際人間科学部学科長(グローバル文化学科長を除く)を加えた、9名体制で臨んだ。

また、昨年度合意した評価の方法や基準等を基本的に踏襲しつつ、その都度問題がないか慎重に判断しながら、手続を進めた。「教員活動評価結果通知書」配布後、「意見の申出」はなかった。

教員活動評価委員会は、6月1日、7月6日、7月27日、10月5日、及び1月11日に開催した。10月5日の委員会にて、「教員活動評価書」の見直し、その評価書に対する総合評価に係る基準、及び卓越研究大学を目指す「ビジョン」に基づく共通評価指標との関連性などの検討を行い、1月11日に「教員活動評価書」に対する総合評価に係る基準について確認した。

(教員活動評価委員会委員長 岡田修一)

2.2.4. 中期計画推進委員会

今年度は、研究科長(委員長・岡田修一)、副研究科長(平山洋介、近藤徳彦)、研究推進委員会委員長(岡田修一)、教務委員会委員長(中村晴信)、学生委員会委員長(前田正登)、国際交流委員会委員長(太田和宏)、入学試験委員会委員長(平山洋介)、キャリアサポートセンター長(澤宗則)、情報メディア委員会委員長(宮田任寿)、自己評価委員会委員長(津田英二)、事務課長(中野下勉)の構成員に加え、総務係長(西田望智子)が出席し、月1回の定例会議を開催した(計11回)。

「中期目標の遂行、見直しに関する事項」を所掌する本委員会では、毎回、研究科長から

部局年次計画に関わる全体的な状況が説明された。その後、各委員会等からそれぞれの活動内容が報告され、年次計画の進捗状況を確認し合うとともに、各委員会における計画実施の促進、ならびに委員会相互の情報の共有と連携可能性について検討した。

また、「第二期中期目標・中期計画管理表」における平成30年度実績について各委員会に対し回答を求め、それらを踏まえたうえで本研究科の年次計画管理表の再確認を行った。

(中期計画推進委員会委員長 岡田修一)

2.2.5. 自己評価委員会

本年度は、研究科長(岡田修一)、副研究科長(平山洋介、近藤徳彦)、委員長(津田英二)、副委員長(高見和至)、委員(加藤佳子、谷正人、宮田任寿、井口克郎)、事務課長(中野下勉)の10名の構成員ならびに総務係長(西田望智子)が出席した。10回の委員会の開催、2回メール会議の実施によって、以下の事について取り組んだ。

(1) 授業のピアレビュー

学内教員が学び合うことを目的として行う取り組みとして、学部・大学院の授業を対象にピアレビューを実施した。各学科及びそれぞれの専攻から選定された授業の参観および授業担当者と参観者との意見交換や授業実践報告会が行われ、13科目の授業を対象に延べ50名の教員が参加した。参観形式で実施した科目については、授業の概要、授業において優れた点・工夫がみられた点、次年度の授業改善に向けて強化できる点がピアレビューレポートとして報告された。

(2) ファカルティ・ディベロップメント

大学教員としての能力開発に関する組織的な取組として、3回のファカルティ・ディベロップメントを実施した(資料集を参照)。参加者の延べ人数は、教員220名、職員等19名、合計239名であった。特に今年度はBEEFの効果的な利用を促す取り組みを意識した。

(3) Voice Box

Voice Boxの投稿と回答の公表について、より効果的な方法を協議し規則を変更した。また、Voice Boxに3件の投稿があった。これらの投稿について関連委員会等への検討依頼、執行部・事務部への付託によって改善を図り、必要に応じて投稿者へのリプライを行った。

(4) 各種アンケートの検討

学修の記録、入学・進学時アンケート、授業振り返りアンケート、卒業・修了時アンケートの結果について分析を行い、改善点を洗い出した。また、関連委員会や事務部と連携し改善を図った。

(5) 教育研究懇談会

発達科学部から 2 名の学生が選出され教育研究懇談会に出席した。懇談会の結果が開示され、教育環境の改善について検討した。

(6) 研究科修了時アンケート・発達科学部卒業時アンケートの実施

研究科前期課程修了時アンケートを実施し、その報告書を作成した。また、結果について検討した。

(7) 卒業生の就職先機関インタビューの実施

ミズノ株式会社（人事課長）、兵庫県教育委員会（兵庫県立教育研修所所長）にインタビューを行い、その報告書を作成した。

(8) 法人評価・認証評価に向けた準備

「教育の質向上のための評価指標」見直し、「教育の内部質保証に関する自己点検リスト」に関する協議を行い、法人評価・認証評価の実施に備えた。

(9) 平成 30 年度年次報告書の作成

平成 30 年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し、年次報告書としてまとめた。

（自己評価委員会委員長 津田英二）

2.2.6. 安全衛生委員会

1) 平成 30 年度委員

委員長（村山留美子）、委員（吉永潤、高田義弘、大田美佐子、江原靖人、大野朋子、白杉直子、中野下勉（事務課長）、西田望智子（総務係長）、多田真紀子（人間科学図書館情報サービス係長））

2) 委員会の開催

4 月 24 日、8 月 3 日、11 月 14 日、2 月 19 日に委員会を開催した。

3) 委員会の業務

- ・点検事項報告とその対策の検討
- ・その他改善を要する点の検討
- ・全学安全衛生委員会の報告
- ・その他

4) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を月に一回実施し、各委員が担当場所の点検報告を行った。

5) 本年度の実施事項

- ・巡視（廊下の物品の撤去）について協力依頼を行うとともに、教職員及び学生に節電対策の理解と協力を呼びかけた（6月）。
- ・6月の大阪北部地震の発生を受け、廊下、階段等の不要物品の撤去等について改めて協力を呼びかけるとともに、安全確保の観点から、棚等の耐震金具設置についての調査を実施した（7月）。
- ・廃棄物品の廃棄方法に関するマニュアルを作成して部局内に送付し、不要物品撤去についての徹底を呼びかけた（7月）。
- ・蚊の大量発生への対策として、キャンパス内の側溝の土砂除去作業（6月）、一部側溝への防虫ネットの設置（7月）、側溝への防虫剤の散布（7～9月）を実施した。
- ・A棟（1～4階）の衛生管理者巡視結果を、全学安全衛生委員会において報告した（10月）。
- ・キャンパス内の棚等の耐震金具設置一斉工事を行った（1月）。
- ・キャンパス内各棟の廊下等にある不要物品の一斉撤去を行った（1月～2月）。
- ・各委員巡視時の問題箇所の改善依頼を当該箇所管理者の先生に依頼し、改善を進めた（A棟1階、A棟7階、G棟、駐車場側溝）（7月～3月）。

6) 課題

- ・共有スペースにおける不要物の撤去依頼を継続する。
- ・省エネへの協力依頼を継続する。
- ・蚊の発生について経過を観察するとともに、対策を実施する。

（安全衛生委員会委員長 村山留美子）

2.3. 予算

2.3.1. 予算に関する特記事項

(1) 予算追加配分

本年度は科研費間接経費、受託研究間接経費、契約単価が下がったことに伴う電気料の所要額の大幅減等を財源として、予算追加配分を下記のとおり行った。

- ①前年度に引き続き、外部資金獲得者に対してインセンティブ配分を行った。
- ②教育研究費を全教員に一律3万円を配分した。
- ③第3期中期目標・中期計画期間に予測される財源不足に備えて、800万円を預かり金として確保した。

(2) 平成31年度当初予算配分

平成31年度当初予算配分案作成にあたり、教育研究基盤経費（既定経費）が発達科学部から国際人間科学部への予算振替と機能強化促進係数影響分（1.6%減）により減少したこ

となどから、昨年度よりも厳しい予算配分となった。

①管理的経費については、電気代契約単価の値下げ等による光熱水料の削減、事務補佐員等雇上の費用の減少に加え、トナーインク類等の消耗品費を削減したことから、全体として約988万円の減額となった。

②教育費については、学生当経費として新たに前期課程の研究生一人につき1万円、後期課程の研究生一人につき2万円を配分したことに加え、発達科学部の学生数減少に伴い共通図書費を削減できたことなどから、全体として少し減額となった。

③研究経費については、研究支援経費としてICPSR国内利用協議会会費が新規に計上され、教員研究経費は教員一人あたり30万円を維持したものの、教員数が96人から5人減の91人となったため、全体として少し減額となった。

④附属施設経費については、教育連携推進室の目的等の見直しに伴って、海外での教育連携研究形成等の新たな取組のための経費を計上したため、全体として少し増額となった。

⑤政策経費については、国際人間科学部の授業が減少することに伴い教務委員会のゲストスピーカー謝金が減少するため、全体として少し減額となった。

(予算委員会委員長 渡邊隆信)

2.3.2. 予算関係の審議等の状況

(1)平成29年度決算

平成30年5月15日の予算委員会で審議し、平成30年5月18日の教授会において審議・承認された。

(2)平成30年度当初予算再配分

平成30年3月19日の教授会において承認された平成30年度当初予算について、平成30年5月1日現在での各専攻、学科、コース等の学生実員数に基づいて学生当経費の再配分の修正を行い、5月15日の予算委員会で審議し、5月18日の教授会において審議・承認された。

(3)平成30年度予算追加配分

予算追加配分について、平成30年10月15日の予算委員会で審議し、10月19日の教授会において審議・承認された。

(4)平成31年度当初予算配分

平成31年度当初予算配分について、平成31年3月15日の予算委員会で審議し、3月19日の教授会において審議・了承された。なお、学生当経費は平成31年5月1日の学生当員数に基づいて修正を加え5月開催の教授会で審議することとした。

(予算委員会委員長 渡邊隆信)

2.3.3. 外部資金獲得状況(教員及び学生)

平成 30 年度科学研究費補助金の獲得は、52 件（新規：21 件）、総額 164,500 千円であった。内訳は、新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究：1 件（新規：1 件）、基盤研究(S)：1 件（新規：0 件）、基盤研究(A)：1 件（新規：1 件）、基盤研究(B)：13 件（新規：2 件）、基盤研究(C)：23 件（新規：9 件）、挑戦的研究（開拓）：1 件（新規：1 件）、挑戦的研究（萌芽）：3 件（新規：1 件）、挑戦的萌芽研究：継続 6 件、若手研究(B)：4 件、若手研究：新規 3 件、若手研究(A)：継続 1 件、若手研究(B)：継続 4 件、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）：継続 2 件、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））：新規 1 件となっている。平成 29 年度科学研究費補助金の獲得は 49 件（新規：26 件）、総額 178,600 千円であることから、今年度は獲得件数では微増であるが、新規採択件数では減少している。また、獲得総額は 8%の減少がみられた。特に、昨年度と比較すると、今年度は基盤研究(A)の新規採択、基盤研究(B)及び基盤研究(C)の採択数の減少が特徴的である。

今後、研究推進委員会等において、科研費制度改革の留意点を再考しながら、次年度以降の科学研究費補助金の獲得に向けての検討が必要と思われる。

日本学術振興会特別研究員については、本年度 DC5 名（新規：2 名）、PD1 名（新規：0 名）が採用されている。昨年度の DC8 名（新規：3 名）、PD1 名（新規：0 名）と比較すると減少している。学生委員会を中心とした申請に係る説明会の継続的な開催により、今後の申請数及び採用数の増加策を講じる必要がある。

受託研究については、12 件、総額 7,148 万円となっており、件数及び総額ともに昨年度を上回った（平成 29 年度 11 件、総額 6,821 万円）。また、共同研究については、14 件、総額 1,768 万円となっており、件数及び総額ともに昨年度を上回った（平成 29 年度 12 件、総額 1,354 万円）。

受託事業については、5 件、総額 2,535 万円となっており、総額では昨年度を大きく上回った（平成 29 年度 3 件、総額 1,431 万円）。

奨学寄附金については、20 件、総額 1,639 万円となっており、件数は昨年度を下回ったものの、総額は昨年度を大きく上回った（平成 29 年度 28 件、総額 1,379 万円）。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一）

2.4. 広報及び情報公開

2.4.1. パンフレット、ウェブサイト等

(1) 研究科案内（パンフレット）

平成 31 年 4 月入学者向け研究科案内（研究科案内 2019）を作成し、平成 30 年 6 月に発行した。研究科案内 2019 は 27 ページで構成され、研究科の教育、研究、国際学術交流、社会貢献、各専攻に関する特色について掲載した。平成 30 年から発達科学部の学生募集は停止しているため、発達科学部入学者向けの学部案内は作成していない。

(2) 研究科ウェブサイト

研究科ウェブサイト (<http://www.h.kobe-u.ac.jp>) は平成 23 年度に導入された CMS

(コンテンツ管理システム)によって運用されており、すべての情報を一元的に管理・公開している。しかし、現在のシステムは、古いバージョンのCMSをベースとしているため、セキュリティ、保守性、効率性を考慮すると、最新バージョンのCMSが導入されることが望まれる。

研究科ウェブサイトは、受験生を含む一般向けの広報媒体として、また、在学生や教職員向けの広報媒体としての役割をもつ。平成30年度においては、昨年度同様、入試情報、国際学術交流、シンポジウム(学術WEEKS主催のイベントを含む)、セミナーなど、研究科の公式組織が主催するほぼすべてのイベントの情報をウェブ上に掲載した。在学生向けの情報として、各種教務学生情報(学生便覧、時間割表など)、キャリアサポートセンターが主催するセミナー情報、留学に関する情報を掲載し、学科や専攻を超えた学術交流を支援するため、各コースが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

2.4.2. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

人間発達環境学研究科主催の「オープン・らぼ」は、平成28年度より「オープンらぼウィークス」という研究室訪問期間を設け、参加希望者が予め個別に教員に連絡して面談の予約をとり、「オープンらぼウィークス」の期間中の任意の日時に面談を行うという方式がとられている。

平成30年度は、申込み受付期間を5月21日から6月8日まで、また、研究室訪問期間を6月11日から7月6日までとした。その結果、人間発達専攻の研究室訪問者は103名(昨年度は7名)、人間環境学専攻の研究室訪問者は7名(昨年度は4名)、計110名(昨年度11名)であった。

「オープン・らぼ」開催の趣旨は、人間発達環境学研究科の理念や特徴、養成しようとする人材像等を広く発信するとともに、ひいては大学院の受験生を増加させる点にある。今年度は、人間発達専攻で訪問者が劇的に増加した。その理由は、明確にはわからない。しかし、訪問者の増大は、本専攻の発展を反映・促進するとみられる。一方、人間環境学専攻では、訪問者は、昨年度より増加したとはいえ、一桁にとどまった。この専攻の存在と特徴をより広く発信していく必要が指摘される。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 主査 平山洋介)

2.4.3. ホームカミングデイ

1) 平成30年度発達科学部ホームカミングデイの開催

本年度の神戸大学ホームカミングデイ(第13回)は、10月27日(土)に開催された。本学部でも例年通り、午後から鶴甲第2キャンパスにおいて、学部企画を開催した。

スケジュールは以下の通りであった。

13:00~14:00: 受付(発達科学部A棟正面玄関)

- 14:00～14:30：学内探検ツアー，懐かしいあの場所は今（キャンパスツアー）（構内）
- 14:45～15:00：「鶴甲へおかえりなさい！」発達科学部長，紫陽会会長挨拶（大会議室）
- 15:00～15:15：紫陽会賞受賞式（昨年度活躍された卒業生，現役生に対する表彰）
（大会議室）
- 15:20～16:30：知りたい，伝えたい，繋ぎたい 発達科学マインド
— 卒業生と在学生による懇談会 —（大会議室）
- 16:40～18:00：懐かしの生協食堂で，先輩，同級生，後輩，そして現役学生達と語ろう！
（懇親会）（参加費：3,000 円）

2) ホームカミングデイの招待年と参加者の学部・卒業年

① 招待年：

昭和 33 年卒，昭和 44 年卒，昭和 53 年卒，昭和 63 年卒，平成 10 年卒，平成 20 年卒（以上全学指定），昭和 62 年卒，平成 18 年卒，平成 19 年卒，平成 22 年卒（発達指定）

② 参加者の学部・院と卒業・修了年：

教育学部卒業生（昭和 28 年卒 2 名，昭和 32 年卒 1 名，昭和 34 年卒 2 名，昭和 35 年卒 1 名，昭和 36 年卒 1 名，昭和 38 年卒 1 名，昭和 40 年卒 1 名，昭和 43 年卒 2 名，昭和 51 年卒 1 名，昭和 52 年卒 1 名，昭和 53 年卒 3 名，昭和 54 年卒 1 名，昭和 60 年卒 1 名，昭和 61 年卒 1 名，昭和 62 年卒（平成元年修）1 名，昭和 63 年卒 5 名，小計 25 名（うち現職教員 2 名））

発達科学部卒業生・大学院総合人間科学研究科修了生（平成 9 年卒 4 名（うち 1 名は同 11 年修了），平成 11 年卒 1 名（ご家族 1 名），平成 13 年卒 1 名，平成 20 年卒 1 名，平成 20 年卒 1 名，平成 22 年卒 2 名（うち 1 名は同 26 年修了），平成 23 年卒（同 25 年修了）1 名，平成 26 年卒 1 名，平成 30 年卒 1 名，小計 14 名）

卒業生・修了生とご家族 合計 39 名

在学生（発達科学部 3 年生 3 名，同 4 年生 4 名，大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程 1 年生 3 名，国際人間科学部 2 年生 2 名，小計 12 名）

在学生合計 12 名

現職教員 7 名（卒業生を除く），現職職員 5 名

参加者合計 63 名（懇親会 43 名）

3) 第 13 回 発達科学部ホームカミングデイ企画

テーマ：「知りたい，伝えたい，繋ぎたい 発達科学マインド

— 卒業生と在学生による懇談会 —」

プログラム：

15：20～15：55 パネリストによる話題提供

司会 発達科学部人間環境学科 3 年生

1. 「教育学部を卒業して ○年，そして，今」 教育学部卒業生（昭和 52 年卒）

2. 「ウワサの新学部 コクジンの実態」

国際人間科学部子ども教育学科 2 年生 2 名

3. 「私が考える発達科学マインド」 発達科学部人間行動学科 3 年生

4. 「大学時代に考えていたこと、社会に出て今思うこと」

発達科学部卒業生（平成 20 年人間環境学科卒）

15 : 55～16 : 00 質疑応答

16 : 00～16 : 30 討論

16 : 30 閉会

4) 本年度企画の特色と今後の課題

本年度は、発達科学部の 3, 4 年生と新学部の国際人間科学部の 1, 2 年生が共に在籍する年度であった。昨年度・一昨年度の年次報告書の本項にも述べられているように、在学生の参加がホームカミングデイ活性化の鍵であり、卒業生も在学生との交流を望んでいる。発達科学部の在学生と卒業生がともに振り返る機会が必要と考えた。また、国際人間科学部の学生との交流も重要である。そこで、本年度は、教育学部・発達科学部の卒業生と発達科学部・国際人間科学部（鶴甲第 2 キャンパス）の在学生を繋ぐ企画とした。

まず、14:00 からのキャンパスツアー「学内探検ツアー、懐かしいあの場所は今」では、改修された F 棟の 1, 2F を中心に見学した。1F に新設されたダンス系アクティブラーニングルーム (F164) のお披露目では発達科学部 3 年生男子の創作ダンスのサプライズがあり、参加者を驚かせ、楽しませた。また、同じく F 棟南側 1F の廊下の壁面を活用した展示機能を持つ「ギャラリー虹」を活用して、表現学科 3 年生 3 名がこの日のために自らの絵画の作品を複数点展示した。テーマは、「Try-Angle 人間表現学科絵画ゼミ 3 回生展」であり、参加者らに学生たちの活発な活動状況を知って貰うことができた。いずれも発達科学部表現学科の教員と学生の熱心な協力があって実現した。

3) に示した「卒業生と在学生による懇談会」は、「知りたい、伝えたい、繋ぎたい 発達科学マインド」のテーマのもと、シンポジウム形式で意見交換を行った。教育学部から発達科学部へと改組後、25 年を経た今、本キャンパスに育まれてきた学風のようなものを「発達科学マインド」と名付け、教育学部と発達科学部の各卒業生、発達科学部と国際人間科学部（第 2 キャンパス）の各在学生在がそれぞれパネリストとして話題提供した。国際人間科学部からは子ども教育学科の学生に学科長がパネリストの希望者を募り、自ら立候補した学生達が参加した。彼らは新学部の一期生であるが、今回は教育学部、発達科学部のそれぞれ一期生が参加していたこともあり、時代を超えて共有できる部分を見出すことができ、3 つの学部を繋ぐ有意義な懇談会となった。司会やパネリストの方々には準備段階から協力頂いた。

今後の課題は、やはり卒業生、在学生共に参加者を増やすことである。開催日の 10 月末土曜日は様々なイベントと重なることから、働き盛り・子育て世代には参加し難い場合も多い。今回、家族同伴可能としたことから卒業生の子どもが参加してくれた。今後も、オープンキャンパス的な見方も兼ねて卒業生の家族が参加し易いように案内することを一案としたい。また、今回、社会で活躍する教育学部、発達科学部の卒業生に懇談会のパネリストを務めて頂いたが、在学生にとっては、人生の先輩としての相談相手や自身のキャリア形成の

モデルとなり得ることを実感した。今後もさらに卒業生と進路を考える在学生との交流の場になるような企画が望まれる。

次年度は、発達科学部の学生が最終学年を迎える。彼らに卒業生がエールを送り、続く国際人間科学部の学生にもホームカミングデイを通じて卒業生と繋がる大切さを知ってもらえる機会にしたい。

(第 13 回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長 白杉直子)

2.5. 環境設備

2.5.1. 教育・学習環境の整備

(1) 各種施設・設備

1) 教室 (B 棟及び F 棟) 等の整備

学生の教育環境を充実させるため、B 棟階段教室 (B108 及び B212) の老朽化したマイク設備を更新するとともに、映像投影時に音声の不具合があった中教室 (B106 及び B210) のプロジェクターを修理した。また、F 棟多機能ルーム (F257) 及び中教室 (F263) に、新たに AV 機器及びマイクを設置 (増設) するとともに、季節によって日差しの影響により利用に支障が出ていた教室等 (F158, F257 及び F263) にカーテン (暗幕) を設置した。これら整備の一部は、紫陽会からの支援によるものである。

2) 本館 (A 棟) の整備

キャリアサポートセンターによる各種支援を学生に周知するために、1 階に設置していた掲示板を更新するとともに、2 階教務学生係事務室横に学生向け掲示板を増設した。また、本キャンパス内における怪我人・急病人発生時の対応のため、A 棟に車椅子を配備した。

(事務課長 中野下勉)

(2) キャンパス内ネットワーク環境整備

本研究科で利用できる無線 LAN は、神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN と、本研究科が独自に管理するものが存在する。平成 30 年度は、新たなアクセスポイントの設置は行っていない。部局内建物の主要な場所において無線 LAN の利用が可能となっているが、部分的に電波が届きにくいという報告はされている。

昨年度に行われた全学的なネットワーク設備の変更 (KHAN2017 への移行) に対応するため、部局内において、構成員への説明会を実施し、ネットワークの管理体制を整備した。

情報教育設備室の準備室にはスタッフが常駐し、60 台の教育用端末のサポートの他、学生や教職員向けに、コンピュータやネットワーク利用に対する技術支援も行っている。

本研究科では、学生向けメーリングリストの運用を行っている。メーリングリストは学生が所属する公式組織 (コースなど) 単位で構成され、教務、学生生活、キャリアサポートに関する情報などが配信された。また、在学生向けの情報を流す電子掲示板も部局内に 3 箇所設置しており、この運用も行っている。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

(3) 図書館運営・整備

本学研究科・学部に附設された人間科学図書館は、下記の活動を実施した。

新入生ガイダンスで図書館利用の意義・方法を案内した(「図書館利用のすすめ」)。利用方法を説明する「春の図書館ツアー」を4月6～10日に実施し、4月中は要望に応じて適時実施した。また図書検索実習を行った。

学生用資料の整備充実に努め、平成30年度において、学生用推薦図書(専攻推薦図書)、学生希望図書、学習・研究の基盤として必要な高額図書など、1,061冊(総額3,664,806円)の図書を購入して配架した。部局からの配分図書費が約17%削減されたため、学生用推薦図書や学生希望図書を減額せざるをえなかった。また、平成29年度購入学生用図書の平成30年1月～12月までの利用実績は、全体の貸出率で50.71%、回転率で152.61%であり、いずれの図書とも概ねよく利用されていた。スペースの有効活用の観点から、古い資料・重複資料を1,786点(5,517,164円)、処分した。

予算的観点から、継続購読中の学生用雑誌について見直しを行うため、学科ごとに意向調査を行った。その集約結果により、電子ジャーナルで閲覧可能である19誌については、冊子の購読を中止した。また利用頻度が低くかつ意向調査でも継続の必要なしと判断された28誌についても購読中止とした。

教員の転出に伴う返却図書について、当該教員より譲渡ならびに返還申請のあった資料の審議・決定をした。

本年度は、メール会議を含めて6回の委員会を開催した。全学の附属図書館運営委員会には、4回出席した。

(図書委員会委員長 加藤佳子)

2.5.2. 交流ルーム・アゴラ

今年度も従来通り、平日11時～18時まで運営し、食事と飲み物を提供した。学生や教職員の他、学外からの利用もあり、特に昼食時間帯に混み合った。

1) 体制

今年度は、2名のスタッフ(非常勤職員)の退職に伴いどのようなスタッフ体制を組むかという課題から始まった。昨年度から引き続き雇用できたのは知的障害のあるスタッフ4名であり、新たに学生3名の雇用を行うことで、6名体制での運営を行い、常時2名体制を敷くことができた。他に実習生1名が週2回携わった。

また、この体制に移行するに当たって、知的障害のあるスタッフが会計責任者となることとなったため、そのサポートに1名の学生の雇用を行った。

10月からは新たに2名のスタッフを加え、学生もあわせて計7名での運営に切り替えた。また、実習生が1名加わり、2名となった。

2) 活動状況

・六甲アイランド高校の福祉専攻の生徒たちが、前期に月一回のペースで実習を行った。

- ・前期毎週1回、大学院の授業が哲学カフェ、サイエンスカフェ形式で実施された。
- ・8月10日のオープンキャンパスには、スタッフ6名と学生アルバイト6名が対応し、ランチ等を提供した。メニューは、カレー、パウンドケーキ、コーヒー、リンゴジュース、レモンスカッシュであった。また、実習生が構内でクッキーを売り歩いた。
- ・知的障害のあるスタッフのうち1名は、交流ルームでの業務の他に、会議室や教室の清掃に従事した。
- ・スタッフと実習生が、教員ボックスへの郵便物の配達を行った。
- ・実習生1名（年度途中から2名）が構内でクッキー販売を行った。

3) その他

- ・年度末に、A144に控室を設置することができた。

(交流ルーム運営委員会委員 赤木和重)

2.6. 教員研修

2.6.1. FD

研究科FD記録、及び神戸大学HP大学教育推進機構「FD活動」FDカレンダーより抜粋したFDについて、以下に記す。

- (1) 4月6日「現代生命科学Aに関する意見交換会」
- (2) 4月10日「自然環境科学実験B（主として生物学）【自然】に関する意見交換会」
- (3) 4月20日「生活環境基礎実験に関する意見交換会」
- (4) 5月23日「心理発達論演習B」
- (5) 6月15日「BEEFの活用事例」
- (6) 7月20日「人間の発達と表現1」に関する意見交換会」
- (7) 8月30日「健康発達概論に関する意見交換」
- (8) 9月28日「科研費制度改革の留意点と大型科研への取り組み」
- (9) 10月19日「アクティブラーニング型授業について」
- (10) 12月21日「合理的配慮と発達障害・精神障害の具体的対応—事例から考える—」
- (11) 1月18日「人間の発達と表現2」に関する意見交換会」
- (12) 2月13日「子ども発達論研究法2」

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

2.6.2. 初任者研修

情報メディア委員会では、毎年、着任した教員に対して研修会を主催している。平成30年度に着任した教員はいないため、研修会は開催していない。

(情報メディア委員会委員長 宮田任寿)

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

本研究科及び発達科学部が関係する入学試験全体を所管する入学試験委員会は、研究科長，副研究科長，専攻長，学生委員会委員長，発達科学部学科長の計8名で構成し，平成30年度委員長を平山洋介副研究科長が務めた。なお，学部の入学試験は国際人間科学部の入試となり，当該学部の入学試験委員会の所掌下にある。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

・第1回（4月19日）

1. 平成31年度大学院学生募集要項について
2. 平成31年度入学者に係る入試日程について

・持ち回り審議（5月17日）

1. 平成31年度博士課程前期課程学生募集要項(案)
2. 平成31年度博士前期課程人間発達専攻1年履修コース学生募集要項（案）

・第2回（7月24日）

1. 大学院募集要項の英語化について
2. ネイティブ学生の英語外部試験の取扱いについて
3. 英語による授業等の検討

・第3回（9月10日）

1. 平成31年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第I期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

・第4回（9月26日）

1. 平成31年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
2. 博士前期課程入学試験におけるネイティブ学生の英語外部試験の取扱いについて
3. 大学院募集要項の英語化について
4. 英語による授業の検討
5. 英語による入試問題の検討

・第5回（1月15日）

1. 平成31年度博士課程前期課程人間発達専攻1年履修コース入学試験合格者の判定について
2. 平成32年度博士前期課程学生募集要項について
3. 平成31年度博士前期課程入試合格者の辞退状況について
4. 入学者選抜の実施にかかる留意事項等について

・第6回（3月5日）

1. 平成31年度博士課程後期課程入学試験・進学者選考試験合格者の判定について
2. 平成32年度以降の博士後期課程入学試験・進学者選抜試験実施日について

（入学試験委員会委員長 平山洋介）

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は，関係各位の尽力により大過なく遂行された。

平成 28 年度から導入された博士課程前期課程の英語外部試験は本年度も継続され、合否判定に有効に活用された。人間発達環境学研究科博士課程前期課程の学生定員に関しては、平成 28 年度より人間発達専攻では 52 名から 51 名に、人間環境学専攻では 40 名から 36 名に削減され、研究科全体の定員は、92 名から 5 名減の 87 名となっている。

博士課程前期課程の平成 31 年度入学試験結果は、人間発達専攻では、入学定員 51 名に対し、志願者数 69 名（志願倍率 1.35 倍）、合格者数 57 名であった。人間環境学専攻では、入学定員 36 名に対し、志願者数 44 名（志願倍率 1.22 倍）、合格者数 33 名であった。外数（定員 4 名）としている人間発達専攻（1 年履修コース）では、志願者数 5 名、合格者数 4 名であった。研究科全体では、定員 91 名に対し、志願者数 118 名（志願倍率 1.30 倍）、合格者数 94 人となった。博士課程後期課程については、人間発達専攻では、入学定員 11 名に対し、志願者数 15 名（志願倍率 1.36 倍）、合格者数 11 名、人間環境学専攻では、定員 6 名に対し、志願者数 5 名（志願倍率 0.83 倍）、合格者数 5 名であった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体に関しては、定員 17 名に対し、志願者数 20 名、合格者数 16 名となっている。

とくに人間環境学専攻に関し、志願者数を増加させ、安定させることが課題として指摘される。博士課程前期課程については、平成 31 年度の志願者は、前年度までに比べ、増加したとはいえ、これが安定して続くかどうかを見守る必要がある。博士課程後期課程については、平成 31 年度入試の志願者数は定員を下回った。現在、博士課程前期課程の人間環境学専攻の入試に関し、英語での受験を可能にするよう、制度改正を検討中である。これは、大学院のグローバル化を反映・促進すると同時に、志願者数を増加させる一つの方策になると考えている。人間発達専攻についても、英語での受験を可能にする制度改正を検討することがありえる。

入学試験に関する詳細なデータは『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長 平山洋介）

4. 国際交流活動

4.1. 学術交流協定

(1) 新規締結：新たに以下の大学との交流協定を締結した。

部局間協定

カセサート大学理学部・理学研究科（タイ） 学術交流協定および学生交流細則

スラマン PGRI 大学（インドネシア） 学術交流協定

マラヤ大学農業バイオテクノロジー研究センター 学術交流協定

ドレスデン工科大学（ドイツ） エラスムス+IIA(インターンシップ)協定

複数部局協定（タイプ 2）

ダルムシュタット工科大学（ドイツ） 学生交流実施細則

全学協定（タイプ 1）

ジョージア工科大学（アメリカ合衆国） 学生交流細則

パベシュ・ボヨイ大学（ルーマニア） 学生交流細則

国立成功大学（台湾） 学生交流細則

(2) 協定終了 以下の大学との交流協定の終了を確認した。

ペンザ州立建築建設大学（ロシア）

形式上平成 28 年に失効していたものを双方確認し終了した。

ヨハネス・ケプラー大学（オーストリア）

長年交流実績がなく双方確認のうえ終了をした。

（国際交流委員会委員長 太田和宏）

4.2. 留学生

本年度、本研究科で学んだ留学生は 80 名である。昨年度 70 名と比較して 14.3%増加した。内訳（性別・国籍別・学年別・専攻・学科別・国費/私費別）は別表のとおりである。

(1) 交流協定校との留学生の交換

受入： 華東師範大学 2 名， ヴィリニウスゲディミナス工科大学 (Erasmus+) 1 名

派遣： 高麗大学校 1 名， グラーツ大学 1 名， リール大学 1 名， ブリュッセル自由大学 1 名

(2) 留学生関連行事

従来実施していた、懇談会、茶話会、小旅行等、留学生向けの企画は、日本人学生との交流の希薄さなどから今年度は実施を見合わせた。今後は留学生の意向を踏まえながら検討する。

(3) チューター制度

留学生の来日直後の生活条件の整備、諸手続き遂行、論文作成において補助を要する者に対して、個人チューターを配して便宜をはかった。

別表 「留学生の内訳」

		前期	後期	計
性別	女性	45	54	54
	男性	23	26	26
	計	68	80	80

		前期	後期	計
国籍	中国	59	67	67
	韓国	3	3	3
	台湾	1	1	1
	インドネシア	2	2	2

	コスタリカ	1	1	1
	コロンビア	1	1	1
	スリランカ	0	1	1
	タイ	0	1	1
	リトアニア	0	1	1
	マレーシア	0	1	1
	バングラディッシュ	1	1	1
	計	68	80	80

		前期	後期	計
学年	D3	5	5	5
	D2	3	3	3
	D1	3	3	3
	M2	13	13	13
	M1	23	23	23
	学部生 4 回生	1	1	1
	学部生 2 回生	2	2	2
	学部生 1 回生	1	1	1
	研究科研究生	16	25	25
	学部研究生	0	0	0
	学部特別聴講生	0	0	0
	大学院特別聴講生	0	3	3
	教育研修生(大学院特別 研究生)	1	1	1
	計	68	80	80

		前期	後期	計
専攻・学科	人間発達	29	35	35
	人間環境学	35	41	41
	発達コミュニティ	2	2	2
	環境共生	1	1	1
	人間表現	1	1	1
	計	68	80	80

		前期	後期	計

国費/私費	国費	2	3	3
	私費	66	77	77
	計	68	80	80

(国際交流委員会委員長 太田和宏)

4.3. ダブルディグリー

タイのカセサート大学と締結した学術交流協定および学生交流細則に基づきさらなる研究交流を促進し、ダブルディグリー・プログラムの内容を検討している。

(国際交流委員会委員長 太田和宏)

4.4. Innovative Asia

国際協力機構 JICA によるイノベティブ・アジアに本研究科としても積極的に取り組むこととし、手続きを整備し東南アジア諸国からの留学生応募をかけた。マレーシアのマラヤ大学から生物学分野に取り組む有望な院生を迎え入れることができた。近江戸伸子教授指導の下研究に励んでいる。

(国際交流委員会委員長 太田和宏)

4.5. 学生・教員・職員の海外派遣

(1) 国際交流運営資金

学生の国際学会発表への援助事業助成

2018年8月: 人間環境学専攻(2018) 4名 大韓民国 26th International Conference on Raman Spectroscopy

その他国際交流に関する事業

2018年9月: 人間形成学科(2018) 4名 教育方法学ゼミナール主催教育・子ども総合支援に関する日英比較研究会・研究調査

(2) 教員・職員派遣 (研究科等の経費)

期日	氏名	国	訪問先	内容
2018年7月	近江戸伸子	オーストラリア	キャンベラ大学, ロイヤル・ボタニックガーデン	バイオテクノロジー研究スタディツアー海外研修引率
2018年8月	坂東肇	チェコ	サマーアカデミー AMEROPA, ミュージックキャンププラハ, カサヴェルディ	サマーアカデミー AMEROPA 及びミュージックキャンププラハ並びにカサヴェルディに学生引率及び開拓

	佐藤春実	アメリカ	ワシントン大学, ボーイング社エベレット工場	GSC/ROT プログラム海外研修において受講生の指導および引率を行う
	古川文美子	インドネシア	リアウ大学等	グローバルチャレンジプログラムの現地コーディネーター
	伊藤真之	アメリカ	オレゴン大学メインキャンパスおよびパインマウンテン天文台	GSP オレゴン大学 PMO プログラム
	谷正人	イラン	International center for Persian Studies 及び Kamkar 音楽教室	GSP 引率及び中東少数民族の音文化に関する研究調査
2018年8月～9月	津田英二	アメリカ	Minnesota Department of Education, St. Cloud State University, ミネソタ大学等	GSP 学生引率
2018年9月～10月	川地亜弥子	イギリス	Impington Village Collage, St. Laurence Catholic Primary School, College Nursery School 等	オラリティを中心とした資質能力及び食に関する子育て支援教育に関する調査研究
2019年1月	太田和宏	フィリピン	サンバーダ大学, 労働雇用省(DOLE), Abra 生活協同組合	GSP 実践型プログラム学生引率
2019年2月	落合知子	ベトナム	ドンスアン市場, 国際交流基金ハノイ事務所, Rensei Education Center, ホーチミン日本人学校	グローバルネットワークによる母語・バイリンガル教授法開発に関する調査及び資料収集ならびにGSPプログラム開拓
2019年3月	川地亜弥子	イギリス	ケンブリッジ	GSP 学生引率
	源利文	中国	上海交通大学, 浙江省風景園林学会水生植物研究所	グローバルチャレンジプログラムに係る打ち合わせおよび現地視察

3) 紫陽会グローバル人材育成資金

期日	氏名	授業科目等	渡航先・学生等
2018年8月15日～24日	坂東肇	ピアノ演奏演習2, 卒業研究, 器楽表現特論 I-2	イタリア 学生3名
2018年9月9日～16日	長ヶ原誠	スタディー・ツアー	マレーシア 学生9名
2018年9月	源利文	GSP 実践型 アジア・フ	インドネシア・スラウェシ

17日～25日	古川文美子	イールドワーク	学生1名
2018年11月 20日～29日	秋元忍	スポーツ文化史特論演 習1, スポーツ文化史特 論演習2	中華人民共和国・上海 学生1名
2019年3月 20日～22日	片桐恵子	エイジング論演習・卒業 研究(片桐ゼミ)	大韓民国 学生4名

(国際交流委員会委員長 太田和宏)

4.6. 海外研究者等の招聘・訪問

期日	氏名	国名	所属・職名	受入者
2018年				
2018/5/9	西田 幸代	オースト ラリア	ニューイングランド大学・ 講師	北野幸子
2018/5/24	Daryna Dechyeva	ドイツ	ドレスデン工科大学・ 助教	近江戸伸 子
2018/6/7	Kim Jong Nam	韓国	ナザレ大学リハビリテ ーション自立学科 ・保護者会代表	津田英二
2018/6/7	Kim Jae Eun	韓国	フリー・舞踏家	津田英二
2018/6/29～7/3	Sumaporn Kasemsumran	タイ	カセサート大学農業研 究所・研究員	佐藤春実
2018/6/29～7/3	Nattaporn Suttiwijitpukdee	タイ	カセサート大学農業研 究所・研究員	佐藤春実
2018/7/21～7/30	Christine Luscombe	アメリカ	ワシントン大学・教授	伊藤真之
2018/9/11～9/14	Karl Neumann	ドイツ	ブラウンシュヴァイク 工科大学・名誉教授	渡邊隆信
2018/10/2	Allan Cledera	フィリピン	講師	太田和宏
2018/10/30～11/2	Gyounghae Han	韓国	Seoul National University・教授	片桐恵子
2018/10/30～11/2	Jeonghwa Lee	韓国	Chonnam National University・教授	片桐恵子
2018/10/30～11/2	Joohong Min	韓国	Jeju National University	片桐恵子
2018/10/30～11/2	Heejin Choi	韓国	Seoul National University・大学院生	片桐恵子
2018/10/30～11/2	Youngeui Hong	韓国	Seoul National University・大学院生	片桐恵子

2018/10/30～11/2	Jin Kin	韓国	Seoul National University・プログラムコーディネーター	片桐恵子
2018/10/30～11/2	Donghyun Kang	韓国	Seoul National University・大学院生	片桐恵子
2018/11/15～11/24	Faith Kares	アメリカ	City of Chicago・アナリスト	太田和宏
2018/9/17～9/18	中野 リン	香港	香港中文大学・教授	渡部昭男
2018年				
2019/2/17～2/22	Ir. Andi Amri	インドネシア	ハサヌディン大学・准教授	古川文美子
2019/2/17～2/22	Dadang Ahmad Suriamihardja	インドネシア	ハサヌディン大学・准教授	古川文美子
2019/2/16～2/24	Wen-Shin Lee	英国	スターリング大学・講師	長坂耕作
2019/3/2～3/6	Oranuch Puangasuk	タイ	ウボンラーチャーターニー大学・准教授	太田和宏
2019/3/3～3/6	Raja Farihana Binti Raja Khairuddin	マレーシア	スルタン・イドリス教育大学・教授	太田和宏
2019/3/3～3/6	王 素斌	中国	華東師範大学・准教授	太田和宏
2019/3/2～3/7	Karl Ian Cheng Chua	フィリピン	アテネオ・デ・マニラ大学・准教授	太田和宏
2019/3/2～3/7	Ir. Andi Amri	インドネシア	ハサヌディン大学・准教授	太田和宏
2019/3/17～3/23	Sumaporn Kasemsumran	タイ	カセサート大学農業研究所・研究員	佐藤春実
2019/3/23～3/31	Yeonju Park	韓国	江原大学校・特任教授	佐藤春実

※学術 WEEKS での招聘についてはその項を参照
(国際交流委員会委員長 太田和宏)

4.7. 「英語による授業の実践—ESD 研究」

大学のグローバル化に対応して、英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては、英語の授業に対する学生からのニーズは乏しいものの、ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから、大学院に開設された ESD サブコースの授業科目のうち、「ESD 研究 1・2 (ESD study1・2)」は、英語で実施された。

本研究科の教員5名（太田和宏，津田英二，清野美恵子，稲原美苗，松岡広路）のコーディネートの下，毎回，履修生が英語でショートスピーチを行い，英語でグループディスカッションを行う，という形式である。一切日本語は使われない。履修生は8名で，うち4名は留学生（リトアニア1名，中国3名）であった。授業後のコメントも英語で記入し，最終レポートも英語で作成することを求めた。教員・院生共に試行錯誤であったが，参加院生からの「国際舞台での発表を意識することができた」等の意見や，日本人学生からの「英語でのコミュニケーションの面白さを体感できた」との感想などを得た。

夜間ということもあってか，履修院生数は少なく，とりわけ，日本人学生の履修が少なかった。次年度は，本学カリキュラムにおいて定着的に発展するために，本研究科だけではなく，全学的に本授業の存在をアピールし，履修院生の拡大とともに，英語による授業の大切さを広めていくつもりである。

（人間発達専攻 松岡広路）

4.8. 海外協力大学とのグローバル・ワークショップ

平成31年3月4日，5日に国際交流委員会と発達支援インスティテュートとの共催でグローバルな視野での研究教育の在り方を考えるワークショップ“Sustainable Development Goals (SDGs) and University Education: Challenge of Global Interaction in A New Era”（SDGsと大学教育ーグローバル交流の可能性）を開催した。神戸大学からは松岡広路教授がSDGsとESDについて，落合知子准教授がGSPについて講演をした。参加したハサヌディン大学 Andi Amri 教授（インドネシア），アテネオデマニラ大学 Karl Ian Cheng Chua 准教授（フィリピン），ウボン・ラチャタニ大学 Oranuch Puangsuk 准教授（タイ），スルタン・イドリス教育大学 Raja Farhana Raja Khairuddin 教授（マレーシア），華東師範大学王素斌教授（中国），ダブリン市立大学 Trudy Corrigan 博士（アイルランド）から，各大学の国際化戦略と取り組み実践が報告され，教訓や課題を共有し，今後の研究教育上のさらなる交流を進めるための意見交換をした。将来に向けた継続的協力関係の模索のための好機会となった。なお企画はキャンパスのグローバル化推進の一環として取り組まれた。

（国際交流委員会委員長 太田和宏）

4.9. スタディツアー

(1) Casa Verdi に学ぶ，音楽と人生

渡航先：イタリア

8/16～8/23に Casa Verdi で行われる Raimondo Campisi 氏（ピアニスト，元ミラノ音楽院教授）のマスタークラスを受講し，最終日に行われるコンサートに出演した（ミラノ滞在：8/15～8/24）。

Casa Verdi は，一流の音楽家のみが入居を許される養老院。ここで，海外研修の一環として授業受講生等のために特別に開講されたマスタークラスに，発達科学部人間表現学科

3年及び4年生の学生(各1名)、大学院人間発達環境学研究科研究生(1名)等を引率・指導し受講させた。

その結果、成果発表の場であるファイナルコンサートで、満場の拍手と共に大きな信頼を得て、家族として迎え入れられるほどの深い絆で結ばれ、これからも毎年、交流を温めていこうとの協議を Casa Verdi 及び Casa Verdi 入居者の Raimondo Campisi 氏と坂東との間で行った。

以上のように、世界的な水準にある音楽の殿堂から、演奏の評価だけでなく、人間的にも評価され、毎年の継続を望まれるほどの信頼関係が結べたことは、これまでの学びと受け入れ先開拓の道筋が正しかったことを確信させ、受講生にも引率者にも大きな自信となった。

(人間発達専攻 坂東肇)

(2) 第1回アジア・パシフィックマスターズ大会調査

平成30年9月7日から9月15日の期間で開催された第1回アジア・パシフィックマスターズ・ペナン大会における現地調査を目的として、主に大会の運営状況を中心にマスターズ甲子園事務局に関わる院生・学部生が中心となってフィールドワークを実施し、第10回ワールドマスターズゲームズ2021 関西大会に向けての参考情報を幅広く収集すると共に、開催準備に関する具体的な大会プロモーションの方向性と課題を集約した。

大会では、各競技会場での運営視察調査、選手やボランティアに対する会場インタビュー調査、開閉会式・文化関連行事でのインタビュー・映像収集調査の実施、さらに大会組織委員会事務局の部門別運営マニュアル情報や大会プロモーションに関わる映像データを収集した。滞在中にインタビュー動画の文字おこしを行い、参加者が大会で得られる満足度や課題の内容を分析し、マスターズスポーツ振興支援室が作成したスポーツライフ活性化指標を基に生涯スポーツ国際大会への参加経験による活性化の具体的内容を抽出した。同時に、各年代の男女選手を対象として2021年に関西圏で開催されるワールドマスターズゲームズ大会に対する出場意向と期待度に関する質問紙調査を実施し、今後の追跡研究に向けてのベースラインデータを集約した。

これらの調査情報は、インタビュー動画の日本語の字幕付けを行い、動画掲載用の Facebook ページ「マスターズスポーツ応援プロジェクト」に掲載し、大会プロモーション情報(大会前の主催団体による準備状況)、大会オペレーション情報(大会中の主催団体による運営状況)、大会ボランティアマネジメント情報(大会参加ボランティアの運営状況)、大会フォローアップ情報(大会後の主催団体によるケア状況)の4部構成による大会調査報告書を最終的に作成した。

(人間発達専攻 長ヶ原誠)

(3) 教育・子ども総合支援に関する国際比較研究会・研究調査

英国・ケンブリッジにおいて、教育・子ども総合支援について実地に調査し、日本およ

び英国におけるそれらのあり方について研究会を行った。平成30年9月23日（日）～9月30日（日）の8日間であった。4年生4名が参加した。子ども家族支援団体や学校において子どもや家族と直接接するため、全員が無犯罪証明書を取得し現地に持参した。

公立保育園，公立小学校，公立中等教育学校（国際バカロレア認定校），子ども家族支援団体2か所を訪問・見学した。加えて，公立小学校内で実施されているアフタースクールの指導補助，子ども家族支援団体でのプレイワーカーの補助，日本人育児の会での遊びの提供を行った。初日には連携協定先のメドウにおいて，英国における支援の現状と実際，とりわけ虐待，DV，訴訟の対応とその克服に向けた支援に関してレクチャーを受け，最後に日英比較研究会を開催した。学生は熱心に参加し，日本における子ども家族支援との違い，今後の課題について帰国後も考察を続けていた。

本ツアーは紫陽会グローバル人材支援基金より支援を受けた。

（人間発達専攻 川地亜弥子）

(4) 大韓民国ソウル市での日韓の高齢社会事情比較

平成30年度は梨花女子大学，中央大学校との国際交流を実施した。本学の学部生4名が参加した。日程は平成31年3月20日から22日の3日間であった。

20日は中央大学校を訪問し，同大の老年心理学や消費者心理学の先生と，日本と韓国の高齢者の心理や消費行動についての相違などについて議論をした。

21日は梨花女子大学を訪問し，学生間の研究課題についての討議，同大学のコミュニティーセンターを訪問し，活動の様子を見学，梨花女子大学の研究者及び学生と交流を行った。

学生は韓国と日本を比較し，高齢者の家族関係や経済状況，消費行動など，日韓の高齢者や取り巻く状況の相違点について理解を深めたと思われる。

本プログラムは 同窓会紫陽会グローバル人材育成基金の助成金により実施された。

（人間発達専攻 片桐恵子）

(5) アメリカの障害者権利擁護運動に接する旅

現代アメリカの障害者権利擁護運動の動向に焦点を当て，ミネソタ大学とセントクラウド州立大学の他，アクティブな運動団体や多様な子どもたちが通う学校，行政機関等を訪問し交流するプログラムを実施した。期間は8月31日～9月9日で，訪問先はミネソタ州。参加者は人間発達環境学研究院生3名，国際人間科学部学生3名であり，事前学習も含めて熱心に深い学びの機会となった。

（人間発達専攻 津田英二）

(6) フィリピンの労働事情に関する調査研究

国際開発論演習の一環として発達科学部学生6名，およびGSPプログラムの一環として国際人間科学部生5名を1月に8泊9日でフィリピンに引率をした。提携大学サンペーダ

大学アラン・クレデラ講師の協力を得て、労働雇用省でのレクチャーを受け、マニラにおけるインフォーマルセクター労働者、アブラ州生活協同組合における新しい農業の模索等につき、現地調査を行うなど情報を収集した。なお大半の参加者が JASSO 奨学金の支援を受けた。

(人間環境学専攻 太田和宏)

5. 教育

5.1. 教育課程

5.1.1. 今年度の特徴

平成 30 年度に新たに開始した取り組みや、本年度特記すべき事項などは以下のとおりである。

(1) 博士課程前期課程及び後期課程の指導体制の変更に係る内規の作成

これまで整備されていなかった、博士課程前期課程及び後期課程の指導教員の変更について、原則として指導教員を変更しなければならない場合及び指導教員を変更できる場合の各々について定めた。

(2) イノベティブ・アジアプログラムの実施

アジア諸国にて産業開発を担う優秀な若手人材を外国人留学生として日本へ受入れ、本学における英語による博士課程前期課程教育と、企業・研究機関への見学やインターンシップを実施するものとして募集を行った。本募集により 1 名の外国人留学生が採用された。

(3) ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの見直し

本研究科のディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーが神戸大学のディプロマ・ポリシーと整合性があるかどうか確認作業を進め、必要箇所について修正を施した。

(4) 博士課程後期課程に関する研究科細則等の整備

博士後期課程における指導および審査に関する細則、基準、申し合わせ等について、各条文間及び現状との間での整合性を鑑み整備を行った。

(5) 博士課程前期課程に関する研究科細則等の整備

博士課程前期課程の指導及び審査に関する研究科細則等について、各条文間及び現状との間での整合性を鑑み整備を行った。

(6) 環境教育プログラムの策定

理学研究科と本研究科との間のプログラム教育コースとして「環境・化学プログラム教育コース」を設置し、履修要件等を定めた。また、それに伴い研究科規則を改訂した。

(7) 助教・講師の大学院担当に伴う規程の整備

新たに助教及び講師が大学院担当となることに伴い、関係する研究科細則、要領、申し合わせ等を整備した。

(8) 教育のアウトプット・アウトカムの調査

平成 28 年度及び 29 年度に関する教育のアウトプット・アウトカムに関する調査を行った。

(教務委員会委員長 中村晴信)

5.1.2. 研究科，専攻共通科目

(1) 人間発達総合研究 I

人間発達総合研究 I は前期課程の共通科目として，人間発達専攻前期課程1年生全員が一堂に会して実施されるものである。専攻内の各研究分野から選出された教員たちが，綿密に連携して講義を進めている。ここ数年は特に，多様な研究関心を持つ院生同士が人間発達研究に向けた学際的・総合的アプローチを共同開発し，各自の研究にフィードバックできるよう，グループ協議・発表を中心としたアクティブ・ラーニングの積極的活用を努めてきた。毎年，各系講座の委員からなる共通科目運営委員会を設置して熱心に協議を重ねることによって，組織的・機動的な運営が行われるよう工夫している点も特徴の一つである。受講生・担当教員の双方から，きわめて高い満足度が示されている。

(人間発達総合研究主担当 山下晃一)

(2) 人間発達総合研究 II

平成 30 年度の人間発達総合研究 II は，例年通り，人間発達専攻に在籍する博士課程 1 年次生の博士論文構想発表会として実施した。開催日は，平成 30 年 7 月 13 日であり，会場は中会議室 B であった。例年は大会議室で開催しているが，本年度は災害対応のため使用できなかったため，小さなサイズの会場となった。参加院生は，司会などを分担して担当し，各自資料を提示しつつ，30 分の発表（質疑込み）を行った。質疑なども活発であり，博士論文作成への出発点として有意義な会であったと考えられる。以下に当日の発表課題を示す。

- ・自己肯定感を高めるための身体表現ワークショップ～効果の検証と実践家の試み～
- ・算数科授業における数理構成能力を育成する相互行為に関する研究
- ・生活習慣における自己制御を規定する心理的要因に関する研究
- ・保育情報の公開に関する研究-保育施設の評価を中心に-
- ・中央競技団体における統合・インクルージョンに関する実証的研究-障害者スポーツに着目して-
- ・シニアの生涯学習の効果-学習を通じた生涯発達から-
- ・「教育的ニーズ」の定義とその読み取りの提案（仮）
- ・「柔道の投げ技における頭部損傷の予防に向けた加速度解析」
- ・子育て支援における保護者の葛藤と倫理的意決定
- ・中年期の重要な個人ライフイベントについての認知と定年退職への適応について

(人間発達総合研究主担当 稲垣成哲)

(3) 人間発達相関研究

人間発達相関研究では、受講生である人間発達専攻前期課程1年生が、前期に開講された人間発達総合研究 I における学修成果を基盤として、自らの修士論文の構想・計画を作成、発表、協議するものである。各自が基盤とする研究分野に軸足を置きながらも、人間発達を研究する総合的なアプローチの創出・活用を目指して、修士論文構想のポスター発表を行い、参加者のみならず専攻内外の前期課程・後期課程の院生、さらには教員をも交えて、様々な専門領域の観点から活発な質疑応答が行われる。今年度も約80名の参加者を得て、活発な発表と議論が繰り広げられた。

(人間発達相関研究主担当 山下晃一)

(4) 人間環境学相関研究は、人間環境学専攻の前期課程共通科目として実施されてきたが、学生の要望も踏まえて平成 28 年度より授業の設計を変更した。講義形式によって、大学院生としてのキャリア形成や研究を進める上で必要なリテラシーを学ぶとともに、受講生がこれまでの研究活動内容および修士課程での研究計画について、異分野の学生に対してプレゼンテーション(以下、発表)を行うことで双方向性のコミュニケーション能力を実践的に学ぶ形式となっている。

人間環境学専攻の多様な専門性を活かすべく、この授業は各学生の研究発表に基づく多分野間の学際的な対話を行うことを目的としている。具体的には、今年度は 4 教育研究分野 37 名の学生が、それぞれ発表とコメント・ファシリテーション(発表の座長)の役割を分担して相互に意見を交わし、さらに全員が発表に対する評価基準を自ら設定しながら全ての発表の評価を行った。その上で、担当教員が、各発表と座長としての取り仕切り、および毎回のフロアでの発言および評価レポートについて評価することとした。これら多分野間の議論・意見交換と相互評価を通じ、自らの研究に対する異分野からの評価による気づきや自明視していた前提の再検討の契機を得るとともに、修士論文に向けた自らの研究の深化をはかることができた。

(人間環境学相関研究担当 丑丸敦史, 古川文美子)

(5) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本年度は、さまざまな領域での研究を志す院生が参加して、知を横断する対話の創出に力点を置き、哲学対話の意味や進め方を実践的に学ぶ授業を展開した。コーディネーターは稲原美苗准教授と津田が務めた。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究世話人 津田英二)

5.1.3. 教職教育

(1) 教育実習

教育実習の履修者(単位認定者)数は、幼稚園 19(19)、小学校 30(30)、中等教育 92

(92), 特別支援学校 11(11)であった。

平成 31 年 3 月 7 日に附属校園との実習反省会を行い, 平成 30 年度の実習に関する反省事項や次年度以降に向けての課題について意見交換を行った。

(2) 教員免許取得状況

本年度の教員免許実取得人数は一種免許状が 98 名, 専修免許状が 35 名であった。詳細は資料編に掲載した。

(3) 教職実践演習

本年度の幼少「教職実践演習」は 10 月 5 日から 1 月 25 日の間に 15 回開講し, 幼稚園, 小学校, 特別支援学校の現役教員及び本学部卒若手教員による授業を行った。

(教務委員会委員長 中村晴信)

5.1.4. 博物館学芸員資格

博物館学芸員資格専門委員会は, これまで発達科学部・国際人間科学部の学芸員養成課程における博物館実習の運営と単位認定を行ってきた。平成30年度も, 当委員会は, 国際人間科学部の2年生および発達科学部の3年生以上の履修生に対して, 従来通りのスケジュールに則って, 博物館実習の説明会・学内実習運営を実施するとともに, 履修を終えた3年生以上に単位認定を行った。これらの活動に関連して, 3回の委員会を開催した。

一方で, 発達科学部と国際文化学部の再編統合により開設された国際人間科学部の新入生が入学し既に2年生となり, それは以下に報告する学内施設「あーち」における実務実習を履修する年度でもあった。国際人間科学部にも学芸員養成課程は引き継がれるため, 一昨年度より, 両学部の同委員会委員の一部が合流する形で国際人間科学部の同委員会を発足させた。そこでの特筆すべき活動は, 発達科学部と国際文化学部の同委員会のプログラム内容の特色や違いを再検討し, 統一し, より合理的で充実したプログラムに完成させたことにある。

1) 平成29年度博物館実習説明会と各実習の実施

① 全体事前指導 (4月18日) : 2年生を対象として, 博物館実習全体のカリキュラムについての説明を行った。

② 見学実習 (夏期) : 2年生を対象として, 博物館・美術館・科学館等での見学実習を実施した。

③ 学内施設「あーち」における実務実習 (3回)

・1回期 (9月25日~10月4日) : 学内施設「あーち」において, 博物館の一般的なイメージを壊し, 日常の中で力をもつアートの空間づくりをめざし, 三者コラボによる実験的な空間アート⑭「CHATS」を実施した。(履修者数6名)

・2回期 (1月22日~31日) : 学内施設「あーち」において, 岸本吉弘教授の指導 (大学院前期課程授業「現代絵画特論演習 I - 1, 2」の一環として・受講生2名)のもと, あーと@あーちとして「ドローイングの庭ー川原百合恵絵画展」を開催し, インスタレーション的

な絵画展示に加え、子供対象のワークショップも併催した。(履修者数4名)

・3回期(2月26日～3月7日):学内施設「あーち」において、戦争体験者の語りを子どもたちが聞き取り、その内容を実習生がサポートしながら展示に仕上げることで、平和をテーマとした対話が生まれる空間づくりをめざし、平和展「いのちをつなぐ」を実施した。

(履修者数6名)

④ 全体・館園事後指導ならびに館園実習前事前指導(12月7日):昨年度と同様に、3年生以上を対象とした全体・館園事後指導と、2年生以上を対象とした館園実習前事前指導を合同で実施した。目的は、事後指導対象の実習生が行う、学外での博物館・美術館における館園実習の体験談や問題意識の口頭報告を、これから実習に赴く下級生たちが事前指導の一つとして聴くことにより共有することにある。この報告会における質疑応答も含めて、事後指導履修生は博物館実習全体の総括を行った。事前指導履修生には別途、学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

2) 平成30年度の博物館実習単位認定:博物館実習単位は2年間をかけて取得する。

4年生14名に対して博物館実習の単位認定を行った。

3) 国際人間科学部の学芸員養成課程におけるプログラムの完成

本報告は本来、発達科学部の当委員会における活動報告をするものであるが、新学部の学芸員養成課程のプログラム作成の経過についても触れておく。前々年度からの課題であった国際文化学部との統合により開設された新学部における、学芸員養成課程の統合・改編を進めるため、今年度も、発達科学部の当委員会と国際文化学部の同委員会より一部の委員が国際人間科学部の同委員会の委員を兼任することで、情報交換を円滑に行った。すなわち、発達科学部より岸本吉弘委員長と、白杉直子委員、津田英二委員、勅使河原君江委員が、国際文化学部より板倉史明委員が副委員長として国際人間科学部の同委員会のメンバーとなり、国際文化学部の同委員会の先生方からの情報提供の協力も得ながら作業を進めた。この際、前々年度より発達科学部で実施された、学芸員資格取得に関するカリキュラムを従来の3年生対象から、1年前倒しをし、2年生から履修できるようにした仕組みは、学生の履修の機会を増やすとともに、国際文化学部との統合において両学部のカリキュラムの親和性を特にスケジュールの点から高めることにもつながった。見学実習においては、国際文化学部の同委員会が従来実施していた、教員が学生を引率して美術館または博物館を見学する実習を1回取り入れることとし、発達科学部の当委員会が実施してきた人間発達環境学研究科附属施設「あーち」における実務実習についても継続することとなった。両学部のそれぞれの特徴を生かした博物館実習プログラムにつなげることができた。

4) 今後の課題

発達科学部においても、博物館実習に履修生の就職活動が重なるなどの個別の問題が発生していたが、更に国際人間科学部への移行後は、GSPにおける海外等でのプログラムと

の時期的なバッティングがますます増えることが予想される。博物館学芸員資格取得を希望する学生が、履修登録や実習参加の機会を逃さないように、学生向けMLによるメールでのアナウンスの適切な活用などが必須となってくる。

(博物館学芸員資格専門委員会委員長 岸本吉弘)

5.1.5. ESD サブコース

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコースは、学部を超えた領域横断型のコースとして、平成 20 年度より開講されている。平成 27 年度より授業運営を担う ESD 教育部会(部会長:松岡広路)は、国際教養教育院に設置されたが、中核となっているのは、人間発達環境学研究科である。全学に配置されている同コース運営委員会の委員長は、伊藤真之(人間環境学専攻教授)、副委員長は松岡広路(人間発達専攻教授)となっている。また、実務的には、松岡のみならず、総合コーディネーターの鴨谷真(学術研究員)や清野未恵子(人間発達専攻准教授)が、神戸大学の新しい教育モデル「ESD コース」の運営に当たっている。

今年度は、「ESD 基礎 A・B」「ESD 論 A・B」「ESD ボランティア論」「ESD 生涯学習論 A・B」を実施した。全学の ESD 関係教員の協力を得て、アクティブ・ラーニングを基軸とした授業を展開している。それらの基幹にあるのは、本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが実務を担当する「ESD スタディツアープログラム」である。阪神間の 20 以上の ESD 関係の団体に活動を提供してもらい、そこに学生が参加し気づきを持ち帰り、共有することで、ESD の世界の実像に触れることが意図されている。上記の ESD 基礎科目群と、各学部で開講されている関連科目を履修したのち、ESD 演習で、学びの総合化・交流を行うという学びの流れをもつ ESD コースは、新しいサービス・ラーニングのモデルにもなりえるであろう。参加部局が全部局に広がり、いよいよ全学部参加のコースとして本格的に動き始めた。本コースの運営の母体であるヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役割は大きく、全学にその存在感を示すことが求められている。

(人間発達専攻 松岡広路)

5.1.6. ゲストスピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲストスピーカー

平成 30 年度は、72 万円(1 件につき 1 万円)の予算配分のもとで、前期 27 件、後期 40 件の計 67 件が実施された。提出された実施報告書の点検を通じて、受講学生、招聘講師、担当教員のいずれからも良好な評価が得られており、高い教育効果を生んでいることが確認できた。

(2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生及び学部学生に対し、教育的配慮のもと教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や学生に将来教員・研究者等の職に就くためのトレー

ニングの機会を提供し、これに対する手当支給により、学生の処遇の改善の一助とするためにティーチング・アシスタント制度を設けている。学部学生をスチューデント・アシスタント（SA—時給 900 円）、大学院前期課程学生をティーチング・アシスタント（TA—時給 1200 円）、同後期課程学生をシニア・ティーチング・アシスタント（STA—時給 1500 円）とし、従事可能な業務内容につき差別化を行ったうえで任用した後期課程学生を TA として任用することも可能—時給 1400 円）。実施報告書（学生用・教員用）からは、担当教員・学生のどちらからも高い評価を得ていることが確認できた。

昨年度から発達科学部と国際人間科学部で同時開講の科目に関するティーチング・アシスタントは国際人間科学部の予算でまかなわれている。そのため、発達科学部における平成 30 年度の予算配分は約 177 万円（1,768,000 円）であり、昨年度比で 37.14%であった。任用学生数は以下のとおりである。

前期 SA 0 名 TA 53 名 STA 4 名 計 57 名

後期 SA 4 名 TA 31 名 STA 0 名 計 35 名

（教務委員会委員長 中村晴信）

5.1.7. 神戸グローバルチャレンジプログラム

本年度は、神戸グローバルチャレンジプログラムと国際人間科学部グローバル・スタディ・プログラム（GSP）との共同で、2つのアジア・フィールドワークをインドネシアで実施した。

8月15日から25日にかけて学外実習を行ったリアウコースでは、神戸大学から8名、リアウ大学から10名の計18名の学生が参加した。インドネシアの海上集落における教育現場を訪ね、共通言語の無い状態で、現地の小学校・中学校・高校訪問し、現地の学生との異文化交流会を学生主体で企画と実践を試みることで、言葉や宗教、文化の異なるコミュニティにおける自己表現方法を学んだ。

9月20日～30日にかけて学外実習を行ったスラウェシコースでは、神戸大学から8名、ハサヌディン大学から8名の計16名の学生が参加した。本コースでは、異なる学部学生同士がインドネシアの大学生たちとともに、フィールドワークを通して、地域が直面する環境問題・社会問題を深く理解することを目指す。前半では、インドネシアの漁村においてホームステイをしながら、漁撈活動やマングローブ植林活動などの体験型プログラムに参加する。後半では、これらの活動を通して学生自らが立案したフィールドワークを遂行しながら地域の魅力や地域課題を見つける。そして、住民や現地の大学生と共に地域おこしプロジェクトを企画し、実践することで課題解決型アプローチを学んだ。

これらの2つのインドネシアのプログラムでは、多民族がともに暮らす海上集落において短期のホームステイ経験やフィールドワークを通して、国や地域をこえた多民族共生問題に対して、グローバルな視点とローカルな視点から捉えようとする多面的な思考や探究心を重要視した。

（人間環境学専攻 古川文美子）

5.2. 各学科等の教育

5.2.1. 人間形成学科

(1) 運営

人間形成学科は、心理発達論コース、子ども発達論コース、教育科学論コース、学校教育論コースにより構成されている。日常的な運営は、主にコース単位で実施しているコース会議ないしはコース主任による学科運営会議で行っている。学科全体の予算、教育、入試等の議案やコース間の役割分担等については、学科長とコース主任による学科運営会議において適宜連絡・協議し、調整を図りながら運営した。しかしながら、新学部設置以降は、これらの業務は、新学部の側に移行している。

(2) 予算

予算は大学院の各専攻講座に配分されている。よって、学部学科独自の予算はない。大学院と学部のコースが対応しているところでは、一括して予算執行されている。ただし、大学院との対応がない学校教育論コースについては、子ども発達論コースと教育科学論コースを構成する教員組織への予算配分から共通経費を捻出し、共同の運営としている。その他、実験・実習経費を得ている。なお、学科共通経費は計上していない。

(3) 入試

すべての入試が、国際人間科学部に移行している。

(4) 教育

各コースにおいて、3年生のゼミ分け、教員・ゼミ紹介パンフレットの作成、各指導教員との面談、既ゼミ生との面談機会を設定し、ゼミへの所属決定過程において、個人の研究志向とゼミの最適化をするように図った。

教員の授業改善の試みとしては、ゲストスピーカーなどの招聘を行い、講義内容に実践的な側面を付加させた。

なお、コース別の特記事項は以下の通りであった。

心理発達論コースでは、昨年同様に、学びが書物の上だけになってしまわないように、各種の実験、実習を行い、実践的な側面からも学びが充実したものになるよう心がけた。また、外部でのボランティアなども推奨し、学びが社会とのつながりの中で体験され、実感されることを目指した。

子ども発達論コースでは、例年通り、子どもをめぐる諸問題を、社会の形成者一員として当事者意識をもってとらえ、個々の範疇でその解決に向けて行動できる力量を形成するために、学際的実践的な教育・研究を目指した。そのため、海外の来訪研究者等による講話、院生、学生との共同授業や共同フィールドワーク、附属および地域の幼稚園・小学校における授業の実施を積極的に行った。

学校教育論コースでは、例年通り9月に西はりま天文台で合宿研修を計画していたが、台風のため実施できなかった。なお、この企画には、国際人間学部の子ども教育学科の学生も参加予定であった。

教育科学論コースでは、例年通り、卒業研究において副査制度を導入し、卒業研究の質の保証に取り組んできた。また、コース内で、教員・大学院生との共同で、『教育科学論集』の発行を行ってきている。これらの試みは、所属学生の卒業研究への取り組みに対して、効果的な影響を与えていると考えられる。その他、教育基礎研究道場やゲストスピーカー制度とタイアップして講演会を開催し、例えば、「カリキュラムの・デザインの理論と実践」「大規模調査の視点で見た新学習指導要領」「草津市における発達支援のためのシステムづくり」「三木市における教育委員会の仕組みと試み」「大崎上島の島おこしと高校魅力化プロジェクトの取り組み」「鳥取県南部町における「地域協働学校」及び「まち未来科」の展開」等、教育に関わる特定の課題や地域についての関心と知見を深める機会を提供した。

その他、各ゼミあるいはゼミ合同によって多数の合宿研修（淡路島等）がなされており、教員・学生の教育研究の交流が行われた。

（人間形成学科長 稲垣成哲）

5.2.2. 人間行動学科

(1) 運営

昨年度4月に国際人間科学部が設立され、発達科学部の学生募集は停止されているため、人間行動学科の在学学生は3年次以上である。健康発達論コース（教員4名）、行動発達論コース（教員6名）、身体行動論コース（教員7名）によって、それぞれのコースの運営にあたった。日常的な運営は基本的にコース単位で行い、コース間の役割分担等については、学科長とコース主任によって適宜連絡・協議した。

(2) 予算

予算は大学院の各専攻・系講座に配分されており、学部独自の予算はない。学部学生当経費の扱いに関しては各コースの指導学生数に応じて配分した。コースによって若干の配分の仕方に違いがあるが、概ね、3・4年次学生分は指導学生数に応じて配分した。

(3) 入試

すべての入試が、国際人間科学部に移行している。

(4) 教育

各学年における学生指導は、3・4年次生はゼミ教員が中心となって指導にあたっている。学生の教育研究活動が円滑かつ効果的に進むよう、学科として下記の行事を実施した。

9月 下旬 卒業研究中間発表会（コース別、3、4年生の参加）

- 2月 4日 行動発達論コース卒業研究発表会
- 2月 13日 健康発達論コース卒業研究発表会
- 2月 14日 身体行動論コース卒業研究発表会

1) 卒業研究指導

履修コースにより卒業研究指導のスケジュールが若干異なるが、最も多数の学生がいる身体行動論コースでは、5月に卒業研究届を提出したのち、9月末頃に中間発表会を開催し、口頭発表を行った。12月下旬に卒業論文をコース内提出した。コースでは各卒論の主査（指導教員）と副査を決め、翌年1月中旬に主査・副査のもと、口頭試問を実施し審査を行った。口頭試問等で指摘された箇所を加筆・修正した後、1月31日に教務学生係へ提出した。その後、2月初旬から中旬に開催した卒業研究発表会で口頭発表し、教員が最終合否判定を行った。他の2コースでも、ほぼ同様の手順での卒業研究指導が行われた。

2) 学生の受賞

人間行動学科では、体育・スポーツ科学が教育・研究の大きな分野であるため、スポーツ活動において優秀な成績を残す学生も多い。

堀庭裕平（空手道部）発達科学部人間行動学科 4年

2018 FISU 世界大学空手道選手権大会 in 神戸の男子個人形で優勝した。

井上拓也（アメリカンフットボール部）発達科学部人間行動学科 4年

賞名：「神戸市優秀スポーツ選手賞」

受賞日：平成31年2月6日

表彰元：神戸市教育委員会より

受賞理由：第3回 FISU アメリカンフットボール大学世界選手権 3位

（人間行動学科長 河辺章子）

5.2.3. 人間表現学科

(1) 運営

人間表現学科（発達科学部）は人間発達専攻表現系（人間発達環境学研究科）の構成員と同一のため、学科に関する意思決定は、構成員全員による学科／系講座会議に適宜メール審議を加えて、予算、入試、教務、学生、将来構想等に関わる案件を審議・決定した。なお、人間表現学科は1学科1コース（人間表現論コース）であるため、学科長がコース主任を兼務しているが、3コース制（表現創造論、表現文化論、臨床・感性表現論）の過年度生に対応するため、別に3名のコース主任も置いている。

(2) 予算

当学科の予算は大学院人間発達専攻表現系として措置され、年度初めに一定の共通経費を確保し、学部分については等分、博士課程前期課程と同後期課程については主指導担当学生数に応じて比例配分している。学科共通経費は複写・印刷代、教育機器の修理、整備等に充てた。

(3) 入試

すべての入試が、国際人間科学部に移行している。

(4) 教育

1) 指導体制

人間表現学科では3年次にゼミ配属を行っており、発達科学部生は基本的に所属ゼミが決定している。学科共通科目「人間の発達と表現」(3年次開講、通年科目)は後期に成果発表を行っているが、これが4年次からの卒業研究に向けた準備過程として効果をあげている。

学部改組にともなう時間割の複雑化を受けて、平成30年度以降に発達科学部生(3,4年生)を対象にコース単位でより丁寧な履修指導を行うことが、研究科教務委員会において取り決められた。これを受けて当学科(=当コース)においても、ゼミ単位での確認作業を複数回行い、学科レベルでの情報共有をはかった。

本年度をもって坂東肇教授、田村文生准教授が退職した。

2) 卒業研究指導

カリキュラム上の「卒業研究」は4年次開講(10単位)だが、実質的に3年次から始まるゼミにおいて2年間を通してゼミ単位の指導が行われている。平成31年2月8日開催の「卒業研究審査会」において、他ゼミの教員・学生参加で意見交換が行われた。評価については、審査会出席教員の見解をふまえて各指導教員が行うこととしている。

3) 学術 WEEKS

学術 WEEKS 参加企画として、次の3件が実施された。

- ①「緊張をとる」「集中力のひみつ」ワークショップ(11月1日、谷ゼミ)
- ②音楽文化のトランスボーダー(11月5日、大田ゼミ)
- ③モーション・クオリア研究公開ラボ(12月28日、関ゼミ)

4) ゲストスピーカー

世界で活躍する多彩な表現者、研究者を招聘して、学生に「表現研究の今」を実感する機会を提供し、学内での学修・研究を外界に開いていく契機を与えることになった。本年度に招聘したゲストスピーカーは次のとおり。

鞍掛綾子氏「GAGAワークショップ」、いむろなおき「マイム・ワークショップ」、相

原マユコ氏・村田勇人氏「コンタクトインプロヴィゼーション・ワークショップ」(以上, 関典子准教授担当科目)。井上春緒氏「インド音楽理論と現在の音楽状況について」
「インド音楽のリズム理論と実践 タブラの演奏を交えて」, 中川博志氏「インド音楽の理論と実践 バーンスリーの演奏をまじえて」, 飯野りさ氏「アレppoの伝統で学ぶアラブ旋法」(以上, 谷正人准教授担当授業)。Chad Cannon 氏「ドキュメンタリー映画 Paper Lanterns <灯籠流し>上映会」, 金谷こうすけ氏・中嶋明彦氏「ジャズの掟 II」, 峯素子氏「落語と演劇の間」, 永原宣氏「近代日本の楽壇エリートとコスモポリタニズム」, 山本美紀氏「祈りの音楽としてのメソディストの音楽」(以上, 大田美佐子准教授担当授業)。沼田里衣氏「ミュージックセラピー, 音楽療法」(以上, 岡崎香奈准教授担当授業)。筒井直子氏「ファッション展の舞台裏」, 小形道正氏「社会学視点から見る衣服研究」(以上, 平芳裕子准教授)。

5) 学生の受賞

宇野美桜, 森重美千香「第 42 回 ピティナ・ピアノコンペティション連弾上級銅賞」
(平成 30 年 8 月 19 日, 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会)

6) その他

人間表現学科の教育活動は, 表現実践と連携して行われる側面があり, その成果を発表する場が不可欠である。この点において, 昨年度に実施された F 棟改修工事で同棟に新設された「ギャラリー虹」や「アクティブラーニングルーム」が活用され, 教育効果をあげたことは特筆に値する。

(5) 広報

国際人間科学部におけるオープンキャンパスにおいては, 来場高校生ならびに父兄からの質問に対して, 発達科学部生(3年生以上)が国際人間科学部生(2年生)と協力して活躍した。

(人間表現学科長 梅宮弘光)

5.2.4. 人間環境学科

(1) 運営

学科に関する意思決定は, 例年どおり, 人間環境学科運営会議において行った。本運営会議は, 学科長と各コースの主任の計 5 名から構成される。今年度は, 16 回開催し, 予算配分, 入試, 教務等に関わる重要案件を審議・決定した。国際人間科学部の環境共生学科の運営についても, 同メンバーで審議した。

(2) 教育

今年度は 3 年生以上についての教育を担った。今年度のコース別配属人数は, 以下のとお

りである。この学生たちの卒業研究教育は、主に所属する研究室の指導教員、そして履修についての指導は所属するコース主任や科目担当教員が全体で取り組んだ。

自然環境論コース：71名、数理情報環境論コース：32名、生活環境論コース：53名、社会環境論コース：61名で構成された。

(内訳)

コース区分	自然環境論	数理情報環境論	生活環境論	社会環境論
4年生以上人数	40	16	29	31
3年生人数	31	16	24	30

(人間環境学科長 近江戸伸子)

5.2.5. 発達支援論コース

◇ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「プロジェクトと連動したコース」

本コースは、人間発達環境学研究科及び発達科学部における「実践性」を特徴とした研究と社会貢献を展開するヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、「HCセンター」と略）の多様なプロジェクトと連動して運営されている教育コースである。学部教育における大きな特徴は、本コースで学びたい学生は、3年生になる時に4学科いずれからも編入できる点にある。編入してきた学生は、主に、「社会教育・サービスマネジメント支援部門」「インクルーシブ社会支援部門」「ジェンダー・コミュニティ支援部門」「自然共生地域支援部門」が取り組んでいる実践的研究に関わりながら、地域・行政・企業・NPOとの協働のあり方を実際に学んだり、現代的課題を解決する研究の原理と方法を修得したりできる。学生が携わることのできる各部門の主な研究プロジェクトは次の通りである：HCセンターのサテライト施設である「のびやかスペース あーち」における社会的実践、「みのり」プロジェクト、「つむぎ」プロジェクト、ESD ボランティアぼらぼん事業、大船渡 ESD プロジェクト（震災復興支援）、ESD 推進拠点の創造（「RCE 兵庫 - 神戸」の実質化）プロジェクト、「哲学対話（哲学カフェ）」プロジェクト、イノシシ調査プロジェクト、自然共生社会づくり（篠山市）プロジェクトなど。

◇「多様な志向性・専門性」をもった学習共同体

平成30年度の編入生は5名であり、出身学科・コースは、人間形成・教育科学論（1名）、人間形成・学校教育論（1名）、人間表現・人間表現論（1名）であり、外部編入者は、2名であった。昨年度以前の編入生（11名）と合わせると学部生は16名になる。どの学科からも3年次から編入可能な本コースは、学生の集団に多様性や異質性が内包されていることが特徴である。また、本コースは、基本的に学部生の大学院進学あるいは大学院生と共に学ぶスタイルを推奨しており、大学院在籍者を含めると、「多様な専門性をもった学習共同体」と言える。ちなみに、今年度において、発達支援論コースと直接つながっている大学院（人間発達専攻学び系C）在籍者は、博士課程前期課程6名、同課程1年制履修コース5名、博士課程後期課程6名である。

◇「教師と学生の共同作業」としての学習プログラムづくり

本コースは、2年次まで所属していた学科・コースのカリキュラム（3年次以降）に束縛されることなく、学生自らの研究テーマに応じて自由に履修科目を選択する（学習プログラムを作り上げる）ことができるという特徴もある。学生の問題意識・関心と最新の学問的 이슈が交差するように、教員と学生が共同して学習プログラムを作成する。教員と学生の学習や研究に対するアプローチをいかに対話的に構築するかという課題が残るが、学生にとっては「自らの学習過程を自ら創造する」という体験を通して、学習支援の本質を理解することとなる。卒業論文・修士論文・博士論文は、そのような学習と研究の集約である。

これら論文の具体的な研究テーマは、ウェブページ「発達支援論コース 卒業論文発表会／人間発達専攻 発達支援 修士論文発表会 [2018年度] (<http://www.h.kobeu.ac.jp/ja/node/5000>) を参照されたい。

◇多様な社会領域での「ヒューマンキャピタル・ソーシャルキャピタル創成者」

平成30年度学部卒業生（4年生）の進路は、大学院進学，地方公務員，社会福祉施設，学校教員，民間企業などで，博士課程（前期）修了者は，博士後期課程進学，学校教員，ソーシャルワーカーなどとなっている。発達科学部・人間発達環境学研究科の全体的な傾向同様，本コースの卒業生・修了生も，多様な社会領域に進出しているといえる。しかし，とりわけ，学部・領域横断的かつ実践主義的な本コースで学んだ彼らには，現実社会の輻輳した問題を解決に導くヒューマンキャピタル（人的資本）・ソーシャルキャピタル（社会関係資本）を，より豊かにしていく実践者として，各領域において活躍してもらうことを期待するものである。

（発達支援論コース主任 松岡広路）

5.3. 各専攻講座の教育

5.3.1. 人間発達専攻

(1) 運営

各教員は，4つの系講座（こころ系，表現系，からだ系，学び系）に所属している。専攻の運営は，基本的に，この各系講座を中心に行われている。運営にあたっては，専攻長と各系講座の主任より構成された人間発達専攻運営会議を組織し，月1回の定例会議のほか，適宜臨時の会議を開いて，専攻に関わる重要案件（人事，予算，入試，共通科目運営，共通備品運用等）に関わる審議等を行った。また，人事については，人事委員会メンバーである新学部の発達コミュニティ学科長と子ども教育学科長にも適宜参加を依頼し，拡大専攻運営会議として開催した。今年度の人事の焦点は，新規助教採用の人事案の検討であった。新規採用人事及び専攻再編等の議題については，専攻運営会議だけでなく，構成員全体における専攻会議を開催して議論を行った（2回開催）。

(2) 予算

予算は、専攻に配分されたものを各系講座に振り分けた。共通経費は設定していないが、大型プリンタ運用経費については、各系講座より予算の一部を拠出している。また、この大型プリンタの経費については、その用途が共通必修科目におけるポスター発表に集中しているため、専攻長が実験・実習等に要する経費を申請して対応している。本大型プリンタの運用では、平成30年度はこころ系講座が担当であり、原則的に、利用者には無料で使用させたが、予算的には問題は発生していない。むしろ、若干の余裕が生じている状況である。なお、平成30年度からは、大型プリンタの設置場所が確定（F棟）したので、毎年の移設設置の手間が大幅に削減されているが、今後は、その方向をさらに進めて、プリンタの維持管理においても研究科全体での運用を求める意見が多い。

(3) 入試

博士課程前期課程入試については、学び系の一部の受験区分において応募者が少なく、また、合格辞退者も頻出したが、結果的に定員をなんとか維持できた。しかし、定員問題は、今後も継続して大きな課題である。合格辞退の理由は、他大学院への合格などである。来年度以降の博士課程前期課程入試について、これまで以上の広報活動等の強化が喫緊の課題である。一方、博士課程後期課程については、無事に定員を充足することができた。

(4) 教育

共通必修科目として、人間発達総合研究I/II、及び人間発達相関研究が設定されている。人間発達総合研究Iは、専攻内における多様な研究関心とテーマの広がり共有できる内容であるが、最近、受講生の評価がいまひとつ低調であり、次年度の改善が期待されるところである。一方、修士論文の構想発表の場である人間発達相関研究では、例年通り、ポスター発表がなされ、活発な議論が行われた。この講義については、受講生からの評価が極めて良好である。さらに、博士論文の構想発表会を兼ねる人間発達総合研究IIでは、口頭発表によって、それぞれの博士論文構想並びにその進捗状況が発表され、充実したものとなっている。この講義についても、博士課程後期課程の院生からの評価は極めて高いものとなっている。

大学院生への教育は、修士論文・博士論文の作成を大きな目標として、関連講義科目を学修しつつ、研究を進めていくことが中心であり、指導はそれぞれの主指導教員や副指導教員（複数指導体制）がその役割を担っている。博士課程前期課程から学会発表（博士課程後期課程では国際学会での発表を奨励）や研究論文の学術誌への投稿を勧めており、一定の成果が認められる。

以下、各系講座における特色を列挙する。

- こころ系：博士課程前期課程科目である「人間発達研究（こころ系）」では、学会発表

を行うことを念頭に、自らの研究内容について大型ポスターを用いた発表を行った。これによりプレゼンテーション能力の向上だけでなく、こころ系における各研究領域を超えた検討を深めるとともに、院生の複眼的視点の育成を図ること等ができ、研究水準の向上にも貢献した。大学院生がファーストオーサーとなった国際会議での研究発表には、今年度は以下のものがある。

Taniguchi, A. & Yamane, T. (2018). Education students' attitude toward children with attention-deficit. ISPA2018 abstract book, 76.

また、幅広い見識を得るために、適宜ゲストスピーカーを招聘している。例えば、臨床人間関係学特論 I-2 (家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践 2) における平成 30 年 7 月 23 日 (月) 榊原久直氏 (神戸松蔭女子学院大学) 「アタッチメント理論に基づく養育者へのグループ支援」である。

さらに、人間発達相関研究の授業で参加が課題となっている学術 WEEKS の一環で、次の 4 件の企画を開催した。平成 30 年 7 月 21 日 (土) 竹内三津子氏 (神戸市保健福祉局保健所須磨保健センター長) 「災害時の“こころ”の支援に向き合う」、平成 30 年 9 月 6 日 (木) Prof. S. Narciss, J. Rose (TU Dresden), M. Uemura, Y. Wang, Prof. A. Ito, Prof. Y. Kato (Kobe University) 「日独学術交流シンポジウム 2018・学びのデザインと well-being」、平成 30 年 10 月 20 日 (土) 村上公也氏 (キミヤーズ塾)・石井英真氏 (京都大学大学院) 「障害のある子どもの知性が湧きあがる授業づくり」、平成 30 年 12 月 8 日 (土) 山本隆一郎氏 (江戸川大学)・田村典久氏 (兵庫教育大学)・堀内史枝氏 (愛媛大学)・岡靖哲氏 (愛媛大学)・笹澤吉明氏 (琉球大学)・林光緒氏 (広島大学)・田中秀樹氏 (広島国際大学) 「眠育シンポ in Kobe -いま必要!子どもの快眠-」これらの開催を通し、こころ系から人間発達専攻での教育の充実に寄与した。

●表現系：大学院教育においては、学生の学位論文指導を軸にしながら、その周辺に関連する学術情報・知的活動を配置することに努力している。その内容は、学会発表に加え、学内・外における多様な機関や表現実践との連携に当系の特徴がある。以下に今年度の事例のうちから代表的なものをあげる。

- 1) 学会発表：日本認知科学会第 35 回大会 (山本真秀, 赤木満里奈/野中ゼミ), 第 13 回日本臨床音楽療法学会 (能勢晶子/岡崎ゼミ), 第 15 回ジェンダー史学会年次大会 (高屋安優美/梅宮ゼミ)
- 2) 作品発表：学内ギャラリー虹における作品発表, あいち博物館「ドローイングの庭」展 (岸本ゼミ), 「川原百合恵絵画展-Morning Painting」(Sanseido Gallery) (岸本ゼミ)
- 3) 学術 WEEKS：モーション・クオリア研究公開ラボ (関ゼミ), 「緊張をとる」「集中力のひみつ」ワークショップ (谷ゼミ), 音楽文化のトランスボーダー：笛の楽園 - 濱田芳通&黒田京子 デュオ (大田ゼミ)
- 4) インターン等：京都造形芸術大学舞台芸術研究センター (舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点) 学生サポートチーム (関ゼミ), 国立国際美術館 (岸

本ゼミ)、竹中工務店(梅宮ゼミ)

なお、当系講座では本年度をもって坂東肇教授、田村文生准教授が退職した。

●からだ系：からだ系講座は自然科学から人文・社会科学分野までの多岐にわたる学問分野を含んでいるので、これらの学際的観点から解析する方法や枠組みを習得し、課題解決のための柔軟な思考能力や洞察力を涵養することを目的に、大学院生それぞれの分野の学会やセミナーでの発表することのみならず、学内での各種発表会・研究会などの実質的な計画・運営に参画し、積極的参加を行わせている。

また、多数の大学院生が、国内外の学会や研究会等で研究発表を行い、さらには系講座の教員が携わっている「アクティブ・エイジング・プロジェクト」、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」や「マスターズ甲子園」などの活動に積極的にかかわり、プロジェクト運営を補助する役割を十分に担っている。これらの積極的な活動を通して、多くの教員や他大学の研究者や院生とのディスカッションができ、多様な学びを深めていくことができたという院生からの感想を得た。

●学び系：学び系としては、特筆すべき教育研究活動としては、「教育基礎研究道場」を挙げることができる。この道場では、多様なテーマに関する21件の特別講義が企画、実施され、院生の研究企画能力の向上に役立っている(詳細の一部は、<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5181>参照)。また、その他講義内容の充実のために、ゲストスピーカー制度を活用し、受講生が幅広い専門家からの知見を得ることができるようにしている。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

5.3.2. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は、例年どおり、人間環境学専攻運営会議において行った。本運営会議は、専攻長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は、定例会議を16回開催し、予算配分、人事、入試、教務等に関わる重要案件を審議・決定した。なお、本専攻運営会議は同じメンバーで構成されるため、人間環境学科の運営会議、環境共生学科の運営会議と同時に開催している。

今年度は、若手教員を増やす学域方針に沿って、専攻としての人事方針を立てるための議論を重ねた。特に、人間環境学専攻の意見交換会を2度開催した。その結果として、助教採用人事の検討を2件行った。2件は学域会議において人事選考委員会の設置を認められ、現在、選考中である。また、拡大専攻運営会議を2回開催し、専攻の方向性、構成、研究・教育のあり方を検討した。

(2) 予算

国際人間科学部環境共生学科1、2年生については、各コースの教育費として、均等に分

配した。また3,4年生については、各コースの所属人数に応じて、配分した。コース1名配属の特命助教人件費専攻負担分を考慮して、予算を配分した。

(3)入試

博士課程前期課程入試については、1.58倍と応募者が多かった。結果的に合格者が定員を上回った。一方、博士課程後期課程については、定員を充足することができなかった。次年度での適正化が、両方の課題である。前期、後期課程入試とも英語での受験希望者も複数名いたために、適宜英語での発表、面接を行い柔軟に対応した。英語での受験ならびに合格後の指導の希望者については、円滑な指導のために、希望する指導教員への事前相談が望まれる。博士課程後期課程入試に関し、「受験生のプレゼンテーションに対し、主論文等審査委員と論文等審査委員が所見を述べ、各コースから口述試験委員が採点する」という方式を引き続き採用した。

(4)教育

大学院生は修士論文・博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから、彼らに対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが多い。博士課程前期課程に関して、専攻共通科目「人間環境学相関研究」を行っている。内容に関しては学生からの要望も聞き取り、検証、改良する必要がある。6名の大学院生が研究発表などにおいて受賞した(学生の受賞のページ参照)。

<学外研究者を招いての専攻主催の国際講演・シンポジウム等>

ICAMS satellite Workshop

主催者：佐藤春実

開催日：2018年7月2日

主な参加者：タイ・カセサート大学農業研究所 研究員2名、中国・北京化工大学 研究員1名 参加者27名

内容：近赤外分光法による非破壊分析やコアシェル型エマルジョンを利用した塗装技術など、大学で学ぶ知識やスキルが産業・応用へつながることを学ぶ。

Second Interdisciplinary and Research Alumni Symposium iJaDe2018 (第2回 iJaDe2018)

生物学分科会

主催者：近江戸伸子

開催日：2018年9月3日-6日

主な参加者：ドイツ・ドレスデン工科大学、京都大学、大阪大学など 参加者 85名

内容：ドレスデン工科大学と神戸大学・京都大学・大阪大学が会しての国際交流シンポジウムである。今後、TUDと神戸大ならびに、関西3大学コンソーシアムの国際共同研究ならびに教育ネットワークの構築を目指す。

シンポジウム：学際的研究と女性研究者 —台湾，アメリカ，カナダ，ベルギー，イギリスの経験を通して—

主催者：長坂耕作

開催日：2019年2月20日

主な参加者：University of Stirling 研究者1名，参加者15名

内容：学際的研究と女性研究者をテーマに，情報・通信業で働く女性としてのキャリア，そこで出会った日本の女性研究者，そして，グローバルに活躍をされている女性研究者の研究経験について講演頂き，留学や学際研究，そして女性研究者としてのキャリアパスについて議論を行った。

5th Utility of Genome and Chromosome Information for Environment 第5回環境に資するゲノム・染色体情報の活用

主催者：近江戸伸子

開催日：2019年2月21日

主な参加者：マレーシア・マラヤ大学 講師1名，参加者8名

内容：マレーシアと日本の環境植物学の最新の知見の交換を行い，環境とゲノム・染色体の研究拠点としての研究科のプレゼンスを高めた。研究協力関係を強くすることで，近い将来，学部・大学院学生の派遣交流などの学生のグローバル化も期待される。

(5) 広報

修士課程受験検討者に対し，オープンラボの期間が設けられ，受験相談を行った。

(人間環境学専攻長 近江戸伸子)

6. 進路

6.1. キャリア形成支援

6.1.1. キャリアサポートセンター

人間発達環境学研究科キャリアサポートセンター（CSC）は，発達科学部と国際人間科学部の学部生から人間発達環境学研究科の大学院生にいたるすべての学生を対象とし，学生のキャリア形成を実践的にサポートすることを目的としている。就職活動支援，キャリア形成支援，大学院進学支援の3つの活動に大別される。以下，各支援活動に関し詳述する。

(1) 就職活動支援

例年通り，就職活動中の学生を対象に，下記の個別相談（カウンセリング）を行った。

- ・自己分析支援
- ・エントリーシート作成支援
- ・模擬面接

- ・就活・キャリアに関する相談
- ・大学院進学に関する相談

個別相談の総人数は670人であり、その内訳は、発達科学部：419人、人間発達環境学研究科：176人、国際人間科学部：20人、国際文化学部（院含む）2人、農学部（院含む）：6人、理学部（院含む）：6人、文学部（院含む）：3人、経済学部（院含む）：30人、経営学部（院含む）：3人、法学部（院含む）：2人、工学部（院含む）：1人、海事科学部（院含む）：1人、医学部（院含む）：1人であった（2019年3月12日時点の数値）。

さらに、下記のセミナー・説明会の集团的イベントを開催した。

- ・就職活動全般（就活スケジュール、自己PR、志望動機、業界・仕事研究、グループディスカッション練習会等）
- ・教員採用試験対策
- ・自治体教育委員会による説明会
- ・心理職に焦点を当てた公務員試験対策

セミナーの一覧は、後述を参照されたい。セミナーの総数は95で、総参加人数は1,081人であった。参加人数の内訳は、発達科学部：554人、人間発達環境学研究科：156人、国際人間科学部：36人、国際文化学部（院含む）14人、農学部（院含む）：38人、理学部（院含む）：77人、文学部（院含む）：46人、経済学部（院含む）：55人、経営学部（院含む）：40人、法学部（院含む）：24人、工学部（院含む）：21人、海事科学部（院含む）：13人、医学部（院含む）：2人、国際協力研究科：5人であった。

上記に加え、今年度も、発達科学部・人間発達環境学研究科のOBOG訪問のアレンジ、大学推薦の求人票の案内、他大学の大学院募集情報の案内を行った。

また、平成30年度からの新たな施策として「内定者獲得紹介システム」の運用を平成30年8月から開始した。本紹介システムは、CSCの仲介により、就職先の内定獲得あるいは合格を果たした発達科学部・人間発達環境学研究科に在学中の学生に対し、同じ就職先を志望する学生が直接会って、当該就職先に向けての就職活動に関する情報（例えば、具体的な採用選考内容）を得ることを目的とするものである。約半年間の運用を振り返ると、改善点はあるものの、一定の成果を上げたと評価しており、その要因は次の3点と考える。

- ・先生方から多くの協力を頂けたこと。特に、内定獲得者の登録において。
- ・「同じ志望先」&「同じ発達科学部／人間発達環境学研究科の先輩学生」が、面談を希望する下級生に好評であった。
- ・先輩学生が後輩学生を支援する仕組みが、特に発達科学部／人間発達環境学研究科の学生の気質（人間好き、世話好き）に合ったこと。

具体的な実績値は以下の通りである。

- ・内定獲得者の登録者数：68人
- ・内定先企業＋合格先官公庁の数：119（内訳：企業106、官公庁：13）
- ・下級生（就活生）の登録人数：24人
- ・面談数：35回

数字的には、内定獲得者と下級生の登録人数がまだまだ少なく、来年度は採用選考の早期化が一段と進む中で、より早い時点から内定獲得者の登録を推進する必要があると考える。

(2) キャリア形成支援

前述の個別相談で個々の学生に対し、進路・キャリアに関するカウンセリングを継続的に実施している。これに加え、セミナー形式で以下の4つのことを実施した。

①OBOGを講師としてお迎えし、講師が歩んでこられたキャリア形成のお話を頂くセミナー
下記の3つのセミナーを開催した。

- ・キャリア選択セミナー（OBOGから学ぶ、キャリア選択の始め方）
- ・社会での活躍に欠かせない装いの力を身に付ける
- ・楽しく働く！を叶えるために～リアルな共働き事情を教えます～

②初年次セミナーなどでの講師

キャリアアドバイザーの笹倉氏が、下記の学生を対象にCSCの紹介と共に、キャリア形成に関する話をした。

- ・国際人間科学部1年生（子ども教育学科，環境共生学科，発達コミュニティ学科）
- ・発達科学部3年次編入生
- ・人間発達環境学研究科M1生（CSCの紹介のみ）
- ・外国人留学生（CSCの紹介のみ）

③「協働型リーダーシップ論」での授業

国際人間科学部の学部共通科目「協働型リーダーシップ論」（担当教員：CSCセンター長・澤宗則）は、1年生対象に行っている授業である。この授業では、社会でリーダーシップを発揮しながら活躍する人をゲストスピーカーとして講演を行っている。キャリアアドバイザーの笹倉氏が「企業での経験を踏まえて」というタイトルで、リーダーシップと絡め、海外での勤務経験を踏まえながら、実際の民間企業での経験談を話した。

④「進路でお困りの学生向けのお助けセミナー」の開催

当学部・研究科のゼミや授業等の時間等を借り、CSCが短いセミナーを実施することを教員に提案した。その結果、或る先生のゼミ生に話をする機会を頂いた。その後、当該ゼミ生はCSCを利用することが多く、一定の成果があったと評価する。来年度はさらに多くの機会を得るための対策を講じる必要があると考える。

(3) 大学院進学への支援

①国際人間科学部1年生向けの初年次セミナーや個別相談において、大学院修了後の就職先実績を紹介し、文系修了生も含めて、就職が不利にならないことを強調した。

②当研究科の大学院入試のポスターを200部作成し、各大学のキャリアセンターを中心に郵送配布した。その成果として、今年度の受験者は、前年度118人から143人へと増加した。

【今年度開催したセミナー一覧】会場はすべて鶴甲第2キャンパス

1. 4月13日(金) 神戸市教員採用選考試験説明会
2. 4月16日(月) 教員採用試験志願書相談会 講師：同窓会紫陽会副会長
3. 4月17日(火) 企業就活希望者向け 就職活動スタートアップ講座
4. 4月20日(金) 企業就活希望者向け 就職活動スタートアップ講座
5. 4月20日(金) 公務員就職を考えている方向け 就職活動スタートアップ講座
6. 4月23日(月) 大阪府豊能地区教職員人事業議会からの説明会
7. 4月23日(月) 滋賀県教育委員会からの説明会
8. 4月24日(火) 教員採用試験志願書相談会 講師：同窓会紫陽会副会長
9. 4月25日(水) 就職活動スタートアップ講座 第1部, 第2部
10. 4月25日(水) 大阪市教育委員会からの説明会
11. 4月26日(木) 和歌山県教育委員会からの説明会
12. 4月27日(金) 堺市教育委員会からの説明会
13. 4月27日(金) 京都市教育委員会からの説明会
14. 5月8日(火) 私学教員志望者セミナー
15. 5月11日(金) 京都府教育委員会からの説明会
16. 5月11日(金) 兵庫県教育委員会からの説明会
17. 5月14日(月) 山口県教育委員会からの説明会
18. 5月15日(火) 奈良県教育委員会からの説明会
19. 5月17日(木) インターンシップ対策講座 第1部, 第2部, 第3部
20. 5月18日(金) 教員採用セミナー「教育時事対策」
21. 5月21日(月) 公務員・教員志望のあなたへ 進路ガイダンス 第1部, 第2部
22. 5月25日(金) キャリアセレクト ～OBOGから学ぶ, キャリア選択の始め方
23. 5月25日(金) 教員採用セミナー「論作文試験対策」
24. 6月1日(金) インターンシップ対策 自己分析・自己PR講座 第1部, 第2部
25. 6月1日(金) 教員採用セミナー「面接試験対策」
26. 6月4日(月) 先輩から伺う面接試験ポイント 講師：同窓会紫陽会副会長
27. 6月8日(金) 先輩から伺う面接試験ポイント 講師：同窓会紫陽会副会長
28. 6月8日(金) キャリアセレクト ～OBOGから学ぶ, キャリア選択の始め方
29. 6月12日(火) 先輩から伺う面接試験ポイント 講師：同窓会紫陽会副会長
30. 6月15日(金) インターンシップ選考対策講座 第1部, 第2部, 第3部
31. 6月21日(木) 先輩から伺う面接試験ポイント 講師：同窓会紫陽会副会長
32. 6月22日(金) 業界研究セミナー ～コンテンツ業界～
33. 6月25日(月) 心理・福祉系公務員 家庭調査官を目指そう
34. 6月26日(火) 業界研究セミナー (OB訪問会) ～ITソリューション業界～
35. 7月10日(火) 留学生対象 就活準備スタート講座
36. 7月12日(木) 先輩から伺う面接試験ポイント 講師：同窓会紫陽会副会長
37. 7月13日(金) 先輩から伺う面接試験ポイント 講師：同窓会紫陽会副会長

38. 8月10日(金) 教員採用試験面接練習会 講師：同窓会紫陽会副会長
39. 8月16日(木) 教員採用試験面接練習会 講師：同窓会紫陽会副会長
40. 10月9日(火) さくっと学べる後期スタートアップ講座
41. 10月10日(水) 新聞社の仕事の魅力 (お仕事研究セミナー)
42. 10月16日(火) SPI 性格検査活用講座 第1部, 第2部
43. 10月17日(水) 公務員 (教員含む)・民間企業志望者向け 進路ガイダンス
44. 10月23日(火) 就職活動の成功のカギ「これが本当の」企業研究講座
45. 10月24日(水) 就職活動の成功のカギ「これが本当の」企業研究講座
46. 10月24日(水) 私立小中高教員 知られざる私立学校の魅力!
47. 10月25日(木) 神戸市教育委員会説明会
48. 10月26日(金) 体育会系学生のための就職活動スタートアップ講座
49. 10月29日(月) 体育会系学生のための就職活動スタートアップ講座
50. 10月30日(火) 私学小中高教員 知られざる私立学校の魅力!
51. 10月31日(水) 働き始める前に知っておきたい!
52. 11月6日(火) エントリーシート実践練習講座 第1部, 第2部
53. 11月8日(木) グループディスカッション練習会 #1
54. 11月9日(金) 社会での活躍に欠かせない装いの力を身に付ける(OB訪問会)
55. 11月9日(金) 教員採用試験対策スタートガイダンス
56. 11月12日(月) 体育会向け自己PR作成講座
57. 11月13日(火) 企業・(公務員 or 教員) 併願向け自己PR作成講座
58. 11月15日(木) 業界研究セミナー(OB訪問会) ~金融サービス業~
59. 11月16日(金) 国立大学職員として働く 講師：神戸大学財務部経理調達課
60. 11月16日(金) 教員採用合格者座談会
61. 11月19日(月) グループディスカッション練習会 #2
62. 12月3日(月) 私学教員採用対策セミナー
63. 12月4日(火) 自分に合った企業の探し方講座
64. 12月4日(火) 家庭裁判所調査官の仕事を知ろう!
65. 12月5日(水) 自分に合った企業の探し方講座
66. 12月6日(木) グループディスカッション練習会 #3
67. 12月6日(木) 大阪府豊能地区教職員人事協議会からの説明会
68. 12月7日(金) チャレンジ模試&出題傾向ガイダンス
69. 12月10日(月) 企業・(公務員 or 教員) 併願向け面接対策基礎講座
70. 12月11日(火) 企業・(公務員 or 教員) 併願向け面接対策基礎講座
71. 12月11日(火) 心理・福祉系公務員, 家庭調査官を目指そう
72. 12月12日(水) 楽しく働く!を叶えるために リアルな共働き事情(OB訪問会)
73. 12月14日(金) 業界研究セミナー(OB訪問会) ~食品メーカー~
74. 12月17日(月) 企業・(公務員 or 教員) 併願向け志望動機作成講座

- 75. 12月18日(火) 企業・(公務員 or 教員) 併願向け志望動機作成講座
- 76. 12月19日(水) 業界研究セミナー(OB 訪問会) ～コンサル業界～
- 77. 12月21日(金) 仕事研究セミナー(OB 訪問会) ～放送業界～
- 78. 12月21日(金) グループディスカッション練習会 #4
- 79. 1月9日(水) 社会福祉系の心理職の仕事を知る(OB 訪問会)
- 80. 1月11日(金) 業界研究セミナー(OB 訪問会) ～空港業界～
- 81. 1月10日(木) グループディスカッション練習会 #5
- 82. 1月15日(火) 企業・(公務員 or 教員) 併願向け総まとめ講座
- 83. 1月17日(木) 就活本番直前! 面接体験セミナー
- 84. 1月21日(月) 面接&プレゼン講座 第1部, 第2部
- 85. 1月22日(火) グループディスカッション練習会 #6
- 86. 1月23日(水) 体育会向け志望動機作成講座(総まとめ講座)
- 87. 1月25日(金) 総まとめ講座・ダイジェスト講座 第1部, 第2部
- 88. 2月8日(金) 業界・企業研究の深め方講座 第1部, 第2部
- 89. 2月12日(火) 業界研究セミナー ～建設業界～
- 90. 2月15日(金) グループディスカッション練習会 #7
- 91. 2月18日(月) 業界研究セミナー ～精密機器メーカー～
- 92. 2月19日(火) 就活スタート直前+合説活用講座
- 93. 2月22日(金) 業界研究セミナー(OB 訪問会) ～電子部品メーカー～
- 94. 2月22日(金) 教員採用試験対策 「面接対策」
- 95. 2月26日(火) グループディスカッション練習会 #8

(キャリアサポートセンター運営委員会委員長 澤宗則)

6.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催により、平成30年4月3日(火)に「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを開催した。

まずは、青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明、ついで、鳥居深雪教授から審査委員経験を踏まえた申請書作成やヒアリングなどに関するアドバイスがなされた。その後、人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員2名(DC1およびDC2)による採用に至る経験談やヒアリング時の留意点などの紹介がなされた。説明会には約30名の学生が参加した。参加者のモチベーションは非常に高く、特に申請書の書き方やヒアリング時の自己PRの方法に関して活発な質疑応答が行われ、予定時刻を大幅に超過した。なお、平成31年度特別研究員採用者は、新規で2名(DC1が1名、DC2が1名)であった。

○「学振特別研究員への応募のススメ」

- ・日時：4月3日(火) 14時15分～16時00分
- ・場所：発達科学部 大会議室

- 14：15 － 14：20 開会の辞（学生委員長 前田正登 教授）
 プログラムの説明と講師紹介（学生委員長 前田正登 教授）
 14：20 － 14：40 特別研究員制度の概要と本研究科の現状（青木茂樹 教授）
 14：40 － 14：45 質疑応答
 14：45 － 15：05 審査・選考の実際－審査経験者の立場から（鳥居深雪 教授）
 15：05 － 15：10 質疑応答
 15：10 － 15：30 申請の実際－応募者の立場から（1）（人間環境学専攻自然環境コース）
 15：30 － 15：50 申請の実際－応募者の立場から（2）（人間発達専攻学び系講座）
 15：50 － 16：00 質疑応答
 16：00 閉会の辞
 （学生委員会委員長 前田正登）

6.2. 卒業・修了後の進路

平成30年度の発達科学部卒業生の就職状況はほぼ例年通りであり、概ね良好であった。博士課程前期課程修了生も企業や公務員への就職者はほぼ例年通りであったが、進学者数が若干減少した。博士課程後期課程は学部や博士課程前期課程と異なり、公募による就職が主となるため年度毎に様相が異なるが、平成30年度は就職者が約47%と約半数が就職した。

なお、進路状況、産業別就職者数、大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

（学生委員会委員長 前田正登）

7. 研究

7.1. 今年度の特長

7.1.1. 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去6年間の研究活動の実績は、下表のとおり、概ね順調に推移してきている。平成30年度の活動（KUIDをもとに調査）は、「論文」310、「著書」79、「研究発表等」474であり、

昨年度と比較し、論文数は減少しているものの、著書及び研究発表（発表：443、芸術作品：31）の数は増加している。

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
論文	218	328	311	371	396	310
著書数	73	83	75	73	67	79
研究発表等	311	488	419	547	432	474

(2) 研究科ミッションの実現に向けた共同研究への支援

本研究科では、研究科のミッションの実現に向けた研究の推進・発展を図ることを目的として、「研究推進支援経費」を継続的に設定してきた。

すなわち、複雑・重層化する国内外の社会的課題を克服し、多世代・多様な人々の安全・安心で豊かな生活(well-being)を実現するためには、課題解決の基盤となるコミュニティにおける社会関係資本（社会的ネットワークにおける人間関係や信頼関係，社会的結束力）の構築や持続可能な環境共生社会の形成が急務である。このことを踏まえ、「研究推進支援経費」は、人間発達環境学研究科がこれまで蓄積してきた研究教育活動の成果を活かした先端的かつ独創的な研究（人間発達環境学研究科の機能強化に資する研究）をより一層推進することを目的として、領域横断的型プロジェクト研究や文理融合型プロジェクト研究，国際共同研究に重点配分するとともに，若手教員による積極的な申請を奨励した。

今年度，研究推進委員会にて選定した共同研究は，以下のとおりである。

- ① 研究課題：地域循環共生圏の構築に係る持続可能性の評価指標（SDGs 効率性指標）の開発
研究代表者：田畑智博
共同研究者：片桐恵子，村山留美子，大野朋子，井口克郎
決 定 額：1,000 千円

- ② 研究課題：植物資源に資する新生融合染色体のバイオインフォマティクス
研究代表者：近江戸伸子
共同研究者：Chee How Teo（マラヤ大学・マレーシア）
決 定 額：500 千円

- ③ 研究課題：高度科学技術社会に生きる市民の well-being を実現する次世代科学リテラシー育成プログラムの開発研究
研究代表者：山口悦司
共同研究者：坂本美紀
決 定 額：500 千円

- ④ 研究課題：大都市化・高齢化時代における持続的環境共生社会のデザイン -都市生態系サービスと住民の Well-being
研究代表者：佐藤 真行
共同研究者 丑丸敦史，片桐恵子，源利文，村山留美子，平山洋介
決 定 額：1,000 千円

- ⑤ 研究課題：英国の食およびオラシーに関する教育・子ども支援研究 -子どもの貧困と

社会的排除の克服を目指して-

研究代表者：川地亜弥子

共同研究者 中谷奈津子, 赤木和重

決 定 額：500 千円

(人間発達環境学研究科長・発達科学部長 岡田修一)

7.1.2. 学生の受賞

平成 30 年度における大学院生の受賞は以下の通りである。

- 1) 受賞者：山元優美子（人間環境学専攻博士課程前期課程）
受賞名：ICAMS国際会議Best Poster Award
受賞対象：ポスター発表「Inter- and intra-molecular interaction of PET and PBT studied by terahertz spectroscopy」
受賞日：平成30年7月1日
受賞理由：上記のポスター発表が優秀であると評価されたため
- 2) 受賞者：岡崎なつ実（人間環境学専攻博士課程前期課程）
受賞名：ラマン国際会議Best Poster Award
受賞対象：ポスター発表「Study on Intermolecular Interaction of Polydioxanone by Terahertz and low frequency Raman spectroscopy」
受賞日：平成30年8月31日
受賞理由：上記のポスター発表が優秀であると評価されたため
- 3) 受賞者：徐寿明（人間環境学専攻博士課程後期課程）
受賞名：第1回環境DNA学会東京大会最優秀ポスター賞
受賞対象：ポスター発表「環境DNAの放出と分解に対する水温とバイオマスの影響」
受賞日：平成30年9月29日
受賞理由：上記のポスター発表が特に優秀であると評価されたため
- 4) 受賞者：坂田雅之（人間環境学専攻博士課程後期課程）
受賞名：日本陸水学会第83回岡山大会優秀口頭発表賞
受賞対象：口頭発表「堆積物由来環境DNA抽出法の改善と過去復元への展望」
受賞日：平成30年10月8日
受賞理由：上記の口頭発表が優秀であると評価されたため
- 5) 受賞者：速水花奈（人間環境学専攻博士課程前期課程）
受賞名：応用生態工学会仙台東北地域研究発表・シンポジウム優秀ポスター発表賞

受賞対象：ポスター発表「環境DNAメタバーコーディング手法を用いたダム湖の魚類相把握」

受賞日：平成30年11月10日

受賞理由：上記のポスター発表が優秀であると評価されたため

6) 受賞者：丸嶋利嗣（人間環境学専攻博士課程前期課程）

受賞名：日本写真学会編集委員長賞

受賞対象：日本写真学会2018年度秋季大会（画像関連学会連合会 第5回秋季大会）における発表

受賞日：平成30年11月17日

受賞理由：上記の発表が優秀であると評価されたため

7) 受賞者：川勝佐希（人間発達専攻博士課程後期課程）

受賞名：日本発育発達学会第16回大会最優秀研究賞

受賞対象：思春期前期の子どもの身体活動，抑うつ傾向，首尾一貫感覚（SOC）の関係

受賞日：平成30年3月9日

受賞理由：優れた研究成果発表のため

（学生委員会委員長 前田正登）

7.2. 学術 WEEKS

学術 WEEKS は，平成 20 年より大学院 GP（正課外活動の充実による大学院教育の実質化）を契機とし，本研究科の国際交流推進の一環として実施されている。学術 WEEKS2018 にあっても，これまでの基本方針を継承し，国内外の学術交流活動を通して，大学院生・学部学生の視野を広げ，研究会の企画・運営・発表などの技能習得に資することを目的とした。また，多様な研究領域を擁する本研究科の特色を生かし，教員・大学院生・学部学生をまじえた領域横断的な学術交流の場を提供するものである。例年同様，本年度も多く企画の応募があり，16 企画が採択，実施された。学部改組に関わるグローバルな視点での企画も多く実施された。各企画では教員，院生及び学部生が立案，準備，運営を自主的に行い，外部の専門家を交えて専門性を深化させる一方で，よりグローバルな視点で物事を考えることができる良い機会となった。日ごろは専門分野に特化して研究を行う研究者や院生が異なる視点に立つ研究に接しすることで，自らの研究活動を相対化し，さらに異分野との協同や融合の可能性に対する気づきを持つ機会となったと評価できる。個別の企画内容に関しては以下を参照していただきたい。

（学術 WEEKS2018WG 主査 野中哲士）

7.2.1 学術 WEEKS の各事業・セミナー

(1) 災害時の“こころ”の支援に向き合う

【日程】7月21日【参加者】神戸大学の学生約10名

【概要】震災後の心理支援を行った専門家として、神戸市保健福祉局保健所須磨保健センター竹内三津子センター長を招聘し災害時の心の支援に関する講演を開催した。

災害は身近なものであることを意識し、災害が被災者にもたらす“こころ”の痛手とその回復過程をとらえ、その時々課題について検討した。また、心理支援を必要とする者の支援者の心の健康についても話題として取り上げられた。震災時の支援活動を行ってきた専門家を招聘し、災害時の“こころ”の支援について考え、災害時支援への備えについて実践的検討が行われた。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(2) 「Casa Verdi に見る人生の円熟とは」発達コミュニティ学科国際交流シンポジウム

【日程】9月5日【参加者】70名

【概要】人生100年時代といわれる現代、円熟した人生の宝庫である Casa Verdi から基調講演者としてフェルディナンド・マリオ・ダーニ氏を迎えて、Casa Verdi 創設という大事業を成し遂げたヴェルディの人生について伺い、そこに住む音楽家達の人生と彼の人生が、どう響き合い、心豊かなコミュニティが育まれているのか討議。パネリストには、CasaVerdi 唯一の日本人ソプラノ歌手:松本千歳先生、現役最高齢ピアニスト:室井摩耶子先生、池田洋子先生、バリトン歌手:益子務先生等、世界で活躍してこられた円熟の音楽家と、音楽文化事情に詳しい松岡祐治氏を迎え、内発的に成長する喜びの中にある、人生の真の意味について考えた。

(人間発達専攻 坂東肇)

(3) ドイツと日本における学びのデザインと教師教育

【日程】9月5日, 9月6日【参加者】約50人(国外研究者12人, 外部研究者15人含む)

【概要】本シンポジウムの目的は、現代社会における学校内外の学びの変化とそれに対応した教師教育の改革に関して、ドイツと日本の現状と課題をつきあわせる作業を通して、今後の両国における教科教育と教師教育を改善するための手がかりを探究することである。

2日間にわたるシンポジウムでは、ドイツと日本の大学で教科教育や教師教育に携わっている研究者を招聘し、5つのトピックについて、それぞれドイツ側と日本側から1グループずつ研究発表を行った。まず最初に、ドイツと日本の教師教育改革の動向と主な論点について概観した(Axel Gehrmann(ドレスデン工科大学), Rolf Puderbach(同), 渡邊隆信, 前原健二(東京学芸大学))。次に、科学教育(Gesche Pospiech(ドレスデン工科大学), Florian Simon(同), 三宅志穂(神戸女学院大学)), 算数教育(Marcus Schütte(ドレスデン工科大学), Judith Jung(同), Ann-Kristin Tewes(同), 下村岳人(島根大学), 岡部恭幸), 公民教育(Anja Besand(ドレスデン工科大学), Tina Hölzel(同), 吉永潤, 菅慶子)の3つの分野について、教員養成と関連づけながら、新しい教育内容と教育方法の提案を行った。最後に、教育実習生が抱く授業イメージと彼らが身に付けるべき資質能力に

ついて論じた (Axel Gehrmann, Tobias Bauer (ドレスデン工科大学), 別惣淳二 (兵庫教育大学), 長澤憲保 (同), 鈴木正敏 (同))。

(人間発達専攻 渡邊隆信・吉永潤・岡部恭幸)

(4) 日独学術交流シンポジウム 2018 「学びのデザインと well-being」

【日程】9月6日【参加者】国内外の研究者や大学院生, 附属中等教育学校の生徒約45名

【概要】本事業では, 協働学習について斬新な提案を行っているドレスデン工科大学の Susanne Narciss 教授 と大学院生の Julia Rose さんを招き, 協働学習を well-being の視点からとらえなおした学びのデザインについて討議した。

協働学習を前提とした“学びのデザインと well-being”について, ドレスデン工科大学の教員や学生との学術交流を深めることができた。現在, 神大附属中等教育校と取り組んでいる実践研究について国境を超えた視点からの考察を得ることができ, より深い研究と教育実践につなげることが期待される。

(人間発達専攻 加藤佳子)

(5) 第3回 ESD 実践研究集会

【日程】9月29, 30日, 10月9日【参加者】9月29日:140名, 30日:90名, 10月9日:40名

【概要】平成28年度から ESD 推進ネットひょうご神戸と HC センターの共催によって開催されてきた ESD 実践研究集会は, 今年で3回目になる。同ネットのメンバーと HC センターの教員および「ESD プラットフォーム」を運営する学生メンバーの協力で, ESD の実践と理論を交差させることが目的とされた。

1日目のポスターセッションと ESD カフェは, 企画・運営をすべて学生が行った。ポスターセッションでは, 学生間で行われてきた「ESD ボランティアぼらぼん」「大船渡 ESD プロジェクト」「ESD 学び隊」の活動の様子を, 学生自らが紹介するとともに, 高校生や阪神間の実践との比較検討が行われた。また, ESD カフェは, 一般の人を含む多様な人たちが, ESD (持続可能な開発のための教育) をめぐる課題や実践に楽しく触れることを目的に, 『ESD ビンゴゲーム』や『世界のコインで出会おうゲーム』, および, 『非常食試食ワークショップ』などが企画・実施された。

事後アンケートによると, 100名を超える参加者は, こうした学生が開発したゲームやワークショップを通して, ESD に親しみやすさを感じたようである。

また, 彼らの活動は, ESD をユースが中心となって事業化することを推奨する国際的な潮流の先端を走るものであり, 平成31年2月9日に小倉で開催された国内 RCE ユース会議で, この事例を学生数人が発表し, 高評価を得た。

(人間発達専攻/人間環境学専攻 松岡広路・清野未恵子・伊藤真之)

(6) 新しい農業の模索とコミュニティの在り方: 日本とフィリピン比較

【日程】10月2日, 3日【参加者】フィリピン人9名, 日本人30名

【概要】フィリピン, サンペーダ大学のアラン・クレデラ講師の組織した「アブラ州協同組合」ADTEMPCOの職員, 農民9名が神戸大学を訪問し行われた学術 WEEKS ワークショップではアラン講師によってADTEMPCOの取り組みの考え方と実践プロジェクトの実態が講義された。また, 日本の農業の取り組みに関しては, お招きした橋本有機農園の橋本慎司氏が, 有機農法の技法ならびに実践実態と課題について講義を行った。

2019年1月にはGSPプログラムとしてフィリピンのADTEMPCOを訪問し, 彼らの取り組みを実際に観察する機会を得た。このプログラムに参加した学生の半分は, 本学術 WEEKS に参加した者であり, 内外プログラムを有機的に連結させられたという点でも有意義であった。

(人間環境学専攻 太田和宏・古川文美子)

(7) 障害のある子どもの知性が湧きだす授業づくり

【日程】10月20日【参加者】約80名

【概要】本学術 WEEKS では, 障害のある子どもを対象とした授業づくりについての講演と実際に授業を行った。登壇者は, 村上公也氏(キミヤーズ塾)・石井英真氏(京都大学)であった。現在, 盛んに指摘されている「主体的・対話的・深い」学びについて特別支援教育の視点から, お二人に話題提供をいただき, 議論を行った。

(人間発達専攻 赤木和重)

(8) 第4回環境に資するゲノム・染色体情報の活用

【日程】10月29日【参加者】合計51名(学生, 大学院生49名)

【概要】チェコ国研究員のPetr Cápál博士と和田直樹博士を講師に招き, 上記企画の学術セミナーを行った。2人の講演者と内容は以下の通りである。Petr Cápál博士は, ムギ属のフローソーティングによる植物染色体分取を行い効率的にゲノム解析によりゲノム情報を解析することの意義とEUでの研究コンソーシアムの事例について紹介した。植物の特性を向上させるために, 野生または近縁栽培種から染色体を導入する遠縁交雑が, 140年以上前から実践されてきた。また, 1980年代には種を超えた生物の遺伝子導入法として, 植物遺伝子組換えが確立された。しかし, ある生物種に異種の遺伝子を導入する場合, 導入された後の外来の染色体断片や遺伝子の機能が, 本来とは異なり変化する場合がある。その変化をエピジェネティクスという。

和田直樹博士は, 自ら開発したヒト・植物融合細胞システムを用いての研究成果について講演した。本来, 別の生物界に属する動物と植物に由来する染色体が, 1つの細胞内で共存するという特色のある研究材料である。界を超える異質の生物由来の染色体が安定的に, 共存しうることは生物学の常識を越える。このような新しい染色体情報解析がどのように, 環境に活用されていくかについて議論した。

今回は, 学術 WEEKS 2018の支援を受けて, 謝金と国内旅費を使用した。講演会には, 多くの学生が出席した。講演会は英語で行った。和田直樹博士は, 講演について, あらかじめ日

本語の概要説明を行ってもらい、その後、英語で講演を行っていただいた。そのため、学部生も十分に内容を理解できたと予想される。学部2年生ならびに大学院生が、英語で積極的に質問を行い、ゲノム・遺伝子の研究について、最先端の研究内容に触れ、国際的な力を養うことができたと考え、大変に有意義であった。

(人間環境学専攻 近江戸伸子)

(9) 『緊張をとる』『集中力のひみつ』ワークショップ

【日程】11月1日, 2日【参加者】13名

【概要】『緊張をとる(以下, 上巻)』『集中力のひみつ(以下, 下巻)』の著者, 伊藤丈恭氏をお招きして, 演劇メソッドをベースとした緊張をとる・集中するための様々なワークを実践した。参加は学生4名, 教員2名, 卒業生1名, 残りが学外からであった(見学申し込みも数名あり)。

ワークの内容は, 初日に「ワーツ」(上巻 p. 10, 図 p. 354)「歌う(上巻 p. 153)」「超細分化(上巻 p. 155)」「思い出す&独り言ワーク(上巻 p. 160~p. 167, 下巻 p. 32. 下巻 p. 72 にまとめ図)」「鏡と一個飛ばし連想+クロス(下巻 p. 196)」「お酒飲む演技」「ジブリッシュ(上巻 p. 20)」「連動のリラクゼーション(上巻 p. 304. ゆるめるは上巻 p. 285)」などを, 2日目に「ワーツ」「歌う。(上巻 p. 153・p. 155)」「踊る(上巻 p. 175)」「後ろに発声(上巻 p. 147, 図 p. 352)」「いろんな笑い方(上巻 p. 132)」「アメンボ」「フローティング」「スケート(上巻 p. 174 の変形)」「感情を4~5秒でころころ変える」「エア楽器」「ぷちぷち」「だるまさん転んだ(下巻 p. 48+p. 188)」「大声ワーク」などを行った。

これらのワークに通底していたのは, 「焦ったらアカンっていうくせに, プロセスを言わんとすぐに結果を求める間違った教え」(『緊張をとる』p. 178)という言葉に代表される, 2段階/3段階思考(p. 260~270)の必要性・有用性であった。その意味において, 本ワークショップは, 単に演劇あるいは人前でのパフォーマンスに関してのアドバイスのみならず, 「学ぶ・何かに向けて準備する・人に教える」ことについての世の中の誤解にむけた, 伊藤氏の痛烈な批判でもあり, 参加者にとって大変な示唆に富むものであった。

(人間発達専攻 谷正人)

(10) 笛の楽園 - 濱田芳通&黒田京子 デュオ (学術 WEEKS シリーズ vol. 4: 音楽文化のトランスボーダー)

【日程】11月5日

【概要】「音楽文化のトランスボーダー」をテーマにした企画の4回目。今回は日本の古楽を牽引し, 洋楽史の問題を古楽奏者の視点から考察してきたアントネッロ代表でホルネット奏者の濱田芳通さん, 様々なジャンルの音楽経験を積み, そのユニークな視点で実験的な共演を提案してきたピアニストの黒田京子さんをお迎えした。「笛の楽園」とは17世紀オランダで活躍したマルチな音楽家ヤコブ・ファン・エイクの作品集の名前である。特に今回のプログラムは, 古楽作品にジャズの方法論を適用し, ジャズのスタンダードに古楽の方法

論を応用するというようなジャンルの「融合」ともいえる実験性に富んだものであった。つまり、異なるジャンルを単に掛け合わせたプログラムとは別次元のものであり、音楽における「理論」や「楽譜」、「即興性」の関係性について、一見異なるジャンルの音楽にも実は通底する「根源的な問い」を明らかにしたといえる。理論上は可能でも、それを実践する創造性に優れた演奏者なくては成立しない実験である。今回は、お二人の演奏で「古楽」と「ジャズ」という生まれた時代もスタイルもコンセプトも異なるジャンルの音楽が「越境する瞬間」を共に体験し、聴衆が五感をフル活動してその意味を考えるきわめて貴重な機会を得た。

(人間発達専攻 大田美佐子)

(11) 「青年期教育制度論」の創造と展開 —「学ぶ・働く・生きる」をめぐるケア・支援の制度化は可能か—

【日程】11月11日【参加者】63名

【概要】若い世代が自己肯定感の低さ、対人関係の困難、意欲低下などを指摘されている。しかし、彼らに対して最大限可能な支援やケアを準備していない先行世代にこそ、責任があるのではないか。今回の企画は、全国各地で実践と研究に取り組んでこられたパネラーを招聘し、「学ぶ・働く・生きる」をキーワードに、若い世代が尊厳とゆるやかなつながりを保障され、安心して学び・発達できる「青年期教育制度」のあり方を模索したものである。

一人目のパネラーである藤田晃之氏（筑波大学）からは、『働く』：キャリア教育・高校教育研究の観点から—若者と労働—と題して、日本型雇用慣行がゆらぐ困難な昨今でありながら、キャリア教育実践が、事実上、ホームルーム担任の善意と熱意にのみ依存することの限界等が指摘された。

二人目のパネラーである高橋寛人氏（横浜市立大学）からは、『生きる』：居場所カフェ・研究と地域の観点から—学校と社会—と題して、公立高校内で生徒が気軽に立ち寄って軽い飲食や談笑を楽しめる「居場所カフェ」を設置・運営する実践を通じて、彼らの日常的で多様な不安が、運営スタッフとの会話によって解消・支援される様相が紹介された。

三人目のパネラーである田中容子氏（京都大学）からは、『学ぶ』：教育方法学・教育実践論の観点から—学びとケア—と題して、公立高等学校教員としての豊富な試行錯誤の経験に基づき、彼ら一人一人の声に耳を傾け、彼らの生活文脈を教科学習につなげること等によって、安心感の得られる授業づくり・学びづくりの重要性が提起された。

以上の報告の後、コーディネーターの服部憲児氏（京都大学）からのコメントやフロアからの質疑を交えながら研究協議を進めた。結果として、既存の学校制度への「適応」を求めただけでなく、公私セクターの区分も超え、就労支援や福祉などとの連携も含め、中等教育と高等教育を包括する新たな制度として、周囲の人びととの関係や事物との関係を取り結びつつ、自分のペースで発達課題に向き合い、あるいは共存していくための“試行錯誤と発達が許される時空間”の保障すること等、制度的対応に向けた諸原則を参加者間で確認・共有することができた。

(人間発達専攻 山下晃一)

(12) モーション・クオリア研究〈公開ラボ〉

【日程】12月28日【参加者】43名(一般28名, パネリスト10名, 学生スタッフ5名)

【概要】「京都造形芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉2018年度 共同研究プロジェクトI (研究代表者 関典子)」として実施中の「モーション・クオリア研究～自由落下による必然的な動きと表現～」の関連企画(経過発表・試演・調査)として、学術WEEKSにおいて、「公開ラボ」を実施した。

《パネリスト》

関典子(研究代表者, ダンサー・神戸大学准教授)

工藤聡(研究協力者, モーション・クオリア考案者, ダンサー・振付家, 在スウェーデン)

相原マユコ(進行・演出補|振付家, j. a. m. Dance Theatre 主宰, 近畿大学非常勤講師)

村田勇人(ダンサー, C. I. 名古屋主宰)

坂口勝彦(舞踊批評, シアターアーツ編集部, 早稲田大学非常勤講師)

村越直子(ソマティクス研究, 武庫川女子大学准教授)

橋本有子(動作分析CMA: Certified Movement Analyst, お茶の水女子大学講師)

東出益代(舞踊教育学, 武庫川女子大学非常勤講師)

伊藤真之(宇宙物理学, 神戸大学教授)

北村明子(ダンサー・振付家, 信州大学准教授)

アンケートでも「モーション・クオリア」についての考察などを自由記述していただき、研究資料とした。本企画の成果は2019年2月3日、京都芸術劇場・春秋座での「劇場実験」での発表(上演・講演・実演・ワークショップ・パネルトーク)へと結実した。

(人間発達専攻 関典子)

(13) 神戸大学発達科学部タイムスリップコンサート～プラハの旧友と秀峰をめざして～

【日程】平成31年3月18日 18:00～20:20 【参加者】110名

【概要】多くの人々が、何の疑問も抱かずインターネットで手軽に音楽を視聴するだけでわかった気になり、音楽を真に理解する意味を見失っている現代。19世紀ヨーロッパにおいては演奏録音など存在せず、心身の能力を総動員して自らの手で音楽を創造せざるを得なかった。しかしそうであるからこそ、その時代は現代には見られない、豊饒な生命力あふれる表現が、音楽のあらゆる分野で繰り広げられていた。このような時代の、音楽に向き合う姿勢を現代によみがえらせ、もう一度原点に帰って見つめ直そうとするのが、このコンサートの趣旨。

演奏する楽曲の背景として、音楽家の人生経験が芸術を深め成熟させてゆくプロセスについて話し、平成10年以来、人間発達環境学研究科表現系講座教員の坂東と、日本・チェコの両国において共演してきた20年来の旧友であるシュターミッツ四重奏団とのピアノ五重奏の演奏を通して、音楽本来の楽しみや、生命力溢れる音楽が示唆する真の幸福を、地域や家庭で共有する新たな希望の源を探求した。

内容：プログラム

ハイドン：弦楽四重奏曲 ヘ長調 作品3の5 Hob. III-17

フランク：ピアノ五重奏曲 ヘ短調

ドヴォルザーク：ピアノ五重奏曲 イ長調 作品81

出演：シュターミッツ四重奏団 Stamitz Quartet

インジッフ・パズデラ（第1 ヴァイオリン）

ヨセフ・ケクラ（第2 ヴァイオリン）

ヤン・ペルシュカ（ヴィオラ）

ペトル・ヘイニー（チェロ）

坂東 肇（神戸大学大学院 表現系講座 教授 お話とピアノ）

成果：終演後に回収出来たアンケート用紙は51枚。「とてもよかった」に○をつけた人が46名、「とてもよかった・よかった・普通・よくなかった・よく分からない」のいずれにも○をつけなかった人は5名、来場者の多くが今後も開催を強く希望していた。

アンケートの自由記述欄には、「こんなにも素晴らしい演奏を無料でできかせていただいていいのかと心底思いました。先生のピアノといいカルテットの方達といい、フランクとドヴォルザークの後、スタンディングオベーションをしたかったが恥ずかしくてできず後悔。こんなに感動したことは今までにないくらい。ぜいたくな演奏をありがとう」「素晴らしい演奏、重厚な音色、多彩な音楽、とても聴きごたえありました。こんな素晴らしいコンサート、又、ぜひやっていただきたい。」「至福の時でした。Danke Shöen!!」「アンサンブルは人生が出てくるのだと思います。今後の演奏活動を期待しています。」「とても素敵な空間でした。心にぐっときました。」「こんなに近くで五重奏を聴いたのが初めてだったので、音圧にびっくりしました。5人の音が溶け合ったり対照的だったり、とても豊かな音楽でした!」「とても素敵な演奏。間近でのプロの演奏はとても迫力があり感動しました。」「弦楽四重奏曲もピアノ五重奏曲もすばらしく、こんな近くで聴けてよかった。すばらしい一生の思い出です。」「鳥肌立ちました。本当にありがとうございます。」「しぶい選曲、フランク：弦の調べのあいだを小川が流れるようなピアノの音がよかった。ドヴォルザーク：ボヘミアンな気分にあふれた。とてもよかった。チェロもよく聴けて。」「思い掛けない演奏会に感無量です。本当にありがとうございます。」「プラハ城からの街並みは美しくその町からわざわざいらした方々にとっても嬉しく思います。すごい奏者を呼んでこられて豪華です。」「こんなに近い場所で、弦楽四重奏曲とピアノ五重奏曲が聴けて大変幸せ。立派なコンサートありがとう。」「素敵な演奏会をありがとうございます。またプラハに行きたいと思いました。」「肉厚でエネルギーほとばしる演奏を間近できかせて頂き本当にありがとうございます。先生の人生のコンセプトとライフワークが渾然一体となったコンサートでした。」「音楽のイベントがあればまた聴きにきます。弦楽のひびきがすてきでした。Superb!!Fantastic!!」「とても美しい音と素晴らしい音楽を聴かせていただきました。」「地元の方も多数来られているようで、良い地域貢献になっていると思う。」「良かった。思った以上でした。」「カルテットという船を、時にその進路を静かに見守り、時に舵を取り、

大海原を共に航海するキャプテンのように見えました。フランクが好きになりました。」「日常を忘れ別世界にいる様でした。素晴らしい時間を過させて頂きありがとうございます。」「素晴らしい演奏をありがとうございました。弦楽四重奏の優しい響きに癒され、ピアノ五重奏の迫力に感動しました。」「大変楽しいひとときでした。」「素晴らしいの一言に尽きます！」「力強い響き又ゆるやかな音の流れに心ゆさぶられ感動致しました。遠い所から来て下さり御礼申し上げます。有難うございました。」「こんなに近くで聴ける機会がないので弦楽器の柔らかな音がとてもこちよかった。また、とても迫力があつた。」「久しぶりに音楽をいっぱい浴び、どっぷり音楽に浸りました。有難うございました。」「非常に近い距離で聴くことが出来て感動しました。」「久しぶりに近くで楽器の演奏をきくことが出来て、体にズシンとひびきました。4才の息子もはじめて演奏をきき楽しかったと言っています。」「久しぶりの生のクラシックを聴かせていただき、生きかえったようです。」等の感想が寄せられ、幅広い世代の来場者に音楽の喜びを伝えることが出来たと同時に、今後への期待の大きさも実感できた。

(人間発達専攻 坂東肇)

(14) 高校生・私の科学研究発表会 ～理科研究！発表したい人集まれ！～

【日程】11月23日【参加者】198名（高校生142名，高校教員28名，大学関係者16名を含む）

【概要】科学課題研究に取り組む高校生に対して、サイエンスショップと兵庫県生物学会との共催により、研究発表・交流会を開催した（今回は、鶴甲第2キャンパスが使用できなかったため、鶴甲第1キャンパスを会場として実施した）。この会は、高等学校における研究・探求活動の発展を支援するとともに、サイエンスショップの理念である市民の科学に関わる活動の広がりにつなげることを目的としている。

高校生による口頭発表14件とポスター発表32件があり、口頭発表は午前と午後の2部に分けて行われ、その間にポスター発表と交流会が行われた。兵庫県から18校のほか、京都府、岡山県、埼玉県各1校からの参加があった。発表内容は、生物、地学、物理、化学、環境、防災など多領域にわたり、発表に対して高校生同士の活発な質疑応答や、高校・大学の教員、大学生などから質問や助言がなされ、上記の目的に添った成果を収めた。

なお、サイエンスショップより、生物分野以外の領域の優れた発表として、兵庫県立加古川東高校の『宇宙ピペット』実用化のための有用性検証』に優秀賞が授与された（生物分野については兵庫県生物学会が表彰した）。

(人間環境学専攻 伊藤真之)

(15) 土方巽の舞踏譜-舞踏家・正朔による実践と舞踊研究の交点を探るワークショップ-

【日程】12月1日，2日【参加者】17名

【概要】本企画は、土方巽が創始したダンス、「舞踏」の訓練に関する実践的・学術的知見を深めることを目的とした企画である。土方巽から舞踏のメソッドを継承する正朔氏、およ

び舞踏研究者である稲田奈緒美氏（桜美林大学准教授）・富田大介氏（追手門学院大学准教授）を招聘した。一般からは、舞踏家，ダンサー，俳優，作業療法士，フェルデンクライスメソッド講師，演劇や舞踏の研究を行う学内外の大学院生，学外の学部生などからの応募・参加があった。

二日間とも，午前中に研究発表会を（発表者：稲田奈緒美氏・富田大介氏・本研究科准教授 関典子・企画者），午後には正朔氏による実践ワークショップを開催した。また各日程の最後に，参加者全員が自由に発言できる意見・感想の場として座談会を開いた。

参加者全員が，研究発表と実践ワークショップどちらのプログラムにも出席するという形式をとったため，実践家と研究者の垣根を超えた議論・意見交換の場を作ることができた。

（人間発達専攻 関典子）

（16）眠育シンポ in Kobe —いま必要！子どもの快眠—

【日程】12月8日【参加者】約25名（学外15名，学生10名）

【概要】幼児から大学生までを対象として，各年齢層に応じた睡眠教育を実践してきた眠育のエキスパートから，子どもの睡眠の現状や睡眠障害への気づきから具体的な睡眠改善方法まで幅広く睡眠について学び，ディスカッションを通して現実的な問題解決能力を獲得することを目的とした。参加者は大学生・大学院生に加え，高校生，主婦，保育士，養護教諭，小学校教諭と様々な属性であった。ディスカッションでは，それぞれの立場で実践できる具体的な方法とその根拠まで掘り下げて討論することができた。さらに，学んだことを周りへ伝えたいという感想があり，複数抄録を持ち帰る参加者もいた。また，チラシにはシンポジスト自身が家庭で実践している子どもの快眠法を記載することで，当日シンポジウムに参加できなくても簡単な実践的知識を得られるよう工夫した。本シンポジウムの内容は以下の通りである。

- ・ 世界の睡眠と日本の睡眠（江戸川大学 山本隆一郎）
- ・ みんなの睡眠の悩み，大集合！（兵庫教育大学 田村典久）
- ・ 子どもの睡眠の病気に気づくには？（愛媛大学医学部附属病院 岡靖哲）
- ・ 子どものSOSサイン～睡眠の視点から～（愛媛大学医学部附属病院 堀内史枝）
- ・ よく寝る，すっきり起きる，気持ち良く毎日を過ごす方法（広島大学 林光緒）
- ・ 学力アップにお勧め睡眠方法とは？（琉球大学 笹澤吉明）
- ・ ライフスタイルを変えたいけど変えられない…睡眠改善法の秘策とは？（広島国際大学 田中秀樹）
- ・ 先生に聞いてみよう（ディスカッション）

（人間発達専攻 古谷真樹）

7.3. 研究科支援プロジェクト研究

（1）地域循環共生圏の構築に係る持続可能性の評価指標（SDGs 効率性指標）の開発

1. 研究の目的

国連の持続可能な開発目標(SDGs)の達成を目指して、政府は平成29年12月にSDGsアクションプランを作成している。本アクションプランには8つの優先課題が設けられており、優先課題の一つとして地域活性化が挙げられている。本アクションプランをもとに、政府や地方自治体はSDGsを考慮した地域活性化に係る方策を進めているところである。例えば、環境省は平成30年4月に閣議決定された第5次環境基本計画において、都市と農村部とのヒト・モノ・カネの循環(地域循環共生圏)の構築を通じて地域活性化を図ることを提唱している。地域循環共生圏の構築では、循環により環境や経済をより良くするだけでなく、循環を通じて地域住民の生活の質を向上させることが求められている。これを実現するために、SDGsの目標・ターゲットの達成は必要不可欠であるといえる。

本プロジェクトは、SDGsの観点から、地域循環共生圏の構築による地域活性化の達成度を持続可能性の観点から定量的に測定できるSDGs効率性指標を開発することを目的とする。ここでは、六甲山と神戸市との地域循環共生圏の構築による神戸市の地域活性化を事例として想定し、SDGsの観点から地域活性化策を進めるために重要な項目の抽出、SDGs効率性指標による政策の優先順位の設定を行う。本プロジェクトを通じて、地方自治体がSDGsの観点から地域活性化を進める際の方法論を提案することが最終目標である。

2. 研究の実施内容

(i) SDGsと地域活性化に関する論点整理

国連は、SDGsを地方自治体が実践するために、制度のローカライズが必要であると論じている。ローカライズには、資金や人材の確保、17目標・169ターゲットの地域施策への組み込みなどが含まれている。一方、地方自治体はその自治体が有している施策を優先的に実施する必要があり、特に小規模な自治体ではSDGsを新たに展開する余裕に乏しい。そこで本プロジェクトでは、地方自治体が実施している施策がSDGsとどのように繋がっているかが可視化できれば、地方自治体の施策にSDGsが反映しやすくなると考えた。

まず、神戸市が実施している、六甲山の森林管理を通じた地域活性化に関する施策である「六甲山森林整備戦略」を取り上げ、本戦略と政府のSDGsアクションプラン、国連のSDGsとどのように関連しているかを調査し、論点を整理することを試みた。この際、森林管理とその実施が地域の環境、経済、社会、防災にどのように波及するかを考えた。この考えに合致するSDGsの目標・ターゲットを抽出するため、環境学、農学、老年学、リスク学、経済学を専門分野とする5名のプロジェクトメンバーによるエキスパートジャッジを行った。その結果、11目標・20ターゲットが抽出された。続いて、抽出された目標・ターゲットの文言を森林管理用に翻訳することで、地方自治体が森林管理に関する施策を検討する際に、SDGsのどの目標・ターゲットと整合させれば良いかを判断しやすくなった。

(ii) SDGs効率性指標の開発

SDGs効率性指標は、施策の実施に伴うSDGsの目標達成具合を施策実施に必要なコストで除することで算出する。SDGsの各目標は次元が異なるために合算できないが、各目標の重み付け係数を乗じることで統合化できる。ここでは六甲山に近い地域住民の意識をもとに重み付け係数を算出することを考え、神戸市民約800名を対象として、森林管理の観点から

11 目標の重要度合いをアンケート調査により尋ねた。また、階層分析法(AHP)を用いて調査結果を解析し、各目標の重み付け係数を算出した。例えば、地球環境に関連する目標は、他の目標に比べて重み付け係数が高くなることが示された。

(iii) SDGs 効率性指標の適用方法の検討

開発した指標の適用方法を検討するため、森林管理と地域活性化が結びついている先進事例を整理した。先進事例には、例えば岡山県真庭市(木質バイオマスの発電・熱利用など)、和歌山県(紀州備長炭のブランド化やこれを利用した体験学習、未利用植物の商品化による耕作放棄地の減少など)がある。各事例は11目標のいずれかと関係しており、関連目標と重み付け係数を組み合わせることで、各事例に指標が適用できる。また、六甲山の森林管理への指標の適用方法を検討するための一環として、神戸市民や観光客が考える六甲山の望ましい森林のあり方について、アンケート調査により明らかにした。例えば、回答者が考える森林のあり方と現在の六甲山の森林育成状況には乖離が存在すること、森林管理においては景観や観光の視点を加味することが極めて重要であることがわかった。

3. 研究成果の発信

本プロジェクトで得られた学術的成果は学会・国際ワークショップ等で発表しており、学術論文としての公開も予定している。また、開発したSDGs 効率性指標の改良を進めていくとともに、研究成果を自治体に発信することで、SDGs を活かした都市・地域づくりへの社会的貢献も行っている。

(研究代表者 田畑智博)

(2) 植物資源に資する新生融合染色体のバイオインフォマティクス

異種の染色体が導入された状況で生じる植物染色体のDNA構造変化とエピジェネティックな遺伝子発現変化に焦点を当て、染色体が新しい細胞環境へどのように適応するのかを明らかにした。本年は、フローソーティングによる外来染色体の分取法の確立を行い、単離した染色体については、次世代DNA塩基配列解析を行った。目標としていた到達点である、ヒト細胞の同調化による高い細胞分裂周期指数を持つ細胞の取り扱い、フローソーティング分取の条件設定(蛍光色素の選別や分画フローパネルの設定など)の最適化までは達成できた。

本予算で購入したHPワークステーションDNA塩基配列解析システムにより、全ゲノムシーケンス情報解析を行った。また、マレーシア・マラヤ大学講師のTEO CHEE HOW博士を招聘し、次世代シーケンス解析のためのバイオインフォマティクス情報解析手法について議論し、植物ゲノム塩基配列解析を行った。

この研究に関連して本年度は、”Insight of chromosome and chromatin dynamics in plants”というタイトルで、チェコのOlomouc Institute of Experimental Botany(実験生物学研究所)のシンポジウムで発表した。また、本研究で得られた研究成果をもって、マレーシア、チェコ国との国際共著論文を2年以内に出版する予定にしている。

(研究代表者 近江戸伸子)

(3) 高度化学技術社会に生きる市民の well-being を実現する次世代科学リテラシー育成プログラムの開発研究

1. 研究目的の概要

「自然科学者のための教育」ではなく「すべての人のための教育」としての科学教育本来の目標の再構築を目指し、高度科学技術社会に生きる市民の well-being を実現するために求められる自然科学の素養と人文・社会科学の素養を統合した新しいタイプの科学リテラシーを「次世代科学リテラシー」と定義して、その育成プログラムの開発を行う。

2. 研究組織

(1) 代表者 山口悦司（人間発達専攻）科学教育

(2) 共同研究者 坂本美紀（人間発達専攻）教育心理学

3. 研究実績の概要

(1) 次世代科学リテラシー育成に関する教育理論と学習理論の確立

人文科学の素養，自然科学の素養の観点から，科学リテラシーの概念を批判的にレビューするとともに，次世代科学リテラシー概念の理論的基盤と研究仮説を確立した。

(2) 次世代科学リテラシー育成プログラムの開発

教育心理学における思考・コミュニケーション，科学教育における教育内容・教材の観点から，次世代科学リテラシーの指導法スタンダードと研究仮説を策定した。学習者用ワークブック，評価テストとループリックなどを開発した。

(3) 社会実装型実証実験の実施

上記の研究成果を社会実装し，次世代科学リテラシーの発達モデルの初期段階における小学生を対象とした実証実験を行った。具体的には，神戸大学附属小学校の理科担当教諭と連携し，神戸大学附属小学校の3年生 67 名を対象として，理科の1 単元（全 11 時間）にわたる実証実験を行った。

(4) 実証実験データ解析

実証実験のデータについては，アンケートやビデオ記録などのデータを収集した。本研究の理論の妥当性と教育プログラムの効果を検証するため，これらの収集したデータの解析に着手した。

(5) 研究成果発表

実証実験の研究成果を科学教育のトップレベルの国際会議および科学教育のインパクト・ファクターの高い世界上位ランクの国際研究論文誌等へ投稿する準備を進めた。

(6) 大型科研費を含む複数の科研費の申請

本研究課題に関する大型科研費（基盤研究（A）（一般））および科研費（挑戦的萌芽）を申請した。申請区分は，大型科研費については「大区分 A・中区分 9：教育学およびその関連分野」であり，科研費については「特設審査領域 CN02：超高齢社会研究」であった。

（研究代表者 山口悦司）

(4) 大都市化・高齢化時代における持続的環境共生社会のデザイン ～都市生態系サービスと住民の Well-being～

1. 研究の目的

本研究は、都市化と人口構造変化という日本における現代的状況のもとで、環境と経済社会の持続的調和という先端的な課題に取り組むことを目的とする。著しい経済開発とともに進行する都市化と、人口構造の急速な変化のもとで、環境・生態系をいかに保全し、居住者に高い生活の質や Well being を保証しつつ持続的環境共生社会をデザインすることが大きな目標である。そのためには、環境・生態系の評価と保全の在り方について、新しい時代背景を踏まえてコミュニティや制度のレベルにおいて問い直すことが求められる。公共財的性質をもつ環境の保全は、社会的意思決定として実施される。この基礎には各個人の環境認知だけでなく、社会的規範・制度が強く関連している。具体的には、環境リスク認知や、コミュニティにおいて形成される倫理や伝統知伝達などの広義の教育が影響する。そして、環境共生社会が住民の生活の質を保証するかという点が、環境保全政策の妥当性を担保する。本研究は、学際的な実証研究を通じて持続的環境共生社会について研究する。

2. 研究の内容

(1) 都市における環境・生態系の実態と都市化の影響に関する分析

環境や生態系への人為的影響を植生調査や環境 DNA 手法を用いて質的・量的に把握する。特に都市ボーダーの拡大や人口変化の影響を調査し、GIS などのかたちでデータ化した。

(2) 個人およびコミュニティの環境認知との環境コミュニケーション

環境や生態系への影響に基づいて、住民の認知や態度について調査・分析する。特に人口分布や年齢構成による差異に着目するとともに、パーソナリティや環境・リスク・コミュニケーションを含めたコミュニティの影響を調査した。

(3) 環境共生社会における Well-being と環境政策

都市化による環境・生態系影響や、住民・コミュニティの環境認知に基づいて、都市における環境・生態系保全の価値を定量化し、環境共生社会にむけた保全政策を研究する。特に、環境や生態系に対して、都市生態系サービスという観点から評価を行い、住民の Well-being を保証するかという視点で政策を議論した。

3. 研究の成果

本研究にかかる成果として、都市緑地の主観的な量と客観的な量の乖離が経済的評価に与える影響についての論文が審査付き英語雑誌 (Urban Forestry and Urban Greening) に掲載された。また都市住民の環境に対する態度と経済評価について国際会議 Efs in Asia 2018 で発表し、後に審査付き英語雑誌に投稿された (審査中)。生態系の経済価値評価に関する研究が環境経済統合勘定-実験的生態系勘定 (SEEA-EEA) に関する国際会議 (ロンドングループ会合) で発表された。森林生態系サービスの経済評価についての論文が審査付邦文雑誌 (『数理統計』) に掲載された。森林の質と量の重

要性についての研究が日本生態学会で発表された。本研究の成果を応用的に発展させて都市における河川に関する分析を含めた研究提案が本学先端プロジェクトの採択につながった。生態系勘定の開発に関する環境省受託研究の開始につながった。本研究の発展を目指して、科研費（基盤A）に応募した。

（研究代表者 佐藤真行）

(5) 英国の食およびオラシーに関する教育・子ども支援研究—子どもの貧困と社会的排除の克服を目指して—

本研究の目的は、貧困研究を先進的に行ってきた英国における食およびオラシーに関する教育・支援に焦点を当て、子どもの貧困と社会的排除の克服のための学校、子ども支援の在り方を探求することである。食とオラシーの両方に焦点を当てる理由は、英国では個人に閉じた資質・能力形成という文脈を相対化し、子どもの貧困の克服を目指してこの両方に取り組む公立学校が多数存在し、一定の効果を挙げていることが事前調査で示されたためである。

他の経費支援も受け、メンバーで調査を分担し、英国の学期にあわせて、年度末（7月）、夏季長期休業中（8月）、年度始め（9月）、春季休業前（3月）の計4回調査を実施した。

研究成果中間報告を、教育方法学、リテラシー教育、特別支援教育の各研究団体において計3回行った。

研究は現在も遂行中であるが、現時点での成果の概要は以下の通りである。①英国においても、オラシーを個人に属する「話す力」と捉える傾向があること。感情、認知、身体、言語の4つの観点から「測られる」とも述べられていた。②一方、見学や聴取調査からは、話すことが苦手な子ども、特別な支援が必要な子ども、英語が第一言語でない子どもが話しやすいように、アートを活用し、子どもがうまく話せなくとも支援者・指導者や友達が様々に読み取り、共感的な支援を行う中で、多様性に寛容なオラシティの場でオラシーが育成されていること。③諸事情により家庭で十分に食事ができない子どもへの学校内外の支援と、その場での人間関係の形成、自由な遊びの充実が積極的に行われていること。④学校に対する第三者評価を通じた学力保障論への対抗軸の形成が、オラシー概念と授業研究の導入、学校間連携によって促進されており、個人に閉じた能力主義、学校に閉じたマネジメント等を克服するためにさまざまなネットワークが構築・活用されていること。

なお、本研究をベースに、子ども家族支援団体、初等教育学校、障害がある人の中等教育後の学びの場に焦点をあてた更なる調査を遂行すべく、川地を研究代表者として、科研費基盤研究(C)特設研究分野に申請中である。

（研究代表者 川地亜弥子）

7.4. 高度教員養成プログラム

教育連携推進室の新設以降、その研究開発部門において、高度教員養成プログラムの企画運営を引き継ぎ、例年通り実施した。年間7回のセミナーを企画・実施した（セミナー報

告は、次のサイトにある。<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5261>。参加者は、研究科において専修免許取得を目指す7名の院生であり、附属学校と連携しながらアクションリサーチを主たる研究方法として採用し、研究に取り組んだものである。参加院生には、不十分ながら国内学会等への参加発表支援を当該プログラム予算から行った。なお、本年度より大学院後期課程院生8名をサポートとして参入させている。参加院生の研究業績は、次の通りである（参加学生の業績 <https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5443>）。主に、学術論文14編（審査付き12編）、学会発表20件（審査付き7件）であった。また、受賞は1件であった。今年度は、参加院生を博士課程後課程まで拡大したので、業績は従来よりもかなり充実したものとなった。それらのうち、国際的な業績は6件であり、今後のさらなる充実が求められる。

なお、平成30年度における本プログラムの活動は、次のページ及びそのリンクページにすべて記載され、公表している。<https://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/5134>

高度教員養成プログラム参加院生（後期課程のサポートも込み）の業績

(1)学術論文（14件）

1. 川勝佐希・国土将平・長野真弓・石井好二郎（印刷中）「思春期前期の子どもにおける首尾一貫感覚（sense of coherence）の構造」『思春期学』第37巻，第1号．〔審査付き〕
2. 川勝佐希・国土将平・笠次良爾・長野真弓・森田憲輝・鈴木和弘・渡邊将司・上地広昭・山津幸司・堤公一・辻延浩・久米大祐・石井好二郎（2018）「思春期前期の子どもにおける身体活動，抑うつ，首尾一貫感覚（SOC）の実態調査」『発育発達研究』第78号，43-60．〔審査付き〕
3. 中橋葵・岡部恭幸（2018）「幼児期の数学教育における「遊びを通しての指導」の再検討：フロー理論に着目して」『数学教育学会誌』第59巻，第1・2号，59-66．〔審査付き〕
4. 中橋葵・岡部恭幸（印刷中）「幼児期の豊かな数感覚につながる経験と保育者の援助を考える：5歳児の概念的サビタイジングの実態分析を通して」『保育学研究』第57巻，第1号．〔審査付き〕
5. 西口啓太（2018）「米国大学初年次ライティング指導における学習者への動機づけの効果と課題：プロセス・ライティング指導に着目して」神戸大学教育学会『研究論叢』第24号，67-77．〔審査付き〕
6. 西口啓太（2018）「アメリカ合衆国の大学における初年次ライティングの教育実践に関する一考察：モンクレア州立大学の事例に着目して」日本教育実践学会『教育実践学研究』第20号，第1巻，9-21．〔審査付き〕
7. 西口啓太（印刷中）「米国大学におけるライティング教育の歴史的変遷：1860年代から1980年代までの学習支援体制の視点から」『教育科学論集』第22号．〔審査付き〕

8. 三木知子 (2018) 「ループリックによる教育・保育実習自己評価スタンダードの提案」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 12 巻, 第 1 号, 1-10. [審査付き]
9. 都倉さゆり・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲・若林和也・俣野源晃 (2018) 「科学技術の社会問題を取り上げた小学生向け教育プログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 33 巻, 第 3 号, 21-24. [審査なし]
10. 山崎裕也・下村岳人・石野陽子 (2018) 「算数科割合単元におけるアナログ教示の学習効果」『島根大学教育臨床総合研究』第 17 巻. [審査なし]
11. Wakabayashi, W., & Yamaguchi, E. (2018). Teacher learning support in Japanese science curriculum materials for secondary school. In Finlayson, O. et al. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2017 Conference. Research, Practice and Collaboration in Science Education, Part 14* (co-ed. Couso, Welzel-Breuer), (pp.1979-1986). Dublin, Ireland: Dublin City University. [審査付き]
12. Wakabayashi, K., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T. & Inagaki, S. (2018). Development of design elements of a socio-scientific issue curriculum unit for fostering students' argumentation for persuasion: Case of the 'Rice Seed-Based Edible Vaccine for Japanese Cedar Pollinosis' curriculum unit. M. Andree and M. Ideland (Eds). *Future Educational Challenges from Science and Technology Perspectives. XVIII IOSTE Symposium Book of Proceeding* (pp. 128-132). Malmö: Malmö University. [審査付き]
13. 若林和也・都倉さゆり・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲 (2018) 「科学技術の社会問題を取り上げた大学生向け教育プログラムの評価：複数視点取得に着目して」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 33 巻, 第 3 号, 21-28. [審査なし]
14. 若林和也・山口悦司 (2018) 「中学校理科の教師用指導書を対象とした教師の学習支援に関する分析：第 1 分野「電流とその利用」の事例」日本科学教育学会『科学教育研究』第 42 巻, 第 4 号, 366-377. [審査付き]

(2) 学会発表 (20件)

1. 赤川峰大 (2018) 「小学校段階での演繹的推論についての一考察：算数の内容に内在する三段論法に焦点をあてて」第 64 回近畿数学教育学会例会 (2018 年 9 月 22 日発表) 和歌山県 JA ビル. [審査なし]
2. 赤川峰大・岡部恭幸 (2018) 「演繹的推論を育成する円の面積の学習：三段論法に焦点を当てて」日本教育実践学会第 21 回研究大会 (2018 年 12 月 1 日発表) 岡山理科大学. [審査なし]

3. 赤川峰大・岡部恭幸 (2019) 「演繹的推論を育成する円の面積の学習：三段論法に焦点を当てて」第 65 回近畿数学教育学会例会 (2019 年 2 月 17 日発表) 滋賀大学大津サテライトプラザ. [審査なし]
4. 赤川峰大・岡部恭幸 (2019) 「証明の系統的育成についての一考察：仮言的三段論法を用いた構成の実態に着目して」2019 年度数学教育学会春季年会 (2019 年 3 月 17 日発表) 東京工業大学. [審査なし]
5. Kawakatsu, S., Kokudo, S., Kasanami, R., Nagano, M., & Ishii, K. (2018). Associations between physical activity, sedentary behaviour, depression tendency, and sense of coherence in early adolescents. Oral presentation at 23rd annual congress of the European College of Sport Science, Convention Centre Dublin, Dublin, Ireland. [審査付き]
6. 川勝佐希・國土将平・笠次良爾・長野真弓・石井好二郎 (2019) 「思春期前期の身体活動，座位行動，抑うつ，首尾一貫感覚 (SOC) の関係」日本発育発達学会第 17 回大会 (2019 年 3 月 10 日発表) 大妻女子大学. [審査付き]
7. 清山莉奈・北野幸子 (2018) 「行政による保育情報の公開に関する研究：アメリカ，イギリス，ニュージーランドの検討」日本乳幼児教育学会第 28 回大会論文発表 (2018 年 12 月 8 日・9 日発表) 岡山大学. [審査なし]
8. 清山里奈・北野幸子・古賀志津香 (2019) 「家庭との連携に関する保育者養成教育の検討：保育者対象インタビューと養成課程等の改訂を踏まえて」第 3 回日本保育者養成教育学会研究大会 (2019 年 3 月 2 日発表) 東北福祉大学. [審査なし]
9. 中橋葵・岡部恭幸 (2018) 「幼小接続期の概念的サビタイジングの発達に関する研究：数の合成・分解の学びのプロセスに着目して」日本数学教育学会第 51 回秋期研究大会論文発表 (2018 年 11 月 17 日・18 日発表) 岡山大学. [審査付き]
10. 中橋葵・岡部恭幸 (2018) 「領域「環境」の保育者の援助について考える (1)：遊びにおける子どもの認識の質の高まりに着目して」日本乳幼児教育学会第 28 回大会研究発表 (2018 年 12 月 8 日・9 日発表) 岡山コンベンションセンター. [審査なし]
11. Nishiguchi, K. (2018). The effects and challenges of teaching academic writing at Japanese universities: Developing abilities and dispositions through the interaction with teachers and peers. The 38th Annual International Seminar of the International Society for Teacher Education, Joetsu, Japan. [審査付き]
12. 松山航平 (2018) 「歴史授業における役割体験学習の組織：統帥権干犯問題を題材に」全国社会科教育学会第 67 回全国研究大会自由研究発表 (2018 年 10 月 21 日発表) 山梨大学. [審査なし]

13. 下村岳人 (2018) 「算数科授業における数学的知識の構成にみる協定の特徴に関する一考察：Searle の言語行為論による談話分析を通して」日本数学教育学会第 51 回秋期研究大会論文発表 (2018 年 11 月 18 日発表) 岡山大学. [審査付き]
14. Shimomura, T., & Kondo, Y. (2018). Students' Explanations about the Area Problem in Elementary School: Assessment Framework. ICMI-EARCOME8 Taiwan 2018 (2018 年 5 月 8 日発表) Taipei International Convention Center, Taipei, Taiwan. [審査付き]
15. 下村岳人・近藤裕 (2018) 「見出し説明する過程を重視した算数授業：算数科授業における話し合いに関する一考察」第 100 回全国算数・数学教育研究 (東京) 大会発表 (2018 年 8 月 3 日・4 日・5 日発表) 東京都北区王子小学校. [審査なし]
16. 下村岳人・齊藤英俊 (2018) 「数理認識能力の発達にみる相互行為の特徴に関する一考察」日本教育実践学会第 21 回研究大会発表 (2018 年 12 月 1 日発表) 岡山理科大学. [審査なし]
17. 都倉さゆり・山口悦司 (2018) 「大学生の自然・科学への興味・関心と小学校時代の理科に対する好き嫌いとの関連」『日本理科教育学会第 68 回全国大会発表論文集』第 16 号, 466. [審査なし]
18. 若林和也・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲 (2018) 「科学技術の社会問題を取り上げた教育プログラムの評価：転移テストの分析結果を中心として」『日本科学教育学会年会論文集』第 42 号, 421-422. [審査なし]
19. 若林和也・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲 (2018) 「科学技術の社会問題を取り上げた教育プログラムの開発：遺伝子組み換え技術を応用した花粉症緩和米を事例として」『日本理科教育学会第 68 回全国大会発表論文集』第 16 号, 465. [審査なし]
20. Wakabayashi, K., Yamaguchi, E., Sakamoto, M., Yamamoto, T., & Inagaki, S. (2018). Teaching socio-scientific issues to foster persuasive argumentation: Design elements of a curriculum unit on transgenic rice containing peptides from japanese cedar pollen allergens. Paper presented at the 18th Symposium of the International Organization for Science and Technology Education. Malmö, Sweden. [審査付き]

(教育連携推進室長 稲垣成哲)

7.5. 附属中等教育学校を活用した高大接続研究

「神戸大学－附属中等教育学校高大接続研究」

神戸大学が、「グローバルキャリア人の育成」を教育目標に掲げる附属中等教育学校を活用した高大連携・接続の在り方に関して行う研究に対し、発達科学部 (人間発達環境学研究所) の教員が積極的に協力した。具体的な連携事業としては、学部が実施するグローバルな

課題に関するアクティブ・ラーニングに対して、附属中等教育学校生徒に参画してもらった「グローバル・アクション・プログラム」や、附属中等教育学校生徒が卒業研究として取り組む研究に大学教員が指導・助言を行う「課題研究」などがある。平成30年度は、前者について、附属中等教育学校から2名が発達科学部（人間発達環境学研究科）教員の協力するプログラムに参画した。また、後者の課題研究については、教育研究アドバイザーである発達科学部（人間発達環境学研究科）教員が、附属中等教育学校4年生から6年生の生徒に対して、研究の進め方や分析のしかたについての講義や、発表会での講評などを行った。

（神戸大学附属中等教育学校 教育研究アドバイザー 林創）

7.6. 研究推進

7.6.1. 研究推進委員会

本委員会は研究科長，副研究科長，専攻長，学科長の7名で構成され，研究科における共同研究の推進，研究シーズの発見と育成，外部資金の獲得に向けた組織的対応等について議論を行った。

本委員会の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月6日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成30年度研究支援経費について 2. 平成31年度概算要求について 3. 先端研究融合環のプロジェクト申請について 4. 平成30年度科研採択数について 基盤研究A・B・C，若手研究，研究成果公開促進費 6. 平成30年度国立大学法人運営費交付金の重点支援の評価結果について
第2回（4月27日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成29年度研究支援経費 報告書（研究報告と経費の使途）について 2. 第3期中期目標期間の教育研究の状況に係る評価実施スケジュールについて
第3回（6月1日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成28年度「研究支援経費」実績報告書について <ul style="list-style-type: none"> ・「プロジェクト研究支援経費」4件 ・「国際共同研究支援経費」3件 2. 平成30年度「研究推進支援経費」応募に対する審査について
第4回（9月7日）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平成30年度科研費採択状況について 挑戦的研究（開拓），挑戦的研究（萌芽），特別研究員奨励費 2. 科研費獲得に係るFDの開催

（研究推進委員会委員長 岡田修一）

7.6.2. 研究倫理審査委員会

本年度は59件の新規申請があり、50件が承認、5件が条件付承認、1件が取り下げ、1件は附属校に申請をお願いした。まだ審議中のものが2件残っている状況である。

一昨年度の新規申請が71件、昨年度は69件であったので、本年度は少し件数としては落ち着いた感があるが、それにしても2015年度までは20件台であったことを考えると申請件数は多い方である。平成27年4月1日から「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が施行された。また、平成29年には「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の一部改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正、「個人情報保護法等の改正に伴う研究倫理指針」の改正もなされている。本審査委員会の手続きおよび審査については、昨年度に引き続き、新倫理指針を踏まえた対応を心がけた。さらに、今年度は規程の一部改正を行い、様式第1号の改正を行った。それに伴い、説明書、同意書のひな形の作成も行った。本研究科の研究倫理審査の質を保ちつつ、多くの件数に対応できるシステム構築が可能になったと考えている。

(研究倫理審査委員会委員長 井上真理)

7.6.3. 紀要編集委員会

平成30年度研究紀要編集委員会は、4回の対面会議ならびにメール審議を通して「神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要」第12巻第1号、第2号の編集・刊行を行ったほか、研究紀要執筆要項やレイアウト見本、投稿申込書を改訂した。投稿申込書の改訂にあたっては、主として、神戸大学の学術研究に係る行動規範等の遵守ならびに本研究科における人を直接の対象とする研究審査受審状況についての記載欄を改善した。平成30年9月30日付けで刊行した第12巻第1号は、研究論文5編（査読あり）、研究報告3編（査読なし）を掲載した。平成31年3月31日付けで刊行予定の第12巻第2号は、研究論文3編（査読あり）、研究報告8編（査読なし）を掲載予定である。

(研究紀要編集委員会委員長 坂本美紀)

7.7. 各専攻の研究

7.7.1. 人間発達専攻の研究

以下、各系講座別に研究の概要を示す。

【こころ系講座】

(1) 国際共同研究

本専攻研究者：加藤佳子、鳥居深雪、山根隆宏

共同研究者：Roswith Roth (Graz University), Greimel Elfriede Renatea (Graz Medical University), Mautner Ev (Graz Medical University), 古屋敷智之 (神戸大学医学研究科), 篠原正和 (神戸大学医学研究科)

研究課題：心の健康の保持増進のための国際支援プログラム評価指標の開発

研究資金：科研費 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) (代表：加藤佳子)

研究概要：心の支援を必要とする者 (要心理支援者) への家族や支援者 (支援関係者) から

の支援は、 疾病や障害などの困難を克服する上で重要である。しかし支援関係者らは、要心理支援者との関係性において、固有の重篤なストレスに直面する可能性がある。そのため支援関係者らが心理支援を円滑に行うには、支援者関係者ら自身の心の健康の保持増進を図る必要がある。そこで支援関係者らがそのストレスにうまく対処し、心の健康を保持増進し、生きがいを促進する機序について探求し支援関係者の心の健康・生きがい増進モデルを構築する。そのために歴史的にも先進的な心理支援に取り組み、一定の効果を上げている海外の地域（オーストリア）に中核共同研究拠点を置き国際ネットワークを構築する。最終的に国際社会で活用可能な支援関係者用心理支援プログラムおよび評価指標を開発し、その妥当性を検証する。

本専攻研究者：斎藤誠一，吉田圭吾，加藤佳子

共同研究者：Róbert Urbán (Eötvös Loránd University), Rigó Adrién (Eötvös Loránd University), 黒川通典 (大阪樟蔭女子大学)

研究課題：健康を創出する生きいき食教育プログラム評価指標の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (代表：加藤佳子)

ELTE Institutional Excellence Program (783-3/2018/FEKUTSRAT) supported by the Hungarian Ministry of Human Capacities.

研究概要：本研究は、健康を創出する生きいき食教育プログラム評価指標の開発の一環として行った。食生活は心の健康と関連していることが研究の過程から明らかになった。そこで、より精緻化した検証を行うために心の健康と関連する生活習慣の一つであるクロノタイプに注目した。また、国際研究への展開を目ざすために、クロノタイプの専門家である Rigó Adrién の助言を得ながら国際的に使用されている尺度である Composite Scale of Morningness の日本語版尺度の開発を行った。

(2) その他の研究

本専攻研究者：相澤直樹

共同研究者：石橋正浩 (大阪教育大学), 齋藤大輔 (金沢大学), 牧田潔 (愛知学院大学), 平石博敏 (浜松医科大学)

研究課題：自己制御課題としてのロールシャッハ法の神経基盤の探求

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (代表：石橋正浩)

研究概要：fMRI を用いた脳機能計測によりロールシャッハ検査法実施時の神経基盤を探求する。

本専攻研究者：相澤直樹，山根隆宏

研究課題：認知の偏りを総合的に測定する認知特性プロフィール尺度の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (代表：相澤直樹)

研究概要：精神障害の発生と維持に関わる認知の偏り (cognitive biases) を包括的に測定

する尺度を作成し、その因子構造と妥当性を検討する。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：小淵隆司（北海道教育大学）、戸田竜也（北海道教育大学）

研究課題：異年齢教育による障害の「不可視化」機能：インクルーシブ教育の新次元

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（代表：赤木和重）

研究概要：本研究では、異年齢教育に注目してインクルーシブ教育を検討している。とくに異年齢教育が、障害の「見えにくさ（「不可視化」機能）」に寄与することを明らかにすることを目的としている。障害のある子を含めた異年齢教育を実施している（1）アメリカ、ニューヨーク州にある私立学校、（2）北海道の釧路・根室管内にあるへき地・複式学級において、教師・保護者に聞き取りおよび参与観察を行っている。

本専攻研究者：赤木和重

共同研究者：三木裕和（鳥取大学）

研究課題：自閉症児の授業づくりにおける教育目標・教育評価に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（代表：三木裕和）

研究概要：以下の三点について検討を行っている。①自閉症児を中心とした発達障害児の教育実践における教育目標・教育評価の構造を明らかにすること。その際、「人と共鳴し共感すること」「創造的に考えること」の内容と方法に研究の視点を置く。②社会性の障害に対して「社会適応的行動の獲得」だけでなく、社会性そのものの発達を教育目標として設定可能であるかどうかの研究の視点を置く。③特別支援学校における個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画、成績表、通知表などを分析検討する。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：小島亜美（国立保健医療科学院）、古屋敷智之（神戸大学医学研究科）、篠原正和（神戸大学医学研究科）

研究課題：食に焦点をあてた健康寿命環境促進要因指標の開発（代表：小島亜美）

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）

研究概要：食に焦点をあてながら、健康寿命環境を促進・阻害する要因を明らかにし、これを評価する指標を作成することを目的としている。今年度は、3059名を対象に調査を行った。その結果、1510名より回答が得られた。得られた調査結果について、調査協力者にフィードバックを行う取り組みを行った。

本専攻研究者：加藤佳子

共同研究者：永野和美（神戸大学附属中等教育校）、古屋敷智之（神戸大学医学研究科）

研究課題：心のしなやかさを育む牛乳乳製品の摂取

研究資金：平成30年度「牛乳乳製品健康科学」学術研究

研究概要：牛乳乳製品には、伝統的な日本食では十分に補えない良質のたんぱく質やカルシウムが含まれており、わが国の健康を支えるうえで重要な役割を果たしてきた。近年、さらに牛乳乳製品の優れた機能が明らかにされており、健康な生命活動を維持する上で重要な食品であることが次々に確認されてきている。その一つとして、心理的な効果についての研究も進みつつある。申請者の行っている調査から、牛乳乳製品の摂取量とストレス対処能力（sense of coherence：以下 SOC）との関連が示された。そこで本研究では得られた調査結果をもとに、牛乳乳製品の摂取によるレジリエンス強化への影響を検討し、レジリエンスの強化に寄与する牛乳乳製品の摂取について明らかにすることを目的とし研究を行った。

本専攻研究者：齊藤誠一

共同研究者：松河理子（花園大学）

研究課題：子が思春期にあるときの子及び親の発達性認知・相互交渉が子及び親の発達に与える影響

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（C）（一般）（代表：齊藤誠一）

研究概要：思春期の子及びその親が相手の発達性をどのように認知し、どのように相互交渉するかに着目して、こうした発達性認知と相互交渉が子の思春期の発達課題の解決や精神的健康性に、親の中年期の発達課題の解決や精神的健康性にどのように影響しているかを明らかにし、子の思春期と親の中年期が発達上重層的な相互作用を有することを明らかにする。

本専攻研究者：坂本美紀，稲垣成哲，山口悦司

共同研究者：山本智一（兵庫教育大学），西垣順子（大阪市立大学），益川弘如（静岡大学）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究（B）（一般）（代表：坂本美紀）

研究概要：トランス・サイエンス問題のひとつである科学・技術に関する公共的な問題（SSI）の教育利用に着目して、科学教育における指導理論・指導法・評価法を体系化し、それらを踏まえた教師教育プログラムを、科学教育の専門家と学習科学等の研究者による学際的な共同研究によって、開発・検証することを目指すものである。

本専攻研究者：坂本美紀，山口悦司

共同研究者：伊藤真之（人間環境学専攻），松河秀哉（東北大学）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）（代表：坂本美紀）

研究概要：科学に対する関心・関与を持続的に保持しながら、科学へ主体的に参加・支援するための資質・能力・態度の総体を「オープンサイエンス・リテラシー」と定義し、エンゲ

ージメント理論を応用して、その理論化を行うとともに、市民の科学への主体的な参加・支援を促進する教育モデルを開発することを目的とする。

本専攻研究者：林創

研究課題：子どもの社会性を支える「察する」心の発達心理学的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (代表：林創)

研究概要：幼児期から児童期の子どもを対象に、特に向社会的行動の発達について実証的な視点から着目することで、これらが人間の社会性を支える「察する」心の発達に重要な意味をもつことを明らかにする。

本専攻研究者：林創

研究課題：道徳性に基づく公正観の発達心理学的研究

研究資金：上廣倫理財団研究助成 (代表：林創)

研究概要：幼児期の子どもを対象に、道徳性に基づく人間の公正観を分配状況のもとで実証的に調べることで、教育実践現場での指導の新たな示唆にもつながる心の発達を明らかにする。

本専攻研究者：山根隆宏

研究課題：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの実態と有効性に関する縦断的検討

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究 (代表：山根隆宏)

研究概要：自閉症児の親におけるオンラインソーシャルサポートの利用実態と、その有効性について縦断的な調査を通して検討するものである。

本専攻研究者：山根隆宏

共同研究者：石本雄真 (鳥取大学)、松本由貴 (千葉大学)

研究課題：放課後等デイサービスにおける支援機能向上に資する複層的な支援リソースの開発と検証

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究C (代表：石本雄真)

研究概要：放課後等デイサービスで実施可能でかつ、発達障害児の不安の問題に介入できるプログラムを開発すること、および効果的な研修システムの開発とその効果検証を行うものである。

本専攻研究者：山根隆宏

研究課題：Effects of online social support on psychological stress response among parents of children with autism spectrum disorders

研究資金：日本科学協会：海外発表促進助成 (代表：山根隆宏)

研究概要：自閉症児の親においてオンラインソーシャルサポートの利用が心理的ストレスにどのように寄与するかを検討するものである。

(3) 教員の受賞

林創 2018年度 日本発達心理学会 英国心理学会発達部門大会講演者派遣 (JSDP Award)
Invited talk at the BPS Developmental Psychology Section Annual Conference 2018,
Liverpool, United Kingdom. 2018年9月14日
相津直樹 公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞 (於:日本心理学会第82回大会)
[受賞対象] 驚藤大輔・ジョンミンヨン・内海千種・相津直樹・牧田潔・中村有吾・平石博
敏・石橋正浩 (2018). 投影法課題における図版の特性と性格傾向を反映した神経基盤
日本心理学会第82回大会 (ポスター発表)

(4) 国際共著論文且つ Web of Science 収録掲載論文

NCD Risk Factor Collaboration (NCD-RisC) (including Nakamura H). Contributions of
mean and shape of blood pressure distribution to worldwide trends and variations
in raised blood pressure: a pooled analysis of 1018 population-based measurement
studies with 88.6 million participants. *Int J Epidemiol.* 47 (3): 872-883i, 2018
Yoshiko Kato, Róbert Urbán, Seiichi Saito, Keigo Yoshida, Michinori Kurokawa,
Adrien Rigó Psychometric properties of a Japanese version of Composite Scale
of Morningness *Heliyon* 5(1) <https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2018.e01092>

(5) Web of Science 収録誌掲載論文

Aizawa, N., Ishibashi, M., Nakamura, Y., Uchiumi, C., Makita, K., & Iwakiri, M.
(2018). Near-Infrared Spectroscopy Detects Prefrontal Activities During
Rorschach Inkblot Method. *Japanese Psychological Research*, 60(4), 242-250.

Ohara K, Mase T, Kouda K, Miyawaki C, Momoi K, Fujitani T, Fujita Y, Nakamura H.
Association of anthropometric status, perceived stress, and personality traits
with eating behavior in university students. *Eat Weight Disord.* 2019 [Epub ahead
of print]

Kouda K, Iki M, Fujita Y, Nakamura H, Ohara K, Tachiki T, Nishiyama T. Trends in
serum lipid levels of a 10- and 13-year-old population in Fukuroi City, Japan
(2007 - 2017). *J Epidemiol.* 2018 [Epub ahead of print]

Fujita Y, Kouda K, Nakamura H, Iki M. Relationship between maternal pre-pregnancy
weight and offspring weight strengthens as children develop: a population-based
retrospective cohort study. *J Epidemiol* 28(12):498-502, 2018

(6) 著書

- 赤木和重 (2018) 『目からウロコ！驚愕と共感の自閉症スペクトラム入門』 全障研出版部
山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康雅・大日方真史・守山紗弥加・前原裕
樹・大西宏明 (2018) (編) 『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる：教育的事象の深い理
解をめざした対話的教育方法』 三恵社
- 赤木和重・古村真帆 (2018) 発達障害 大久保智生・牧 郁子 (編) 『教師として考えつづけ
るための教育心理学：多角的な視点から学校の現実を考える』 (pp72-76)
- 赤木和重 (2019) (編) 『ユーモア的即興から生まれる表現の創発：発達障害・新喜劇・ノリ
ツッコミ』 クリエイツかもがわ
- 古谷真樹 (2019) 睡眠の評価法 白川修一郎・福田一彦・堀 忠雄 (監), 日本睡眠改善協
会 (編) 『基礎講座 睡眠改善学 第2版』 ゆまに書房 pp. 149-163.
- 林創 (2018) 社会性の発達 鹿毛雅治 (編) 『未来の教育を創る教職教養指針3 発達と学習』
学文社 pp. 45-62.
- 林創 (2018) 探究的な学習・課題研究 楠見 孝 (編) 『教職教養講座 第8巻 教育心理学』
協同出版 pp. 149-165.
- 林創・神戸大学附属中等教育学校 (編著) (2019) 『探究の力を育む「課題研究」—中等教
育における新しい学びの実践—』 学事出版
- 伊藤俊樹 (2018) 『臨床心理学で読み解く芸術家の創作：ロールシャッハ法と「なぐり
描き法」を通して』 箱庭療法学モノグラフ第8巻 創元社
- 坂本美紀 (2018) 理科教育 楠見 孝 (編) 『教職教養講座 第8巻 教育心理学』 協同出版
pp. 215-228.

(7) 論文 (Web of Science 収録誌掲載論文以外)

- 相澤直樹 (2018) 精神障害の発生と維持に関わる認知の偏りの文献的検討 神戸大学大学
院人間発達環境学研究科研究紀要 12, 1, 75-84.
- 相澤直樹 (2019) 認知特性体験尺度作成の試み——因子構造と構成概念妥当性の検討 神
戸大学発達・臨床心理学研究, 18 (印刷中)
- 長田真人・相澤直樹 (2019) 何が過去のいじめ体験からのPTGを導くのか——テキストマ
イニングによるPTGの検討 神戸大学発達・臨床心理学研究, 18 (印刷中)
- 赤木和重 (2019) 身体や心を「わがもの」にするには (書評『限界を超える子どもたち』)
教職研修 558, 112.
- 赤木和重 (2018) 新しい学びの文化に出会う シャンティつくば実践報告集 2, 127-134
- 赤木和重 (2018) 子どものけんかっすごい：発達の理解と対応 日本の学童ほいく 519,
10-15.
- Miyawaki C, Ohara K, Mase T, Kouda K, Fujitani T, Momoi K, Kaneda H, Murayama R,
Okita Y, Nakamura H. The purpose and the motivation for future practice of

physical activity and related factors in Japanese university students. J Hum Health Sport Exerc 2019 [Epub ahead of print]

中村晴信 栄養と適応. 日本生理人類学会誌 23(4):175-179, 2018

Sakamoto, M. & Yamaguchi, E. (2018). Informal reasoning for socio-scientific issues concerning dilemmas faced by genetic medical technologies. In Finlayson, O.E., McLoughlin, E., Erduran, S., & Childs, P. (Eds.), *Electronic Proceedings of the ESERA 2017 Conference. Research, Practice and Collaboration in Science Education*, Part 8 (co-ed. Nielsen, J. A. & Lindahl, M.), (pp.1069-1075). Dublin, Ireland: Dublin City University. ISBN 978-1-873769-84-3.

雲財啓・齊藤誠一 (2018) がん患者の意味づけに関する研究の概観と展望 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 12, 31-40.

雲財啓・齊藤誠一 (印刷中) 大学生における首尾一貫感覚と回想の関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 12.

米谷充史・齊藤誠一 (印刷中) 繰り返し囚人のジレンマにおける Extortion 戦略の有効性 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 12

米谷充史・齊藤誠一 (印刷中) パーソナリティ発達についての生活史理論からのアプローチ 神戸大学発達・臨床心理学研究, 18.

(8) 総括および課題

こころ系講座では、心理学、健康科学、脳科学を総合した観点、障害児教育を含む教育と発達支援の観点から研究が進められている。具体的には、心身の発達や健康について、そのプロセスや促進・阻害要因、新たな測定方法を探求する研究の他、科学教育や障害児教育、発達支援に関わる実証研究や実践研究が、活発に展開されている。国外の研究者の連携に基づく国際共同研究は、徐々にではあるものの増加傾向にある。今後は、国内での研究課題をグローバルな立場からも俯瞰することで、この動きを加速させ、国際共著論文等の件数を増やしていくことが課題になるであろう。

【表現系講座】

(1) 教員による研究

本専攻研究者：田畑暁生

研究課題：情報社会、監視社会に関する理論的研究

研究代表者（本専攻教員）：岸本吉弘

研究協力者：大島徹也（広島大学）

研究課題：抽象表現における垂直構造が持つ意味と可能性

研究資金：構成員の個人研究費及びギャラリー白（民間企業）

研究概要：抽象絵画の構造そのものに肉迫し、なかでも垂直方向の構成にのみ着眼・実制作・

展示（個展形式・ギャラリー白）することにより絵画表現におけるフォーマリズム的な現代的な可能性を追求した試みである。個展会期中には「絵について」と題した対談を岸本吉弘と大島徹也（広島大学大学院准教授）で同会場にて開催し、展覧会リーフレットには大島徹也氏によるテキスト「岸本吉弘ー『湖のひみつ』後」が掲載された。（平成30年7月開催）

研究代表者（本専攻教員）：岸本吉弘

共同研究者：石川裕敏（大阪府内公立中学校美術教諭）、圓城寺繁誉（大阪府内公立高校美術教諭）、河合美和（大手前大学非常勤講師）、善住芳枝（親和学園教諭）、中島一平、渡辺信明（京都市立芸術大学教授）、コーディネーター：尾崎信一郎（鳥取県立博物館副館長）

研究課題：ペインタリネスな抽象絵画の有様について

研究資金：ギャラリー白（民間企業）

研究概要：関西近県の活動する抽象画家が集い、拠点であるギャラリー白（大阪・西天満）において大型作品の展示と同時に、トークイベントも併載し、抽象絵画における現状とその可能性を探る試みを実施した。（平成30年9月開催。リーフレットも作成し、テキスト「ペインタリネスの力」を尾崎信一郎が執筆した。）

研究代表者（本専攻教員）：岸本吉弘

共同研究者：細川貴司（東北芸術工科大学）

研究課題：制作者からみた絵画表現の可能性について

研究資金：数寄和（民間企業）

研究概要：絵画表現を実践する画家2名の多くの実作品を2人展形式で紹介し、その方法論等の差異を浮き彫りにする中で、絵画表現における現状とその可能性を探る試みを実施した。（平成30年5月に新宿高島屋10階美術画廊にて開催）

研究代表者（本専攻教員）：関典子

研究課題：モーション・クオリア研究～自由落下による必然的な動きと表現～

共同研究者：工藤聡（ダンサー）、伊藤真之（神戸大学）、北村明子（信州大学）、村越直子（武庫川女子大学）、橋本有子（お茶の水女子大学）、工藤洋子（国際公認フェルデンクライスメソッドプラクティショナー）、東出益代（武庫川女子大学非常勤講師）、坂口勝彦（早稲田大学非常勤講師）、相原マユコ（近畿大学非常勤講師）、村田勇人（ダンサー）、クレア・カムース（ダンサー・美術家）

研究資金：京都造形芸術大学舞台芸術研究センターアーツサポート関西助成

研究概要：スウェーデン在住の振付家・工藤聡が独自に開発する「モーション・クオリア」というダンス理論について、研究代表者である関典子自身を被験者として、各分野の研究者からなるチームを結成し、理論的／実践的な解明に取り組んだ。

研究代表者（本専攻教員）：関典子

研究課題：薄井憲二バレエ・コレクション特別展「The Essence of Beauty バレエ 永遠の輝き」

共同研究者：二宮一恵（そごう美術館）、川島京子（早稲田大学）

研究概要：世界でも有数の規模を誇る兵庫県立芸術文化センター所蔵「薄井憲二バレエ・コレクション」の資料を「バレエの歴史」「バレエと美術」「三大バレエ」などの項目に分け、約 400 点を展示。

研究代表者（本専攻教員）：関典子

研究課題：薄井憲二バレエ・コレクション追悼特別展「バレエ ～永遠の輝き～」

研究資金：兵庫県立芸術文化センター

研究概要：平成 29 年 12 月 24 日に逝去された薄井憲二氏の一周忌にあわせ、薄井氏ゆかりの品々、ダンサーたちの直筆手紙、写真、アンティークプリント、ポスターなど約 200 点を展示。

研究代表者（本専攻教員）：梅宮弘光

研究課題：川喜田煉七郎におけるモダニズム思想の展開過程

研究資金：構成員の個人研究費

研究概要：昭和初期における建築計画案の制作からデザイン教育の実践を経て建築施設の能率研究に至る川喜田煉七郎の事跡をモダニズム思想の展開過程として日本近代建築史に位置づけることを目指す。

(2) 科研費などによる研究

研究代表者（本専攻教員）：田畑暁生

研究課題：条件不利地域の地域情報化政策

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)

論文「条件不利地域の地域情報化政策：初山別村と檜枝岐村」（神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要 12(2), 2019. 3)

研究代表者（本専攻教員）：谷正人

研究課題：イラン音楽における身体性の研究～各楽器固有の身体感覚・語法、その交差～

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究

本専攻研究者：谷正人

研究課題：中東少数派の音文化に関する研究—共有と非共有に着目して

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B) (代表：飯野りさ(聖心女子大学特別研究員))

研究代表者（本専攻教員）：野中哲士

研究課題：乳児の日常生活技能獲得場面をとりまく乳児—養育者間共同行為の実証的検討
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (特設分野研究／オラリティと社会)

研究概要：本研究は、まだ言葉を使う前の乳児が日常生活技能を獲得する過程で生起する乳児—養育者間の共同行為 (joint action) と、これらの共同行為の乳児の発達にともなう推移を縦断的に記述することを通して、状況や発達を反映して複雑にゆらぐ乳児の行為に寄り添う養育者の行為が乳児の動作や場面の状況のどのような特徴に呼応して調整されているのかを実証的に明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：野中哲士

共同研究者：伊藤精英 (はこだて未来大学)

研究課題：アクティブタッチ技能の獲得過程の解明：身体の触運動ダイナミクスからの検討
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

研究概要：本研究提案は、複雑な刺激情報を選び分け、有用な一群の刺激を浮かび上がらせる身体運動の側面から、実世界における能動触知覚 (アクティブタッチ) 技能の獲得プロセスの理解を目指すものである。視覚障害児を対象とし、大人になってからの習得が困難とされる点字の触読の獲得過程を縦断的に検討し、実世界におけるアクティブタッチの技能発達において探索的な身体運動のダイナミクスが果たす役割について明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：平芳裕子

研究課題：「見るもの」としてのファッション—表象装置としてのミュージアムとの関連から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

研究概要：ファッションが「見るもの」としていかに制度化されたのかをミュージアムとの関係から考察する。

(3) 国際共著論文

Nonaka, T., & Goldfield, E. C. (2018). Mother-infant interaction in the emergence of a tool-using skill at mealtime: A process of affordance selection. *Ecological Psychology*, 30(3), 278-298.

(4) Web of Science 収録論文

Nonaka, T., & Goldfield, E. C. (2018). Mother-infant interaction in the emergence of a tool-using skill at mealtime: A process of affordance selection. *Ecological Psychology*, 30(3), 278-298.

Yoshida, I., Hirao, K., & Nonaka, T. (2018). Adjusting Challenge-Skill Balance to Improve Quality of Life in Older Adults: A Randomized Controlled Trial. *American Journal of Occupational Therapy*, 72(1), 7201205030p1-7201205030p8.

(5) 国際共同研究

本専攻研究者：野中哲士

共同研究者：Enora Gandon (University College London, UK), John A. Endler (Deakin University, Australia), Reinoud Bootsma (Aix-Marseille University, France)

研究課題：Individual variations in the morphogenesis of traditional ceramic shapes

研究概要：本研究の目的は、世界各地の伝統的な陶芸技能の実験的検討を通して、Cultural Transmission (技能の文化的伝承) に関する実証的な知見を得ることである。陶芸形状の定量化に Elliptical Fourier Analysis と呼ばれる数理手法を用い、生態学、運動学、人類学の学際的なチームで検討を行っている。

本専攻研究者：平芳裕子

共同研究者：川村由仁夜 (ニューヨーク州立ファッション工科大学)

研究課題：ミュージアムにおけるファッション展の国際的展開に関する総合研究

研究資金：科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)(代表：平芳裕子)

研究概要：ミュージアムにおけるファッション展の歴史と近年の国際的展開に関して総合的な研究調査を行う。

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：Carol J. Oja 教授(研究代表者, ハーバード大学), Katie Callam(ハーバード大学), 木本麻希子(神戸大学人間発達環境学研究科研究員)

研究課題：‘Marian Anderson’ s 1953 Concert Tour of Japan: Post-Occupation Racial Encounter through Performance

研究概要：日米の戦後音楽界の交流と人種問題。2019年3月23日 ニューオリンズで開かれる Society for American Music 年次大会で学会発表 <https://www.american-music.org/page/N02019GeneralInfo>。2019年度中に学術雑誌 American Music への掲載予定。

本専攻研究者：大田美佐子

共同研究者：Carol J. Oja 教授(研究代表者, ハーバード大学)

研究課題：U. S. Concert Music and Cultural Reorientation during the Occupation of Japan: A Bicultural Perspective

研究概要：対話的視点で描く占領期における日米音楽交流。2019-2020年に Michigan University Press から出版される論文集に掲載予定。

本専攻研究者：梅宮弘光

共同研究者：Marion von Osten (curator, organizer-facilitator, Berlin), Grant

Watson (Royal College of Art, London), Helena Capkova (早稲田大学), 池田祐子 (国立西洋美術館), 本橋仁 (京都国立近代美術館), Ulrike Hennecke (Goethe-Institut Tokyo)
研究課題 : bauhaus imaginista: Corresponding With
研究資金 : Der Bundesregierung fur Kultur und Medien (ドイツ連邦首相府文化・メディア担当), Der Kulturstiftung des Bundes (ドイツ連邦文化財団), Des Auswartigen Amts (ドイツ連邦外務省)
研究概要 : 日本におけるバウハウスの影響を掘り下げる歴史的研究。バウハウスが 20 世紀世界各地の多様な運動と共有する国際的な関係性に焦点を当てる。

(6) 学術論文

田畑暁生「情報社会は人間を幸せにする社会なのか」『TASC MONTHLY』No. 508, 2018 年 4 月
岡崎香奈:「Global Equivalency Certificate for Music Therapists Part II: Professional Identity and Competencies : 音楽療法士の世界共通資格について パート 2 : 職業的アイデンティティとコンピテンシー (シンポジウム報告)」『日本音楽療法学会誌』Vol. 17-2 pp. 115-117, 2018 年 12 月
谷正人「打弦楽器をめぐる試行錯誤—インド・イランのサントゥール」『季刊民族学』, 116 号, pp. 43-50, 2018 年 10 月
平芳裕子「近代アメリカのメディアに見る表象としてのファッションと女性—雑誌・パターン・ディスプレイ」(博士学位論文), 2018 年 3 月
Hiromitsu Umemiya "Naked Functionalism and the Anti-Aesthetic: The Activities of Renshichiro Kawakita in the 1930s" On Line Journal of 'bauhaus-imaginista', <http://www.bauhaus-imaginista.org/articles/2331/naked-functionalism-and-the-anti-aesthetic>
梅宮弘光「1960 年代に竣工した坂本鹿名夫の設計になる円形校舎の全体的概要」『日本建築学会大会学術講演梗概集 (東北)』 pp. 885-886, 2018 年 9 月

(7) 著書出版

染谷昌義・細田直哉・野中哲士・佐々木正人『身体とアフォーダンス: ギブソン『生態学的知覚システム』から読み解く』2018 年 4 月, 金子書房
平芳裕子『まなざしの装置—ファッションと近代アメリカ』2018 年 9 月, 青土社
岡崎香奈 (分担執筆), 赤木和重 (編著)『ユーモア的即興から生まれる表現の創発』2019 年 2 月, クリエイツかもがわ(岡崎香奈「体験新喜劇の感想—音楽療法士の視点から—」pp. 65-76)
梅宮弘光 (分担執筆), 都市史学会 (編)『日本都市史・建築史事典』2018 年 11 月, 丸善
梅宮弘光 (分担執筆), 埼玉県立美術館+新潟市美術館+広島現代美術館+国立国際美術館 (編), 五十嵐太郎 (監)『インポッシブル・アーキテクチャー』2019 年 2 月, 平凡社

(8) 国際会議，国際学会等における研究発表

Hiromitsu Umemiya "Renshichiro Kawakita and His Design Education 'Kousei-Kyouiku'",
International Interdisciplinary Symposium for bauhaus imaginista, (ゲーテ・イン
スティトゥート東京, 2018年8月5日)

(10) 学生の研究活動

山本真秀 (博士課程前期課程) 「合唱練習における指揮者と演奏者間の意図の共有と演奏熟
達プロセス」日本認知科学会第35回大会 (立命館大学大阪いばらきキャンパス, 平成30年
8月30日)

赤木満里奈 (博士課程前期課程) 「コンテンポラリーダンス作品における振付創作プロセス
一場との関係に着目して」日本認知科学会第35回大会 (立命館大学大阪いばらきキャン
パス, 平成30年9月1日)

高屋安優美 (博士課程前期課程) 「旧杉山家住宅の廻り階段と書斎に関する考察—ジェンダ
ー視点からみる歌人・石上露子の創作空間—」第15回ジェンダー史学会年次大会 (東京外
国語大学, 平成30年12月16日)

石原興子 (博士課程後期課程) 「精神科即興音楽療法における打楽器の臨床的役割とその意
義」『日本音楽療法学会誌』Vol. 17-2 2017, pp. 140-150 (平成30年12月)

赤木満里奈 (博士課程前期課程) 「コンテンポラリーダンス作品における振付創作プロセス
一場との関係に着目して」『日本認知科学会第35回大会発表論文集』, pp. 1038-1042,
日本認知科学会, 平成30年8月

能勢晶子 (博士課程前期課程) 「臨床現場における音楽療法士の聴取技能」第13回日本臨床
音楽療法学会 (神戸大学鶴甲第2キャンパス, 平成31年2月17日)

炭谷将史 (博士課程後期課程) 「傾斜付砂場が園児に与える遊びの機会」『生態心理学研究』12
巻1号, 日本生態心理学会, 平成31年3月。

(11) 総括及び課題

表現系講座教員の研究領域は多様で，各分野共通に適用できる評価指標を設定することは
難しいが，それぞれの分野では顕著な研究活動が展開されている。このことをふまえたう
えで，今後は次の各点が課題であろう。1) 教員相互に共有できる認識や課題も潜在的には
小さくないはずなので，系講座内・専攻における相乗効果が発揮されるような共同研究に向
けた態勢づくりと機運の醸成が必要である。2) 国際共同研究については，背景や枠組みが異

なり必ずしも一律には規定できないが、一定の実績が見られるので、今後の発展が求められる。3) 学生の研究について、各領域での学会をベースとした口頭発表、論文投稿といった研究活動に向けた指導が求められる。

【からだ系講座】

(1) 著書

Katagiri, K. Rich experiences in natural environment in childhood cultivate attachment to community. in Clare Pracana & Michael Wang (Eds.), Psychology Applications & Development IV. Lisboa: inSciencePress. 2018

片桐恵子・石岡良子. 産業・組織. 太田信夫監修, 佐藤眞一編『シリーズ心理学と仕事 6 高齢者心理学』北大路書, pp. 43-65

Sato K, Iemitsu M. Vitamins & Hormones: The Role of Dehydroepiandrosterone (DHEA) in Skeletal Muscle, ELSEVIER, 2018.

長ヶ原誠:「高齢社会におけるスポーツの役割」(pp. 139-144), 「高齢者のスポーツ参加とQOL」(pp. 149-153), 「高齢者のスポーツプロモーション」(pp. 232-237), 改訂4版・生涯スポーツ実践論, 川西正志・野川春夫編著 市村出版, 2018

増本康平(単著) 2018 老いと記憶 加齢で得るもの, 失うもの 中央公論新社

増本康平・塩崎麻里子・中里和弘(分担執筆) 2018 シリーズ心理学と仕事 6: 高齢者心理学(担当箇所: 第5章保健・医療) 太田 信夫(監修), 佐藤 眞一(編集) 北大路書房

増本康平(分担執筆) 2018 最新老年心理学(担当箇所: 第7章 高齢者の自伝的記憶) 松田修(編著), ワールドプランニング

(2) 国際共同研究

長ヶ原誠 ワールドマスターズゲームズ開催地におけるレガシー創出効果の検証(国際マスターズゲームズ協会共同研究)

近藤徳彦 身体機能調節の統合的視点による熱中症リスク評価とその予防(Toby Mundel in Massey Univ, New Zealand)

片桐恵子 都市居住高齢者の日常活動と健康: 日本と韓国の国際比較研究(日本学術振興会 国際交流)

片桐恵子 (分担) Promoting Active Transport for the Elderly: A Comparative Study of Three Asian Cities (NUS Global Asia Institute)

片桐恵子(分担) Sloan Research Network on Aging & Work (Alfred P. Sloan Foundation. S)

(3) 国際学術論文 (査読有, WOS 論文)
(国際共同研究, 国際共著論文)

Katagiri, K. Abundant Experiences in Natural Environment in Childhood Promote Attachment to Community. Psychological Applications and Trends 2018, 227-231
2018. 5

Morton RW, Sato K, Gallagher MPB, Oikawa SY, McNicholas PD, Fujita S, Phillips SM. Muscle Androgen Receptor Content but Not Systemic Hormones is Associated with Resistance Training-Induced Skeletal Muscle Hypertrophy in Healthy, Young Men. Frontiers in Physiology, 9. 1373, 2018. (McMaster University との共同研究の成果)

Bae S, Lee S, Lee S, Harada K, Makizako H, Park H, Shimada H. Combined effect of self-reported hearing problems and level of social activities on the risk of disability in Japanese older adults: A population-based longitudinal study. Maturitas, 2018;115:51-55. (Web of Science 収載)

Amano T, Okushima D, Breese BC, Bailey SJ, Koga S, Kondo N. Influence of dietary nitrate supplementation on local sweating and cutaneous vascular responses during exercise in a hot environment. Eur J Appl Physiol. 2018 May 15. doi: 10.1007/s00421-018-3889-9.

Iannetta D, Okushima D, Inglis EC, Kondo N, Murias JM, Koga S. Blood flow occlusion-related O₂ extraction "reserve" is present in different muscles of the quadriceps but greater in deeper regions after ramp-incremental test. J Appl Physiol (1985). 2018 Aug 1; 125(2):313-319.

Gerrett N, Griggs K, Redortier B, Voelcker T, Kondo N, Havenith G. Sweat from gland to skin surface: production, transport, and skin absorption. J Appl Physiol (1985). 2018 Aug 1; 125(2):459-469.

Tsuji B, Hoshi Y, Honda Y, Fujii N, Sasaki Y, Cheung SS, Kondo N, Nishiyasu T. Respiratory mechanics and cerebral blood flow during heat-induced hyperventilation and its voluntary suppression in passively heated humans. *Physiol Rep*. 2019 Jan; 7(1):e13967.

Gerrett N, Amano T, Havenith G, Inoue Y, Kondo N. The influence of local skin temperature on the sweat glands maximum ion reabsorption rate. *Eur J Appl Physiol*. 2019 Mar; 119(3):685-695

Choo HC, Peiffer JJ, Lopes-Silva JP, Mesquita RNO, Amano T, Kondo N, Abbiss CR. Effect of ice slushy ingestion and cold water immersion on thermoregulatory behavior. *PLoS One*. 2019 Feb 27; 14(2):e0212966

(WOS 論文)

Katagiri, K. & Kim JH. Factors Determining the Social Participation of Older Adults—A Comparison between Japan and Korea Using EASS 2012. *PLOS ONE*
Doi: 10.1371/journal.pone.0194703 2018. 4

Yoshii N, Sato K, Ogasawara R, Kurihara T, Hamaoka T, Fujita S. Relationship between Dietary Protein or Essential Amino Acid Intake and Training-Induced Muscle Hypertrophy among Older Individuals. *Journal of Nutritional Science and Vitaminology*, 63, 6, 379-388, 2018.

Kido K, Ato S, Yokokawa T, Sato K, Fujita S. Resistance training recovers attenuated APPL1 expression and improves insulin-induced Akt signal activation in skeletal muscle of type 2 diabetic rats. *Am J Physiol Endocrinol Metab*, 1, 314, E564-571, 2018.

Yoshii N, Sato K, Ogasawara R, Nishimura Y, Shinohara Y, Fujita S. Effect of Mixed Meal and Leucine Intake on Plasma Amino Acid Concentrations in Young Men. *Nutrients*, 10, 10, 1543, 2018.

Lee S, Lee S, Bae S, Harada K, Jung S, Imaoka M, Makizako H, Doi T, Shimada H. Relationship between chronic kidney disease without diabetes mellitus and components of frailty in community-dwelling Japanese older adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 2018:18:286-292. (Web of Science 収載)

Jung S, Lee S, Lee S, Bae S, Imaoka M, Harada K, Shimada H. Relationship between physical activity levels and depressive symptoms in community-dwelling older Japanese adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 2018;18:421-427. (Web of Science 収載)

Harada K, Masumoto K, Katagiri K, Fukuzawa A, Chogahara M, Kondo N, Okada S. Community intervention to increase neighborhood social network among Japanese older adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 2018;18:462-469. (Web of Science 収載)

Harada K, Masumoto K, Katagiri K, Fukuzawa A, Chogahara M, Kondo N, Okada S. Frequency of going outdoors and health-related quality of life among older adults: Examining the moderating role of living alone and employment status. *Geriatrics and Gerontology International*, 2018;18:640-647. (Web of Science 収載)

Harada K, Lee S, Lee S, Bae S, Anan Y, Harada K, Shimada H. Distance from public transportation and physical activity in Japanese older adults: The moderating role of driving status. *Health Psychology*, 2018;37:355-363. (Web of Science 収載)

Harada K, Lee S, Lee S, Bae S, Harada K, Shimada H. Changes in objectively measured outdoor time and physical, psychological, and cognitive function among older adults with cognitive impairments. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 2018;78:190-195. (Web of Science 収載)

Harada K, Masumoto K, Kondo N. Spousal concordance for objectively measured sedentary behavior and physical activity among middle-aged and older couples. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 2018;89:440-449. (Web of Science 収載)

Bae S, Lee S, Lee S, Jung S, Makino K, Harada K, Harada K, Shinkai Y, Chiba I, Shimada H. The effect of a multicomponent intervention to promote community activity on cognitive function in older adults with mild cognitive impairment: A randomized controlled trial. *Complementary Therapies in Medicine*, 2019;42:164-169. (Web of Science 収載)

Fukuzawa, A., Katagiri, K., Harada, K., Masumoto, K. Chogahara, M., Kondo, N., & Okada, S. (in press) Social Networks as a factor in volunteering among elderly Japanese with lower socioeconomic status. *Japanese Psychological Research*. (Web

of Science 収録紙)

Fukuzawa, A., Katagiri, K., Harada, K., Masumoto, K. Chogahara, M., Kondo, N., & Okada, S. (2018) A longitudinal study of the moderating effects of social capital on the relationships between changes in human capital and ikigai among Japanese older adults, *Asian Journal Of Psychology*. DOI: 10.1111/ajsp.12353 (Web of Science 収録紙)

Amano T, Igarashi A, Fujii N, Hiramatsu D, Inoue Y, Kondo N. β -Adrenergic receptor blockade does not modify non-thermal sweating during static exercise and following muscle ischemia in habitually trained individuals. *Eur J Appl Physiol*. 2018 Dec; 118(12):2669-2677.

Que A, Asashima C, Oizumi R, Ichinose-Kuwahara T, Kondo N, Inoue Y. Age-related attenuation of conduit artery blood flow response to passive heating differs between the arm and leg. *Eur J Appl Physiol*. 2018 Nov; 118(11):2307-2318.

(4) 国内学術論文 (査読有)

片桐恵子. サードエイジ研究の射程と課題 老年社会科学, 40(1), 67-72, 2018. 4

水野いずみ, 片桐恵子. 成人期母娘の就業状態と母親からのサポート受領との関連—子どもと母親をもつ成人期娘を対象とした分析日本家政学会誌. 印刷中

原田和弘, 増本康平, 片桐恵子, 福沢愛, 長ヶ原誠, 近藤徳彦, 岡田修一. 高齢者における近隣の坂道に対する認識と活動的な移動習慣との関連: 斜面市街地を対象とした検討. *運動疫学研究*, 2018:20;16-25.

浜口佳奈子, 栗原俊之, 藤本雅大, 家光素行, 佐藤幸治, 浜岡隆文, 真田樹義. 閉経後サルコペニア女性を対象とした骨密度に対する軽負荷パワートレーニング効果の個体差に関連する要因の検討. *トレーニング科学*, 30, 1, 45-54, 2018.

中山侑紀, 井門あゆみ, 石井好二郎, 家光素行, 佐藤幸治, 藤本雅大, 栗原俊之, 浅原哲子, 真田樹義. 日本人中高齢女性を対象とした内臓脂肪の分布とメタボリックシンドロームリスク因子との関係. *京都滋賀体育学研究*, 34, 10-18, 2018.

瀧千波, 小西可奈, 塩澤成弘, 木村哲也. 足関節底屈での等尺性最大随意収縮における被験者内試行間誤差の分布. *トレーニング科学*, 30 : 107-117, 2018.

(5) 外部資金（科研費）

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

研究課題：マイクロとマクロからみた新たなサードエイジ発達モデルの構築

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)

研究概要：サードエイジの発達モデルの構築

研究代表者（本専攻教員）：原田和弘

研究課題：心理学的要因が退職に伴う高齢夫婦の健康変化に及ぼす影響

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究 (A)

研究概要：健康心理学と老年心理学の理論に基づき、どのような心理学的要因が、退職に伴う高齢夫婦の生活習慣・健康状態の変化に影響を及ぼしているのかを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：木村哲也

研究課題：循環・立位バランス両調節システムの協働効果の解明（平成 29～31 年度）

研究資金：科学研究費助成事業 若手研究(B)

研究概要：静的二足立位姿勢における、立位バランス調節システムと循環調節システムの関連について検討を行っている。

研究代表者（本専攻教員）：増本康平

研究課題：高齢期の意思決定バイアスの国際比較：多様な価値観に応じた自律支援を目指して

研究資金：科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)

研究概要：文化的価値観の違いが高齢期の意思決定プロセスと選択後の後悔や満足度に及ぼす影響を明らかにし、多様な価値基準に応じた意思決定支援方法の確立を目指す。

研究代表者（本専攻教員）：近藤徳彦

研究分担者：井上芳光（大阪国際大学）、西保岳（筑波大学）、天野達郎（新潟大学）

研究課題：運動と遺伝子が高温下での運動パフォーマンスに関係する汗イオン濃度調節に及ぼす影響

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B)

研究概要：高温下での運動パフォーマンス低下や運動時の熱中症発症の予防には、発汗の量の調節だけでなく、効率よく汗を蒸発させるには汗イオン濃度（本研究では塩分濃度）をも重要となる。本研究では運動に関わる要因と遺伝子の違いが汗イオン濃度の調節にどのように影響するのかを明らかにし、高温下運動時に熱中症予防に新しい情報を提供する。

研究代表者（本専攻教員）：秋元忍

研究課題：1914 年以前のイギリスにおける女性のホッケーの普及過程に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (一般)

研究概要：1914 年以前のイギリスにおける女性のホッケーのゲーム普及過程を，新出史料に基づき以下の 3 点から明らかにし，女性スポーツ史の視角から新たな近代スポーツ史像を提示する。

研究代表者（本専攻教員）：河辺章子

研究課題：運動が苦手な人をなくすための運動制御能力テストの開発と習得支援への展開

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C) (一般)

研究概要：身体運動の制御能力を構成する基本的要素を明確にするため，今までの研究とは逆の観点から運動が苦手な人の動作を詳細に分析し，随意運動制御の基本要素を明らかにした上で，運動の制御能力テストを開発し，運動が苦手な人への習得支援へと結びつける。

本専攻研究者：片桐恵子

研究課題：日本人の情報行動, その四半世紀にわたる変遷と超高齢社会における課題の検討

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A) (研究代表者：橋元良明(東京大学))

研究概要：日本人の情報行動の変化の把握と高齢者の情報行動の解明

本専攻研究者：佐藤幸治

研究課題：ビタミンDと運動併用による筋肥大メカニズムの解明と新たなサルコペニア予防法の開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B) (研究代表者：藤田聡(立命館大学))

研究概要：高齢者における，ビタミンD摂取と，レジスタンス運動が，筋力・筋量・筋機能に及ぼす影響を生化学的解析により，メカニズムを明らかにすることを目的としている。

(6) 外部資金（民間，その他）

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

研究課題：フレイルな高齢者の社会的役割と健康

研究資金：損保ジャパン日本興亜福祉財団委託研究

研究概要：フレイルな高齢者の住まいとしてのサービス付き高齢者住宅の居住者の現状把握，地域や多世代交流を促す仕組みと健康への効果の検討

研究代表者（本専攻教員）：片桐恵子

研究課題：人々はなぜクラウドファンディングをするのか

研究資金：吉田秀雄記念事業財団

研究概要：人々がクラウドファンディングをするメカニズムの解明

研究代表者（本専攻教員）：原田和弘

共同研究者：増本康平，近藤徳彦

研究課題：買い物環境が高齢者の外出・日常身体活動量に及ぼす影響：移動能力による差異

研究資金：ロッテ財団・奨励研究助成

研究概要：移動能力によって，買い物環境が高齢者の外出や日常身体活動量に及ぼす影響が異なるかを明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：木村哲也

研究課題：静的立位時の追加荷重に対する適応メカニズム解明

研究資金：中富健康科学振興財団研究助成金

研究概要：静的二足立位姿勢における，荷重負荷に対するバランス制御則の変化について検討を行っている。

研究代表者（本専攻教員）：長ヶ原誠

研究課題：関西圏スポーツモニタリング指標

研究資金：関西広域連合委託調査（314万円）

研究概要：関西圏2府6県在住1万人を対象としたスポーツ活動調査の実施と今後の追跡調査に関わる生涯スポーツモニタリング指標の開発。

研究代表者（本専攻教員）：近藤徳彦

研究課題：汗成分センサーに関する共同研究と身体調節機構に関する基礎的研究

研究経費：ホンダリサーチインスティテュート

研究概要：リアルタイムに運動中の汗成分を定量するセンサーを構築する。また，身体調節機構に関連する基礎的な研究に関わる環境整備とその研究を実施する。

(7) 受賞

佐藤幸治 准教授

平成30年度神戸大学優秀若手研究者賞受賞

原田和弘 准教授

平成29年度笹川スポーツ研究助成優秀研究賞（2018年4月笹川スポーツ財団）

(8) 総括及び課題

平成30年度における研究活動は，複数の外部研究資金を基盤として，順調に研究を進め，論文として成果も多数挙げている。生涯スポーツ振興事業に関する評価データを収集中であり，また，身体運動に関する制御系のデータを計測・分析中であるため，来年度にはこれらのデータを十分に解析し，研究成果へと結び付けていくことが課題である。また，現在受けている外部研究資金が終了した後の更なる資金獲得へ向けて努力していく必要がある。

【学び系講座】

(1) 科研費などによる研究

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：浜田博文（筑波大学）

研究課題：校長のリーダーシップ発揮を促進する制度的・組織的条件の解明と日本の改革デザイン

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)（一般）（課題番号 18H03654）

研究概要：本研究は、校長のリーダーシップ発揮の促進要因を、校長職をとりまく制度的・組織的条件に焦点づけて実証的に解明し、とりわけ制度的・組織的条件の解明と整備＝システムアプローチの観点から日本における改革デザインを提示することを目的とする。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：小野田正利（大阪大学）

研究課題：対応困難な保護者とのトラブル事例分析と紛争化の防止及び解決支援に関する学際的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(A)（一般）（課題番号 17H01021）

研究概要：本研究は、教育学・心理学・精神医学・社会福祉学・法律学などの学際的観点から、学校と地域をめぐる対応困難なトラブルの緩和と解決のためにケース分析を行い、学校管理職に焦点化したトラブルアセスメント・対応プランニングの開発を目指す。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：武田義明（神戸大学）

研究課題：里山植生遷移ゲームと野外体験を統合した環境学習プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（一般）（課題番号 16H03059）

研究概要：里山植生遷移ゲームと野外体験を統合した環境学習プログラムの開発を行った。

本専攻研究者：稲垣成哲，山口悦司

研究代表者：坂本美紀（神戸大学）

研究課題：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（一般）（課題番号 17H01979）

研究概要：トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育プログラムを開発した。

本専攻研究者：渡部昭男

研究代表者：坪井由実（北海道大学）

研究課題：公教育の共同統治を推進する分散型リーダーシップシステムと学習環境調査票の開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（一般）（課題番号 17H02658）

研究概要：公教育の共同統治を推進する分散型リーダーシップシステムと学習環境調査票の開発を行った。

本専攻研究者：稲垣成哲

研究代表者：楠房子（多摩美術大学）

研究課題：ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（一般）（課題番号 17H02002）

研究概要：ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践を行った。

本専攻研究者：渡邊隆信

研究代表者：日渡円（兵庫教育大学）

研究課題：教育行政専門職の養成，研修に関する比較研究：システムとカリキュラム・方法を中心に

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（海外学術調査）（課題番号 16H05727）

研究概要：教育行政専門職の養成，研修に関する比較研究を行った。

本専攻研究者：山下晃一

研究代表者：白石陽一（熊本大学）

研究課題：高校の教科外活動に着目したグローバルなアクティブ・シティズンシップ教育モデル開発

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）（課題番号 16K04479）

研究概要：本研究の目的は，教科外活動を中心としたグローバルなアクティブ・シティズンシップ高校教育モデルの開発・評価である。EU 生徒会連合やイギリス・アメリカのシティズンシップ研究の理論・実践をふまえ，日本の異なるタイプの教科外教育実践から，高校生のアクティブ・シティズンシップ育成をはかる教育モデルを析出する。

本専攻研究者：川地亜弥子，赤木和重

研究代表者：三木裕和（鳥取大学）

研究課題：知的障害，発達障害の教育目標・教育評価に関する研究：資質・能力論の観点から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（一般）（課題番号 18K02366）

研究概要：現代日本のコンピテンシー論について教育目標・評価研究を通じて批判的に検討する。本年度は特に理論的な研究を行った。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：坂本美紀（神戸大学）

研究課題：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）（課題番号 18K18646）

研究概要：市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデルを開発した。

本専攻研究者：山口悦司

研究代表者：望月俊男（専修大学）

研究課題：21世紀型スキルとしての認識論的コンピテンシーを育む協調学習環境の研究開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究（課題番号 16K12796）

研究概要：21世紀型スキルとしての認識論的コンピテンシーを育む協調学習環境を研究開発した。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：幼保連携型認定こども園2・3歳児クラス接続期教育における保育者の専門性

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究（課題番号：16K13526）

研究概要：幼保連携型の認定こども園における2・3歳児クラス接続期教育における保育者の専門性を探究する。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究

研究資金：平成30年度 堺市受託研究

研究概要：堺市の幼児教育の向上を目的に評価指標を作成する。

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金：平成30年度 神戸市共同研究

研究概要：神戸市の乳幼児教育の保育者の専門性を研究する

研究代表者（本専攻教員）：北野幸子

研究課題：就学前教育の質的充実に向けた調査研究

研究資金：神戸市受託研究

研究概要：就学前教育の内実を調査する

研究代表者（本専攻教員）：岡部恭幸

研究課題：幼小接続期の数理認識の発達に着目した評価スケールの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽)（課題番号 18K18648）

研究概要：幼児教育から初等教育への接続期の数理認識の発達に着目して、学習評価のスケールを開発しようとする。

研究代表者（本専攻教員）：木下孝司

研究課題：幼児期における「内容と目的に応じた教示行為」の発達とその認知的基盤

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号 18K03037）

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：三村真弓（広島大学）

研究課題：音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号：18K02577）

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：埋橋玲子（同支社女子大学）

研究課題：「音と声」に注目した保育者研修プログラム－ECERS 及び音環境調査に基づいて－

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号：18K02467）

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：福澤紀子（つるた乳幼児園園長）

研究課題：幼保連携型認定こども園の現状における3歳未満児の教育の質の在り方に関する研究②～遊具環境と遊びに注目して～

研究資金：平成30年度 厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

本専攻研究者：北野幸子

研究代表者：秋田喜代美（東京大学）

研究課題：保育の質に関する基本的な考え方や捉え方・示し方に関する調査

研究資金：平成30年度 厚生労働省 保育の質に関する基本的な考え方や捉え方・示し方に関する調査研究事業

本専攻研究者：勅使河原君江

研究代表者：ロニー・アレキサンダー（神戸大学）

研究課題：被災者が表現活動を通して具現化する「安心」～寄り沿い支援の実証的研究と理論の展開

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）（課題番号：18K18647）

研究概要：東日本大震災の被災地での表現活動の効果を検証する研究である。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：稲垣恭子（京都大学）

研究課題：戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号：17H02679）

研究概要：戦後日本の教育界に影響力を行使してきた政治家および財界人の教育観や教育政策との関係を明らかにする。

本専攻研究者：目黒強

研究代表者：土居安子（一般財団法人大阪国際児童文学振興財団）

研究課題：大正期における児童出版文化史の研究－実業之日本社の果たした役割

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)（課題番号：17K02488）

研究概要：実業之日本社が大正期の児童出版文化の発展に果たした役割を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：津田英二

研究課題：脆弱性をもつ子どもを見守るボランティアな組織の形成過程に関する実践的研究

研究資金：ニッセイ財団

研究概要：子どもの貧困への社会的関心の高まりによって生まれてきている市民の自発的な行動が、貧困のもつ多義的な性質の認知を深めながら、社会連帯を強め、市民協働による福祉社会を形成していく可能性とその過程を探求する実践的共同研究である。

研究代表者（本専攻教員）：津田英二

研究課題：障害者の文化芸術活動の実践分析に基づくエンパワメント評価及び支援システム開発研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B)（課題番号：18H0097）

研究概要：障害者の文化芸術活動を対象として、1)それらがどのような効果をもたらえるものであるのか、2)その効果を把握する現実的な評価方法はいかなるものであるべきか、3)多様に展開されている障害者の文化芸術活動を社会や行政はいかに支援しえるか、という3点を明らかにする共同研究である。

研究代表者（本専攻教員）：稲原美苗

研究課題：哲学的当事者研究の展開：重度・重複障害者と慢性疼痛患者のコミュニケーション再考

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C)（課題番号：16K02120）

研究概要：哲学の知見を取り入れ、重度・重複障害児（者）や慢性疼痛患者の支援プログ

ラムを構築することを目的とする研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：浜渦辰二（大阪大学）

研究課題：北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号：16H03346）

研究概要：誕生，老い，病，死，障がい，痛み，性といった問題の広がりを経験学的に考察する共同研究である。

本専攻研究者：稲原美苗

研究代表者：村上旬平（大阪大学）

研究課題：障害者の親のQOLを高めるための歯科治療における包括的家族支援プログラムの開発

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）（課題番号：18K18601）

研究概要：障害者歯科の利用者の保護者を対象とし，歯科学，臨床哲学，ジェンダー学，臨床心理学，社会福祉学，看護学の見地から家族支援のあり方を考察する学際的研究である

(2) Web of Science 収録誌掲載論文

Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Nakanishi, F., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2018, October). Let's build forests for 300 years: Game-based learning in environmental education. *Proceedings of the 12th European Conference on Games Based Learning* (pp. 881-886). Sophia Antipolis, France. (査読付)

Tokuoka, M., Komiya, N., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., & Kusunoki, F. (2019). Implementation and Evaluation of a Wide-Range Human-Sensing System Based on Cooperating Multiple Range Image Sensors, *Sensors*2019, 19(5), 1172; <https://doi.org/10.3390/s19051172>. (査読付)

(3) 国際共同研究・国際共著書・国際共著論文

本専攻研究者：渡邊隆信

年月日：2018年9月5日～6日

名称：Second Interdisciplinary and Research Alumni Symposium iJaDe2018

外部資金：ドイツ連邦教育芸術省，アレクサンダー・フォン・フンボルト財団

内容：神戸大学で開催されたドレスデン工科大学主催の学際的国際シンポジウムにおいて教育学・心理学部会を企画・運営した。

本専攻研究者：渡邊隆信

年月日：2018年11月12日～16日

名称：International Conference at the Centre for Teacher Education and Educational Research (ZLSB)

外部資金：ドイツ学術交流会 (DAAD)

内容：ドレスデン工科大学・教師教育研究センター主催の教師教育に関する国際シンポジウムに参加し、研究発表を行った。

本専攻研究者：北野幸子

年月日：2018年5月12日

名称：幼児教育における学びや発達の評価はどうあるべきか—実践に生きる評価を目指して—

外部資金：日本保育学会

内容：日本保育学会国際交流委員会の国際シンポジウムを企画・運営した。

本専攻研究者：山口悦司

年月日：2019年1月25日

名称：2019 KASE International Conference

外部資金：2019 KASE International Conference

内容：“Harmonious integration of scientific argument into inquiry-based learning” というタイトルの招待講演を行った。

本専攻研究者：山口悦司，稲垣成哲

内容：国際誌査読付き論文

Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Nakanishi, F., Asahina, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2018).

Gaze-measurement-technology-based evaluation of a vegetation-succession learning system. *International Journal of Education and Research*, 6(12), 191-200.

本専攻研究者：山口悦司，稲垣成哲

内容：国際誌査読付き論文

Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Nakanishi, F., Asahina, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2019).

Vegetation succession learning support system for virtual forestry management: Toward the maintenance and conservation of the natural environment.

International Journal of Education and Research, 7(1), 203-218.

本専攻研究者：稲原美苗

内容：国際共著出版

INAHARA, M. (2018) “Disability and Ambiguities: Technological Support in a Disaster Context”, in Routledge Handbook of Well-Being (edited by K. T. Galvin), Oxford: Routledge, chapter 12: pp.124-132. ISBN: 9781138850101

本専攻研究者：稲原美苗

内容：国際誌査読付き論文

INAHARA, M. (2018) “Rethinking Feminist Standpoint Theory: The Situated Knowledge of the Disabled and Tojisha-Kenkyu”, in Internatilnal Christian University Peace Research Institute Monograph Series #1: Disabilities in Context Toward an Empowering Vision, pp. 23-28.

本専攻研究者：清野未恵子

内容：国際誌査読付き論文

Ueda Y , Kiyono M, Nagano T, Mochizuki S, Murakami T (2018) The appearance factor of crop-raiding Japanese macaques in a farming community practicing multiple damage controls, Human Ecology 46 , 2 , 259-268.

本専攻研究者：山口悦司, 稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Egusa, R., Ishida, R., Ono, S., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Inagaki, S., and Nogami, T. (2018). Developing digital content that helps zoo visitors comparatively observe animal exhibits. Proceedings of EdMedia 2018 (pp.1382-1387). Amsterdam, Netherlands. (査読付)

本専攻研究者：山口悦司, 稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Iio, T., Sasaki, Y., Tokuoka, M., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., Kusunoki, F., & Nogami, T. (in press) : Animal Observation Support System Based on Body Movements- Hunting with animals in virtual environment -. CSEDU 2019. (査読付)

本専攻研究者：山口悦司, 稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2018). A Forestry Management Game as a Learning Support System for Increased Understanding of Vegetation Succession -

Effective Environmental Education Towards a Sustainable Society. CSEDU (1) 2018: 322-327. (査読付)

本専攻研究者：山口悦司, 稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2019). Augmentation of environmental education using a forest management game to stimulate learners' self-discovery. In A. Jobér, M. Andrée and M. Ideland (Eds.), Proceedings of XVIII IOSTE Symposium: Future Educational Challenges from Science and Technology Perspectives (pp.122-127). Malmö, Sweden. (査読付)

本専攻研究者：山口悦司, 稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Komiya, N., Tokuoka, M., Egusa, R., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Namatame, M., Kusunoki, F. (2018). "Let's Play Catch Together": Full-Body Interaction to Encourage Collaboration Among Hearing-Impaired Children. ICCHP (1) 2018: 384-387. (査読付)

本専攻研究者：稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Komiya, N., Tokuoka, M., Egusa, R., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Namatame, M., Kusunoki, F. (2018). Novel Application of 3D Range Image Sensor to Caloric Expenditure Estimation based on Human Body Measurement. Proceedings of the 2018 Twelfth International Conference on Sensing Technology (ICST2018):371-374. (査読付)

本専攻研究者：稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Tokuoka, M., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., & Kusunoki, F. (2018). Full-Body Interaction-based Learning Support to Enhance Immersion in Zoos - Evaluating an Electrodermal Activity Response Support System. CSEDU (1) 2018: 336-341. (査読付)

本専攻研究者：稲垣成哲

内容：国際学会等での発表

Tokuoka, M., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., Kusunoki, F., & Sugimoto, M.

(2018). "Discuss and Behave Collaboratively!" - Full-Body Interactive Learning Support System Within a Museum to Elicit Collaboration with Children. CollabTech 2018: 104-111. (査読付)

本専攻研究者：北野幸子

内容：国際学会等での発表

Kitano, S. (2018) "Teacher's professionalism focusing on two to three-year-olds class transition program in Kodomoen (integrated early childhood care and education center) in Japan" 19th PECERA Annual Conference. (審査有)

本専攻研究者：北野幸子

内容：国際学会等での発表

Fukuzawa, H., Kikuchi, Y., Tadano, H., Hirayama, T., Kabasawa, S., & Kitano, S. (2018) "Quality analysis of 0 to 3 years-old education through reflection with ECCE practitioners in Kodomo-En" 19th PECERA Annual Conference. (審査有)

本専攻研究者：北野幸子

内容：国際学会等での発表

Kitano, S. (2018) "Professionalism in early childhood care and education focusing on relationship with family" 28th EECERA Annual Conference (審査有)

本専攻研究者：北野幸子

内容：国際学会等での発表

Seyama, R., & Kitano, S. (2018) "Sharing information about the quality of ECEC services with parents: Comparing the cases of Japanese local authorities" 28th EECERA Annual Conference (審査有)

本専攻研究者：北野幸子

内容：国際学会等での発表

Kitano, S. (2018) "Outdoor free play time and children's playful learning in early childhood education in Japan" International School Grounds Alliance, ISGA (審査有)

本専攻研究者：稲原美苗

内容：国際学会等での発表

INAHARA, M. (2018) "Expressing Pain through Fine Art: The Power of Dialogue", XXIV World Congress of Philosophy, Beijing 2018, China National Convention

Center (CNCC), 16th August, 2018 (審査有)

本専攻研究者：稲原美苗

内容：国際学会等での招待発表

INAHARA, M. (2018) “Visualizing Pain with an Artist: A Phenomenological Study of Embodied Subjectivity in Dialogue”, 8th PEACE (Phenomenology for East Asian Circle) Conference, Seoul National University, 1st December, 2018. (招待有)

本専攻研究者：稲原美苗

内容：国際学会等での発表

INAHARA, M. (2019) “The Ghost of Eugenics in Japan: Exploring the Intersections of Disability, Asexuality, and Anonymity”, Association for Asian Studies 2019 Annual Conference, Sheraton Downtown Hotel in Denver, 23rd March, 2019. (審査有)

(4) 総括と課題

本年度も、研究資金獲得を伴う研究の進展と、その成果の産出には多くの成果が見られた。また、国際共同研究が着実の増加しており、その成果が国際共著著作となって表れている。今後は、各研究分野における単著・共著著作による研究成果の社会的還元増進、学部教育の加速とも対応した国際的な共同研究と発信の増進、大学院生の研究活動に対する指導・支援の一層の充実が今後の課題となると考える。

(人間発達専攻長 稲垣成哲)

7.7.2. 人間環境学専攻

本専攻では、多分野の教員が自身のテーマを発展させ、多彩な研究プロジェクトに従事することで、人間環境学とその研究ネットワークの発展に貢献してきた。今年度時点で、本専攻研究者は、人間環境学に関する多様なプロジェクトを国内外で共同実施し、統括する役割をはたしている。また、それらの業績を論文や著書としてまとめ、報告している。その研究公表の内訳と数は、(1) 研究プロジェクト (代表者で、研究費総額 200 万円以上) 計 22 件、(2) 国際共同研究 計 10 件、(3) 教員の受賞 計 2 件、(4) 国際共著論文 計 15 報、(5) 著書 計 20 報 (単著 3 報、共著 17 報)、(6) WoS 論文 計 43 報、(7) その他論文 計 22 報である。以下に、本専攻研究者が展開する研究の概要と成果内容を紹介する。

(1) 研究プロジェクト (専攻研究者が代表者で、研究費総額 200 万円以上)

研究代表者 (本専攻教員)：青木茂樹

共同分担者：中野敏行 (名古屋大学)、連携研究者：高橋覚 (本専攻教員)

研究課題：気球搭載型エマルジョン望遠鏡による宇宙ガンマ線未解決課題の解明
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (S), 2017-2021 年度, 総額 (直接経費) 15,390 万円
研究概要：気球搭載型のエマルジョン望遠鏡を開発し, 天体などからのガンマ線観測を行う。

研究代表者 (本専攻教員)：蘆田弘樹

研究課題：CO₂ 固定酵素ルビスコの機能発現最適化による光合成の機能改良
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B), 2017-2020 年度, 総額 (直接経費) 1,370 万円
研究概要：CO₂ 固定酵素ルビスコの機能発現最適化を行い, 植物の光合成能向上を目指す。

研究代表者 (本専攻教員)：伊藤真之

研究課題：バーチャルリアリティ技術を利用した宇宙教育プログラムの開発と展開
研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究(萌芽), 2017-2019 年度, 総額 (直接経費) 210 万円
研究概要：バーチャルリアリティ技術を利用した宇宙教育プログラムを開発・展開する。

研究代表者 (本専攻教員)：源利文

共同研究者：山中裕樹 (龍谷大学)

研究課題：環境 DNA/RNA を利用した生物調査の新展開：水を汲んで生物の行動や状態を知る
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B), 2017-2019 年度, 総額 (直接経費) 1,690 万円
研究概要：環境中の核酸を用いた生物調査手法を用いて生物の行動や状態を知ることのできる新たな手法を開発する。

研究代表者 (本専攻教員)：高見泰興

研究課題：機械的生殖隔離による種分化：交尾器形態分化の要因と帰結
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B), 2016-2019 年度, 総額 (直接経費) 1,300 万円
研究概要：オオオサムシ類の多様な交尾器の遺伝発生, 進化要因と, 種分化への影響を明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：高見泰興

研究課題：性的形質の緯度クラインをもたらす性淘汰の環境依存性の解明
共同研究者：Jong Kuk Kim (Kangwon National University, Korea), Jun Lark Kim (Uiduk University, Korea), Yong Hwan Park (Korea National Arboretum)
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B), 2017-2020 年度, 総額 (直接経費) 810 万円
研究概要：朝鮮半島産ツヤオサムシ類の交尾器形態の緯度クラインの成因を明らかにする。

研究代表 (本専攻教員)：丑丸敦史

研究課題：メガシティにおける生物多様性減少メカニズム-機能群多様性減少の影響評価
研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(B)，2016-2019年度，総額（直接経費）1,261万円
研究概要：本申請課題では，都市拡大に伴う土地利用の変化が水田生態系における生物多様性を減少させるメカニズムを植物・植食性昆虫の機能群多様性の減少とそれによる相互作用系への影響に着目して解明することを目的とする。ここでは，畦畔の草地に生育・生息する植物・植食性昆虫(送粉昆虫, チョウ類, バッタ類)を対象に研究を行う。研究では，都市化に伴う生息地の縮小と分断化, 景観間の接続性消失, 生息地の質的变化, 外来種導入等の人為的な環境変化が，各分類群の種・機能群多様性の減少および種間相互作用の変化をもたらすメカニズムを，里山一都市ライン上の多地点野外調査，GIS による景観解析，相互作用ネットワーク解析，バッタ胃内容 DNA 分析を組み合わせることで総合的に解明する。

研究代表（本専攻教員）：丑丸敦史

共同研究者：平岩将良（本学非常勤研究員）

研究課題：伊豆諸島における長口吻送粉者の不在が植物の繁殖に与える影響

研究資金：（公財）市村清新技術開発財団・植物研究助成金，2017-2020年度，総額（直接経費）総額 416万円

研究概要：長口吻送粉者が少ない伊豆諸島と長口吻送粉者が多い本州において，植物相が類似する海浜群集を対象とし，長口吻送粉者の不在による送粉者群集の訪花パターン変化が植物群集の繁殖成功や花形質の進化に与える影響を検証する。

研究代表者（本専攻教員）：長坂耕作

研究課題：基盤的な数値数式融合計算における数値的安定性と数学的安定性の研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C)，2015-2019年度，総額（直接経費）370万円

研究概要：誤差やパラメータを伴う多項式の GCD の計算方法

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

連携研究者：川田菜穂子（大分大学）

研究課題：超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (B)，2016-2018年度，総額（直接経費）380万円

研究概要：複数住宅所有の実態に関する全国初の調査にもとづき，超高齢社会の住宅資産形成を分析する。

研究代表者（本専攻教員）：平山洋介

連携研究者：川田菜穂子（大分大学）

研究課題：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽），2018-2020年度，総額（直接経費）480万円

研究概要：住宅相続の実態に関する全国初の本格的調査にもとづき，超高齢・持ち家社会

の住宅資産形成を分析する。

研究代表者（本専攻教員）：井上真理

研究課題：自動車，家電製品，日用雑貨等の人の手に触れる部材の触感評価の体系化

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究(C)，2017－2019 年度，総額（直接経費）350 万円

研究概要：自動車，家電製品，日用雑貨など手に触れて用いられる材料の最終用途に応じた望ましい触感を生み出す材料特性の範囲を明らかにし，必要とされる触感の体系化・標準化を行い，材料・商品設計に結びつけることを目的としている。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Jaroslav Doležel, Petr Cápál (Institute of Experimental Botany, Czech Republic)

研究課題：Altered gene expression in alien plant chromosome introgression lines
外来植物染色体添加系統における遺伝子発現の改変

研究資金：二国間交流事業共同研究，2018－2019 年度，総額（直接経費）489 万円

研究概要：異種の染色体が導入された状況で生じる，外来の染色体の構造変化，遺伝子の修飾変化とそれに関連する遺伝子のエピジェネティックな発現の改変を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：佐藤真行

共同研究者：山本充（小樽商科大学），林岳（農林水産政策研究所），田畑智博（神戸大学）

連携研究者：栗山浩一（京都大学），國井大輔（農林水産政策研究所），山口臨太郎（国立環境研究所）

研究課題：国・地方公共団体における生態系勘定の導入に向けた研究

研究資金：環境省受託研究（環境経済の政策研究），2018-2020 年度，総額（直接経費）2,160 万円

研究概要：2010 年に名古屋で開催された COP10 愛知目標に向けた生態系勘定の開発を行う。

研究代表者（本専攻教員）：田畑智博

共同研究者：片桐恵子（人間発達専攻）

研究課題：超高齢化社会の進行とごみ分別行動の関係性評価

研究資金：科学研究費助成事業 挑戦的萌芽研究，2016－2018 年度，総額（直接経費）260 万円

研究概要：高齢者の増加がゴミ分別及び自治体のゴミ処理に及ぼす環境的影響を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：大野朋子

共同研究者：大形徹（大阪府立大学）

研究課題：伝統的文化を背景とした植物利用が地域性の形成と地域環境に与える影響に関する研究

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 2018-2020 年度, 総額 (直接経費) 330 万円
研究概要：宗教や伝統工芸など文化的背景を持ちながら利用される植物の栽培, 維持, 逃げ出しが地域景観と自然環境に与える影響を明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：浅野慎一

研究課題：戦後日本の夜間中学とその生徒の史的変遷：ポスト・コロニアリズムの視座から

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 2017-2020 年度, 総額 (直接経費) 429 万円

研究概要：戦後日本の夜間中学とその生徒の変遷を明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：浅野慎一

研究課題：中国残留日本人をめぐる「正義ある和解」の学的探究

研究資金：科学研究費助成事業 新学術領域研究(研究領域提案型), 2018-2019 年度, 総額 (直接経費)310 万円

研究概要：中国残留日本人をめぐる歴史問題について「正義ある和解」の可能性を学的に探究する。

研究代表者 (本専攻教員)：澤宗則

共同研究者：南埜猛 (兵庫教育大)

研究課題：空間的实践とエスニシティからみた在日インド人と在日ネパール人—戦術から戦略へ

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 2016-2019 年度, 総額 (直接経費) 330 万円

研究概要：在日インド人移民とネパール人移民を比較しながら, 「空間的实践」(「戦術」から「戦略」への移行プロセスと, 「戦術」の多様化や変化) を分析することにより, エスニシティと空間との関係性を明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：太田和宏

研究課題：フィリピンの労働レジーム - グローバル資本主義下の自由化と伝統の接合

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 2017-2019 年度, 総額 (直接経費) 330 万円

研究概要：柔軟雇用, インフォーマルセクター, 海外出稼ぎの接合した特異なフィリピンの労働構造について明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：岩佐卓也

研究課題：企業横断的労使関係の存立構造とその変容—ドイツを主な対象として

研究資金：科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 2018-2021 年度, 総額 (直接経費) 210 万円

研究概要：企業横断的な労使関係の存立構造を実証的・理論的に明らかにする。

研究代表者 (本専攻教員)：井口克郎

研究課題：過疎・少子高齢社会下の介護領域における公私役割分担システムに関する研究
研究資金：科学研究費助成事業 若手研究 (B) 2016-2019年度, 総額 (直接経費) 221万円
研究概要：日本と諸外国のケア保障システムの比較から, 現在日本で主流となっている公私・多セクター役割分担によるケアシステムの現状, 課題と限界について考察し, それを克服できる人権保障としてのケアシステムのあり方 (発展的具體像) を明らかにする。

(2) 国際共同研究

本専攻研究者：伊藤真之

共同研究者：森浩二 (代表：宮崎大学), 上田佳宏 (京都大学), 中澤知洋 (名古屋大学), 松本浩典 (大阪大学), 馬場彩 (東京大学), 岡島 崇, William W. Zhang

(NASA/Goddard Space Flight Center), Richard Mushtzky (University of Maryland) 他
研究課題：広帯域X線高感度撮像分光衛星FORCE (Focusing On Relativistic universe and Cosmic Evolution) ミッションの検討

研究概要：巨大質量ブラックホールの宇宙論的進化の解明等を目的とした広帯域X線高感度撮像分光衛星FORCE計画の検討を行い, 製作・打ち上げに向けて提案を行う。

本専攻研究者：高見泰興

共同研究者：Jong Kuk Kim (Kangwon National University, Korea), Jun Lark Kim (Uiduk University, Korea), Yong Hwan Park (Korea National Arboretum)

研究課題：朝鮮半島におけるオサムシ類の多様性と進化に関する研究

研究概要：気候変動に対するオサムシ群集の変動予測と, 各種の地理的分化をもたらした生態的, 歴史的要因の解明を行う。

本専攻研究者：佐藤春実

共同研究者：Krzysztof B. Bec (University of Innsbruck, Austria)

研究課題：量子化学計算における広範囲の周波数領域におけるスペクトル解析

研究概要：量子化学計算を用いて, 高分子化合物の広範囲の周波数領域におけるスペクトル解析を行う。

本専攻研究者：佐藤春実

共同研究者：Young Mee Jung (Kangwon National University, Korea), Jun Lark Kim (Uiduk University, Korea), Yong Hwan Park (Korea National Arboretum)

研究課題：二次元相関分光法を用いた生分解性ポリエステルにおける分子間相互作用の研究

研究概要：二次元相関分光法を用いて, 生分解性ポリエステル中の弱い分子間相互作用に関与するテラヘルツ領域のスペクトルの解析を行う。

本専攻研究者：佐藤春実

共同研究者：Mateusz Z Brela (Jagiellonian University, Poland), Marek J. Wójcik (Jagiellonian University, Poland)

研究課題：量子化学計算による低周波数領域の高分子のスペクトル解析

研究概要：量子化学計算を駆使して低周波数領域における結晶性高分子の分子間振動や分子間相互作用に関するスペクトル解析を行う。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Jaroslav Doležel, Petr Cápál (Institute of Experimental Botany, Czech Republic)

研究課題：Altered gene expression in alien plant chromosome introgression lines
外来植物染色体添加系統における遺伝子発現の改変

研究資金：二国間交流事業共同研究，2018－2019年度，総額（直接経費）243万円

研究概要：異種の染色体が導入された状況で生じる，外来の染色体の構造変化，遺伝子の修飾変化とそれに関連する遺伝子のエピジェネティックな発現の改変を明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Kornsorn Srikulnath (Kasetsart University, Thailand)

研究課題：Development of nano-visualization for structural analyses of genetic materials and early infection process for further innovation of functional biotechnology

遺伝物質の構造および初期感染過程のナノ可視化法の開発によるバイオナノテクノロジーの新たな展開

研究資金：戦略的国際共同研究プログラム（SICORP），2018－2020年度，総額（直接経費）582万円

研究概要：アジアに特有の生物種を材料に用い，細胞核および細胞分裂期に構築される遺伝物資の担体である染色体の構造についてナノ可視化法を用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Vipa Hongtrakul (Kasetsart University, Thailand)

研究課題：Distribution of copia-type retrotransposons in *Jatropha* spp. using FISH technique

FISH法を用いたジャトロファのコピア型レトロトランスポソンの分布

研究資金：Fellowship of Research and Researchers for Industries (RRI) development project, 2018年度，総額（直接経費）68万円

研究概要：ジャトロファ育成の段階で生じる雑種の系統について，レトロトランスポソンの分布解析よりそのゲノム構造を解析する。

研究代表者（本専攻教員）：近江戸伸子

共同研究者：Misa Hayashida（NRC-NANO, National Research Council, Canada）

研究課題：3D observation of chromosome scaffold structure using electron tomography

電子トモグラフィーを用いた染色体スキャホールド構造の3D観察

研究概要：ヒト染色体を構成するクロマチン軸構造について、電子トモグラフィーを用いて明らかにする。

研究代表者（本専攻教員）：古川文美子

共同研究機関：Faculty marine science, Hasanuddin University

Ministry of Environment and Forestry, Indonesia

研究課題：マングローブ植林地におけるノコギリガザミを用いた生態系修復と資源回復の評価指標構築

研究資金：三井物産環境基金（研究助成）2016-2018年度 総額470万円

研究概要：植林活動によるマングローブ生態系修復は、定量的な評価方法は確立されていない。さらに、植林後は地域住民の資源利用を禁止した囲い込みの管理がなされることが多いのが現状である。本研究では、生態修復だけでなく、地域住民の生業を通じたマングローブ再生を評価できる指標として「ノコギリガザミ」に注目する。そして、地域社会の現状に適うかたちでの資源利用・管理を提案することで、地域社会とマングローブの共生を目指す。

(3) 教員の受賞

受賞者：源利文

受賞名：第36回村尾育英会学術賞

受賞対象：研究課題「環境DNAを用いた生物分布把握法の開発」

受賞日：平成31年3月9日

受賞理由：環境DNAを用いた水中生物の種組成に関する先駆的研究を進め、魚類相の定量的推定法を確立した業績が評価されたため

受章者：浅野慎一

受賞名：地域社会学会賞

受賞対象：『中国残留日本人孤児の研究』御茶の水書房

受賞日：平成30年5月22日

受賞理由：日本の地域社会学の研究に貢献した。

(4) 国際共著論文（海外との研究）

Agafonova, N. et al. (2018) Final Results of the OPERA Experiment on $\nu\tau$

- Appearance in the CNGS Neutrino Beam. *Phys. Rev. Lett.* 120, no.21, 211801.
- Agafonova, N. et al. (2018) Final results of the search for $\nu \mu \rightarrow \nu e$ oscillations with the OPERA detector in the CNGS beam. *JHEP* 1806 151.
- Abe, K. et al. (2018) Measurement of inclusive double-differential $\nu \mu$ charged-current cross section with improved acceptance in the T2K off-axis near detector. *Phys. Rev.* D98, 012004.
- Abe, K. et al. (2018) Characterization of nuclear effects in muon-neutrino scattering on hydrocarbon with a measurement of final-state kinematics and correlations in charged-current pionless interactions at T2K. *Phys. Rev.* D98, no. 3, 032003.
- Abe, K. et al. (2018) Search for CP Violation in Neutrino and Antineutrino Oscillations by the T2K Experiment with 2.2×10^{21} Protons on Target. *Phys. Rev. Lett.* 121, no.17, 171802.
- Takahashi, T. 他 (81名), Itoh, M., Iwai, M. 他 (188名) (2018) Hitomi (ASTRO-H) X-ray Astronomy Satellite. *Journal of Astronomical Telescopes, Instruments, and Systems*, 4 (2), 021402(1-13).
- Sekowska A., Ashida H., Danchin A. (2019) Revising the methionine salvage pathway and its paralogues. *Microb. Biotechnol.* 12(1), 77-97
- Sato, M. O., Rafalimanantsoa, A., Ramarokoto, C., Rahetilahy, A. M., Ravoniarimbinina, P., Kawai, S., Minamoto, T., Sato, M., Kirinoki, M., Rasolofo, V., De Calan M., Chigusa, Y. (2018) Usefulness of environmental DNA for detection of *Schistosoma mansoni* in Madagascar. *International Journal of Infectious Diseases* 76: 130-136.
- Krzysztof B. Bec, Yusuke Morisawa, Kenta Kobashi, Justyna Grabska, Ichiro Tanabe, Erika Tanimura, Harumi Sato, Marek J. Wójcik and Yukihiro Ozaki, Rydberg transitions as a probe for structural changes and phase transition at polymer surfaces: an ATR-FUV-DUV and quantum chemical study of poly(3-hydroxybutyrate) and its nanocomposite with graphene, *Phys. Chem. Chem. Phys.*, **20**, 8859-8873 (2018).
- Mateusz. Z. Brela, Marek J. Wójcik, Marek Boczar, Erika Onishi, Harumi Sato, Takahito Nakajima, Yukihiro Ozaki, “Study of Hydrogen Bond Dynamics in Nylon 6 Crystals Using IR Spectroscopy and Molecular Dynamics Focusing on the Differences Between α and γ Crystal Forms” , *Int. J. Quantum Chem.* **118**:e25595 (2018).
- Ollerton J, et al. (Ushimaru A is the 69th author) (2019) The diversity and evolution of pollination systems in large plant clades: Apocynaceae as a case study. *Annals of Botany* 123:311-325.

- Dengler J, et al. (Ushimaru A is the 160th author) (2018) GrassPlot - a database of multi-scale plant diversity in Palaearctic grasslands. *Phytocoenologia* 48:331-347.
- Forrest, R. and Hirayama, Y. (2018) Late home ownership and social re-stratification, *Economy and Society*, 47 (2), 257-279.
- Ohmido, N., Iwata, A., Kato, S., Wako, T., Fukui, K. (2018) Development of a quantitative pachytene chromosome map and its unification with somatic chromosome and linkage maps of rice (*Oryza sativa* L.), *PLoS One*. 13 (4):e0195710.
- Jung, S.E, Nakamoto, Y., Sato, M., Yamada, K. (2018) Misperception of Economic Terms, *International Journal of Applied Behavioral Economics*, 7 (2), 1-14.

(5) 著書

単著

- 桑村雅隆(2018) 『応用解析概論』 裳華房
- 澤宗則(2018) 『インドのグローバル化と空間的再編成』 古今書院
- 太田和宏(2018) 『貧困の社会構造分析ーなぜフィリピンは貧困を克服できないのか』 法律文化社

分担執筆

- 源利文 (2018) 環境 DNA. (日本魚類学会編) 魚類学の百科事典. 丸善, 東京都千代田区, pp. 492-493.
- Ushimaru A, Uchida K and Suka T (2018) Grassland biodiversity in Japan: threats, management and conservation. In *Grasslands of the world: diversity, management and conservation* (eds Squires VR, Dengler J, Feng H and Hua L), pp. 197-218. CRC Press, Boca Raton, US.
- 丑丸敦史 (2018) 水田畦畔草地の生物多様性 山口裕文監修 宮浦理恵・松嶋賢一・下野嘉子編「雑草学入門」, pp. 66-77, 講談社
- 丑丸敦史(2019) 畦の上の草原-里草地. 須賀丈・岡本透・丑丸敦史編著「草地と日本人: 縄文人からつづく草原利用と生態系」(増補版), pp. 170-224, 築地書館
- 長坂耕作・岩根秀直 編著 北本卓也・讃岐勝・照井章・鍋島克輔 著「計算機代数の基礎理論」(2019) 共立出版 主な担当:第 1,6 章,付録,企画,主編集
- 平山洋介 (2018) 「住宅政策の論点」 日本建築学会編『日本建築学会東日本大震災報告書

第11巻2 都市計画編』

- Hirayama, Y. and Izuhara, M. (2018) Housing in post-growth Japan, in Chiu, R. and Ha, S-K. (eds.) Housing Policy, Wellbeing and Social Development in Asia, New York: Routledge, 50-68.
- 平山洋介(2018)「誰のためのオープンスペースか？」槇文彦・真壁智治(編)『アナザーユートピア——都市のオープンスペースをめぐる』NTT出版.
- 平山洋介(2018)「住宅復興政策の全体像」近畿災害対策まちづくり支援機構(編)『災害Q&A』東方出版.
- 平山洋介(2018)「阪神・淡路大震災からの復興住宅・まちづくりが残した教訓」近畿災害対策まちづくり支援機構(編)『災害Q&A』東方出版.
- 井上真理(2018)ヒトの感性に訴える製品開発とその評価, 第10章 新素材, 新材料の開発, 評価事例, 第2節 繊維製品の肌触り計測, 評価技術 738-748 (技術情報協会) 技術情報協会
- Sato, M. and Managi, S. (2019) Public debt as a negative stock in sustainability indicator, in Shunsuke Managi (ed), Wealth, Inclusive Growth and Sustainability, Routledge, pp.77-86.
- Tabata, T. (2018) Environmental impacts of utilizing woody biomass for energy, in Ashok, P., Bhaskar, T., Mohan, V., Lee, D.-J., Khanal, S.K. (ed.) Waste Biorefinery 1st Edition: Potential and Perspectives, Elsevier, 751-778
- 田畑智博(2018)ライフサイクルコストとペイバックタイム, 稲葉 敦(編)改訂版 演習で学ぶLCA, 株式会社シーエーティー, 92-98
- 田畑智博(2018)神戸大学 都市環境システム研究室, 「日本の環境研究室」編集委員会(編)日本の環境研究室2018, 環境科学会, 148-149
- 井口克郎(2018)「医療・福祉過疎地域の現状と地域包括ケアシステムの現実性」, 医療・福祉問題研究会編著『医療・福祉と人権 地域からの発信』旬報社, pp.47-59
- 井口克郎(2018)「安倍政権下における介護保険制度改革の問題点と対抗軸」, 医療・福祉問題研究会編著『医療・福祉と人権 地域からの発信』旬報社, pp.111-123
- (6) WoS 論文 (10%論文には, *を付す)
- Agafonova, N. et al. (2018) Final Results of the OPERA Experiment on $\nu \tau$ Appearance in the CNGS Neutrino Beam. *Phys. Rev. Lett.* 120, no.21, 211801.
- Agafonova, N. et al. (2018) Final results of the search for $\nu \mu \rightarrow \nu e$ oscillations with the OPERA detector in the CNGS beam. *JHEP* 1806 151.
- Abe, K. et al. (2018) Measurement of inclusive double-differential $\nu \mu$ charged-current cross section with improved acceptance in the T2K off-axis near detector. *Phys. Rev. D* 98, 012004.

- Abe, K. et al. (2018) Characterization of nuclear effects in muon-neutrino scattering on hydrocarbon with a measurement of final-state kinematics and correlations in charged-current pionless interactions at T2K. *Phys. Rev. D* 98, no. 3, 032003.
- Abe, K. et al. (2018) Search for CP Violation in Neutrino and Antineutrino Oscillations by the T2K Experiment with 2.2×10^{21} Protons on Target. *Phys. Rev. Lett.* 121, no. 17, 171802.
- Hiroki Rokujo et al. (2018) First demonstration of gamma-ray imaging using a balloon-borne emulsion telescope. *PTEP* 2018, no. 6, 063H01.
- Satoru Takahashi et al. (2018) GRAINE project, prospects for scientific balloon-borne experiments *Adv. Space Res.* 62, 2945-2953.
- Takahashi, T. 他 (81名), Itoh, M., Iwai, M. 他 (188名) (2018) Hitomi (ASTRO-H) X-ray Astronomy Satellite. *Journal of Astronomical Telescopes, Instruments, and Systems*, 4 (2), 021402(1-13).
- Ashida H., Mizohata E., Yokota A. (2019) Learning RuBisCO' s birth and subsequent environmental adaptation. *Biochemical Society Transactions*, 47(1), 179-185.
- Sekowska A., Ashida H., Danchin A. (2019) Revising the methionine salvage pathway and its paralogues. *Microbial Biotechnology*, 12(1), 77-97.
- Murakami, H., Yoon, S., Kasai, A., Minamoto, T., Yamamoto, S., Sakata, M. K., Horiuchi, T., Sawada, H., Kondoh, M., Yamashita, Y., Masuda, R. (2019) Dispersion and degradation of environmental DNA from caged fish in a marine environment. *Fisheries Science* 85, 327-337.
- Jo, T., Murakami, H., Yamamoto, S., Masuda, R., Minamoto, T. (2019) Effect of water temperature and fish biomass on environmental DNA shedding, degradation, and size distribution. *Ecology and Evolution* 9, 1135-1146.
- Minamoto, T., Hayami, K., Sakata M. K., Imamura, A. (2019) Real-time PCR assays for environmental DNA detection of three salmonid fish in Hokkaido, Japan: application to winter surveys. *Ecological Research* 34, 237-242.
- Takeuchi, A., Watanabe, S., Yamamoto, S., Miller, M. J., Fukuba, T., Miwa, T., Okino, T., Minamoto, T., Tsukamoto, K. (2019) First attempt of an oceanic environmental DNA survey of the spawning ecology of the Japanese eel *Anguilla japonica*. *Marine Ecology Progress Series* 609, 187-196.
- Sato, M. O., Rafalimanantsoa, A., Ramarokoto, C., Rahetilahy, A. M., Ravoniarimbina, P., Kawai, S., Minamoto, T., Sato, M., Kirinoki, M., Rasolofo, V., De Calan M., Chigusa, Y. (2018) Usefulness of environmental DNA for detection of *Schistosoma mansoni* in Madagascar. *International*

- Journal of Infectious Diseases 76, 130–136.
- Nakagawa, H., Yamamoto, S., Sato, Y., Sado, T., Minamoto, T., Miya, M. (2018) Comparing local- and regional-scale estimations of the diversity of stream fish using eDNA metabarcoding and conventional observation methods. *Freshwater Biology* 63 (6), 569–580.
- Wu, Q., Kawano, K., Uehara, Y., Okuda, N., Hongo, M., Tsuji, S., Yamanaka, H., Minamoto, T. (2018) Environmental DNA reveals non-migratory individuals of *Palaemon paucidens* overwintering in Lake Biwa shallow waters. *Freshwater Science* 37 (2), 307–314.
- Takami, Y., Fukuhara, T., Yokoyama, J. and Kawata, M. 2018. Impact of sexually antagonistic genital morphologies on female reproduction and wild population demography. *Evolution* 72: 2449–2461.
- Nishimura, F., Hoshina, H., Ozaki, Y., Sato, H. (2019) Isothermal crystallization of poly(glycolic acid) studied by terahertz and infrared spectroscopy and SAXS/WAXD simultaneous measurements. *Polymer J.*, 51, 237–245.
- Bec, B. K., Morisawa, Y., Kobashi, K., Grabska, J., Tanabe, I., Tanimura, E., Sato, H., Wójcik, J. M., Ozaki, Y. (2018) Rydberg transitions as a probe for structural changes and phase transition at polymer surfaces: an ATR-FUV-DUV and quantum chemical study of poly(3-hydroxybutyrate) and its nanocomposite with graphene. *Phys. Chem. Chem. Phys.*, 20, 8859–8873.
- Brela, Z. M., Wójcik, J. M., Boczar, M., Onishi, E., Sato, H., Nakajima, T., Ozaki, Y. (2018) Study of Hydrogen Bond Dynamics in Nylon 6 Crystals Using IR Spectroscopy and Molecular Dynamics Focusing on the Differences Between α and γ Crystal Forms. *Int. J. Quantum Chem.* 118:e25595.
- Shimada, J., Shimada, M., Sugahara, T., Tsunashima, K., Tani, A., Tsuchida, Y., Matsumiya, M. (2018) Phase equilibrium relations of semiclathrate hydrates based on tetra-*n*-butylphosphonium formate, acetate, and lactate. *Journal of Chemical & Engineering Data.* 63 (9), 3615–3620.
- Ijiri, A., Inagaki, F., Kubo, Y., Adhikari, R. R., Hattori, S., Hoshino T., Imachi, H., Kawagucci, S., Morono, Y., Ohtomo, Y., Ono, S., Sakai, S., Takai, K., Toki, T., Wang, D. T., Yoshinaga, M. Y., Arnold, G. L., Ashi, J., Case, D. H., Feseker, T., Hinrichs, K.-U., Ikegawa, Y., Ikehara, M., Kallmeyer, J., Kumagai, H., Lever, M. A., Morita, S., Nakamura, K., Nakamura, Y., Nishizawa, M., Orphan, V. J., Røy, H., Schmidt, F., Tani, A., Tanikawa, W., Terada, T., Tomaru, H., Tsuji, T., Tsunogai, U., Yamaguchi, Y. T., Yoshia, N. Deep-biosphere methane production stimulated

- by geofluids in the Nankai accretionary complex. *Science Advances*. 4 (6) eaao4631.
- Yamabe, M., Kaihatsu, K., Ebara, Y. (2018) Antiviral Mechanism of Action of Epigallocatechin-3-O-gallate and Its Fatty Acid Esters. *Molecules*, 23 (10), 2475.
- Yamabe, M., Kaihatsu, K., Ebara, Y. (2019) Binding inhibition of various influenza viruses by sialyllactose-modified trimer DNAs. *Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters*, 29 (5), 744-748.
- Yamabe, M., Fujita, A., Kaihatsu, K., Ebara, Y. (2019) Synthesis of neuraminidase-resistant sialoside-modified three-way junction DNA and its binding ability to various influenza viruses. *Carbohydrate Research*, 474, 43-50.
- Ohkushi, K., Hata, M., Nemoto, N. (2018) Response of deep-sea benthic foraminifera to paleoproductivity changes on the Shatsky Rise in the northwestern Pacific Ocean over the last 187 kyr. *Paleontological Research*, 22, 326-351.
- Ollerton J, et al. (Ushimaru A is the 69th author) (2019) The diversity and evolution of pollination systems in large plant clades: Apocynaceae as a case study. *Annals of Botany* 123:311-325.
- Dengler J, et al. (Ushimaru A is the 160th author) (2018) GrassPlot - a database of multi-scale plant diversity in Palaeartic grasslands. *Phytocoenologia* 48:331-347.
- Aoshima I, Uchida K, Ushimaru A and Sato M (2018) The influence of subjective perceptions on the valuation of green spaces in Japanese urban areas. *Urban Forestry & Urban Greening* 34:166-174.
- Uchida K, Fujimoto H and Ushimaru A (2018) Urbanization promotes the loss of seasonal dynamics in the semi-natural grasslands of an East Asian megacity. *Basic and Applied Ecology* 29:1-11.
- Nakahama N, Uchida K, Ushimaru A and Isagi Y (2018) Historical changes in grassland area determined the demography of semi-natural grassland butterflies in Japan. *Heredity* 121:155-168.
- Kuwamura, M., Seirin-Lee, S., Ei, S. (2018) Dynamics of localized unimodal patterns in reaction-diffusion systems for cell polarization by extracellular signaling, *SIAM Journal on Applied Mathematics* 78: 3238-3257
- Forrest, R. and Hirayama, Y. (2018) Late home ownership and social re-stratification, *Economy and Society*, 47 (2), 257-279.
- Thinzar Phyo Wyint, Shinnosuke Yoneda, Toshiyasu Kinari, Hiroshi Tachiya, Lina Wakako, Mari Inoue (2018) Rotational Dragging-Based Investigation of

- Frictional Properties of Nonwoven Fabrics, *Journal of Fiber Science and Technology*, 74 (4), 82-88.
- Ohmido, N., Iwata, A., Kato, S., Wako, T., Fukui, K. (2018) Development of a quantitative pachytene chromosome map and its unification with somatic chromosome and linkage maps of rice (*Oryza sativa* L.). *PLoS One*, 13 (4):e0195710.
- Kudoh, T., Takahashi, M., Osabe, T., Toyoda, A., Hirakawa, H., Suzuki, Y., Ohmido, N., Onodera, Y. (2018) Molecular insights into the non-recombining nature of the spinach male-determining region. *Mol Genet Genomics*, 293(2):557-568.
- Pachakkil, B., Terajima, Y., Ohmido, N., Ebina, M., Irei, S., Hayashi, H., Takagi, H. (2019) Cytogenetic and agronomic characterization of intergeneric hybrids between *Saccharum* spp. hybrid and *Erianthus arundinaceus*, *Sci Rep*, 9(1):1748. doi: 10.1038/s41598-018-38316-6.
- Aoshima, I., Uchida, K., Ushimaru, A., Sato, M. (2018) The Influence of Subjective Perceptions on the Valuation of Green Spaces in Japanese Urban Areas, *Urban Forestry & Urban Greening* (refreed), 36, 166-174. DOI: 10.1016/j.ufug.2018.06.018
- Sato, M., Tanaka, K., Managi, S. (2018) Inclusive wealth, total factor productivity, and sustainability: An empirical analysis, *Environmental Economics and Policy Studies* (refereed), 20, 741-757. DOI: 10.1007/s10018-018-0213-1
- Jung, S.E., Nakamoto, Y., Sato, M., Yamada, K. (2018) Misperception of Economic Terms, *International Journal of Applied Behavioral Economics*, 7 (2), 1-14.
- Sato, M., Samreth S., Sasaki, K. (2018) The Impact of Institutional Factors on the Performance of Genuine Savings, *International Journal of Sustainable Development & World Ecology* (refereed), 25 (1), 56-68. DOI: 10.1080/13504509.2017.1289990
- Tabata, T., Morita, H. and Onishi, A. (2018) What is the quantity of consumer goods stocked in a Japanese household? Estimating potential disaster waste generation during floods, *Resources, Conservation and Recycling*, 133, 86-98.

(7)その他論文

- 蘆田弘樹 (2018) Photosynthetic Carbon Dioxide-Fixing Enzyme " RuBisCO" , *Journal of the Society of Inorganic Materials, Japan*, 25 (397), 406-411.
- 源利文 (2019) 環境 DNA 分析の概要と希少種の検出〜水をくむだけで絶滅危惧種の分布が

- わかる, 化学と生物 57(3), 181-186.
- 丹羽英之, 坂田雅之, 源利文, 清野未恵子 (2018) 河川における流程 500m 間隔での環境 DNA 分析と現地採集調査による魚類検出結果の比較, 保全生態学研究 23 (2), 257-264.
- 赤塚真依子, 高山百合子, 伊藤一教, 森本哲平, 源利文 (2018) 海草場を対象とした環境 DNA 検出方法と三次元数値解析の適用性に関する検討. 土木学会論文集 B2 (海岸工学) 74 (2), I_1225-I_1230.
- 高山百合子・赤塚真依子・伊藤一教・源利文 (2018) アマモ場のモニタリング手法における環境 DNA の活用について. 土木学会論文集 B2 (海岸工学) 74 (2), I_1231-I_1236.
- 源利文 (2018) 種特異的な環境 DNA 検出によるマクロ生物の生態調査. 水環境学会誌 41A (4), 123-127.
- 山本雄大, 陀安一郎, 藪崎志穂, 申基澈, 中野孝教, 横山正, 三橋弘宗, 大串健一, 伊藤真之 (2018) 2016 年千種川一斉水温調査の水質分析結果 : 溶存イオン成分の特徴, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 12 (1), 67-74
- 村中泰子, 米谷 淳, 谷篤史, 伊藤真之, 蛭名邦禎 (2019) ROOT フォローアップー基礎ステージと実践ステージにおける高校生の成長ー, 神戸大学大学教育推進機構「大学教育研究」, 27, 139-158
- 平山洋介 (2018. 8) 「住宅条件の世代間の違いをどう読むか」『建築雑誌』133 (1714)
- 平山洋介 (2018. 6) 「焼死する老人たちと住宅問題」『住宅会議』(103), 8-14.
- 平山洋介 (2018. 4) 「超高齢社会の公共住宅団地をどう改善するか」『都市問題』109 (4), 69-79.
- 佐藤真行, 栗山浩一, 藤井秀道, 馬奈木俊介 (2019) 「日本における森林生態系サービスの経済評価」, 『統計数理』
- 蔡 佩宜, 佐伯 孝, 大西暁生, 田畑智博 (2018) 一般廃棄物処理施設の稼働実態を考慮した処理余力と可燃性の災害廃棄物処理年数の推計に関する研究～南海トラフ巨大地震を事例として～, 廃棄物資源循環学会論文誌, 29, 92-103.
- Tabata, T., Oda, M., Tsai, P. and Katagiri, K. (2018) Plastic packaging waste segregation behavior of residents and its environmental effect on municipal solid waste management, International Journal of Thermal & Environmental Engineering, 16, 73-79.
- 大形徹, 山里純一, 佐々木聡, 大野朋子 (2019) 「石垣島・タイ北部・ネパール・中国等の人々の手首にヒモを巻くことについての考察」『形の文化研究』
- 浅野慎一 (2019) 「夜間中学の変遷と未来への『生命線』」『日本の科学者』613 号
- 草京子, 浅野慎一 (2018) 「1947～1955 年における夜間中学校と生徒の基本的特徴(後篇)」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 12 巻第 1 号 pp. 47-65
- 浅野慎一・佟岩 (2019) 「中国残留日本人の生成過程における中国人民衆の実践と協働」『神

- 戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第12巻第2号 印刷中
- 澤宗則(2018)「大都市近郊農村からアーバンビレッジへの変容」『地理』63-7 pp.40-49
- 井口克郎(2018)「介護労働者におけるディーセント・ワークの実現をめぐる現状と課題」
『国民医療』No.339, 公益財団法人日本医療総合研究所, 2018年, pp.47-65
- 太田和宏・ホセ・アントニオ・フェレーロス他(2019)「日本とフィリピンにおける戦争に
関する社会的記憶の比較」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第1
2巻第2号 印刷中
- 井口克郎(2018)「医療・介護保障の抑制・後退政策と対抗軸:日本における『健康権』の
普及と確立を」『経済』No.277, 新日本出版社, pp.28-41
- (人間環境学専攻長 近江戸伸子)

8. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

8.1. 産官学共同プロジェクト

研究代表者(本専攻教員):北野幸子

研究課題:幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究

研究資金:2018年度 堺市受託研究

研究概要:堺市の幼児教育の向上を目的に評価指標を作成する。

研究代表者(本専攻教員):北野幸子

研究課題:乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究

研究資金:2018年度 神戸市共同研究

研究概要:神戸市の乳幼児教育の保育者の専門性を研究する

研究代表者(本専攻教員):北野幸子

研究課題:就学前教育の質的充実に向けた調査研究

研究資金:神戸市受託研究

研究概要:就学前教育の内実を調査する

本専攻研究者:北野幸子

研究代表者:福澤紀子(つるた乳幼児園園長)

研究課題:幼保連携型認定こども園の現状における3歳未満児の教育の質の在り方に関する研究②～遊具環境と遊びに注目して～

研究資金:2018年度 厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所「指定研究」

本専攻研究者:北野幸子

研究代表者:秋田喜代美(東京大学)

研究課題:保育の質に関する基本的な考え方や捉え方・示し方に関する調査

研究資金：2018年度 厚生労働省 保育の質に関する基本的な考え方や捉え方・示し方に関する調査研究事業

研究代表者（本専攻教員）：津田英二

研究課題：脆弱性をもつ子どもを見守るボランティアな組織の形成過程に関する実践的研究

研究資金：ニッセイ財団

研究概要：子どもの貧困への社会的関心の高まりによって生まれてきている市民の自発的な行動が、貧困のもつ多義的な性質の認知を深めながら、社会連帯を強め、市民協働による福祉社会を形成していく可能性とその過程を探求する実践的共同研究である。

8.2. 地域連携プロジェクト

(1) ESD グローカルネットワーク推進プロジェクト

学び系の教員が中心となって、国連大学の ESD 推進組織 RCE (Regional Centers of Expertise on ESD) の事務局として認証されたヒューマン・コミュニティ創成研究センターを拠点に、持続可能な開発 (SD) に関連する阪神間の NPO, 企業, 行政などのローカルネットワーク化支援, 世界約 130 か所の RCE とのグローバルネットワークの構築支援を行ってきた。「RCE 兵庫-神戸 (ESD 推進ネットひょうご神戸)」の現段階での構成員は、70 を超えている。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(2) ESD ユースネットワーク推進プロジェクト

SDGs 推進のカギとされるユース (35 歳未満：国連定義) の国内外のネットワーク化を促進するため、2 月の国内 RCE 実務者会議におけるユースカンファレンスに院生 2 名、学部生 2 名を派遣した。本専攻の教員 2 名が同行した。他専攻教員の協力も得ながら、神戸大学を中心とした ESD ユースネットワークの組織化を支援した。

(人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子)

(3) 第 3 回 ESD 実践研究集会の開催

平成 28 年より、ESD に関連する実践者・研究者の情報交換、課題研究の探究、共同研究の創成の場として、ヒューマン・コミュニティ創成研究センター主催の「ESD 実践研究集会」を開催してきた。本専攻教員 5 名が中心的な役割を果たしている。本年度は、平成 30 年 9 月 29, 30 日, 10 月 9 日の三日間、人間発達環境学研究科の学舎で開催し、約 250 名の参加を得た。大会テーマは SDGs (持続可能な開発目標) と ESD の関係を問うことに定められた。

(人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子・津田英二・稲原美苗)

(4) ESD 修学旅行企画運営プロジェクト

東北学院高校 2 年生、約 400 人の修学旅行を、ESD プログラムとして展開する社会実験を、

同高校及びESD推進ネットひょうご神戸の諸団体の協力を得て実施した。平成30年12月6日、本専攻の清野未恵子准教授が中心となり、実践仮説の構築、プログラムコーディネート、リフレクションワークショップなどの社会実験が行われた。なお、本実験の詳細は、『ESD実践研究2018』（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター，平成31年3月）に詳しい。

（人間発達専攻 清野未恵子・松岡広路・津田英二）

(5) ESD ボランティアぼらばんの実践支援

本研究科と連携協定を結んでいる国立ハンセン病療養所邑久光明園での、学生やOBによるボランティア活動プログラムを企画・支援している。当園の納涼祭，わくわく保養ツアー，入居者ランチ交流会，文化祭などでの運営補助，岡山県虫明行業協同組合との連携による海岸清掃などを内容とする宿泊型ボランティアプログラムの企画立案・効果検証などを行った。

（人間発達専攻 松岡広路・清野未恵子）

(6) 東日本大震災公民館支援プロジェクト

平成23年3月11日に発災した東日本大震災被災地，岩手県大船渡市赤崎町における復興のまちづくり支援活動を，8年来，継続している。本年度は，同町の「赤崎復興市」（住民の六次産業体験の場，年4回）や3月の町の慰霊式典に参加するスタディツアープログラムとともに，赤崎町地区公民館において持続可能な開発を実現するまちづくりのための住民ワークショップなどを企画した。人間環境学専攻の教員らと共に，本専攻の松岡広路教授が中心となっている。

（人間発達専攻 松岡広路）

(7) 子育て支援拠点モデル開発

神戸市との連携による「のびやかスペースあーち」の日常的な運営を通して，「ドロップイン・サービス」「ペアレンティング・セミナー」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。その他，地域子育て応援プラザ灘，灘区公立保育園，園田学園女子大学，灘区歯科医師会，各種NPO法人，社会福祉法人との連携・協働によって，多様なプログラムを展開した。

（人間発達専攻 津田英二）

(8) 子どもの居場所づくりモデル開発

神戸市の委託によって「子ども居場所づくり」事業を実施し，灘区連合婦人会との連携・協力によって，子ども食堂，学習支援など，さまざまな課題をもつ人びとが集まり，相互支援の場の提供を行った。また，「都市型中間施設」概念の生成を契機とした施設も出る開発を展開した。

（人間発達専攻 津田英二）

(9) 自然共生地域支援プロジェクト

神戸大生と高校生が交流する機会として、「獣がい対策の多様な担い手研修会」に学生を誘い、参加してもらった。また、その研修会の集大成として、「第1回獣害フォーラム」を開催し、その会の運営をともに行い、野生動物管理に携わる様々な業種の方と交流する機会を設けた。

(人間発達専攻 清野未恵子)

(10) 哲学カフェ

「のびやかスペース『あーち』」及びNPO法人「女性と子ども支援センターウィメンズ ネット・こうべ」が運営しているWACCA(神戸市長田区)で、現象学を学問的基盤におく「哲学カフェ」を企画・運営した。今年度は、一般の人たちがジェンダー問題を気軽に考えられるようになることを目的とした。院生や他大学の研究者とのコラボし、哲学カフェの実践的な可能性を探究した。

(人間発達専攻 稲原美苗)

9. 社会的活動・震災復興支援

9.1. メンタルケア関係

(1)心のケア事業

神戸大学平成30年度震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費として採択された「東日本大震災の心理的影響と支援のあり方に関する継続的研究」の資金を活用して、福島県中通り地区などで以下の事業を行った。

①教員等に対するセミナー・助言指導

福島県県北養護教諭部会の夏季研修会(8月22日/福島県立福島南高校):健康相談において被災経験のある高校生のストレス低減するための方法として認知行動療法についてレクチャーを行い、質疑に応じた。あわせて、各教員が相談に担当している事例に関する助言指導を行った。

②開業カウンセラーに対するコンサルテーションと情報交換

福島市の結カウンセリングルームを8月22日に訪問し、震災関連事例についてコンサルテーションを行うとともに、震災からの時間経過に伴う心理相談のあり方について情報交換を行った。

(2)情報発信活動

これまでの事業や調査で得られた成果を以下の学会などで発信した。

①ISSBD(国際行動発達学会)第25回大会(7月15日-19日/オーストラリア・ゴールドコースト)

②神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室第8回シンポジウム(11月30日/神戸)

③日本発達心理学会第30回大会(3月17日-19日/東京)

東日本大震災の心理的影響について、被災地域(福島・宮城県海岸部)と大阪、東京のサン

ブルを比較しながら、震災が及ぼす生き方の変化、継続的低線量被爆の心理的影響、震災被害及び低線量被爆と心的外傷後成長について情報発信をした。③では現在福島県で被災者支援に関わっている福島大学教員と地元カウンセラーの参加を得て、福島の現状と今後について参加者とともに議論を行った。

(人間発達専攻 齊藤誠一)

9.2. 災害地への支援活動

東日本大震災復興支援 岩手県大船渡市赤崎町

2011（平成 23）年 3 月 11 日に津波によって大きな被害を受けた大船渡市への復興支援は、今年度で 8 年になる。阪神淡路大震災後の復興のプロセスと比較するまでもなく、その復興の速度は遅く、ようやく防災集団移転、災害公営住宅移転が進み始めてきた。もちろん、住環境や防潮堤建設に力点が置かれてきたため、第三次産業の復活は遅く、商店街不在、社会福祉・医療などの社会サービスの低下といった状況は、いまだ改善できていない。

とりわけ、中心街のほとんどを津波で失った同市赤崎町は、そのいずれにおいても、もっとも大船渡で遅れている地域である。平成 30 年度段階で、まだ被災跡地をどのように活用するかが定まっていない。また、新たにバイオマス発電所建設問題も浮上してきた。住民の合意ができないまま、県・市が被災地の埋め立て地の活用計画を実行に移そうとしたため、住民から反対運動が起きている。

いまだ出口の見えないトンネルの中に居る感が強いが、本学の支援で運営されている「赤崎復興隊」（中赤崎復興委員会・赤崎地区公民館主催事業）は、今年度も精力的に活動した。赤崎復興隊は、平成 24 年 10 月に赤崎町民の有志と、本学の学生・教職員によって構成される「まちづくり推進共同体」である。本学学生たちは、発災後、月に一度、赤崎地区公民館（平成 24 年 5 月 1 日に、本研究科と連携協定と締結）で 5 人～20 人が現地に赴き、ボランティアとして活動をしてきたが、平成 24 年以後は、赤崎復興隊と共に活動を行っている。

本年度も、跡地を活用した赤崎復興市の企画・運営、現地の中学生・高校生による「赤崎復興隊ユース」の活動支援を中心に、月に一度、現地の復興隊メンバーとともに活動した。それに加え、災害公営住宅や仮設住宅での便利屋ボランティアなども継続的に行い、現地の人たちからは「おらがまちの若衆」と呼ばれている。

また、学生たちは、被災跡地で年 4 回開催される「赤崎復興市」の活動支援に参加している。これは、六次産業の体験とまちの活性化を企図し、神戸大学 HC センターの「社会教育・サービスラーニング支援部門」のメンバーが提案したものである。

さらに、平成 23 年 7 月からほぼ 8 年間続けてきた「11 えん募金」も行った。毎月、「11 日」に、3・11 と 1・17 のご縁を紡ぐことを目的に、六甲道駅前朝・昼・夜の 3 回にわたり、募金活動を行ってきた（平成 30 年 12 月で終了）。本学学生のみならず、神戸市民の参画を得ながら、10 名内外の学生が、思いを込めて活動してきた。この活動は、多くの神戸市民から、直接励ましの声をいただくとともに、赤崎の人たちからも感謝の言葉をいただくものとなった。今年度は、中赤崎復興基金（被災住民の基金）に 10 万円を寄付した。

また、この募金は、高台に新築される赤崎公民館の備品としても活用された。

学生の活動同様、教職員の支援活動も活発である。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの松岡広路は、大船渡市復興局との活動調整や外部団体の活動を組み入れるコーディネーターとして、ESDのまちづくりと公民館活動の活性化を連動させる方策を提示してきた。同センターの井口克郎准教授も、たびたび現地を訪問し、「赤崎復興隊」のアドバイザーを務めている。跡地の土地利用計画に資する提言やバイオマス発電所建設反対運動に関する助言もしている。

赤崎町のまちづくりが順調に進むには、まだまだ時間が必要である。そして、外部からの資本（人的・物的・アイデア・社会関係）なしには、その継続的な発展は、到底、望めない。いかに、被災地と外部地域の関係を切り結ぶのか、あるいは、ESD（持続可能な開発のための教育）が被災地支援のなかに立ち現れるには、どのような取組が求められるのかをテーマとしたアクションリサーチを、今後も続けていく。また、最後に付言すると、このアクションリサーチは、本学名誉教授の朴木佳緒留の科研『女性被災者の実感を活かした被災者支援の方法再構築』の取得にもつながった。

（人間発達専攻 松岡広路）

10. 附属施設

10.1. 発達支援インスティテュート

10.1.1. 発達支援インスティテュート運営委員会

本委員会は岡田修一発達支援インスティテュート長（研究科長）、松岡ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長、相澤直樹心理教育相談室長、伊藤真之サイエンスショップ室長、稲垣成哲教育連携推進室長、長ヶ原誠アクティブエイジング研究センター長、及び近藤徳彦先端融合研究環コーディネーターで構成される。また、中野下勉事務課長も出席した。今年度も本委員会を毎月1回のペースで開催し、研究科としての研究基盤の強化を図ると同時に、毎回各室・センターの活動報告を定例化し相互の連携を強めた。特に、平成30年度研究科の中期計画に記述した発達支援インスティテュートに関わる取り組みとしてあげている、(1) 地域社会への研究成果の見える化、(2) 他研究科・他大学との共同研究の推進、(3) 大型競争的資金の獲得、及び第2回（平成30年度）発達支援インスティテュートシンポジウムに係る検討を行った。

なお、本委員会の検討事項は以下のとおりである。

	検討事項
第1回（4月16日）	1. 平成30年度人間発達環境学研究科年次計画；発達支援インスティテュート関連の確認 2. 第2回（平成30年度）発達支援インスティテュートシンポジウムについて

	3. 平成 32 年度発達支援インスティテュートに係る評価について
第 2 回 (5 月 21 日)	1. 平成 27 年 3 月学内共同利用施設等の組織「人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート」に係る評価結果について 2. 平成 28 年 2 月学内共同利用施設等の組織の見直しについて 3. 平成 30 年度年次計画を踏まえた対応について
第 3 回 (7 月 11 日)	1. 「教育連携推進室規程」の改正について 2. 発達支援インスティテュート主配置教員を置くこと、及び教員配置に係る諸基準等について
第 4 回 (9 月 18 日)	1. 「教育連携推進室規程」の改正について 2. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて
第 5 回 (10 月 15 日)	1. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて
第 6 回 (11 月 20 日)	1. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて
第 7 回 (12 月 17 日)	1. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて
第 8 回 (1 月 7 日)	1. 発達支援インスティテュート教育連携推進室規程等の一部改正について 2. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて
第 9 回 (2 月 4 日)	1. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて
第 10 回 (3 月 4 日)	1. 平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムについて 2. 次年度発達支援インスティテュートの検討課題について

平成 30 年度発達支援インスティテュートシンポジウムの詳細については、次に示す。

平成 30 年度 発達支援インスティテュートシンポジウム

日 時：平成 31 年 3 月 8 日（金）13 時～16 時

場 所：大会議室

テーマ： **持続可能な社会における人間のライフスタイル**

コーディネーター：伊藤真之 教授

基調報告：

松岡広路 教授

「持続可能な開発 (SD) をどう実現するのか？ ～ESD・SDGs の関係性と大学の役割～」

講 演：

山口悦司 准教授（教育連携推進室）

「持続可能な社会に求められる科学リテラシーの育成に向けた教育プログラム
の開発研究：神戸大学附属小学校との連携に基づいて」

源利文 准教授（サイエンスショップ）

「市民による環境保全活動のツールとしての環境 DNA」

太田和宏 教授（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター）

「グローバル社会と SDGs」

西水卓矢 部長（阪急阪神ホールディングス グループ開発室）

「健康寿命の延びる沿線づくり」の目指す社会と課題」

原田和弘 准教授（アクティブエイジング研究センター）

「アクティブエイジングとライフスタイル」

吉田圭吾 教授（心理教育相談室）

「学校現場におけるいじめの実態と、いじめのない社会の実現に向けて

—いじめ第三者委員会の活動を通して—」

（発達支援インスティテュート長 岡田修一）

10.1.2. 心理教育相談室

心理教育相談室は、市民を対象とし、地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして、地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に、当相談室は、本研究科人間発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成第Ⅰ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり、コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成12年度に総合人間科学研究科の附属施設として設立され、平成17年度からは同研究科附属発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について、臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始、夏季の休室期間を除く）、カウンセリング、プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に、必要に応じて心理テストを実施するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は、幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題、青年期のアイデンティティ形成に絡む課題、成人期のメンタルヘルス、熟年期の家族関係や生き方に関する事など、多岐にわたっている。

また、特筆すべき事項としては、本年度から本学研究科人間発達専攻博士課程前期課程こころ系講座臨床心理学コースにおいて公認心理師養成に関わる授業カリキュラムが整備されたことを受け、心理教育相談室がその実習の一部を引き受けることとなったことである。心理教育相談室に所属する臨床相談員が実習指導者となり、公認心理師のカリキュラムに指定された実習時間（450時間以上、そのうち心理に関する支援を要する者等を対象とした心理的支援等270時間以上）の一端を担うこととなる。心理教育相談室における研修生の面接担当時間の確保等、今後公認心理師カリキュラムに対応するための対策が重要な課題の一つとなってくるものと思われる。

相談室の組織構成、ならびに相談システムについては以下のとおりである。

心理教育相談室は、心理教育相談室運営委員会により管理運営される。委員会の構成員は、運営委員会委員長の発達支援インスティテュート長（研究科長）をはじめ、相談室

長，副相談室長，ほか2名の委員からなる。また，本年度の相談室スタッフは，教員5名（臨床心理学コース担当，臨床心理士，公認心理師），博士後期課程こころ系A講座院生4名，前期課程臨床心理学コース院生24名（M1：13名，M2：11名），研究員1名，事務補佐員1名である。

新規の相談申込みは，基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も，臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており，修士課程1年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は，月曜日の午後1時～2時45分，火曜日～金曜日の午後1時～6時（いずれも祝日は除く）である（年末年始，夏季のお盆期間は閉室）。毎年30件弱の新規相談申込があり，受理面接，インテークカンファレンスを経て面接受理，担当者，継続面接の形式等が決定される。年間相談件数は，平成22年度以降おおむね800から1000件程度で推移しており，地域住民の心の健康に貢献する心理相談機関として，ならびに，臨床心理士養成に関わる実習機関として適切な程度の活動実績を保持している。また，本年度は，心理教育相談室が社会貢献として行っている震災被災者に対する無料相談支援への申込が1件あり，受理面接も併せて5回の面接を実施した。なお，詳細な面接受付件数，面接受理数，面接回数等は年次報告資料編に掲載するとおりである。

平成22年度より，『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』が年1回創刊され，院生たちが心理臨床の実践研究をまとめる場となっている。今年度の第9号は，事例研究論文2篇，相談室主催子育て支援セミナー報告，相談室活動報告，相談員・研修生活動報告から構成される。

また，平成28年度から，発達支援インスティテュートHCセンターとの共同で「サテライト施設のびやかスペース・あーち」において，一般の子育て中の保護者を対象とした「心理教育相談室子育て支援セミナー」を開催している。3回目となる今回は，「『育てにくい子』の心と支援」と題して，心理教育相談室の臨床相談員4名が講師となり，「こらぼ・あーち」にて11，12月に4回開催され，延べ75名の参加があった。セミナーの担当講師，日時，講演内容は以下のとおりである。

- ① 平成30年11月29日（木）10：45～12：15 児童期にある不安の強い子どもの心の育ちを支える 講師：相澤直樹准教授
- ② 平成30年11月30日（金）10：45～12：15 子育ての困り感を乗り越える第一歩～褒め上手になろう 講師：山根隆宏准教授
- ③ 平成30年12月6日（木）10：45～12：15 “育てにくさ” “育てやすさ” を呈する子どもの成長過程と親・教師の役割 講師：吉田圭吾教授
- ④ 平成30年12月7日（金）10：45～12：15 幼児期の“育てにくさ”を成長の兆しに！～視点を広げて，楽しいかわり～ 河崎佳子教授

（心理教育相談室長 相澤直樹）

10.1.3. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) ジェンダー・コミュニティ支援部門

一人一人が日常生活の中で抱えているさまざまな問題を共に考える対話のコミュニティ（一般的に「哲学カフェ」と呼ばれている）を創成する試みをしてきた。それらの問題を「マジョリティ」の立場ではなく、むしろ「マイノリティ」の立場に立って考えていこうとする臨床哲学的な実践を行い、多様な側面から一人一人の「語り」の地平を拓き、全ての支援にかかわる営みには欠かせない「生きづらさ」の哲学を探究する。男女間の格差やセクシャリティに関する差異などについて考える上で、社会のさまざまな場所で潜在的に問題となっていることを、社会の中で生きている人々との対話を通して掘り起こし、問いを作り、ゆっくりじっくり考察すること、つまり、哲学的実践に取り組んでいる。例えば、ジェンダーやセクシュアリティの問題をはじめ、医療、介護、福祉、教育、テクノロジー、環境などについて、それらの問題に常に関わっている人々との対話実践を行う中で「何が問題であるのか」を吟味することを重視してきた。平成30年度中にジェンダー・コミュニティ支援部門が開催した4つの活動について報告する。

1. 「ジェンダーや身体の多様性について考えるメルロ＝ポンティ現象学研究会」

平成30年度、当該研究会を計6回開催した。メルロ＝ポンティ現象学の研究者である松葉祥一氏（同志社大学）を招き、主に、『知覚の現象学』の輪読を行いながら、ジェンダー、看護、介護、生老病死、身体表現をテーマに、参加者全員で対話をし、現象学的アプローチをしながら、さまざまな問題について探究してきた。学生、院生、教員、他大学の院生や教員の方々、そして一般の方々も毎回参加し、ジェンダーや現象学を中心に掘り下げて議論を続けている。専門書の深い読解に並行して、看護や介護、ダンス、気功などの実践者や専門家たちと対話をする中で、それぞれ日常経験、身体の動き方、感情を詳細に記述していく現象学的アプローチを行うことで、生老病死のライフステージにいる当事者の社会的・心理的な状態の理解と支援を促進しようとする。

2. 「WACCA 女性やシングルマザーと子どもたちの居場所」（神戸市長田区）での哲学カフェ

NPO法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」が運営しているWACCAの支援者（主にスタッフ・ボランティア）が対象の哲学カフェを隔月のペースで開催した（平成30年度は7回開催した）。この哲学カフェプロジェクトは、WACCAの代表である茂木美知子氏と大阪大学COデザインセンターの特任講師をしている高橋綾氏と共に企画・運営している。このカフェを始めた当初は、WACCAという女性・子ども支援を行う場所で開催するという考え、スタッフやボランティアなど支援者間のジェンダー意識を高めるのが目的だったが、回数を重ねることによって、スタッフやボランティアの方々（参加者の大半が女性であり、WACCAの元利用者）が自らの問題（家庭や職場での生きづらさやジェンダー問題など）を他の参加者と共有し、語り合い、そして、ともに考える「居場所」へと変容してきた。支援者のエンパワメントが利用者のエンパワメントへつながり、女性、特に、シングルマザーとその子どもたちの居場所づくりや様々な支援を構築していくプロセスにとって、ピアサポート的な哲学カフェの果たした役割は大きかった

と言えよう。今後も継続していく予定である。

3. 「のびやかスペースあーち」でのジェンダー・コミュニティを考える哲学カフェ

長年に亘って「神戸哲学カフェ」を主宰してきたカフェフィロの藤本啓子氏を招き、ジェンダー問題を気軽に考えられるように哲学カフェを企画・運営している。このプロジェクトは、大学院生や学生に開かれた環境を作り、ジェンダー問題を多角的に考える機会を提供すると同時に、哲学カフェのファシリテーションスキルを習得できる学びの場としても機能していくことを目標にしている。地域の住民の方々、「のびやかスペースあーち」を利用しているお母さん方が参加しやすいように、毎回、哲学カフェのテーマ設定に工夫をしている。(今後は院生や学生にも企画段階から入って、一緒に実践をしていく。)平成30年度は6回行った。それぞれ、「家族」「老々介護」「付き合い」「義家族」「生産性」などといった身近なテーマで対話を行った。このプロジェクトの哲学カフェは、2のWACCAの哲学カフェとは異なり、誰でも参加でき、日常生活の中にあふれている(普段あまり深く考えない)問いについて、少し立ち止まって考えてみようという試みであり、異世代間交流をしながらジェンダーを考えるグローバルな視野をもてるように市民の学びの場を構築していくことを目的にしている。

4. ヴァルネラビリティと対話 1day シンポジウム

平成31年2月19日に神戸大学国際人間科学部鶴甲第2キャンパスで開催された本シンポジウムでは、さまざまな「生きづらさ」を抱えている当事者たちと共に哲学カフェや対話実践を行ってきた5名の哲学実践者たちが集い、ヴァルネラビリティと対話をテーマに、これまでの実践を振り返り、これからの実践の展開を考えた。大阪大学Coデザインセンターの高橋綾氏は「聴きあうことの力：対話を通じて苦悩する人をケアし、エンパワメントするには」というタイトルで、がん患者たちの集まりやWACCAでの対話実践について報告し、ヴァルネラビリティを持つ当事者にとって対話がどのような効果があるのかを考えるきっかけを作った。同センターのほんまなほ氏は、「“声”について：対話するまえに、ヴァルネラビリティについて かんがえておきたいこと」という題目で、トランスジェンダー当事者として、脆弱性について語り出す難しさについて考察した。岡山市を起点とし、公民館をはじめとするあらゆる場所で哲学プラクティショナーとして対話実践を続けている松川絵里氏は、「語れなかったことが語られるとき～障害者支援施設とがんカフェの実践から～」と題して、自身の実践を振り返り、参加者が語れるように自己変容することの意義について発表した。そして、大阪大学の臨床哲学の教員を退職した後、近年一般社団法人哲学相談おんころの代表理事を勤めている中岡成文氏は、「対話と哲学のナイーブさ」というタイトルで、今後の哲学実践の展開を見据えた発表となった。このような哲学実践者の先輩方の前座を務める形で、稲原が「慢性疼痛の当事者研究—アートと対話の可能性」というタイトルで発表をした。このシンポジウムは当事者研究と哲学対話の融合を進める上で、大切な第一歩となったと実感している。

5名の哲学実践者の発表の後、全体討論の時間を持った。雨天にもかかわらず、シンポジウムの参加者は27名、(うち、神戸大学の学部生4名、院生3名ほど、他大学の研究者、哲学カフェなどの対話実践者、支援のあり方を考えている研究者など)が集まり、ヴァルネラブルな人々が語ること、そして、対話の持つ力について非常に奥深いディスカッションを持つことができた。

科研費研究の一環として実施した。

(担当 稲原美苗)

(2) 社会教育・サービスマーケティング支援部門

平成29年4月のヒューマン・コミュニティ創成研究センター(以下、HCセンター)の組織変更によって、新たに「社会教育・サービスマーケティング支援部門」が創設された。この部門は、文字通り、学校教育以外のノンフォーマルな教育(社会教育)の教育原理・方法の探究と、ノンフォーマル教育だからこそ持つ開拓性・斬新性・柔軟性・実際性を学校教育と連動させる「サービスマーケティング」の在り方の探究を、実践研究のターゲットにおく部門である。

一般に、社会教育は、学校教育以外の組織的な教育活動と理解されるが、本部門では、制度化されていない幅広い教育的な活動(インフォーマル・エデュケーション)を視野に入れ、「いかに新しい教育が立ち現れるのか?」を問いとする実践的な研究も課題とする。すなわち、社会的活動のなかで「教育らしきもの=学び」が立ち現れ、ノンフォーマル教育として輪郭をもち、その過程で制度化された教育(フォーマル教育)としての学校教育と連動して教育的効果が高まっていく、という教育生成の流れを、全体構図とする。

それゆえ、「ボランティア」「エンパワメント」「インクルージョン」「アンラーニング」「対話」「共生」「ネットワーキング」「ソーシャルアクション」「持続可能な開発」など、他の部門で注視されるキーワードは、本部門においても重要となる。教育生成の全体の流れを意識したうえで、多様な領域を視野にいれながら、各キーワードを基盤とした実践・研究の連環の様態を探究することが、本部門の使命である。

現在は、こうした全体構図を否が応でも意識することになる「ESD(持続可能な開発のための教育)」をターゲットに、HCセンターの他部門との連携・協力のなかで研究的実践を展開している。ESDは、持続可能な開発という理想を実現するうえで生起する、さまざまな社会的課題間の葛藤・矛盾を教材とする新しい教育である。「ESDがいかに立ち現れるか」を問いとしてモデル実践を組み立て、ESD実践の理論化を図ることを目標としている。

具体的には、以下の5つの実践フィールドをもつ。

1. ESD ネットワーキング支援事業

国連大学認証組織(RCE 兵庫 - 神戸:「ESD 推進ネットひょうご神戸」)の組織化・企画創出の過程におけるアクションリサーチ(参与観察・関与観察など)を主とする。「自然共生地域支援部門」「インクルーシヴ社会支援部門」「国際開発実践支援部門」などのHCセンターの他の部門及び発達支援インスティテュート「サイエンスショップ」と連携

しつつ、環境系・福祉系・国際開発系・まちづくり系などの多様な市民・企業・行政組織が互いの活動ベクトルを接近・交差させる過程や、協働的活動のコーディネート の在り方、及び、その過程での学習プロセスの特徴を解明する。

本年度の RCE の主な活動は、ESD グローカルスタディツアープログラム、ESD カフェ、第 3 回 ESD 実践研究集会の実施であった※。

※「(4) 自然共生地域支援部門」参照

2. ESD プラットフォーム「WILL」創成事業

これは、HC センターが主催・支援する高校生・大学を中心とする ESD 関連事業（「ESD ボランティアぼらばん」「大船渡 ESD プロジェクト」など）の人的・物的資源の流動化を促進する時空間づくり、すなわち、プラットフォーム創成の過程を企図する事業である。「大船渡 ESD プロジェクト」は、その支援母体が「ボランティア社会・学習支援部門」から「社会保障・ソーシャルアクション支援部門」へと移り、「ESD 学び隊」は、「自然共生地域支援部門」が主たる支援母体となっているが※、これらと本部門が所管する「ESD ボランティアぼらばん」が、実質的に一元的な動きするようになることを企図する事業である。平成 29 年度末に 3 部門の間で協議され、今年度より本格的に実施の運びとなった。こうしたプラットフォーム化のなかで、あるいは、その結果として、学生などの若者だけではなく関係者すべてに ESD が立ち現れることが期待される。このプロセスから ESD 実践に必要な条件を輪郭化しようとするものである。

※「(4) 自然共生地域支援部門」「(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門」参照。

3. ESD ボランティア育成事業

平成 18 年に開始した「ESD ボランティアぼらばんプロジェクト」は、当初、新しい福祉教育・ボランティア学習の場として構想された。ワークキャンプ方式の意味をさぐるなかで、フィールドワーク・ワークショップを実験的な組み合わせで配置し、参加者のエンパワメント・アンラーニングのプロセスとその生成条件を探究するアクションリサーチである。

本年度は、6 月のイニシャルプログラムからはじまり、福島被災家族支援活動、ハンセン病療養所ボランティア活動、夏のワークキャンプ、12 月のスタディツアープログラムなどを実施し、学習者の学びのプロセスについてのデータ収集を行った。

4. ESD フォーマル教育推進事業（フォーマル教育×ノンフォーマル教育）

神戸大学のフォーマルカリキュラムとして平成 18 年に設立された ESD サブコースのカリキュラム・授業内容を実験的にデザインすることを主とするアクションリサーチである。

第 1 学年に配当される「ESD 基礎 A」「ESD ボランティア論」は、上記のノンフォーマルな ESD 事業との連動の中でデザインされている。ESD が立ち現れるサービ斯拉ーニングの在り方、および、その教育が ESD を推進する実践者育成に及ぼす効果を、比較的自由度の高い高等教育において探究することをめざしている。ESD 総合コーディネータ

一の協力の元、学習者の学びのプロセスをデータ化した。

5. ESD 社会教育・生涯学習支援促進事業

これまでも神戸市・堺市・岸和田市などの生涯学習に関する施策策定に ESD を位置づける活動を行ってきた。あるいは、いなみ野学園（高齢者大学校）のカリキュラムの変更のなかで ESD を位置づけるために指導助言を行ってきた。今年度は、神戸市教育振興基本計画に ESD を位置づけるべく、同策定委員会に参加している。

以上の 5 つの活動を通して、ESD としての教育の形成過程の研究、すなわち、教育哲学論、学習論、主体論、方法論の各視座から ESD とは何かを探究する研究を行ってきた。本年度、ESD プラットフォーム創成事業研究の第一歩を踏み出すことになった。

（人間発達専攻 松岡広路）

(3) インクルーシヴ社会支援部門

A. 平成 17 年度よりヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として開設している「のびやかスペースあーち」において、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」の実践を継続して行った。特に力を入れて実施したのは①毎週金曜日の夕方から夜にかけて実施している「よる・あーち」、②2 度にわたって実施した「あーち博物館」である。

「よる・あーち」は、平成 18 年度より実施している「あーち居場所づくり」を基盤として、平成 28 年秋から開始したプログラムである。神戸市の「子どもの居場所づくり事業」の助成を受け、灘区連合婦人会との連携で、学習支援、子ども食堂、遊び、交流の 4 つの活動を柱とした複合的な場づくりである。さまざまな困難（主に社会性の問題、学力の問題、障害の問題など）をもつ子どもや家庭の支援を関心の中心に置き、その他にも障害のある青年や成人など、多様な課題を抱える人たちが、市民や学生と相互に学び合う状況を創出している。教育・研究・社会的実践の三つ巴の活動で、毎週 60 名前後の人たちが集まる。研究面としては、日本生命財団の委託研究を受託しており、「よる・あーち」に集う市民や学生と共に参加型調査研究チームによる活動を行った。また、「よる・あーち」をフィールドとして、赤木和重准教授との共同研究「ユーモア的即興から生まれる表現の創発：発達障害・新喜劇・ノリツッコミ」を実施した。

「あーち博物館」は、多様な住民が地域文化創成を介して関係形成する実践として、「のびやかスペースあーち」開設当初から実施しているプログラムである。また、本プログラムは発達科学部の博物館学芸員課程の「学内実習」に位置づき、実習生が展示の方法や展示の社会的意義などを学ぶ機会となっている。本年度は、9 月に社会福祉法人たんぼぼ、彫刻家・舞台芸術家の脇谷紘氏との協働で「Chats」（空間アートの世界）を実施し、3 月に「命をつなぐ」（平和をテーマとした展示）を実施した。

B. 韓国ナザレ大学との連携協定に基づき、リハビリテーション自立学部の知的障害学生のミュージカル劇団を受け容れ、日本の知的障害者の音楽サークル NPO 法人あんだんて KOBE の協力を受け、「はっぴい♡みらくるライブ日韓交流コンサート」（神戸アートヴィレッジセ

ンターKAVC ホール) を6月に実施した。

C 学内の交流ルームに平成20年度に設置されたカフェ・アゴラの運営に携わり、障害者雇用及び実習のモデル開発を継続した。

D 障害児の放課後保障の観点から平成20年度から開始したインクルーシブな学童保育の支援を継続して行った。

E 知的障害者のセルフ・アドボカシーグループの支援として、新聞編集支援を継続的に実施した。毎月1回の編集活動を支援し、3月に第21号「フレンド新聞」を発行した。

(担当 津田英二)

(4) 自然共生地域支援部門

本部門では、自然と共生した地域社会の実現を目的として農村部等をフィールドにアクションリサーチ型の研究を行っている。本年度は主に以下の4つの内容を中心に研究・実践した。

1) 地縁型コミュニティを基盤とした獣害対策の推進

・地域自治組織主体

兵庫県篠山市で問題となっている野生ニホンザルとの共存の可能性を模索するため、篠山市畑地区で6年前から取り組んでいる、都市農村交流による柿収穫イベント「さる×はた合戦」を支援した。昨年度は雨で中止になってしまったが、今年度は実施することができ、参加者は55人であった。篠山市内の方で1回目からの継続参加がみられたり、日本在住の外国人の参加もあり、海外の方の受け入れも可能で篠山市内の方々の交流の機会となるイベントであることが実証できた。柿の収穫量は1トンを超え、生息地管理としての柿の収穫が都市農村交流の資源となりうることを、さらに地域に定着しうることを明らかにした。

・高校生主体

篠山市の東雲高等学校および鳳鳴高等学校の高校生を対象とした「獣がい対策の新たな担い手研修会」を実施支援し、今年度は柿をテーマに、高校生らが獣害問題に関わる仕組みを考案した。6/30, 8/5, 9/23, 10/28, 11/10の5回の研修会を経て、12/14~15に開催された第1回獣がいフォーラムで成果を発表した。高校生からは「高校を卒業しても獣害問題に関わっていききたい」といった前向きな意見を聞くことができた。

2) 自然を生かした子育て・子育て拠点施設の運営支援

兵庫県篠山市の「おとわの森子育てママフィールド~petit prix」は、旧味間認定こども園おとわ園舎を活用して平成28年7月に設立された地域子育て支援施設である。当施設の周囲には、子どもたちのために地域住民がボランティアに整備を行ってきた森林がある。こうした自然を生かした子育て拠点としての可能性も期待されている。そこで、自然環境を生かした子育て・子育ての環境づくりのための学びの場として「ツキイチ勉強会」をコーディネートした。勉強会の目的は1) プティプリの新規利用者層の開拓、2) 子育て中の親の興味関心を広げること意識した学びの場づくりである。参加者数は昨年度とほぼ同様であった。テーマや講師についてはスタッフの意見を聞きながら選定しているが、その結果、スタ

ップ（全員子育て中の女性）が積極的に勉強会に参加し、勉強会で得られた成果を次のアクションにつなげていることが成果の一つである。

■ ツキイチ勉強会のラインナップ

日	タイトル	講師	参加者
第1回 5/23	デザインコミュニケーションと子ども	垣内敬造（篠山チルドレンズミュージアム）	11人
第2回 6/2	アートと遊び	山中詩子（遊びワークショッププランナー）	12人
第3回 7/19	産後うつ	寺村ゆかの（神戸大学人間発達環境学研究科）	9人
第4回 8/8	傾聴	寺村ゆかの（神戸大学人間発達環境学研究科）	9人
第5回 9/5	SDGsについて学ぼう	清野未恵子（神戸大学人間発達環境学研究科）	5人
第6回 10/19	ミュージックセラピー	岡崎香奈（神戸大学人間発達環境学研究科）	45人
第7回 12/10	森と遊ぼう	金坂尚人（NPO 法人 S-space）	11人
第8回 1/16	子育てトークカフェ	高橋綾（大阪大学 CO デザインセンター）・稲原美苗（神戸大学人間発達環境学研究科）	8人
第9回 2/20	子育てノウハウカフェ	臼井幾子（篠山市）	22人
第10回 3/20	食育 LIFE	藤岡敏夫（ささらいオーナー）	16人

3) 農村地域における河川および田畑の生物多様性保全に向けた取り組み支援

篠山市では、平成 25 年に生物多様性篠山戦略(森の学校復活大作戦)を策定し、生物多様性を保全する取り組みを始めた。農業を基幹産業とする篠山市では、生物多様性に配慮した農業、また地域づくりに取り組むことが課題とされたが、篠山市内の生物分布の実態は点でしか明らかにされておらず、また、それらをモニタリングする仕組みも整っていなかった。そこで、平成 26 年に篠山市内の高校と大学と篠山市とで連携して地域の生物調査を行うチームを結成し(地域いきものラボラトリー)、モニタリングを行っている。地域いきものラボラトリーは、篠山産業高等学校丹南校(平成 28 年度まで)、篠山東雲高等学校(平成 29 年度以降)、篠山鳳鳴高等学校、神戸大学、京都学園大学、篠山市民などで構成されている。平成 30 年度は、畑川（はたがわ）で行った生き物観察会を支援したほか、上述した獣がい対策の研修会で、カメラトラップを用いた大型哺乳類の調査と、クマやサルなどの野生動物の餌資源となる柿の利用可能性の予備的な調査を行った。

さらに、NPO 法人里地里山問題研究所が主催する田んぼオーナー制度のイベントに参加し、生き物観察会を実施した。さらに、生き物調査の結果を紙芝居としてまとめ、幼児らに生き物の大切さを伝えるツールとして用いられるよう地域の方に提供した。

4) フリースクールにおける ESD 推進手法の検討

神戸市西区の公立フリースクールである神出学園は、平成 29 年 3 月にユネスコスクールとして認定され、ESD を推進する様々な取り組みを行っている。平成 30 年度は、教科総合連携型（ホールスクールアプローチ）を目指して、学園祭では全ての科目の SDGs との関連を意識した発表方法を取り入れた。全教員を対象とした ESD の講義・意見交換も行い、来年度はさらに教科総合連携型の ESD が推進できるよう、支援・研究を行う。

(担当 清野未恵子)

(5)ヘルスプロモーション・健康行動支援部門

ヘルスプロモーションの理論的枠組みとされている健康生成モデルの立場から、生きがい意識を日本固有の Well-being としてとらえ、アクション・リサーチを展開している。そして、Well-being を中核に据えたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を進めている。

今年度は、以下の地域および学校におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動を中心に行った。

1. 地域におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

① 健康あーち 子育て支援を通じたヘルスプロモーション・健康行動支援事業を開始した。

【目的】 乳幼児の保護者を対象とし、食生活を中心に健康について話し合いを行い、話し合いの中から課題を見つけたり、悩みの解決方法を考えたりしながら、子どもの健康増進を目ざすことを目的として事業を展開した。

【場所】 神戸市灘区民ホール 3 階 のびやかスペースあーち

【開催日とテーマ】 下記のテーマで全 8 回の健康あーちを開催した。

開催日	テーマ
6 月 16 日 (土)	みんなでお困りごとについて考えましょう (子どもの食生活)
7 月 21 日 (土)	こんな時どうしていますか (偏食, 食べる量, 食べる速度など)
9 月 15 日 (土)	摂りすぎていないですか (砂糖, 塩, 油など)
10 月 20 日 (土)	おやつについて
11 月 17 日 (土)	よく噛んで食べましょう
12 月 22 日 (土)	朝ご飯を食べましょう
1 月 12 日 (土)	野菜摂れていますか
2 月 16 日 (土)	心身ともに健やかな毎日をめざしましょう

プログラムは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科一年履修コース所属の永野和美氏

(管理栄養士/神戸大学附属中等教育校 栄養教諭) が主となり作成, 実施した。また黒川通典氏 (管理栄養士), 黒川浩美氏 (管理栄養士) からも専門的な支援を得ることができた。

今年度は, のべ 103 名の参加があった。

企画会議および運営会議: 開催にあたり, 合計 10 回程度の企画会議を行った。次年度は, 保護者の主体的な取り組みへと発展できることを目指し, 保護者 5 名とともに運営会議を開催した。

- ② 特定保健指導者向け研修プログラムの開発と実践: 兵庫県の特定期保健指導の指導者や関係者を対象とし, ヘルスプロモーション・行動変容に関わる理論や実践に関する研修を行った。また, 特定保健指導の指導者を向けのリフレットの作成に着手した。
- ③ 健康寿命に関する研究と研修プログラムの開発助言: 滋賀県で健康寿命に関する調査を行い, 調査から得られた結果に基づいて開発した研修プログラムの開発にあたって助言を行った。
- ④ ストレス・マネージメント・プログラムの開発と実施: ストレス・マネージメント・プログラムを開発し, 大阪府泉南郡田尻町および兵庫県西宮市で講演を行った。

2. 学校におけるヘルスプロモーション・健康行動支援活動

- ① 神戸大学附属中等教育校のヘルスプロモーション部会との共同事業として, 中等教育校で行った調査に基づき, 教員を対象としたヘルスプロモーションに関する研修会を行った。
- ② 学術 WEEKS のセミナーの開催
「災害時の“こころ”の支援に向き合う」と「日独学術交流シンポジウム 2018「学びのデザインと well-being」」の二つのセミナーを開催した。

(担当 加藤佳子)

(6) 社会保障・ソーシャルアクション支援部門

◇東日本大震災津波跡地・高台移転先におけるまちづくり支援, 「赤崎復興市」等の活動支援

本学学生たちは, 平成 24 年 11 月以後, 月に一度, 5 人~20 人ほどが赤崎地区公民館 (平成 24 年 5 月 1 日に, 本研究科と連携協定と締結) に赴き, 支援活動をしてきた。本年度も学生ボランティアの協力を得て, 津波の跡地を活用して開催された赤崎町の復興市の企画・運営等の開催支援を行った。現地の住民組織である「赤崎復興隊」および現地出身の小中学生・高校生, 大学生などの若者らによる「赤崎復興隊ユース」メンバーとともに復興に向けた様々な活動および交流を行った。

赤崎町のまちづくりが順調に進むには, まだまだ様々な課題が存在する。今年度も先述の諸活動の他, 赤崎地区公民館で開催される「復興隊のつどい」にメンバーとして参加するなどし, 地域づくり構想の立案に対して助言を行うなどの活動を行った。

(担当 井口克郎)

(7) 国際開発実践支援部門

国際開発実践に関する研究会を、学外協力者を含めて開催する計画を立てた。

(担当 太田和宏)

10.1.4. のびやかスペースあーち

1) 「のびやかスペース あーち」全体の取組について

本研究科のヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、平成17年9月より、神戸市との連携の下、灘区役所旧庁舎（灘消防署2階）において、サテライト施設「のびやかスペースあーち（以下、「あーち」とする）」の運営を開始した。本施設は、開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」の拠点となることを目指して、様々な取組（プログラム等の提供）を行うとともに、実践的研究の場や学生・院生の実践の場（研究フィールド）を提供してきた。平成29年度以降は、実践場所を「灘区民ホール（3階）」に移している（平成28年10月より「子どもの居場所づくり事業（後述）」を先行して実施、平成28年度末には「あーち」全体が移転）。

これまで多様な人々や団体・組織などが「あーち」で出会うような働きかけを通して、「あーち」は徐々に地域のあらゆる立場の人々の居場所やプラットフォームとして機能するようになった。言い換えれば、互いの立場や境遇の違いを認め合い・理解し合える場、あるいは、互いに暮らしやすい地域を創っていくためにどのような活動ができるのかを考え・共有する場となってきたのである。これが「あーち」の大きな特徴であるが、その他にも、地域のボランティアに支えられた多様なプログラムのほとんどが開設当初から現在まで継続しており、多くの人々がそのプログラムを楽しんでいる点、また、新規のボランティアによる新しいプログラムも年々増えている点なども「あーち」の特徴と言える。以上のことから、「あーち」が大学の果たすべき役割のひとつである「社会貢献」を着実に果たしていると判断できよう。なお、これまでに「あーち」は次のような受賞歴がある：兵庫県「ユニバーサルまちづくり賞」平成19年度 神戸市「市民福祉奨励賞（児童福祉）」平成21年度／神戸大学「学長表彰」平成22年度／兵庫県「ひょうご子育て応援賞」平成27年度。

神戸市から委託されている「*地域子育て支援拠点事業（平成19年度より）」と「**子どもの居場所づくり事業（学習支援・子ども食堂）（平成28年度より）」も継続しており、特に後者の事業の「子ども食堂」に関しては、灘区連合婦人会による協力のもと、毎週金曜日の夜間に開催している。

「*地域子育て支援拠点事業」とは 地域に暮らす子育て中の親子の交流促進や育児相談等を実施し、子育ての孤立感、負担感の解消を図り、全ての子育て家庭を地域で支えるという目的のもと平成19年度より予算化された国事業である。全国で約7,259箇所（平成29年度現在）ある。「あーち」では、主に「子ども家庭支援部門」が本事業の委託を受け、基本4事業（①交流の場の提供・交流促進 ②子育てに関する相談・援助 ③地域の子育て関連情報提供 ④子育て・子育て支援に関する講習等）を週5日実施している

「**子どもの居場所づくり事業」は、その背景として「子どもの貧困対策の推進に関する

法律（平成 15 年成立）」がある。貧困対策のひとつとして、国が地方自治体に予算を配分し、各地域の実情に応じた多様な取り組みを促すのがこの事業である。具体的には、「子ども食堂」や「学習支援」がそれに相当する。事業の対象者としては、例えば、ひとり親であったり経済的に困難であったりするため、食事面で何らかの支援が必要な子ども、学習面においては、学校の授業についていくことが困難であったり、学習の機会が乏しいといった子どもとその保護者らである。

こうした流れも受けて、「あーち」では、それまでの「居場所づくり」実践を発展させる形で、「子どもの居場所づくり事業」を取り込んでプログラム化した。その名称は「よる・あーち」であり、週 1 回（金曜日の午後 4 時～9 時）開催している。毎回、多くの未就学児・小学生・中学生・高校生および青年とその保護者、そして市民ボランティア、学生（他大学含む）・院生らが集まってくる。子ども・青年たちは学習支援を受けたり、ボランティアや保護者と夕食を共にしたり、遊びのプログラムに参加したりして、それぞれが自分のニーズに合わせて自由に過ごしている。市民ボランティアや学生らは、子どもの学習支援を担当したり保護者と交流したりしながら互いに親睦を深めている。毎回のプログラム終了後には、学生が主体となって、その日の振り返りを行い、学生や市民ボランティア同士で意見交換を行っている。また、本事業の運営においては、高齢者給食に関する豊富な実績のある「灘区連合婦人会」との協働事業となっており、灘区の婦人会会員が 50 余名登録し、シフト制で調理を担当している。

「あーち」の年間利用者数（月別は後述の表 1 で提示する）は、2 月末現在で、26,280 人（延べ）である。年間の利用者数を開館日数の 211 日で割ると一日平均、約 125 人が利用していることになり、昨年度と比べて同程度の利用である。一日の利用者数が平均して 100 名／日を超えろという実績は平成 19 年度より 13 年間続いている。開館日数については、4 月～9 月までは灘区民ホールの休館日に合わせて、毎月第 2 火曜日を休館としていたが、10 月よりホールの休館日の変更に伴い、第 2 火曜日も開館することになった。

本年度のプログラム開催状況を集計（2 月末現在）すると、教員・一般ボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は 389 回、大学の正規教育プログラムの実施回数（延べ数）は 30 回である。例年どおり、資格関連科目である博物館実習も 3 回開催された。また、2008 年度より毎年継続して ESD サブコースの授業（前期：ESD ボランティア論、後期：ESD 生涯学習論 B および ESD 論 B）に協力し、学部生が実践活動を行う場を提供している。このように、本年度も、「あーち」は学生の教育・実践を支援する機能を果たした。また、学部生・院生が卒業研究・修士研究の場として「あーち」を活用することも多く、発達支援論コース在籍生に限っても、これまで、卒業論文 8 編・修士論文 12 編・博士論文 3 編が提出されている（平成 18～30 年度）。さらに、他大学の実習やボランティア実践の場としても提供しており、5 年前から園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科の 4 年次生（経験値統合実習）、3 年次生（育成連携支援実習）を継続的に受け入れているが、看護学生らが子どもに関わったり、保護者へのヒアリングを行ったりすることは、利用者にとっても、良い刺激となっている。

大学に設置されている「のびやかスペースあーち運営委員会」とは別に、日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち連絡協議会」が、例年どおり、5月・7月・9月・11月・1月・3月に開催された。この会では、「あーち」の利用者、プログラムリーダーとそのスタッフ、「ふらっと」相談員、一般のボランティア、学生、灘区まちづくり課、灘区連合婦人会、灘区社会福祉協議会、教職員が一同に会して、「あーち」の現状・プログラムの近況・新しいプログラム等に関する報告や検討が行われている。また、学生などによる研究の場として「あーち」が活用されるので、この協議会は、学生からの研究依頼・計画を承認・検討する場にもなっている。

プログラム予定表、学生や利用者による絵本の紹介、利用者が担当する取材記事・コラム等を掲載する月刊広報誌を編集するために、毎月1回「あーち 通信編集会議」が開催されている。開設以来、「あーち通信」は一度も発刊を欠いておらず、「あーち」のホームページ上で順次公開されている。「あーち通信」は、これまで同様、利用者に配布されているだけでなく、灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館、さらに連携先の産婦人科クリニックにも配布・設置している。本年度末で「あーち通信」は162号になる。

2) 教員・職員が中心に進めている主な活動について

<ドロップイン・サービス（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」>

地域子育て支援拠点事業を神戸市との連携によって引き続き実施した。乳幼児とその保護者が安心して多様な人との交流を深めながら、社会的なつながりや活動に関わることができる場である。週5日6時間、開設している。「あーち」において利用者の最も多い活動であり、さまざまなプログラムの拠点としても機能している。

<子育て相談事業（同上）>

上記ドロップインの場に、助産師・保育士などの資格を持つ相談員を配置し、保護者からの相談に応じた。灘区のまちづくり課から派遣されている地域活動支援コーディネーター（1回/週）や、地域のNPOのボランティア（1回/週）も子育て相談に応じてくれている。その他、灘区歯科医師会との連携相談事業（4回/年）も行った。これらの相談内容を整理・分析した結果、子どもの生活に関するもの、発育・発達に関するもの、離乳食・幼児食に関するもの、育児不安、地域資源に関するものが多かった。また、分類結果等は、毎年、神戸市に報告されている。

<よる・あーち>

学習支援、子ども食堂、居場所づくりなどを並行して実施する複合プログラムで、毎週1回、夕方から夜にかけて実施している。多様な年齢や属性の人たちが70名~80名ほど集まり、相互に学び合う場を形成している。今年度は、日本生命財団の委託研究を受け、学生や地域住民が参加する参加型調査研究を実施した。ボランティアな市民が主体となって実施している子どもの居場所づくりの「エンパワメント評価」の実施に向けて、定期的な研究会を開いた。

<あーち学習支援（神戸市からの委託事業「神戸市子どもの居場所づくり事業」>

神戸市の委託を受け、毎週1回、「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。

学習面，社会性の面で課題をもつ児童・生徒・青年が毎回 20 名前後参加している。支援者は学生を中心に構成され，学習支援を契機とした支援者の学びに焦点を置いた取り組みを行っている。地域住民や保護者も支援に加わり，参加型研究のフィールドにもなっている。

＜あーち子ども食堂（同上）＞

神戸市の委託を受け，灘区連合婦人会と連携して実施している事業で，毎週 1 回，「よる・あーち」プログラムの一環として実施している。兵庫こども食堂ネットワークに加盟し，その運営への協力も行った。

＜あーち居場所づくり＞

毎週 1 回，「よる・あーち」プログラムの一環として実施している多様な人びとの間の関わりを促進する実践である。障害のある子どもの十分な参加をテーマとして活動を構成し，さまざまな年齢や属性の人たちが遊びや会話を通してエンパワーした。「都市型中間施設」概念に基づくモデル開発実践プログラムとしても位置づけている。

＜ペアレンティング・セミナー（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」）＞

ほぼ毎月 1 回土曜日に開催している神戸市との連携プログラムで，名称は「0 歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習」である。乳児を育てる保護者どうしの交流並びに子育てに関する学習機会を提供する。また同時に，児童・生徒とのふれあいが乳児とふれあう体験の機会を提供している。今年度は児童・生徒の参加が少なかったが，参加した保護者は生き生きと交流し学んだ。

＜地域子育て応援プラザ灘・灘区公立保育所との協働実践＞

灘区内の公立の子育て支援関係施設と連携し，保育士の「あーち」への派遣事業（見守り，相談，親子遊びの実施），公立・私立保育所の保育士向け研修会，広報活動を行った。

＜地域の医療機関との協働実践＞

灘区歯科医師会と連携し，近隣の歯科医師が来館し，その場にいる子育て中の親子の歯の相談を行った。計 4 回開催。また，近隣の産婦人科の医師や助産師が，日常的に「あーち」の広報を行うことで，生まれてまもない乳児がいる家庭の利用促進をはかった。

＜ビギナーズ交流会（神戸市からの委託事業「地域子育て支援拠点事業」）＞

「あーち」を初めて利用する母親を対象としたコネクション・プログラムで，毎月 1 回実施している。生後 6 ヶ月未満の乳児とその母親が毎回 10 組程度参加し，特に母親のエンパワメントに焦点を当てた取り組みを行っている。

＜あーち博物館＞

地域文化を創造していく拠点として，博物館の手法のおもしろさを取り入れることをめざして実施しているプログラムであり，国際人間科学部，発達科学部，国際文化学部，人間発達環境学研究科，国際文化学研究科の博物館学芸員課程の学内実習として実施している。平成 30 年度は空間アートの展示企画 2 回と平和展の計 3 回実施した。

＜新喜劇プログラム＞

新喜劇という形式を用いて，多様な個性をもつ人たちの表現を引き出す実践的研究プログラムである。さまざまな年齢や属性の人たちが集まる「よる・あーち」プログラムの一部

として4回実施した。

<子育て支援セミナー>

人間発達環境学研究科心理教育相談室の教員が担当し、平成30年度は「育てにくい子の心と支援をテーマに、4回のセミナーを実施した。

<健康あーち（食育プログラム）>

食に関する子育て中の親子の疑問や悩みに対応しながら、食のあり方を考えるセミナーと交流会である。計8回実施した。参加者である親たちが主体となって次年度に続くプログラムとなるようにサポートもした。

<てつがくカフェ>

子育てやジェンダーを意識した哲学対話のプログラムで、平成30年度は嫁・姑問題などをテーマにして計6回実施した。

<あーち通信編集会議>

月々のプログラム等の予定を掲載する情報誌で毎月1号発行し、紙媒体で配布するとともにホームページでも公開している。「あーち」利用者である住民の情報発信の媒体としても活用している。毎号、利用者参加のオープンな編集会議を開催し、紙面を作成している。

<あーち連絡協議会>

利用者である住民の参加に対して開かれた、「あーち」の日常的な運営に関する協議を行う会議で、奇数月に年6回実施している。住民が発案するプログラムの審議や、「あーち」関係者が分担して進める企画の審議などを行っている。

3)プログラム概要・その他

ここでは、①プログラム概要、②見学・視察数、③月別年間利用者数（表1）、④プログラム数とそれに対応するボランティア数（表2）、⑤「よる・あーち」利用者数・ボランティア数とその内訳（表3）、⑥連携・協力関係にある組織・団体（表4）を示す。

①プログラムの概要

子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム

<★は本年度から開始したプログラム>

- ・ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週5日開設
- ・おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し、見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
- ・ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなって行う交流プログラム
- ・あーち ビギナーズ交流会：「あーち」を初めて利用する、または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム（子どもの月齢6か月未満対象）
- ・ほのぼの音ランド：音楽療法士によるリズム遊びプログラム
- ・おはなしの国：ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ
- ・めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム

- ・おりがみ遊び：「あーち」の利用者である母親が子どもや保護者に楽しいおりがみを伝えるプログラム
- ・らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
- ・アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
- ・人形劇団 むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団
- ・おもちゃ病院：地域住民の有志によるグループが、壊れたおもちゃなどを修理してくれるプログラム
- ・親子のびのび体操：フリーランスで活躍する保育士による親子あそび
- ・リフレッシュ YOGA：「あーち」利用者による産後の母親の体調改善をめざすプログラム
- ・えいごであそぼう！：「あーち」利用者による幼児を対象とした英語あそび
- ・親子あそびと子育て講座：元神戸市保育士による子育て支援プログラム（4回シリーズ）
- ★くりにかるあーと：子どもと一緒に作品をつくりながら子どもの新たな一面を見出す
- ★おかたづけ講座：整理収納アドバイザーが片付けのコツを伝授する
- ★あらかると音楽あそび：

発達障害のある子どもとその親を対象にしたプログラム

- ・家族教室：発達障害児をもつ親支援プログラム
- ・ぼつとらっく：発達障害児を持つ親の学習会と発達障害児の遊び場

おとなを主な対象としたプログラム

- ・筆をもとう：地域の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
- ・0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象とした学習・交流プログラム
- ・中・高校生の赤ちゃんのふれあい体験学習：中・高校生が0歳児とその保護者が毎月1回交流する

○保育士のための子育て支援研修会（1回）

その他

- ・よる・あーち（居場所づくり/学習支援+子ども食堂）：多様な立場にある人たちが交流し、その時々々のプログラムを企画し実践する/子どもや青年に対して学生や市民ボランティアが個別に学習支援を実施した後、子どもや保護者、ボランティアなどが、灘区連合婦人会が調理した夕食を一緒に楽しむ
- ・音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する、誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
- ・みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル

博物館実習

- 博物館実習：平成30年9月29日～10月4日「CHATS」（社会福祉法人たんぼぼ、版画家脇谷紘氏との連携）
平成31年1月25日～1月30日「ドローイングの庭 川原百合恵 絵画展」（研究科教員・院生による共同企画）
平成31年3月2日～3月7日「いのちをつなぐ」（神戸・子どもと教育ネッ

トワークとの連携)

- ・あーち 通信編集会議：利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場
- ・あーち 連絡協議会：プログラムリーダー，利用者，教職員等による「あーち」運営に関する会議

②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として，社会的責任や地域貢献をはたし，アクション・リサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として，見学者やメディア取材の受け入れを行っている。以下は，平成 30 年 4 月以降，平成 31 年 2 月末までの「見学者数」「視察者数」を機関・組織別に整理したものである。

◎「あーち」見学者など

<見学（総数 129 名）>（順不同）

芦屋市子育てセンター1名 茨城県立あすなろの郷1名 神戸市副市長1名 神戸市子ども家庭局 4 名 神戸市こども青少年課 2 名 神戸市灘区こども保健係 1 名 神戸市立河原児童館 2 名 神戸市地域子育てセンター応援プラザ東灘 2 名 灘区社会福祉協議会 3 名 トライやるウィーク中学生 6 名 関西学院大学子どもセンターさぼさぼ 2 名 甲南女子大学人間科学部事務課 1 名 甲南女子大学甲南子育てひろば 3 名 NPO 法人やんちゃんこ 1 名 ソロプチミスト六甲 3 名 生活クラブ都市生活 10 名 東北学院高等学校 45 名 神戸大学大学院院生 1 名 神戸大学学生 40 名

<視察・ヒアリング等（総数 名）>

ドイツ 児童福祉関係者 9 名

<参考「よる・あーち」見学者>（順不同）

文部科学省 2 名 国立青少年教育振興機構国際企画課 2 名 国立淡路青少年交流の家 2 名 兵庫県教育委員会 1 名 兵庫県ビジョン委員会 3 名 神戸市環境局 2 名 神戸市灘区長 1 名 神戸市灘区まちづくり課 1 名 兵庫県立北須磨高校 教員 1 名/生徒 1 名 神戸大学附属中等教育学校教員 2 名 神戸市立西郷小学校教員 1 名 鳴門教育大学学生 1 名 兵庫教育大学教員 1 名/院生 4 名 神戸学院大学教員 1 名/学生 2 名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科院生 2 名 神戸子どもを守る会 2 名 NPO 法人障がい者の学びを保障する会 3 名 障害者グループみらいのたね 1 名 アートワークセラピーこころんば 1 名 ハグデザイン 1 名 ネスレ日本（株） 1 名 その他個人 多数

<取材・撮影>

読売新聞神戸総局 あさひグリーンファミリー（株）企画センター 神戸新聞

③平成 30 年度「あーち」利用者数とその内訳（2 月末現在）

今年度の「あーち」の年間利用者数は，子ども 13,050 人・おとな 13,230 人であり，合計 26,280 人（延べ数）である。この人数を今年度の開館日数である 211 日で割ると，一日平均約 125 人が利用していることになる。

表 1 月別年間利用者数

2018年度利用者数		ふらっと		こらぼ／ゆーす		一日の利用者数		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4	19	1055	954	240	350	1295	1304	2599
5	19	952	863	196	290	1148	1153	2301
6	21	1111	1032	195	292	1306	1324	2630
7	17	982	866	187	252	1169	1118	2287
8	18	1049	914	150	214	1199	1128	2327
9	18	814	765	257	346	1071	1111	2182
10	22	1093	1007	258	364	1351	1371	2722
11	20	1014	953	244	358	1258	1311	2569
12	19	832	757	224	291	1056	1048	2104
1	18	783	767	169	303	952	1070	2022
2	20	964	908	281	384	1245	1292	2537
合計	211	10649	9786	2401	3444	13050	13230	26280

④平成30年度「あーち」プログラム数およびボランティア数（2月末現在）

表2は、今年度に「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア（リーダー、スタッフ、一般、学生・院生）の数である。

表2 プログラム数およびボランティア数（延べ数）

2018		プログラム数				ボランティア数			
月	開館日数	一般のプログラム	大学の授業&正規教育プログラム(実習)	プログラム総数	プログラム数一日平均	プログラムリーダー&スタッフ数	一般	学生院生	プログラム見学者
4	19	30	2	32	1.68	95	50	145	50
5	19	31	3	34	1.79	92	39	131	41
6	21	36	2	38	1.81	100	59	159	73
7	17	32	3	35	2.06	96	41	137	76
8	18	24	2	26	1.45	90	42	132	36
9	18	36	3	39	2.17	112	61	173	39
10	22	39	3	42	1.91	116	48	164	88
11	20	37	3	40	2.00	110	60	170	72
12	19	39	2	41	2.16	117	59	176	66

1	18	33	2	35	1.94	113	56	169	67
2	20	52	3	55	2.75	141	71	212	89
合計	211	389	30	417		1182	586	1768	697

*基盤プログラムである「ふらっと」は毎日開催しているが、プログラム数に入れていない

*「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入れていない

*比較的ボランティア参加の多いプログラム（順不同）

：ぽっとらっく・居場所づくり・アートセラピー・らくがきおばさん・人形劇・パパママセミナー

⑤平成30年度「よる・あーち」利用者・ボランティア数とその内訳（2月末現在）

表3は、今年度に「よる・あーち」に参加した利用者（子ども・おとな・保護者）、一般のボランティア、学生ボランティア、スタッフの数（月別年間数）である。

表3 「よる・あーち」利用数・ボランティア数（一般・学生等）・内訳（延べ数）

2018年	月													
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2		
利用者	未就学児	11	10	13	9	19	14	16	20	13	12	25	162	
	小学生	1年	0	1	0	0	1	1	2	2	3	3	5	18
		2年	6	3	4	4	10	12	12	13	14	13	19	110
		3年	7	2	4	5	3	11	12	8	3	8	11	74
		4年	7	10	7	9	8	8	10	11	10	9	11	100
		5年	3	2	4	2	1	2	2	2	3	2	1	24
		6年	7	9	6	8	11	8	12	9	9	11	14	104
	小計	30	27	25	28	34	42	50	45	42	45	61	429	
	中学生	1年	3	2	1	1	1	1	0	1	0	0	0	10
		2年	3	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8
		3年	5	4	4	4	2	0	1	1	0	1	0	22
	小計	11	8	8	5	3	1	1	2	0	1	0	40	
	高校生	1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		2年	3	4	0	4	3	5	3	2	2	2	1	29
3年		7	2	4	3	4	5	4	4	3	4	5	45	
小計	10	6	4	7	7	10	7	6	5	5	6	73		

	保護者		48	41	49	39	56	55	57	46	44	54	61	550
	おとな		58	42	62	41	52	56	51	44	38	46	51	541
	小計		106	83	111	80	108	111	108	90	82	94	112	1085
ボランティア	一般		41	29	47	29	39	31	27	24	27	38	31	363
	学部生		24	19	43	38	19	12	32	29	30	35	26	307
	院生/ 研究生		21	20	21	13	12	16	19	20	16	12	13	183
	小計		86	68	111	80	70	59	78	73	73	79	70	847
スタッフ	教職員		16	12	22	15	20	19	19	16	11	16	17	183
	灘区 婦人会		22	16	29	17	22	23	22	24	16	18	28	237
	小計		38	28	51	32	42	42	41	40	27	33	45	419
	合計 (人)		292	230	323	241	283	279	301	276	242	267	319	3053

⑥2018年度 連携・協力関係にある団体など

以下の表4は、今年度の「あーち」の運営にあたって、連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表4 連携・協力関係にある組織・団体など

団体名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係	0歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
神戸市灘区まちづくり推進部	なだ桜まつり/地域コーディネーター
灘消防署	消防訓練
神戸市地域子育て支援センター灘	ふらっと相談員/おひさまひろばあーち
灘区民ホール	運営協力/情報交換
灘区公立保育所(7か所)	ふらっと相談員/おひさまひろばあーち
灘区地域コーディネーター(元幼稚園教諭)	ふらっと相談員
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート
灘区内児童館(10か所)	情報交換
六甲道児童館	情報交換
六甲道児童館ユースセンター	中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
灘区連合婦人会	よる・あーち(子ども食堂)

社会福祉法人たんぽぽ	博物館実習／みんなで歌おう！
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
神戸ユニバーサルツーリズムセンター	居場所づくり
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク	めだか親子クラブ
チャレンジひがしなだ	筆をもとう
クエスト総合研究所	アートセラピー
NPO 法人マザーズサポーター協会	おしゃべりほっとタイム
亀田マタニティ・レディース・クリニック	アウトリーチ・サービス
灘区歯科医師会	ふらっと相談員
兵庫県歯科衛生士会 神戸東支部	おくちをあ〜ん
ママ・リッシュ トマト	0歳児のパパママセミナー
おもちゃ病院（地域の有志）	おもちゃ病院
園田学園女子大学	育成連携支援実習／経験値統合実習の場
神戸海星女子学院大学	として提供
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	ボランティア論（授業）の場として提供
	ぽっとらっく

他に個人による協力も多数あり

（のびやかスペースあーち運営委員長 赤木和重）

10.1.5. サイエンスショップ

1. 概要と運営体制

サイエンスショップは、(a) 地域社会における広義の科学教育や科学コミュニケーションを含む市民の科学に関わる諸活動への支援、および (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的とする。(a) については、科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて、環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や、社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組づくりと実践を目指しており、実践研究として行われている。

平成30年度は、研究科専任教員（室長、副室長、及びその他の室員若干名）と、学術研究員2名（非常勤職員）、事務補佐員3名（非常勤職員）の体制で運営された（学術研究員および事務補佐員については、次項に記すグローバルサイエンスキャンパス事業に係る業務担当を含む）。

2. 平成30年度の主な取組

(1) グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムの運営

サイエンスショップは、神戸大学を実施機関、兵庫県立大学、関西学院大学、甲南大学を

共同機関として 4 大学の連携で実施する、高校生等を対象とした科学技術人材育成プログラム「根源を問い革新を生む国際的科学技術人材育成挑戦プログラム」(略称 ROOT プログラム: ROOT は, Research-Oriented On-site Training Program for future innovative scientists より)の事務局として事業運営の中核的役割を担っている。この教育プログラムは、国立研究開発法人 科学技術振興機構の次世代人材育成事業の一環である「グローバルサイエンスキャンパス」の企画として同機構の支援を受けて展開されている。(企画の実施主担当者をサイエンスショップ室長が務める)。

神戸大学では、本研究科、計算科学教育センターの他、国際文化科学研究科、大学教育推進機構が主体となり、全学の理系部局の参画のもとで企画が進められる。その全学的推進のために、大学教育推進機構に「グローバルサイエンスキャンパス委員会」が設置されている。また、地域の幅広い連携のもとで人材育成を推進するために、兵庫県および周辺府県等の教育委員会や、兵庫県下の先端的研究機関(高輝度光科学研究センター、理化学研究所計算科学研究機構、同生命機能科学研究センター、兵庫県立人と自然の博物館、兵庫県立大学西はりま天文台)や、公益財団法人兵庫工業会などが連携機関として協力し、実施機関である神戸大学、共同機関を含めて GSC ひょうご神戸コンソーシアムが形成されている。

このプログラムでは、毎年、科学分野で優れた資質をもつ受講生を募集し、40 名程度を選抜する。大学教員による講義・実習、先端的研究機関の見学などを含む約半年間の「基礎ステージ」を経て、受講生が研究課題を提案し、評価を受けて選抜された約 8 名が大学等において研究を行う「実践ステージ」に取り組む。科学的課題設定力・探究力を培うプログラムと並行して、科学英語、海外研修など国際性を高めるプログラムも展開される。2 年度目にあたる平成 30 年度には、平成 29 年度から継続して取り組む第 1 期実践ステージ生 8 名が個別課題研究を進め、8 月には米国シアトルでの海外研修に参加、ワシントン大学の学部学生の研究発表会でポスター発表を行い、高い評価を受けた。一方、6 月に第 2 期生の募集を行い、約 80 名の応募者(所属学校所在地:兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、岡山県)から 40 名を選抜、それらの受講生が基礎ステージを受講した。平成 31 年 1 月から 3 月にかけて、その中から実践ステージ受講生 13 名が選抜され、実践ステージに進んだ。

なお、科学技術振興機構による支援は平成 29 年度から 4 年間で、支援終了後の取り組みの継続が求められている。

(2) 地域社会における市民の科学活動および科学コミュニケーション支援

サイエンスショップのこれまでの取組を通じて、伊丹市(「サイエンスカフェ伊丹」)、姫路市を中心とした播磨地域(「サイエンスカフェはりま」)、南あわじ市など兵庫県内の各地域で、サイエンスカフェ等の科学に関わる活動を主体的に進める市民グループが立ち上がって着実な活動を展開しており、サイエンスショップがこれを継続的に支援している。平成 30 年度神戸大学地域連携事業(課題名:持続可能な社会づくりをめざす市民活動への支援事業)、事業主体:発達支援インスティテュート)の一環として学内支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の主な取組等をまとめる。なお、サイエンスカフェの開催リストについては年次報告書資料編に掲載する。

(a) 千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援

千種川流域圏で活動するグループ「千種川圏域清流づくり委員会」による河川環境モニタリング「千種川一斉水温調査」(8月)への、総合地球環境学研究所および神戸大学人間発達環境学研究科の研究者および学生の参加・協力をコーディネートした。この調査は、同委員会が17年間にわたり継続してきた、河川において多様な生物種の重要な生息要件の一つとなる夏季水温等の市民による多地点同時調査であるが、専門家との新たな協働により、同位体分析等、より多くの項目の測定・分析を行う形に展開されている。

平成30年6月には、千種川流域圏のライオンズクラブ等と連携して、「千種川フォーラム 水生生物調査が示す河川の環境―地域で守る千種川―」(会場:さよう文化情報センター)を開催し、地域の市民等による取組とともに大学・研究機関の取組についても紹介した。このイベントには約150名が参加し、千種川の環境保全・調査の取組について地域の人々の認知、理解を高める上で一定の成果を収めた。

(b) Hyogo Science E-cafe (英語によるサイエンスカフェ)

兵庫県において外国語指導助手(ALT)を務める人々を中心とするグループ Hyogo Science Coalition との共同で、英語によるサイエンスカフェの企画・開催を行い、神戸市において3回を実施した。

(c) サイエンスカフェ神戸

神戸大学先端融合研究環の「メタ科学技術研究プロジェクト」との連携により、ゲノム編集と生殖医療をテーマとしたサイエンスカフェ「いのちをデザインする医療―ゲノム編集とひとの誕生」を、平成31年1月、神戸市において開催した。

(d) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ等の開催(10回)を支援した。

(e) サイエンスカフェはりま

姫路市を中心とした播磨地域において、サイエンスカフェ等を開催する市民グループ「サイエンスカフェはりま」によるサイエンスカフェ開催を支援した(3回)。

この他、公益財団法人ひょうご科学技術協会が主催する「サイエンスカフェひょうご」の企画・運営を支援し、神戸大学工学研究科の研究者をゲストとして、「量子力学と量子コンピュータ」のテーマで南あわじ市において開催した。なお、このイベントは、淡路島でコミュニティ活動やその担い手の育成等に取り組む NPO 法人 ソーシャルデザインセンター淡路(SODA)との共同開催として実施された。

平成19年以降実施している、市民が科学者とともに IPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change :気候変動に関する政府間パネル)の報告書を読み解く会「市民のための、

IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を 16 回開催した（第 2 期，第 65 回から第 80 回）。

(3) 地域科学教育への支援と科学技術系人材育成の取組

グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラムについては，項目(1)に記したが，それ以外の取組について記載する。

平成 30 年 11 月には，兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2018」を開催した。高校生 142 名を含む 198 名の参加者があり，活発な発表，交流が行われた。優れた研究に対して，サイエンスショップより優秀賞を授与した。（詳細は，「7.2.1. 学術 WEEKS の各事業・セミナー，(14)」の項に記載）

平成 31 年 1 月には，スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業成果の地域への普及と兵庫県下の理数教育の発展を目的として活動する兵庫「咲いテク (Science & Technology)」事業推進委員会主催の「第 11 回 サイエンスフェア in 兵庫」の開催に協力し（神戸大学が共催），グローバルサイエンスキャンパス ROOT プログラム紹介のポスターを出展した。また，同委員会による取組として平成 30 年 7 月神戸大学統合研究拠点において開催された，高校生による英語での課題研究発表会 “第 4 回 Science Conference in Hyogo” の開催に協力した（神戸大学が共催）。

兵庫県立兵庫高等学校の課題探求型授業への人間発達環境学研究科大学院生の協力（平成 30 年 9 月から平成 31 年 2 月）をコーディネートした。同高等学校からは，大学院生による高校生に対する指導の教育効果が高く評価されている。

鶴甲小学校 PTA の要請を受けて，平成 19 年度以降毎年開催している「理科実験教室」を平成 30 年 7 月に実施した。また，人間発達環境学研究科研究員の新井敏夫氏により，市民を対象とした「つるかぶと科学教室」（平成 31 年 2-3 月に 3 回）が企画・実施された。

(4) 学部・大学院教育

この他，学部学生を中心とした正課外の取組として，地域の小学校等で天体観望会の開催に取組む「天文ボランティアグループ アストロノミア」も，学部，学科の壁を越えて学生が参加し，地域の児童と保護者などを対象として 2 回の観望会（場所：神戸大学鶴甲第 2 キャンパス（対象は神戸市立鶴甲小学校児童および保護者），神戸市立なぎさ小学校）を開催したほか，東大阪市の中学校での天体観望会の支援を行った。また，鶴甲小学校の児童を対象とした「理科実験教室」での実験 1 テーマの企画・実施を行った。

また，国際人間科学部のグローバルスタディズプログラムの国内フィールドとしても学生（4 名）を受け入れた。

このように，サイエンスショップは，大学・大学院におけるアクティブ・ラーニング／サービス・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

表 神戸大学サイエンスショップ 平成 30 年度の主な取組

市民科学活動・科学コミュニケーション支援
<ul style="list-style-type: none"> ・千種川流域における環境モニタリング活動への協力・支援 ・サイエンスカフェの開催・開催支援（サイエンスカフェ神戸（1回）および Hyogo Science E-cafe（3回）開催，サイエンスカフェひょうごほか 県下各地のサイエンスカフェ開催等支援（総計14件）） ・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する会「市民のための，IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（16回） ・つるかぶと科学教室開催（3回：学外研究員による企画） 他
地域の科学教育支援
<ul style="list-style-type: none"> ・神戸市立鶴甲小学校 PTA からの依頼を受けた児童と保護者を対象とした理科実験教室の開催 ・兵庫県立兵庫高等学校における課題探求型授業「創造基礎」への協力（大学院生による研究・実習等指導） ほか ・第4回 Science Conference in Hyogo 開催協力（神戸大学が共催）
大学教育・学生の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・天文ボランティアグループ「アストロノミア」による天体観望会の開催（神戸市立なぎさ小学校他） ・国際人間科学部グローバルスタディーズプログラム国内フィールド「『市民の科学』プログラム：サイエンスショップ」提供
研究会等の主催・共催
<ul style="list-style-type: none"> ・「高校生・私の科学研究発表会 2018／兵庫県生物学会 2018 研究発表会」開催（主催：兵庫県生物学会，神戸大学サイエンスショップ） 神戸大学 ・「千種川フォーラム 水生生物調査が示す河川の環境－地域で守る千種川－」（主催：千種川流域圏ライオンズクラブ） 佐用町
イベント等開催協力
<ul style="list-style-type: none"> ・サイエンスカフェひょうご（主催：（公財）ひょうご科学技術協会）南あわじ市 ・サイエンスカフェはりま（主催：サイエンスカフェはりま） 姫路市他 ・サイエンスカフェ伊丹（主催：サイエンスカフェ伊丹） 伊丹市 ・サイエンスカフェ*SODA（主催：ソーシャルデザインセンター淡路）南あわじ市
研究・開発等
<ul style="list-style-type: none"> ・「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」（神戸大学先端融合研究環 人文・社会科学系融合研究領域：人文学研究科等との共同） ・日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」（領域開拓プログラム）（人文学研究科等との共同：分担）

・環境研究における同位体を用いた環境トレーサビリティ手法の提案と有効性の検証（総合地球環境学研究所との共同）

他

（サイエンスショップ室長 伊藤真之）

10.1.6. 教育連携推進室

教育連携推進室では、教育連携部門、研究開発部門、拠点形成部門において、それぞれ以下の活動を行った。

まず、教育連携部門では、神戸市教育委員会等との連携を継続した。例えば、神戸市教育委員会との連携による初等教員・保育士向け研修「つばめセミナー」を昨年から継続して開催した。また、神戸市の幼稚園（1園）、小学校（1校）に対して研修講師として参画した。

次に、研究開発部門では、高度教員養成プログラムを実施するとともに、7回のセミナーと神戸大学附属学校園や地域の学校及び教育施設等をフィールドとした教育実践のアクション・リサーチを含む理論的・実践的研究の推進に寄与した。本年度の認定証発行は7名であった。

最後に拠点形成部門では、国内外の拠点形成を目指して、調査活動に従事すると同時に、ドレスデン工科大学教師教育センターと連携し、平成30年9月5日～6日の2日間、神戸大学において国際シンポジウム「Second Interdisciplinary and Research Alumni Symposium iJaDe 2018」を共同企画・運営した。また、ドレスデン工科大学教師教育センター主催の教師教育に関する国際シンポジウム「International Conference at the Centre for Teacher Education and Educational Research」に参加し、研究発表を行った。今後、国際的な研究拠点としての本室の活動が期待されるところである。

その他、各室員がそれぞれの所属学会におけるシンポジウムなどに登壇するとともに、各種連携先との積極的な研究活動を行った。なお、国際化の一貫として、上記、高度教員養成プログラム参加院生の海外派遣（長期）を実現するための準備・調整のために、院生1名をフランスのマノスク国際学校に出張させている（平成31年度4月から約7ヶ月のインターンを実施する予定）。

財務的には、現在多くの科研等（JSPS 科研代表6件、JSPS 科研等分担10件、その他代表5件）の採択を獲得してきているが、今後もさらに継続して大型競争的資金の獲得に向けた申請（基盤Aの応募中）及び申請の準備をする予定である。

平成30年度における教育連携推進室関係の連携を基礎とする主要な研究活動実績は以下の通りである。

1 国際シンポジウム共同企画・運営

年月日：平成30年9月5日～6日

名称：Second Interdisciplinary and Research Alumni Symposium iJaDe2018

外部資金名称：ドイツ連邦教育学術省，アレクサンダー・フォン・フンボルト財団（ドレスデン工科大学教師教育研究センターが代表）

内容：神戸大学で開催されたドレスデン工科大学主催の学際的国際シンポジウムにおいて，教育学・心理学部会を共同企画・運営した。

2 研修セミナーの企画・運営

年月日：平成30年度5月から1月

名称：次世代型研修プログラム開発事業「つばめセミナー」

内容：神戸市総合教育センターと連携して，保幼小連携の理論と実践を解説するセミナーを企画運営した。実質的に全9回中6回を担当した。

3 高度教員養成プログラムの企画・運営

年月日：平成30年度5月から2月

名称：高度教員養成プログラム

内容：参加院生（博士前期課程7名と博士後期課程8名）向けに計7回セミナーを開催するとともに，連携先とのアクション・リサーチを主体とする研究活動を行った。

3 主要な研究業績（WOS掲載関連）

- ① Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Nakanishi, F., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2018). Let's build forests for 300 years: Game-based learning in environmental education. *Proceedings of the 12th European Conference on Games Based Learning* (pp.881-886). Sophia Antipolis, France. (査読付)
- ② Tokuoka, M., Komiya, N., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., & Kusunoki, F. (2019). Implementation and Evaluation of a Wide-Range Human-Sensing System Based on Cooperating Multiple Range Image Sensors, *Sensors*2019, 19(5),1172; <https://doi.org/10.3390/s19051172>. (査読付)

4 主要な研究業績（著書）

- ① 渡邊隆信「西洋教育史における教員養成史・教員史研究」，教育史学会編『教育史研究の財前線Ⅱ－創立60周年記念－』六花出版，2018年。
- ② 渡邊隆信・田中崇教「戦後ヴェーニガーにおける政治的陶冶と教育的関係」，丸山恭司・山名淳編『教育的関係の解釈学』東信堂，2019年。
- ③ 岡部恭幸「第7章 数量関係」，原清治・春日井敏之・篠原正典・森田真樹監修，岡本尚子・二澤善紀・月岡卓也編著『算数科教育』ミネルヴァ書房，2018年，102-114頁

5 主要な研究業績（WOS以外の学術論文）

- ① Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Nakanishi, F., Asahina, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2019). Vegetation succession learning support system for virtual forestry management: Toward the maintenance and conservation of the natural environment. *International Journal of Education and Research*, 7(1), 203-218. (査読付)
- ② 田中維・江草遼平・楠房子・奥山英登・山口悦司・稲垣成哲・野上智行 (2018) 「動物園における観察を支援するためのアニメーションを用いた学習コンテンツ：アザラシの形態と行動を観察する親子を対象としたパイロットスタディ」日本科学教育学会『科学教育研究』第42巻, 第3号, pp. 210-224. (査読付)
- ③ 江草 遼平・岩崎 誠司・島 絵里子・楠 房子・生田目 美紀・稲垣 成哲 (2018) 「科学系博物館における聴覚障害者の学習を支援するコンテンツのユニバーサルデザインに関するワークショップ：聴覚障害のある中学生による評価」『日本科学教育学会研究会研究報告』第33巻, 第2号, pp. 107-110. (査読無)
- ④ 竹中 真希子・伊藤 大貴・稲垣 成哲 (2018) 「アクティブシニアによる ICT を活用した社会貢献および学習共同体の形成」『日本科学教育学会研究会研究報告』第33巻, 第2号, pp. 123-128. (査読無)
- ⑤ 都倉さゆり・山口悦司・坂本美紀・山本智一・稲垣成哲・若林和也・俣野源晃 (2018) 「科学技術の社会問題を取り上げた小学生向け教育プログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第33巻, 第3号, pp. 21-24. (査読無)
- ⑥ 中橋葵・岡部恭幸 (2018) 「幼小接続期の概念的サビタイジングの発達に関する研究—数の合成・分解の学びのプロセスに着目して—」『日本数学教育学会第51回秋期研究大会発表集録』 pp. 65-72. (査読付)
- ⑦ 中橋葵・岡部恭幸 (2018) 「幼児期の数学教育における「遊びを通しての指導」の再検討—フロー理論に着目して—」『数学教育学会誌』 Vol. 59/No. 1・2, pp. 59-66. (査読付)

6 主要な国際会議論文等

- ① Egusa, R., Ishida, R., Ono, S., Kusunoki, F., Yamaguchi, E., Inagaki, S., and Nogami, T. (2018). Developing digital content that helps zoo visitors comparatively observe animal exhibits. *Proceedings of EdMedia 2018* (pp. 1382-1387). Amsterdam, Netherlands. (査読付)
- ② Tokuoka, M., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., Kusunoki, F., & Sugimoto, M. (2018). "Discuss and Behave Collaboratively!" - Full-Body Interactive Learning Support System Within a Museum to Elicit Collaboration with Children. *CollabTech 2018*: 104-111. (査読付)
- ③ Tokuoka, M., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., & Kusunoki, F. (2018). Full-Body Interaction-based Learning Support to Enhance Immersion in Zoos - Evaluating an Electrodermal Activity Response Support System. *CSEDU (1) 2018*:

336-341. (査読付)

- ④ Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2018). A Forestry Management Game as a Learning Support System for Increased Understanding of Vegetation Succession - Effective Environmental Education Towards a Sustainable Society. CSEDU (1) 2018: 322-327. (査読付)
- ⑤ Komiya, N., Tokuoka, M., Egusa, R., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Namatame, M., Kusunoki, F. (2018). "Let's Play Catch Together": Full-Body Interaction to Encourage Collaboration Among Hearing-Impaired Children. ICCHP (1) 2018: 384-387. (査読付)
- ⑥ Kawaguchi, S., Mizoguchi, H., Egusa, R., Takeda, Y., Yamaguchi, E., Inagaki, S., Kusunoki, F., Funaoi, H., & Sugimoto, M. (2019, January). Augmentation of environmental education using a forest management game to stimulate learners' self-discovery. In A. Jobér, M. Andrée and M. Ideland (Eds.), Proceedings of XVIII IOSTE Symposium: Future Educational Challenges from Science and Technology Perspectives (pp.122-127). Malmö, Sweden. (査読付)
- ⑦ Komiya, N., Tokuoka, M., Egusa, R., Inagaki, S., Mizoguchi, H., Namatame, M., Kusunoki, F. (2018). Novel Application of 3D Range Image Sensor to Caloric Expenditure Estimation based on Human Body Measurement. Proceedings of the 2018 Twelfth International Conference on Sensing Technology (ICST2018):371-374. (査読付)
- ⑧ Iio, T., Sasaki, Y., Tokuoka, M., Mizoguchi, H., Egusa, R., Inagaki, S., Kusunoki, F., & Nogami, T. (to appear) : Animal Observation Support System Based on Body Movements- Hunting with animals in virtual environment -. CSEDU 2019. (査読付)

7 招待講演

- ① Yamaguchi, E. (2019). Invited speech, "Harmonious integration of scientific argument into inquiry-based learning," 2019 KASE International Conference, Korea National University of Education, Cheongju-si, South Korea, 24-26, January, 2019. http://www.koreascience.org/english/index_2019.asp

8 科研 (平成 30 年度代表分)

- ① 基盤研究 (A) (一般)「科学系博物館におけるユニバーサルデザイン手法の開発と実践モデルの提案」(課題番号 18H03660) 代表: 稲垣成哲
- ② 基盤研究 (B) (海外学術調査)「学習科学を応用したイノベーティブな教育の理論と方法に関する国際調査研究」(課題番号 16H05635) 代表: 山口悦司

- ③ 基盤研究 (C) (一般)「新教育運動における「国際化」の進展と「郷土」形成論の相克に関する比較史的研究」(課題番号: 17K04550) 代表: 渡邊隆信
- ④ 挑戦的研究(萌芽)「幼小接続期の数理認識の発達に着目した評価スケールの開発」(課題番号 18K18648) 代表: 岡部恭幸
- ⑤ 挑戦的研究(萌芽)「幼保連携型認定こども園 2・3 歳児クラス接続期教育における保育者の専門性」(課題番号: 16K13526) 代表: 北野幸子
- ⑥ 挑戦的研究(萌芽)「大量退職時代における熟練教師から初任者教師への理科授業実践知識・技能の伝承モデル」(課題番号 16K12759) 代表: 山口悦司

9 科研等 (平成 30 年度分担分)

- ① 基盤研究 (A) (一般)「幼年期における科学的素養醸成のための科学コミュニケーションに関する学際的研究」(課題番号 16H01814) 代表: 野上智行
基盤研究 (B) (一般)「里山植生遷移ゲームと野外体験を統合した環境学習プログラムの開発」(課題番号 16H03059) 代表: 武田義明
- ② 基盤研究 (B) (一般)「トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育」(課題番号 17H01979) 代表: 坂本美紀
- ③ 基盤研究 (B) (一般)「ユニバーサルデザインに基づいたデジタル人形劇の開発と実践」(課題番号 17H02002) 代表: 楠房子
- ④ 基盤研究 (B) (一般)「トランス・サイエンス問題の解決に資する知識共創型アーギュメンテーションの教師教育」(課題番号 17H01979) 代表: 坂本美紀
- ⑤ 基盤研究 (B) (海外学術調査)「教育行政専門職の養成, 研修に関する比較研究—システムとカリキュラム・方法を中心に」(課題番号 16H05727) 代表者: 日渡円
- ⑥ 挑戦的研究 (萌芽)「市民の科学への参加・支援を加速化するオープンサイエンス・リテラシー教育モデル開発」(課題番号: 18K18646) 代表: 坂本美紀
- ⑦ 基盤研究 (C) (一般)「音楽科固有の資質・能力の基礎となる音楽的感覚及び音楽能力育成カリキュラムと指導法」(課題番号: 18K02577) 代表: 三村真弓
- ⑧ 基盤研究 (C) (一般)「「音と声」に注目した保育者研修プログラム—ECERS 及び音環境調査に基づいて—」(課題番号: 18K02467) 代表: 埋橋玲子
- ⑨ 厚生労働省 日本保育協会保育科学研究所「指定研究」「幼保連携型認定こども園の現状における 3 歳未満児の教育の質の在り方に関する研究②～遊具環境と遊びに注目して～」代表: 福澤紀子
- ⑩ 厚生労働省 保育の質に関する基本的な考え方や捉え方・示し方に関する調査研究事業「保育の質に関する基本的な考え方や捉え方・示し方に関する調査」代表: 秋田喜代美

10 その他の外部資金 (平成 30 年度代表分)

- ① 堺市受託研究「幼児教育評価指標作成及び評価分析に関する研究」代表: 北野幸子

- ② 神戸市共同研究「乳幼児教育実践の質の維持・向上にかかわる保育者の専門性に関する研究」代表：北野幸子
- ③ 神戸市受託研究「就学前教育の質的充実に向けた調査研究」代表：北野幸子
- ④ 大阪府私立幼稚園連盟共同研究「0歳児から6歳児までの保育・教育を考える－非認知的能力はどのようにして育まれるのか－」代表：北野幸子
- ⑤ 福井県私立幼稚園・認定こども園協会共同研究「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の視点から子どもの育ちをとらえる」代表：北野幸子

11 主要な連携先

海外：ドレスデン工科大学教師教育センター，マノスク国際学校

国内：神戸大学附属小学校，神戸大学附属幼稚園，神戸市教育委員会，兵庫県教育委員会，明石市，舞鶴市，兵庫県，大阪市，尼崎市，神戸市立王子動物園，国立科学博物館，兵庫県立人と自然の博物館

(教育連携推進室長 稲垣成哲)

10.1.7. アクティブエイジング研究センター

運営体制

(1) 運営委員

1) 専門教員

2) 教育研究補佐員

八木倫子氏 (週2日勤務)

3) 新規学外研究員

以下2名の学外研究員が就任し，各研究プロジェクトに関与した。

(1) 福沢愛

関西学院大学社会心理学研究センター

研究プロジェクト：鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して，都市住居高齢者の日常活動の国際比較，サードエイジ・プロジェクト

(2) Pieter-Jan Marent

ベルギー・ルーベンカトリック大学，人間・リハビリテーション学修士課程)

研究プロジェクト：男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

プロジェクトの推進

(1) プロジェクトメンバーと内容

平成30年度は前年度までの15のプロジェクトに2つのプロジェクトが加わり(16, 17)，各研究活動を行った。

1) 鶴甲いきいきまちづくり-アクティブエイジングを目指して

メンバー：岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，増本康平，原田和弘，学外研究者
内容：オールドニュータウンである鶴甲地区を対象に，多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた，安全に暮らせるまちづくりを支援するものである。アカデミック・サロン（大学内で行うイベント）を鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎とし，大学をコミュニティの中心に位置付け，このサロンを通して，住民同士のネットワークを形成するとともに，サロンの継続に必要なファシリテーターを養成し，住民が企画・運営するコミュニティ活動を支援する。

2) 住民ネットワーク形成の客観的検証方法の確立

メンバー：増本康平，岡田修一，近藤徳彦，長ヶ原誠，片桐恵子，木村哲也，古谷真樹，研究科共同研究者4名

内容：ウェアラブルセンサデバイスによって対面コミュニケーション行動データを自動収集し，ネットワーク解析を行うことで住民交流の現状や変化，キーパーソンを把握し，支え合い・助け合いの基盤となる住民ネットワークの活性化につなげる。

3) 男女の違いや個人差を考慮した健康増進支援プロジェクト

メンバー：近藤徳彦，岡田修一，中村晴信，古谷真樹，井上真理，齊藤誠一，木村哲也，佐藤幸治

内容：健康行動（食・睡眠・運動）を支援するため，これらに関する環境を工夫することにより健康を支援する方法を提案する。その際，これまで十分な情報が得られていない男女の違いや個人差からアプローチする。

4) 高齢者の身体システム機能維持・向上への学際的プロジェクト

メンバー：木村哲也，佐藤幸治，学外研究者

内容：高齢者の身体システム機能の維持・向上に対して，基礎研究及びその成果に基づいた社会実装を，応用生理学，運動生理・生化学，バイオメカニクス，生体工学の各観点を統合して学際的に実施する。現在取り組み中の具体的課題は，立位バランス神経制御則の解明や高齢者の筋機能の向上である。

5) 都市住居高齢者の日常活動の国際比較

メンバー：片桐恵子，原田和弘，福沢愛，学外研究者1名，海外研究者2名

内容：都市に居住する高齢者がどのような日常活動を行っているのか，その活動量はどの程度か，活動がどのように気分や健康に関連しているか，などの実態の解明とそれらの関連を，日本（神戸）と韓国（ソウル）との国際比較から検討する。

6) 超高齢社会を見据えた持続可能なごみ処理施策の提案

メンバー：田畑智博，片桐恵子

内容：高齢者世帯の増加が将来の自治体のごみ処理施策に及ぼす環境的・経済的影響を、シミュレーション分析により明らかにする。ごみ分別等の住民負担の限界と対策の検討を通じて、超高齢化社会に相応しい持続可能な自治体のごみ処理施策を提案する。

7) 関西ワールドマスターズゲームズ 2021 レガシー創造支援研究

メンバー：長ヶ原誠，岡田修一，近藤徳彦，片桐恵子，増本康平，学外研究者 3 名

内容：2021 年に関西広域で開催が決定した生涯スポーツの国際大会がもたらすレガシー（遺産）創造に向けた振興事業アクションリサーチの展開と効果検証のモニタリング評価を実施し，成人・中高年者を対象とした参加型のスポーツメガイイベント開催が個人と地域の活性化に及ぼす影響過程を検証する。

8) 高齢期の意思決定バイアスの解明と自律に向けた生涯学習プログラムの開発

メンバー：増本康平，学外研究者 2 名

内容：高齢者の意思決定バイアスの特徴を明らかにし，高齢者に適した意思決定の支援方法を明確にする。最終的には，高齢期の自律を目標とした「選び方を選ぶ」生涯学習プログラムを開発する。

9) マスターズ甲子園によるアクティブエイジング活性化の検証

メンバー：長ヶ原誠，学外研究者 3 名

内容：高校野球部 OB クラブの拡大を目指して始動したマスターズ甲子園の各地方予選・全国大会の開催が及ぼすアクティブエイジングに関わる諸効果を検証し，スポーツ同窓会結成支援による活動的な加齢文化の推進に着目した生涯スポーツプロモーション事業の可能性と課題を提示する。

10) サードエイジのサクセスフル・エイジング・モデル構築プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者 2 名

内容：これまでの高齢者とは異なる新しいシニア層である，団塊世代以降の人のライフスタイルや志向を把握し，サードエイジ期（定年後から元気な時期）のサクセスフル・エイジング・モデルを構築する。

11) 生涯学習・多世代交流プロジェクト

メンバー：片桐恵子，学外研究者 2 名，海外研究者 1 名，大学院生 1 名

内容：生涯学習を行うシニアの現状を明らかにし，学習を促進疎外する要因とそのもたらす効果をライフコース的な視点から明らかにする。さらに生涯学習を異世代交流の機会をとらえて，その効果も検討する。アイルランドとの国際比較研究を実施しながら検索する

12) 超高齢社会における複数住宅所有の実態と役割

メンバー：平山洋介，学外研究員 1 名

内容：高齢化が進む社会のなかで、複数の住宅を所有する世帯が増えている。付加的な住宅はレントアウト収入をもたらす、高齢者の経済セキュリティを形成するケースがある。ここでは、高齢社会の安定の維持における複数住宅所有の可能性と限界を明らかにする。

13) 活動的な生活習慣と健康増進プロジェクト

メンバー：原田和弘，近藤徳彦，学内・学外研究員

内容：高齢者において、活動的な生活習慣が形成・維持されるプロセスには、どのような要因が関わっているのかを学際的な観点から明らかにする。また、その知見に基づき、活動的な生活習慣の効果的な支援方法を開発する。

14) アクティブライフ評価と健康寿命の延伸・認知症予防対策

メンバー：近藤徳彦，増本康平，木村哲也，佐藤幸治，原田和弘，学内研究員

内容：中年期までの活動的な生活習慣（＝アクティブライフ）が、健康寿命の延伸や認知症発症を防ぐ効果があるかどうかに注目が集まっている。本研究では幅広い年代のアクティブライフを、経年的に、かつ、正確に測定し、アクティブライフと健康・認知症に関するデータの構築を目指す。これにより健康寿命の延伸や認知症予防に効果的な生活習慣対策を検討する。

15) プロジェクト名：更年期女性の身体的変化と心理的適応

メンバー：齊藤誠一，田中美帆，学外研究員

内容：40歳代後半から閉経に向けて生じる女性の身体的変化の時期である更年期において、どのような身体的変化が生じ、その変化にどのように適応していくか、あるいは同時期の配偶者や子の発達の状況とどのように相互作用しているのかについて検討を行い、その後の中年期後期への望ましい発達のあり方を提案していく。

16) プロジェクト名：高齢者の住まい方とエネルギー消費との関係性に関する調査

メンバー：田畑智博，学外研究者

内容：高齢者世帯におけるエネルギー消費と、居住形態，家電所有，生活時間などとの関係性を調査する。また、エネルギー消費が、環境だけでなく、高齢者世帯の家計や貧困などを与える影響を分析する。

17) プロジェクト名：超高齢・持ち家社会における住宅相続の増大と階層化

メンバー：平山洋介，学外研究員1名

内容：超高齢・持ち家社会としての日本では、遺産相続による住宅資産の世代間移転が増え、社会を階層化する新たな要因になる。相続住宅は、一方では、自己居住用，家賃収入源として役立ち、さらに資産形成を促進すると同時に、他方では、使い途がなく、空き家のままで放置され、管理負担ばかりをもたらす場合がある。ここでは、住宅相続の階層化の実態を解

明するところから、住宅ストック利用に関する政策課題を検討する。

(2) プロジェクトに関わる外部資金と研究成果

各プロジェクトはそれぞれ外部資金を獲得し、研究を推進している。また、学内予算によりプロジェクト推進支援を行ってきた。さらに、大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（神戸市灘区）による活動、株式会社トータルブレインケアとの共同研究を実施している（プロジェクト14）。各研究のプロジェクト概要は日英文で本研究科ホームページに掲載し、各研究活動の具体的内容や成果、関連 URL 情報等は、各研究プロジェクトや研究者個人のホームページと連携させ情報効果と発信を行っている。

セミナー

(1) ソウル大学との共催により、平成30年10月31日～11月1日に、日本学術振興会と韓国研究助成財団の助成金を得て、二国間交流事業共同セミナー『都市居住高齢者の日常生活と健康：日本と韓国の国際比較研究』を開催した。（代表：片桐恵子）

<講演者と演題>

◆Junior scholar

Giovanni Sala (Research fellow of JSPS)

The impact of leisure-activity engagement on measures of successful aging: a structural equation model

Heejin Choi (Doctoral student, Seoul National University)

The Influence of Everyday Social Interaction on Daily Emotions

Chiharu Yasuzato (Doctoral student, Kobe University)

Life-long learning as social participation of older adults: The effects of continuation of learning

Takuma Kimura (Master student, Kobe University)

An exploration of factors supporting on crowdfunding

Youngeui Hong (Master student, Seoul National University)

Neighborhood Social Capital and Happiness in Later Life

Nozomi Ehara (Master student, University of Tokyo)

Daily life and assistive products of the oldest-old: Findings from Itami survey

Tae-eun Kim & Kazuho Maeda (Master students, University of Tokyo)

Working towards an age-friendly workplace: from interviews with the elderly and their supervisors

Wang Jue (Master student, Kobe University)

Anxiety of Japanese seniors living alone

Donghyun Kang (Master student, Seoul National University)

Effect of marital relationship on social participation in middle age

◆Senior scholar

Gyounghae Han (Professor, Seoul National University)

Children in an Aging Society: Attitudes of Korean children towards older adults

Jean-Marie Robine (Emeritus Research Professor, INSERM, the French

National Institute of Health and Medical Research & Emeritus Professor, the advanced school Ecole pratique des hautes études)

The oldest old people in France, trends and numbers, health status, place of residence, wellbeing, many questions for the society

Yasuyuki Gondo (Professor, Osaka University)

Life style and cognitive function in older people. -findings from SONIC study

Jeonghwa Lee (Professor, Chonnam National University)

Korean Centenarians' Living Arrangement and Family Interaction

Keiko Katagiri (Professor, Kobe University)

Work and social participation among the third agers in Japan

Ikuko Sugawara (Project Lecturer at Institute of Gerontology, The University of Tokyo)

Everyday social interactions and anxiety for the future life: Findings from a survey with middle-aged and young-old adults.

Kazuhiro Harada (Associate professor, Kobe University)

Daily and longitudinal associations of out-of-home time with objectively measured physical activity and sedentary behavior among middle-aged and older adults

JooHong Min (Assistant professor, Jeju National University).

Social participation and psychological well-being among the older adults

連携活動と協定

(1) 連携活動

以下の学内プロジェクトと連携活動を継続実施している。

- 1) スマートシティプロジェクト (神戸市・神戸大学)
- 2) アクティブエイジングを IT 人工知能により支援強化するプロジェクト (科学技術イノベーション研究科)
- 3) 認知症予防プロジェクト (神戸大学)

(2) 協定

人間発達環境学研究科の発達支援インスティテュートと Ewha Institute for Age Integration Research (EIAIR), Ewha Womans University との間に国際交流に関わる覚書が昨年度から締結され (平成 30 年 1 月), これをベースに EIAIR との共同研究の議論を継

続して実施している。

(センター長 長ヶ原誠)

10.2. 実習観察園の運営利用状況

○実習観察園施設および概略図

実習観察園の概略は図1の通りで、前年と変わりはない。灰色で示した部分は、自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。



図1 施設・作付概要

○作付面積および作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表2に示した通りである。

表1 作付面積 (m²)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	全体

表2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ
	カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン
マメ・穀類	イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ
果樹	ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ
花卉	ユズ、キンカン、カキ(富有、サエフジ)、ブドウ
	スモモ、キウイ、ウメ
花卉	ベゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア
	キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ
	マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ
	ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ その他

春夏期 北

	ジャガイモ	ソラマメ・エンドウ・ジャガイ	タマネギ	タマネギ	イチゴ	イチゴ	イチゴ	イチゴ																	自然環境論コース 実験用ビニール
	トウモロコシ	植物環境学実験実習	植物環境学実験実習	幼児環境指導法・保育内容	幼児環境指導法・保育内容	幼児環境指導法・保育内容	幼児環境指導法・保育内容	園芸教室	園芸教室	園芸教室	キュウリ・ゴーヤ	ナス・ピーマン	トマト・ピーマン	サツマイモ	サツマイモ										スイカ・カボチャ

秋冬期 北

	イチゴ	イチゴ	ソラマメ・エンドウ	タマネギ	タマネギ	イチゴ	イチゴ	イチゴ																		自然環境論コース 実験用ビニール ハウス
附属吉中学校	附属吉中学校	ジャガイモ	ジャガイモ	ジャガイモ	園芸教室	園芸教室	園芸教室	ダイコン	チンゲンサイ	ハツカダイコン	ミズナ	ホウレンソウ	コマツナ	シュンギク												

図2 30年度畑地作付配置図

○教育（実習）活動

「植物環境学実験実習」（履修生 10 名）の、利用の内容は、植物栽培に関すること、すなわち、畝立て、土作り、草花や野菜の種まき、育苗、鉢上げ、定植、誘引、かき、収穫、挿し芽繁殖、花壇・緑化設計と制作などである。これらの他に、プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている。果樹類については、開花の観察、摘花、摘果、無核化处理などの説明に利用している。

「幼児環境指導法」「保育内容研究（環境）」（履修生 41 名）において、履修者が実践的に“植物と子供の遊び”というテーマで、幼稚園児の指導を行うことを想定し、七夕飾り、草もちの製作を行った。タケ、ササの来歴、違い、利用法について、講義を行った。能動的に学修するアクティブ・ラーニングとして、五感を活用した実習を行った。

○研究のための利用

人間発達環境学研究科および発達科学部の教員ならびに学生が研究と論文作成のため、本園を活用している。

1) カラムシ *Boehmeria nivea* の証拠サンプル育成

「伝統的文化を背景とした植物利用が地域性の形成と地域環境に与える影響に関する研究（基盤研究 (C)2018～2021)」のため、沖縄八重山諸島（石垣島・宮古島）で採取した上布の材料である苧麻（カラムシ）を栽培している。八重山上布や宮古上布は栽培化された苧麻を材料とするが、近年、その野生化が起こっており、植物形態的变化が危惧されている。栽培品種と野生化した苧麻の形態的違いを調査するため、長期的個体の維持が必要である。

利用者：大野朋子 1 名

2) ツユクサ・ケツユクサ・ハマヒルガオの栽培実験

人間発達研究科の D2 の「博士論文研究」と M2 の「修士論文研究」（担当教員：丑丸敦史）として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内および観察園ガラス温室内で栽培したツユクサ属 2 品種、ツユクサおよびケツユクサを対象に、実生の植え付け（4 月下旬）から結実期（10 月中旬）まで温室内での開花観察および実験操作を行った。また非常勤研究員の研究として、伊豆諸島および千葉県・茨城県の海岸において採取したハマヒルガオの地下茎から発芽した植物体の栽培を行った。本研究では研究補助として、当発達科学部生数名の協力があった。

利用者：非常勤研究員 1 名、大学院生 2 名、協力学部学生約 2 名

3) 長野県菅平高原のスキー草原の土の撒き出し実験

人間発達研究科の M1 の「修士論文研究」（担当教員：丑丸敦史）として、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園に設置した温室内で、菅平高原のスキー場草原から採取した土中種子の撒き出し実験を、4 月下旬から 11 月まで行い、発芽した植物の採取と同定を行った。

利用者：大学院生 1 名

○他機関の利用

1) 田植え体験・稲刈り体験

神戸市灘区の鶴甲幼稚園の園児約 80 名と教諭が、人間発達環境学研究科の施設である実習観察園で田植えを実践し、実際に体を動かして五感を活用した体験を行った。発達科学部の授業科目「幼児環境指導法」ならびに国際人間科学部「保育内容研究(環境)」(担当教員：近江戸伸子教授，大野朋子准教授)において、履修者が実践的に幼稚園児の田植え指導を行った。

田植え：平成 30 年 5 月 16 日

参加者：鶴甲幼稚園 5 歳児約 80 名，同園教諭等 5 名，履修者学部学生 41 名

稲刈り：平成 30 年 10 月 17 日

参加者：鶴甲幼稚園 5 歳児約 80 名，同園教諭等 5 名，発達科学部，人間発達環境学学生 4 名

2) 鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト 園芸教室の開催

高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで希望に満ちた、安全な暮らしができるまちづくりは急務であり、住民が主体的に、多世代の交流を促進し、その中で課題を見つけ、学び、活動していく生涯学習の実践の場づくりが大事である。地域社会のこのような現状に対し、本研究科がもつ人的・物的・空間的リソースを活用して、どのような支援が可能か検討する、「鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト」が行われている。実習観察園を活用した園芸教室はその一環の活動である。

春、秋ともに幼児から 80 歳代までの多世代が参加し、参加者（春・秋，各 30 名）がグループに分かれ、それぞれのグループ毎に野菜や花の栽培を楽しんだ。

春の園芸教室 5 月 19 日（土），6 月 16 日（土），7 月 14 日（土）

秋の園芸教室 9 月 15 日（土），10 月 13 日（土），11 月 10 日（土），12 月 15 日（土）

3) 野菜探求プロジェクト～植と食の融合～ 神戸大学附属中等教育学校

テーマを「野菜探求プロジェクト～植と食の融合～」とし、ESD Food プロジェクトの活動の一環として行った。野菜の栽培、観察、収穫などを体験することを通して、作物・園芸植物について探究し理解を深める。以下の知識や栽培スキル等の獲得を目的として行った。

- (1) 生産から消費まで食の循環を理解する。
- (2) 植物（野菜）を多面的に捉え、多様性を理解する。
- (3) 持続可能な社会において植物（野菜）が果たす役割と可能性を考える。
- (4) 植物（野菜）とのかかわりを通して、持続可能な社会に向けてできることを実践する。

参加者 中等教育学校生 16 名，同校教員 3 名

利用期間：9 月 15 日（土），10 月 13 日（土），11 月 10 日（土）

今後も地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ、授業ならびに研究で、利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)